仙台市文化財調査報告書第181集

北原街道B遺跡

―― 仙台市宮城地区 ――

1994年3月

仙台市教育委員会

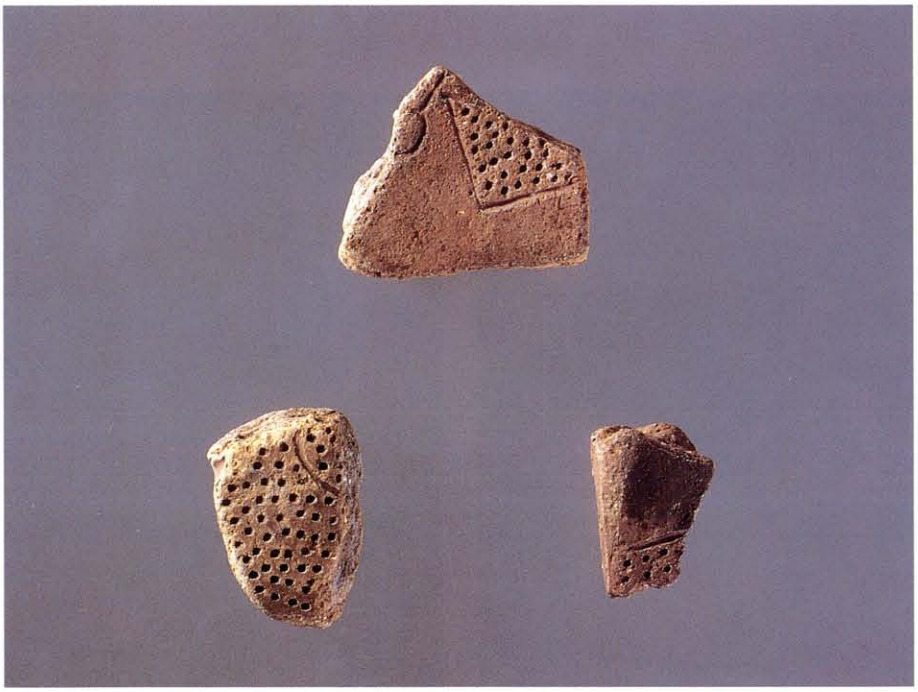
仙台市文化財調査報告書第181集

北原街道B遺跡

――仙台市宮城地区――

１９９４年3月

仙台市教育委員会



序　　文

北原街道Ｂ遺跡の所在する宮城地域は仙台市西北部に位置し、地域内の北西部には船形山を中心とする奥羽の秀峰が聳え、また中央部には広瀬川の清流が流れる、豊かな緑と水の自然に恵まれた地域です。

しかし、近年丘陵部を中心として大規模な団地開発が進行し、こうした自然環境も大きな変貌を遂げつつあります。特に愛子地区は仙台市の都市計画のなかで西の副都心として位置付けられており、急速に都市化が進行しているところでもあります。

豊かな自然環境も文化財も、近年おしよせる開発の波の中では、今わたしたちが本気になって保護の手を差し伸べなければ消滅してしまう状況におかれています。

文化財はわたしたちの祖先が創造した文化であり、そのどれもが固有の価値をもつものです。わたしたちはこの貴重な文化遺産を、将来の人々のために継承していく責務があると思われます。

これからの「街づくり」のなかで、どのように文化遺産を守り、生活のなかに取り込んでいくべきか、市民の皆様とともに考えていく必要が感じられます。

これからも文化財保護への深いご理解とご協力をお願いするとともに、ご協力いただきました地元の皆様をはじめ、調査にたずさわっていただいた多くの方々に対しまして、心より御礼申し上げる次第です。

１９９４年3月

仙台市教育委員会
教育長　東海林　恒　英

例　　言

1．本書は、仙台市青葉区上愛子地区での㈱開発興業による宅地造成事業の実施に伴う、北原街道Ｂ遺跡の発掘調査の報告書である。

2．報告書作製にあたっての遺物整理・編集・執筆は工藤信一郎が担当した。

3．本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の１：25,000「仙台市西北部」の一部を使用している。

4．本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

5．実測図中の水糸高は標高で統一してある。

6．実測図中の方位は磁北で統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏約７°20′である。

7．本書中にある実測図の作成にあたり、縄文土器・剝片石器の実測用写真撮影を㈱シン技術コンサルに委託している。

8．本調査における出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

9．調査にあたって、事業主体である㈱開発興業をはじめ下記の機関・方々よりご協力いただいた。（敬称略）

協進開発株式会社・若葉建設株式会社・庄子幸男（二岩町内会長）・荒井丹治（旧宮城町文化財保護委員）

10．本書中で使用した遺物カラー写真は、仙台市博物館市史編さん室所蔵のものを使用している。

調　査　要　項

1．対象遺跡　北原街道Ｂ遺跡（宮城県遺跡登録番号21144）

2．遺跡の所在地　仙台市青葉区上愛子字北原道上48－１地内

3．調査主体　仙台市教育委員会

4．調査担当　仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

5．担当職員　主事　齋野裕彦　　主事　工藤信一郎

6．調査期間　（野外調査）1992年５月11日～７月28日（実働43日）

7．調査面積　調査対象面積　約11,000㎡

発掘調査面積　約2,100㎡

8．調査参加者

加藤　一郎	加藤　ひな	沢田　和江	佐藤　　正	小松　長司
佐藤　智恵	田中　　幸	加藤　束穂	神山真理子	川戸　伸一
庄子　勝子	庄司はるよ	菅原　和子	西村満利子	佐々木裕美子
大竹　滋子	杉下　初子	桜田　保子	菊池よしえ	伊藤きよ子
佐藤ヒロ子	平山　幸子	早坂　和江	加藤　玲子	庄子　洋子
大久美智子	宮尾久仁子	三宅　勝子	三浦寿美子	浅若　広子
森谷　愛子	岩城いく子	関谷　礼子	荒井　雅子	吉田　公治

9．整理作業参加者

菊池よしえ	浅若　広子	森谷　愛子	岩城いく子	関谷　礼子
坂本　千枝	若生　洋子	鈴木　広子	及川のり子	小泉　幸子
高橋　喜子	本間　春美	高橋　弘子	東海林智子	

発掘調査参加者

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．遺跡の位置 …… 1

2．周辺の歴史的環境 …… 3

Ⅲ．調査の経過と方法 …… 4

Ⅳ．調査成果 …… 9

1．基本層序 …… 9

2．発見された遺構と遺物 …… 9

(1)土器・土製品 …… 9

①縄文土器 …… 9

②土製品 …… 36

(2)石器・石製品 …… 39

出土石器の分類

剝片石器 …… 39

礫石器 …… 44

石製品 …… 46

磨製石斧 …… 46

Ⅴ．出土遺物についての考察と分析

1．縄文土器 …… 79

2．石器・石製品 …… 80

Ⅵ．まとめ …… 89

挿　図・表　目　次

第１図　北原街道Ｂ遺跡と周辺の遺跡……２
第２図　調査区全体図……５・６
第３図　グリット配置図及び土層柱状模式図
　　作成地点……７・８
第４図　調査区基本層序　……10
第５図　出土遺物・土器 (1) ……19
第６図　出土遺物・土器 (2) ……20
第７図　出土遺物・土器 (3) ……21
第８図　出土遺物・土器 (4) ……22
第９図　出土遺物・土器 (5) ……23
第10図　出土遺物・土器 (6) ……24
第11図　出土遺物・土器 (7) ……25
第12図　出土遺物・土器 (8) ……26
第13図　出土遺物・土器 (9) ……27
第14図　出土遺物・土器 (10) ……28
第15図　出土遺物・土器 (11) ……29
第16図　出土遺物・土器 (12) ……30
第17図　出土遺物・土器 (13) ……31
第18図　出土遺物・土器 (14) ……32
第19図　出土遺物・土器 (15) ……33
第20図　出土遺物・土器 (16) ……34
第21図　出土遺物・土器 (17) ……35
第22図　出土遺物・土器 (18) ……36
第23図　出土遺物・土器 (19) ……37
第24図　円盤状土製品　……37
第25図　土偶・土製品　……38
第26図　出土遺物・玦状耳飾　……47
第27図　出土遺物・石器 (1) ……48
第28図　出土遺物・石器 (2) ……49
第29図　出土遺物・石器 (3) ……50
第30図　出土遺物・石器 (4) ……51
第31図　出土遺物・石器 (5) ……52
第32図　出土遺物・石器 (6) ……53
第33図　出土遺物・石器 (7) ……54
第34図　出土遺物・石器 (8) ……55
第35図　出土遺物・石器 (9) ……56
第36図　出土遺物・石器 (10) ……57
第37図　出土遺物・石器 (11) ……58
第38図　出土遺物・石器 (12) ……59
第39図　出土遺物・石器 (13) ……60
第40図　出土遺物・石器 (14) ……61
第41図　出土遺物・石器 (15) ……62
第42図　出土遺物・石器 (16) ……63
第43図　出土遺物・石器 (17) ……64
第44図　出土遺物・石器 (18) ……65
第45図　出土遺物・石器 (19) ……66
第46図　出土遺物・石器 (20) ……67
第47図　出土遺物・石器 (21) ……68
第48図　出土遺物・石器 (22) ……69
第49図　出土遺物・石器 (23) ……70
第50図　出土遺物・石器 (24) ……71
第51図　出土遺物・石器 (25) ……72
第52図　出土遺物・石器 (26) ……73
第53図　出土遺物・石器 (27) ……74
第54図　石鏃長幅分布図　……81
第55図　石鏃重量分布図　……81

第56図　剝片石器長幅分布図 ……82
第57図　剝片石器重量分布図 ……83
第58図　不定形石器長幅分布図 ……84
第59図　不定形石器重量分布図 ……84
第60図　礫石器長幅分布図 ……85
第61図　礫石器重量分布図 ……85
第62図　仙台市内出土の玦状耳飾 ……87
第63図　玦状耳飾型式分類 ……88
第１表　遺跡地名表……3
第２表　調査区基本層序(第４図)土層注記表 …11
第３表　石器の器種別数量及び図化数量 ……39
第４表　剝片石器観察表 (1) ……75
第５表　剝片石器観察表 (2) ……76
第６表　剝片石器観察表 (3) ……77
第７表　石製品・磨製石斧観察表 ……77
第８表　礫石器観察表 ……78

写　真　図　版　目　次

写真１　遺跡遠景・空撮(西方上空から) ……92
写真２　遺跡遠景・空撮(北方上空から) ……92
写真３　調査区全景・空撮 ……93
写真４　調査前状況(東方から) ……93
写真５　調査区遠景・III区(北方から) ……93
写真６　復元土器(第５図) ……94
写真７　復元土器(第５図) ……94
写真８　復元土器(第５図) ……94
写真９　玦状耳飾 ……94
写真10　土偶・円盤状土製品 ……94
写真11　出土遺物・土器(1) 第６図・第７図 ……95
写真12　出土遺物・土器(2) 第７図・第８図 ……96
写真13　出土遺物・土器(3) 第９図・第10図 ……97
写真14　出土遺物・土器(4) 第10図・第11図 ……98
写真15　出土遺物・土器(5) 第12図・第13図 ……99
写真16　出土遺物・土器(6) 第13図・第14図 ……100
写真17　出土遺物・土器(7) 第14図・第15図 ……101
写真18　出土遺物・土器(8) 第16図・第17図 ……102
写真19　出土遺物・土器(9) 第17図・第18図 ……103
写真20　出土遺物・土器(10) 第19図・第20図 ……104
写真21　出土遺物・土器(11) 第20図・第21図 ……105
写真22　出土遺物・土器(12) 第21図～第23図 ……106
写真23　出土遺物・石器(1) 第27図・第28図 ……107
写真24　出土遺物・石器(2) 第29図・第30図 ……108
写真25　出土遺物・石器(3) 第30図～第32図 ……109
写真26　出土遺物・石器(4) 第32図・第33図 ……110
写真27　出土遺物・石器(5) 第34図・第35図 ……111
写真28　出土遺物・石器(6) 第35図～第37図 ……112
写真29　出土遺物・石器(7) 第37図・第38図 ……113
写真30　出土遺物・石器(8) 第39図・第40図 ……114
写真31　出土遺物・石器(9) 第40図・第41図 ……115
写真32　出土遺物・石器(10) 第42図・第43図 ……116
写真33　出土遺物・石器(11) 第44図・第45図 ……117
写真34　出土遺物・石器(12) 第47図・第48図 ……118
写真35　出土遺物・石器(13) 第48図・第49図 ……119
写真36　出土遺物・石器(14) 第49図～第51図 ……120
写真37　出土遺物・石器(15) 第51図～第53図 ……121
写真38　出土遺物・石器(16) 第53図・第46図 ……122

I　調査に至る経過

青葉区愛子地区は仙台市西北部に位置し、周辺の丘陵地帯をはじめとして住宅団地等の開発が進められ、近年自然環境が大きく変貌を遂げつつある地域である。特にこうした傾向は1987年の仙台市と宮城町との合併、翌年の政令都市指定によっていっそう進んでいる。

1991年、開発興業株式会社により当遺跡を含む一帯に宅地造成事業が計画され、周知の文化財の取り扱いについて協議があった。北原街道Ｂ遺跡は、1987年に当遺跡を含む一帯で土取り工事が行われた際に発見・登録された経緯があり、当時かなり地形の改変を受けていた。そこで仙台市教育委員会では、提出された開発行為事前協議書にもとづいて協議を行い、開発予定地内における遺構・遺物の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は開発事業のうち道路が計画されている部分に、1 m×40m, 1m×50m のトレンチを２本設定し、重機によって表土を除去した後人力によって遺構検出作業を行った。その結果、開発予定地の北西部では土取りのため遺構検出面は消滅していたが、試掘トレンチ部分では、表土下10～20cmで遺構・遺物包含層を確認した。調査成果にもとづいて協議を行い、次年度に記録保存を前提とした開発予定地内の事前調査を実施することとなった。

調査は、開発予定面積11,000㎡のうち道路計画部分2,100㎡を対象として、1992年５月11日～７月28日にかけて実施された。

II　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

北原街道Ｂ遺跡は、仙台市青葉区上愛子字北原道上に所在している。市内中心部からは国道48号線を山形方向に約10km、仙台市青葉区宮城総合支所の西方約1.2km、JR 仙山線愛子駅からは西方約800m の地点である。

宮城地域の地形を概観すると、西側には南奥羽山系の山並みが連なり、ここから派生する国見・七北田丘陵と蕃山・青葉山丘陵によって北と南を挟まれ、この間を開折して広瀬川が東流している。広瀬川は、作並付近で新川川と合流し、青下川と大倉川が合流する熊ケ根付近では比高差50m におよぶ深い峡谷を形成しながら蛇行し、愛子に入ると数段の河岸段丘を形成している。遺跡の所在する愛子地区はこの二つの丘陵に挟まれて盆地状を呈する河岸段丘上にあり、所謂愛子盆地とよばれている。

北原街道Ｂ遺跡は愛子盆地のほぼ中央を開折する広瀬川南岸の河岸段丘上に位置している。標高は、約123m 前後となっている。

第１図　北原街道Ｂ遺跡と周辺の遺跡

2．周辺の歴史的環境

愛子地区を含む宮城地域の広瀬川上・中流の河岸段丘上や丘陵上には、縄文時代を中心として多くの遺跡が分布している（第１図）。

縄文時代の遺跡のうち、発掘調査が行われたものとして、野川遺跡、蒲沢山遺跡、農学寮遺跡（一本杉遺跡に改称）、観音堂遺跡、芦見遺跡などがある。

野川遺跡は広瀬川上流の熊ケ根にあり、1991年に発掘調査が行われ、後期前半の遺物包含層の下層から、草創期（注１）の、いわゆる「キャシュ（埋蔵物）」あるいは「デポ（一括埋納）」と呼ばれる、石器の一括貯蔵の痕跡を示す土坑２基が宮城県内で初めて検出されている（吉岡・工藤：1992）。

蒲沢山遺跡は広瀬川北岸の芋沢字赤坂にあり、1982～84年にかけて発掘調査が行われ、上川名II式～大木１式期の竪穴住居跡・土坑群がまとまって検出されたほか、出土遺物としては当該期を中心とする遺物のほかに、晩期旧石器の可能性のある石器類（注２）が出土している（宮城町教委：1983）。

農学寮跡遺跡は、1981年に発掘調査が行われ、縄文時代後期初頭の埋設土器遺構等が検出されている（狩野・真山：1982）。

観音堂遺跡は、1985年に発掘調査が行われ、大木10式期の竪穴住居跡５軒・埋設土器遺構のほか、平安時代の竪穴住居跡１軒などが検出されている（阿部・今野：1986）。

芦見遺跡は、1985年に発掘調査が行われ、大洞A′式期の遺物包含層が検出されている（工藤：1988）。

弥生時代の遺跡はいまのところ確認されていないが、古代の遺跡のうち発掘調査が行われた

第１表　遺跡地名表

№	遺跡名	立地	種別	時代	備考
1	北原街道B遺跡	段丘	包含地	縄文前・中	縄文土器(大木4・5・6)石斧・石鏃・石匙
2	北原街道遺跡	〃	〃	縄文前	縄文土器(大木５)、石篦
3	松原遺跡	〃	〃	縄文	石鏃
4	車A遺跡	〃	〃	古代	土師器
5	平治遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、石匙、石錐、土師器
6	車B遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、土師器、須恵器
7	二ツ岩遺跡	〃	〃	縄文晩	縄文土器、石匙
8	雷神A遺跡	〃	〃	古代	土師器
9	雷神B遺跡	〃	〃	古代	土師器
10	堰内遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、土師器、須恵器
11	樋田遺跡	〃	〃	縄文	剝片
12	蛇台原A遺跡	〃	〃	古代	土師器
13	蛇台原C遺跡	〃	〃	縄文	磨石
14	御殿館跡	丘陵	城館	中世	
15	諏訪神社遺跡	丘陵端	包含地	江戸	陶器、磁器
16	新宮前遺跡	段丘	〃	古代	
17	観音堂遺跡	段丘	集落跡	縄文中・平安	縄文(大木９)、土師器
18	榎遺跡	〃	包含地	古代	土師器
19	蛇台原B遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、須恵器
20	樋田遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、土師器
21	上町A遺跡	〃	〃	古代	土師器、須恵器
22	上町B遺跡	〃	〃	古代	土師器
23	補陀寺跡	〃	寺院跡	近世	
24	観音A遺跡	〃	包含地	古代	土師器
25	南館跡	段丘	城館	中世	
26	想海塚跡	〃	塚	中世	宋銭
27	二本松A遺跡	〃	包含地	縄文、古代	縄文土器、土師器、須恵器
28	棟林C遺跡	〃	〃	縄文、古代	縄文土器、土師器
29	棟林B遺跡	〃	〃	古代	土師器
30	弥勒寺元亨碑		板碑	中世	（元亨四年）
31	館遺跡	丘陵地	包含地	古代	
32	窪遺跡	〃	〃	古代	土師器
33	西館跡	丘陵	城館	中世、近世	
34	栗生遺跡	段丘	包含地	古代	土師器
35	五輪塔遺跡	〃	〃	縄文、古代	石鏃、土師器
36	棟林A遺跡	〃	〃	縄文	縄文土器、石斧、石鏃、石棒
37	一本杉遺跡	〃	集落跡	縄文中、後、平安	縄文土器(大木10南境)土師器、須恵器
38	西館遺跡	〃	城館	中世、近世	
39	本郷遺跡	〃	包含地	縄文	縄文土器、石鏃、石匙
40	本郷館跡	〃	城館	中世	
41	花坂遺跡	〃	包含地	縄文中	縄文土器(大木10)石器、剝片
42	中原遺跡	〃	〃	縄文	縄文土器、石匙、剝片
43	高野原遺跡	〃	〃	縄文	縄文土器、石鏃
44	赤坂遺跡	〃	〃	縄文	石器、剝片
45	畑前B遺跡	〃	〃	縄文早・前	縄文土器(繊維土器)、石器
46	満穂遺跡	〃	〃	縄文	縄文土器、石鏃
47	下野遺跡	〃	〃	縄文晩	縄文土器(大洞A)、石匙、石鏃

ものとして、一本杉遺跡、観音堂遺跡がある。

一本杉遺跡は、1983年の宮城町教委による発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡5軒が検出されている。同年の宮城県教委による発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡2軒が検出されている（斎藤：1984）。

中世の遺跡としては、御殿館跡、本郷館跡、南館跡、想海塚跡、弥勒寺元亨の碑等がある。

想海塚跡は1967年に発掘調査が行われているが、下段の一辺17m、封土の全高2.15mを計る三段築造の方形の塚で、巾3.5mの浅い周溝がめぐっていたことがわかった。鎌倉時代中期から室町時代にかけて構築された、何らかの宗教的な行為に伴う遺構とされている（志間：1973）。

御殿館跡は、1981年に測量調査が行われ、自然地形をいかしながら土塁、平場、空堀等によって区画された遺構が、東廓と西廓にわかれ丘陵全域に比較的保存状態よく保たれていることがわかった（宮城町教委：1981）。

近世の遺跡としては、西館跡、補陀寺跡がある。

西館跡は、伊達政宗に仕えた茂庭綱元の屋敷であったが、後に政宗の長女五郎八姫の仮御殿となったとされている館跡で、1986年に発掘調査が行われ、館の出入口部と考えられる石垣遺構が検出されている（斎藤：1987）。

補陀寺跡については、「安永風土記－下愛子村書出」に村名の由来として、愛子の地名は当村横町補陀寺にある子愛観音からつけられたと記載されている。

注1）約1万年前よりも古いとする年代観での草創期である。

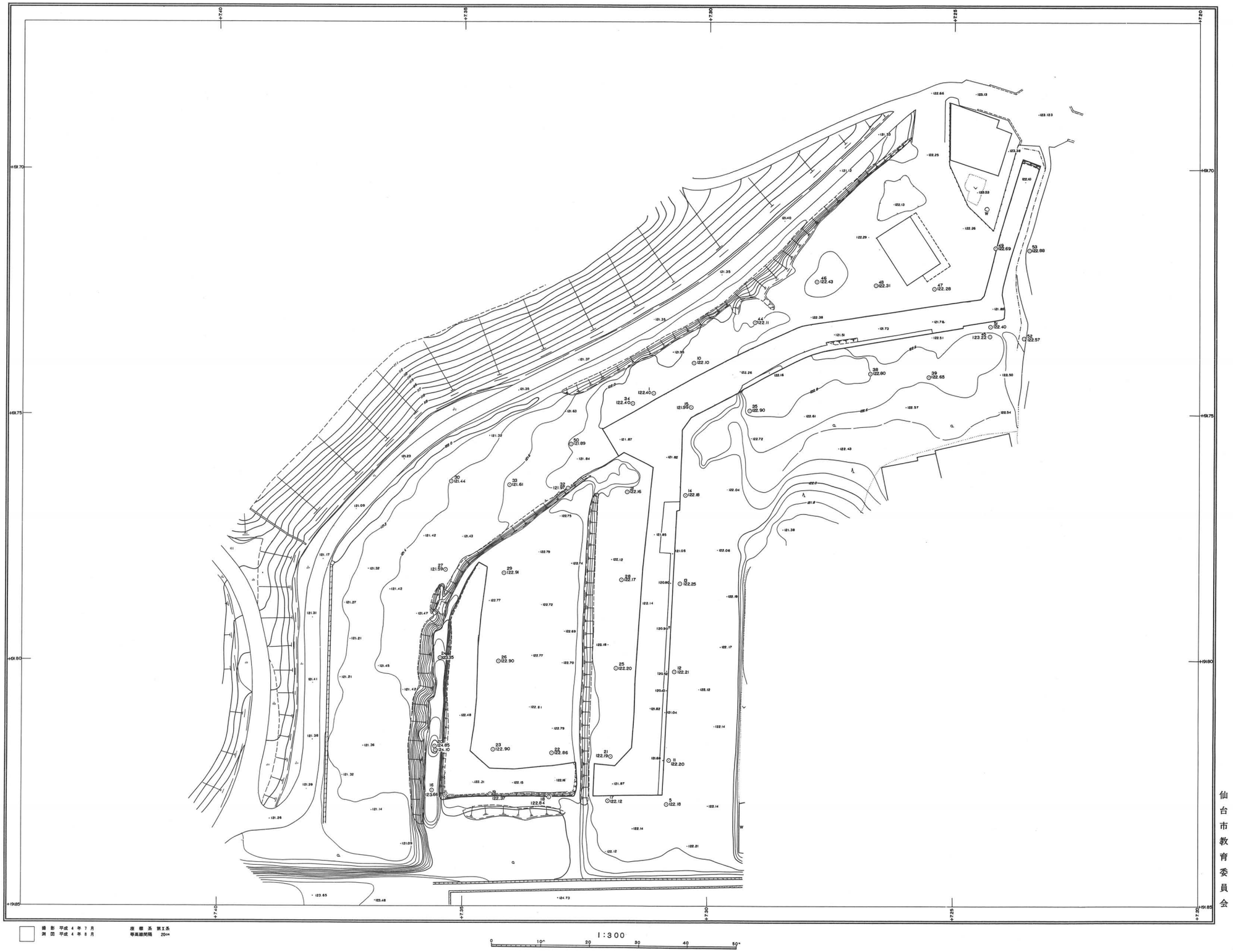
注2）東北福祉大学助教授梶原洋氏の教示による。

Ⅲ　調査の経過と方法

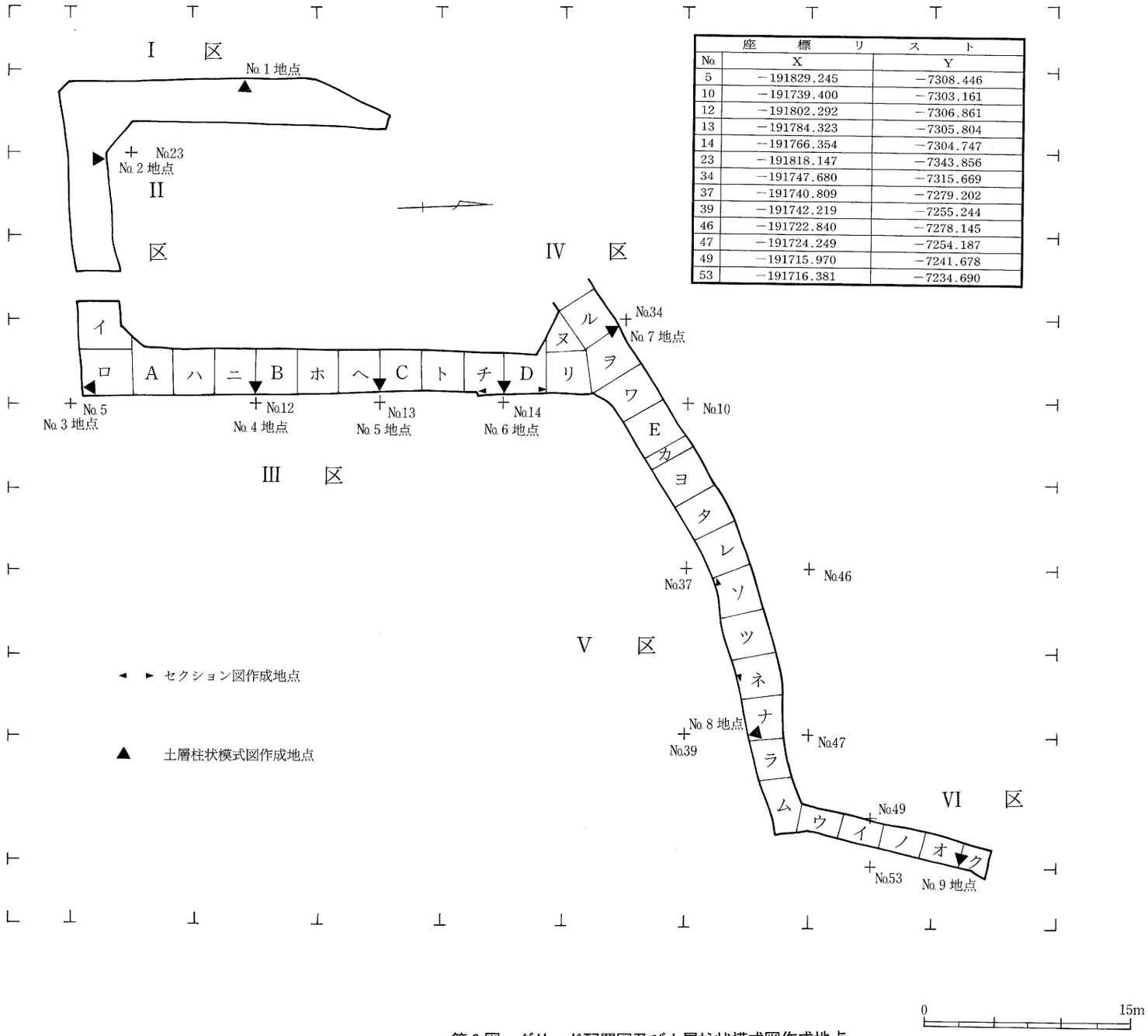
調査は、開発予定区域のうち道路計画部分を対象として実施し、重機によって表土を除去したのちに人力による遺構検出作業を行った（第2図）。調査対象区が変則的であるため、便宜上調査区をⅠ～Ⅵ区に区分し西側のⅠ区から調査に入った。その結果Ⅰ区とⅡ区については、戦後まもなく実施された開田によって礫層面におよぶ大きな撹乱を受けていることがわかった。またⅣ区については、以前行われた土取り工事のため遺構確認面のほとんどは消滅していた。

Ⅲ区についても現水田耕作土直下に遺物包含層が検出されたが、礫混じりの層で開田によって撹乱を受けた二次的な堆積状況を示していた。Ⅴ区西半部でも遺物包含層が検出されたが、畑の耕作等による天地返しが深くおよんでいる状況であった。Ⅴ区東半部からⅥ区にかけても撹乱が礫層面にまでおよんでいる状況であった。

調査対象区のほとんどが、撹乱または天地返しをうけていたことから、遺物の取り上げは3m×3mのグリット単位に、層位毎に行った（第3図）。


撮影 平成4年7月
測図 平成4年8月
座標系 第Ⅹ系
等高線間隔 20cm
1:300
0 10 20 30 40 50m
仙台市教育委員会

第2図　調査区全体図



座標リスト		
No.	X	Y
5	−191829.245	−7308.446
10	−191739.400	−7303.161
12	−191802.292	−7306.861
13	−191784.323	−7305.804
14	−191766.354	−7304.747
23	−191818.147	−7343.856
34	−191747.680	−7315.669
37	−191740.809	−7279.202
39	−191742.219	−7255.244
46	−191722.840	−7278.145
47	−191724.249	−7254.187
49	−191715.970	−7241.678
53	−191716.381	−7234.690

第3図　グリッド配置図及び土層柱状模式図作成地点

発掘調査終了後、委託による地形測量を行い1/300平面図を作成し、また基準点測量を行い平面直角座標系Xに乗せている。

調査成果について、7月25日に現地説明会を開催し、28日にラジコンヘリによる空撮をおこない調査を終了した。

Ⅳ　調査成果

1．基本層序

調査区は広瀬川南岸の河岸段丘上にあり、現況は荒地となっていた。調査区西側のⅠ～Ⅲ区は、以前は水田として利用されており、西側から東に向かって下がる階段状の水田区画が残っていた。この部分については前述のとおり開田工事による影響が大きく、ほとんどのところで段丘礫層面まで撹乱がおよんでいた。

Ⅴ区からは遺物包含層が検出されたが、畑の耕作などによる天地返しが深くおよんでおり、Ⅳ区については土取り工事の影響が、Ⅵ区についてはほとんど段丘礫層面まで撹乱をうけていた。調査区が広範囲であるため、層序・色調・層厚などに違いが認められるが、旧耕作土下において3～4枚の層を確認している。遺物包含層の検出されたⅢ区東壁北側およびⅤ区南壁西側でセクション図を作成したが、その他の各調査区については、№1～№9の地点で土層柱状模式図を作成している（第3図・第4図）。

2．発見された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡や土坑・溝跡などの遺構は発見されていないが、調査区のうちⅢ・Ⅴ区において遺物包含層を検出している。このうちⅢ区の遺物包含層については、開田による影響を受けプライマリーな状況ではなく二次的な堆積状況を示していた。遺物としては、縄文土器・石器・土製品・石製品などがある。

(1)土器・土製品

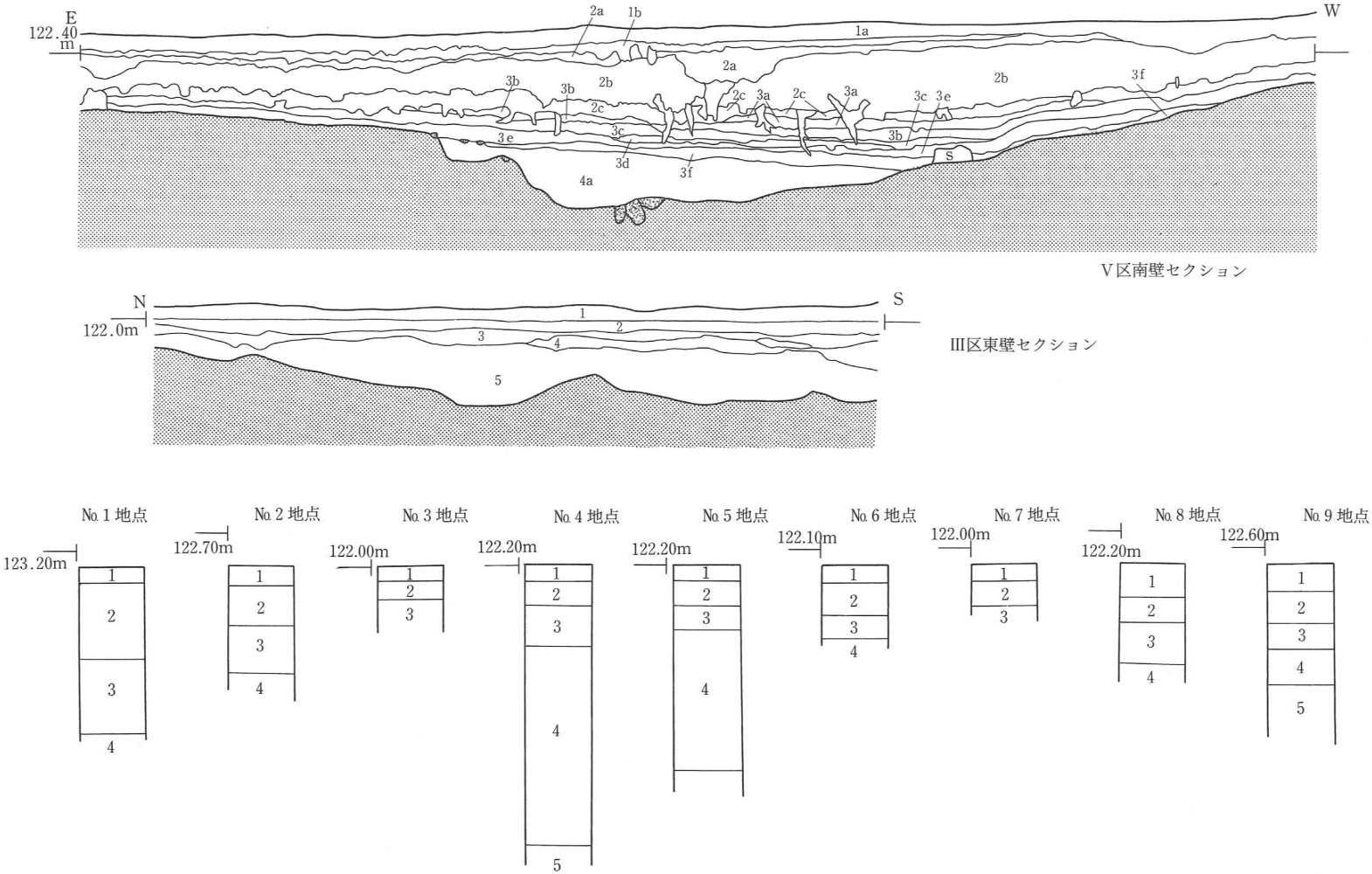
①縄文土器

今回出土した土器は、ほとんど包含層からの出土である。縄文時代前期後半のものを中心としているが、多くの遺物は不規則に出土しており、層位的に明確に分離して出土する状況はみられず混在する状況であった。

出土した縄文土器は大部分が小破片であり、全体の器形のわかるものは第5図に示した3点のみである。これらの土器について、それぞれの文様の特徴などから第Ⅰ群～第Ⅶ群に大別している。またそれぞれのなかで、文様施文上の特徴などから細別を行った。

［第Ⅰ群］前期初頭の大木2式に比定される土器群。

［第Ⅱ群］前期前半の大木3式に比定される土器群。



第4図　調査区基本層序・土層柱状模式図

［第Ⅲ群］前期後半の大木４式に比定される土器群。

［第Ⅳ群］前期後半の大木５式に比定される土器群。

［第Ⅴ群］関東地方諸磯ｃ式土器系の特徴をもつ土器群。

［第Ⅵ群］前期末葉の大木６式に比定される土器群。

［第Ⅶ群］中期初頭の大木７式以降の土器群。

第Ⅰ群土器（第６図～第８図／第21図）

前期初頭の大木２式に比定されるもので、文様施文上の特色により第１類～第４類に分類した。

第１類（第６図－１～５・16／第７図－２・４）

縄文または羽状縄文によって施文された土器を本類とした。

第６図－１・４は羽状縄文によって施文された土器で、このうち１は綾絡文がつけられ、４は２本の異なる原体によってつけられた羽状縄文となっている。第６図－16は小波状の口縁を呈し、撚糸によって施文されている。第７図－２・４は、ともに綾絡文がつけられている。

第２類（第８図－１）

不整撚糸文によって施文された土器で、第８図－１は外反する口縁部に施文されている。

第３類（第６図－９）

付加条縄文によって施文された土器で、第６図－９は口縁部がやや外反している。

第２表　調査区基本層序土層注記表

	層位	土色	土性	備考
Ⅴ区南壁	１ａ	10YR3/3　暗褐色土	シルト	畑耕作土
	１ｂ	10YR3/1　黒褐色土	シルト	
	２ａ	10YR2/3　黒褐色土	シルト	遺物包含層
	２ｂ	10YR2/2　黒褐色土	シルト	遺物包含層
	２ｃ	10YR4/3　にぶい黄褐色土	砂質シルト	２ｂ層土がブロック状に混る
	３ａ	10YR5/6　黄褐色土	砂質シルト	
	３ｂ	10YR6/6　明黄褐色土	砂	
	３ｃ	10YR5/8　黄褐色土	砂	
	３ｄ	7.5YR5/6　明褐色土	砂	
	３ｅ	10YR7/6　明黄褐色土	砂	
	３ｆ	10YR7/4　にぶい黄橙色土	砂	
	４ａ		砂礫層	
	５		礫層	
Ⅲ区東壁	１	10YR3/1　黒褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR2/2　黒褐色土	シルト	砂礫混りの固くしまった層
	３	10YR5/6　黄褐色土	シルト	10～20cm大の礫混層
	４	10YR3/2　黒褐色土	シルト	10cm大の礫混層
	５	10YR2/2　黒褐色土	シルト	こぶし大～40cmの礫混層
	６		礫層	
№１地点Ⅰ区西壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土	シルト	礫混層
	３	10YR2/3　黒褐色土	シルト	10YR3/1黒褐色土が混る
	４		礫層	
№２地点Ⅱ区北壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/2　黒褐色土	シルト	
	３	10YR3/1　黒褐色土	シルト	10～30cm大の礫混層
	４		礫層	
№３地点Ⅲ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土	シルト	小礫混りの固くしまった層
	３		礫層	
№４地点Ⅲ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土	シルト	小礫混りの層
	３	10YR5/6　黄褐色土		礫混層
	４	10YR2/2　黒褐色土	シルト	
	５		礫層	
№５地点Ⅲ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土	シルト	小礫混りの層
	３	10YR5/6　黄褐色土		礫混層
	４	10YR2/2　黒褐色土	シルト	礫混層
	５		礫層	
№６地点Ⅲ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土		
	３	10YR5/6　黄褐色土		
	４		礫層	
№７地点Ⅳ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土		
	３		礫層	
№８地点Ⅴ区南壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/1　黒褐色土	シルト	
	３	10YR3/3　暗褐色土	シルト	
	４		礫層	
№９地点Ⅵ区東壁	１	10YR3/3　暗褐色土	シルト	耕作土
	２	10YR3/3　暗褐色土	シルト	若干グライ化した土が混る層
	３	10YR3/2　黒褐色土	シルト	
	４	10YR2/2　黒褐色土	シルト	
	５	10YR4/3　にぶい黄褐色土	砂質シルト	

第４類（第６図－12／第７図－１・３・５・15／第21図－24）

沈線または刺突によって施文された土器を本類とした。

第７図－５は斜行する短い平行沈線が組み合わされており、15はやや外反する口縁部に櫛歯状の工具による連続刺突が施されている。第７図－１、第21図－24は、Ｓ字状連鎖沈線が施されている。

第II群土器（第６図～第10図／第21図）

前期前半の大木３式に比定されるもので、文様施文上の特色により２類に分類した。

第１類（第６図－15／第７図－８／第８図－19・20／第９図－３・５～７／第10図－１・２／第21図－15）

竹管状工具による施文、または沈線による幾何学文様が施された土器を本類とした。

第６図－15は、竹管を輪切りしたような施文具による円文を横位に連続している。第７図－８、第９図－３・５～７、第10図－１・２、第21図－15は、平行沈線や沈線による幾何学文様が施されている。第８図－19・20は、平行沈線の間に半竹による連続する刺突の「Ｃ」字状文がつけられている。

第２類（第７図－７・12／第８図－２～13・16～18・21～24）

刻目をもつ粘土紐貼付文によって施文された土器を本類とした。

第７図－７・12、第８図－４・９・21～24のような、口縁部を一周する刻目をもつ粘土紐貼付文が、口縁に平行にして１～２本つけられ、貼付文を境として口縁部を無文としている。また第８図－２～８・11・18のように、貼付文が口縁部や体部に分岐遊送しているものもある。粘土紐貼付文につけられた刻目についてみると、第８図－５・12・16・17は、粘土紐への刻目が斜めに切るように入っているのに対して、第８図－２～４・６～11・13・18では、ほぼ直交するように刻まれている。

第III群土器（第６図／第10図～第13図／第15図～第17図）

第１類（第６図－13・14／第10図－23／第11図－２・３・７・８・11～13・16～20／第12図－１～７・10・11・13～15・18・20～23／第15図－14～21／第16図－12・17・20・22・24／第17図－20）

斜行縄文を地文として、細い粘土紐の貼り付けによる小波状文・格子状文・梯子状文などが施文される土器を本類とした。粘土紐の組み合わせなどによってａ～ｄ類に細分された。

１ａ類（第６図－13・14／第10図－23／第12図－１～４・11／第16図－12・17）

２本１組を単位とする細い粘土紐の貼付文や、巾の広い粘土紐の貼付文にそった細い粘土紐の貼付文による装飾が組み合わされるもの。第10図－23は、刺突の入った巾広の粘土紐が組み合わされて施文されている。

１ｂ類（第11図－２・３・７・８・11～13・16～20／第12図－５～７・10・13・18・20／第16図－20・22）

細い粘土紐の貼り付けによる格子状文・梯子状文などが組み合わさって幾何学文状となるもの。第11図－２・３・７・８・12・16・17、第12図－５～７・10・20、第16図－20・22のように格子状文の周りを直線紐で囲むものと、第11図－11・13・18～20、第12図－13・18のように直線紐で囲まないものがある。第11図－20、第12図－13・18は、横位の梯子状文の下端に直線紐が貼り付けられている。

１ｃ類（第12図－14・15・21～23）

直線紐で囲まれた格子状文が環状に巡るもの。

１ｄ類（第15図－14～21／第16図－24／第17図－20）

２本１組を単位とする細い粘土紐の貼り付けによる波状文が施文されているもの。第15図－14～16・20・21では、波状文が山形文状を呈している。16は直線紐に挟まれた山形状の波状文となっている。

第２類（第10図－７・８／第11図－１・４／第13図－10／第17図－４～６・18／第19図－25）

口縁部または口唇部に、波状を呈する鋸歯状装飾帯または細い粘土紐による小波状の貼付文がつく土器を本類とした。第10図－７・８は、口縁部に「∽」状の貼り付けがつき、７には細い粘土紐による貼付文が加えられている。第11図－１は口唇部に小波状文が貼り付けられ、体部上半に格子状文と直線紐によって「⊠」状に施文されている。４は外側に折り返した口唇部に２本の直線紐と小波状文がつけられ、その下に細い粘土紐による貼付文が加えられている。第13図－10は、口唇部に太い粘土紐によって波状を呈する鋸歯状装飾帯が巡り、その下に直線紐と小波状文が加えられている。第17図－４～６・18は、口縁端部、口唇部側面の片側または両側に細い粘土紐の小波状文がつけられ、口縁部は無文となっている。第19図－25は、外反する口縁部に環状の貼付文（円文）がつけられている。

第Ⅳ群土器

前期後半の大木５式に比定されるもので、文様施文上の特色により２類に分類され、さらに口縁部につけられる鋸歯状装飾帯の形態によって細分される。

第１類（第５図～第７図／第10図～第17図）

斜行縄文を地文とし、細い粘土紐による貼付文が、粘土紐を短く切って折り重ねたような鋸歯状の連続山形文となり、格子状文・梯子状文などと共に斜位または幾何学文状に体部に広く施文されるものを本類とした。器形としては、口縁部の外反する円筒形または植木鉢状になり、平縁な口縁部には大きく鋸歯状の切り込みをつけた装飾帯がつけられる。貼付文の特色などから１ａ類～１ｆ類に細分される。

１ａ類（第10図－４／第11図－15／第14図－１～８・11・14・22／第15図－１・２・４・６・８～13・22／第16図－１・２・４～８・10・11・14・15・19・21・23）

細い粘土紐による貼付文が、２本１組を単位とする直線紐か、鋸歯状の連続山形文によって施文されたものを本類とした。直線紐に挟まれた鋸歯状山形文となるものもある。第11図－15は、口縁部を巡る隆帯の上部が幅の狭い無文帯となり、隆帯の下端には３本１組単位の直線紐が巡っている。また第14図－22は、肥厚させた口縁部のコブ状の突起部分に、直線紐のあいだを鋸歯状山形文が垂下している。第15図－１・９では、２本１組単位の鋸歯状山形文が２段重ねられている。第15図－６・８・12・13・22、第16図－13は、刺突または刻目の入った隆帯の下に直線紐に挟まれた鋸歯状山形文がつけられている。

１ｂ類（第10図－10／第11図－５・６・９・14・21／第12図－８・９・16・24／第13図－12／第16図－３・９・16・18）

細い粘土紐による貼付文が鋸歯状の連続山形文となり、格子状文・梯子状文などと共に斜位または幾何学文状に体部に広く施文されるもの。

１ｃ類（第５図－１・２／第13図－８・14・18・19）

口縁部の一部に大型の鋸歯状装飾帯がつき、体部上半に格子状貼付文が施文されるものを本類とした。第５図－１は、口縁部がゆるやかに外反する朝顔型の器形で、口縁部に大きな鋸歯状装飾帯がつく。口縁部に幅のせまい無文帯を形成し、細い粘土紐による梯子状貼付文が横位に巡り、体部上半には格子状文と、それに沿った直線紐の組み合わされた幾何学文状の貼付文が施されている。２は体部がわずかに膨らんだ器形をもち、口縁部には刺突の入った大きな鋸歯状装飾帯がつけられている。体部上半には細い粘土紐による山形文が貼り付けられている。第13図－14・18・19も、口縁部に刺突の入った大きな鋸歯状装飾帯がつけられている。

１ｄ類（第11図－10／第13図－１・３～７／第14図－16・21／第17図－７～12・14～17）

口縁部の全周に小型化した鋸歯状装飾帯がつき、体部上半に格子状貼付文や鋸歯状山形貼付文が施文されるもの。第14図－16は、鋸歯状装飾帯の退化により下部の切り込みが喪失している。第17図－７・８・12・16では、体部上半に直線紐に挟まれた鋸歯状山形文が施文されている。

１ｅ類（第13図－13・第14図－23）

鋸歯状装飾帯とは別に、刺突の入った環状貼付文が口縁部または口頸部につけられたもの。

１ｆ類（第５図－３）

底部を欠いているが、外面に輪積みの痕跡をそのまま残した円筒形の器形で、口縁部には欠損しているもののまるい凹みをもつ小突起がつき、内面は丁寧に磨かれ黒色処理されている。

第２類（第９図／第10図／第14図～第19図／第21図）

山形沈線文とともに、沈線による区画直線文や円形文・弧状文などの曲線文が組み合わされた簡素な幾何学文様となるものを本類とした。口縁部につけられた鋸歯状装飾帯の切り込みが退化小型化し、口縁部の全周につけられている。鋸歯状装飾帯の形態によってさらに2A類〜2D類に細分される。

2A類（第9図－1／第13図－9・11・20／第14図－15／第17図－19・21／第18図－2・8〜11）

上下に鋸歯を有するもの。体部につけられる沈線文により、さらに2A－a類〜2A－c類に細分される。

第13図－9・11・20は、口唇部に太い粘土紐によって波状を呈する山形文がつき鋸歯状装飾帯となっている。第14図－15は、鋸歯状装飾帯の中に窓が開けられている。

2A－a類（第18図－2・8〜11）

平行沈線文や山形沈線文がつくもの。

2A－b類（第17図－19・21）

刻目入りの隆線がつくもの。

2A－c類（第9図－1／第14図－20／第19図－1）

半竹爪型連続刺突がつくもの。

2B類（第17図－13／第18図－3・4・7・13）

鋸歯の上部を喪失するか退化しているもの。第18図－3は、平行沈線文と山形沈線文がつけられている。第17図－13、第18図－4・7・13は沈線文がつけられている。

2C類（第13図－2／第14図－19／第20図－24）

鋸歯の下部を喪失するもの。

第14図－19、第20図－24は、口唇部に細かな刻目が付けられた退化した装飾帯となっている。

2D類（第14図－12／第18図－1）

上下の鋸歯を完全に喪失し、口縁部を肥厚させているもの。

第14図－12は、口縁部の側面を内外面から指頭または太い棒状施文具によって押圧することで口唇部を鋸歯状化（花弁状口縁）している。第18図－1は、平行沈線文と山形沈線文がつけられている。

第3類（第9図・第10図・第14図・第18図・第19図・第21図）

鋸歯状装飾帯喪失後のもので、口縁部形態の変化によって細分される。

3A類　口縁部を肥厚させないもの。文様構成によって細分される。

3A－a類（第9図－8・13・16／第10図－5・27／第18図－20／第21図－9・14）

沈線による直線文と曲線（弧状）文が組み合うもの。

第9図－16は、口縁に2本1組単位の沈線を2段重ね、その下につけられた2本1組単位の

沈線による弧状文がレンズ状を呈している。第21図－９も、同様に弧状文がレンズ状を呈している。

3A－b類（第９図－12／第10図－15・16・18～21／第14図－18／第18図－12／第19図－19・24）

沈線による鋸歯状山形文と平行沈線が組み合うもの。

第10図－21は、２本１組の山形沈線文が垂下している。第14図－18は、隆帯の下に山形沈線文がつけられている。

3B類　口縁部に山形突起か、コブ状の突起のつけられるもの。口縁部形態によって3B－a～3B-c類に細分される。

3B－a類（第10図－９／第17図－１～３／第20図－11・13）

やや肥厚させた口縁部に４単位の山形突起を形成するもの。

第10図－９は、山形突起の中に開けられる窓が退化して盲孔となっている。第17図－１～３は、２本１組単位の細い粘土紐の鋸歯状山形文がつけられている。このうち３は、山形突起の中に窓が開けられ、刻目入り隆線の下に山形文がついている。第20図－11・13は平行沈線がつけられている。

3B－b類（第10図－３・17・13／第14図－17）

山形突起の頂部に深い刻みが入るもの。

第10図－３は、山形突起の中に開けられる窓が退化して盲孔となっている。

3B－c類（第10図－11）

双コブの突起状の貼り付けがつき、波状沈線がつけられている。

第Ⅴ群土器

（第９図－２・14・15・19～21／第20図－１）

関東地方の諸磯ｃ式の特徴をもつ土器群。

第９図－14・15のように棒状貼付文と円形浮文の組合せによる装飾や、19～21のような体部に横方向あるいは交差するような条線文が施される。これらの土器は胎土にも違いがみられ、ほかの土器の胎土に比べ赤みのつよい色調で砂粒等の含有も少ない。第20図－１は、半竹の連続刺突文が木の葉状を呈している。

第Ⅵ群土器（第７図／第10図／第12図～第14図／第18図～第22図）

前期末葉の大木６式に比定されるもので、文様施文上の特色により第１類～第４類に分類した。半竹の押し引き施文による爪型連続刺突文（結節浮線文）と竹管文・ボタン状貼付文などによって構成される。

第１類（第７図－16・19／第10図－25／第13図－17／第18図－17・18／第19図－９～13・15・

18・20・23／第20図－２～６／第21図－18／第22図－１・２）

半竹爪型連続刺突文の施されるもので、弧状沈線文や平行沈線などの沈線文が加えられる。

第７図－19は、口縁部の肥厚された山形突起に、口縁に沿った半竹爪型連続刺突文が施され、その下に平行沈線がつけられている。第13図－17は、口縁部にボタン状の貼り付けがつき、その上下に爪型連続刺突文がつけられている。第18図－17は、頸部に爪型連続刺突文が巡り、それによって区画された口縁部に鋸歯状山形沈線文が施文されている。第19図－15は、口頸部をめぐる連続刺突文と口縁部から垂下する連続刺突文によって作られた方形区画内に、縦位平行沈線と鋸歯状山形沈線文の組合せによって施文されている。23は肥厚させた波状を呈する口縁部に厚みのある突起状のコブがつき、口唇部の側面に沿って竹管による連続刺突が施されている。頸部の３段重ねにされた連続刺突文の下部にはボタン状の貼り付けが施されている。第20図－２・４・５は、連続刺突文に沿った平行沈線の下に２本１組単位の山形沈線文がつくもので、２の口縁部には２個１対のコブ状の小突起がつけられている。第22図－１・２は、細かな結節浮線文によって施文されている。第10図－25、第18図－18、第19図－18は、竹管を輪切りにしたような施文具の連続刺突による列点入りの隆線によって施文されているもので、第10図－25は、平行する刺突入り隆線が波状を呈し、第19図－18では、口縁部に沿った刺突入り隆線によって方形の区画を作り出そうとしている。

第２類（第７図－10・11／第13図－15・16）

ボタン状貼付文の施されるもので、斜位刻目付隆線と平行沈線文の組合わせによって施文される。

第13図－15は、口縁部に稜線をもった粘土紐による環状貼り付けがつき、その内側に沿って２個１対の刺突が施され、外側にも上下に間隔を開けて同様の刺突がつけられている。16は頸部と思われ、ボタン状の貼り付けに太い竹管を輪切りにしたような施文具による刺突が入り、環状貼付文状を呈している。

第３類（第19図－３・６～８・16・17）

口縁部に刻線貼付文の施されるもので、斜位刻目付隆線と平行沈線文の組合わせによって施文される。

第19図－３は、低めの突起頂部に刻みがつき、口縁部に沿って縦長の短沈線状の刺突が巡っている。16は口縁に沿ってつけられた２本の刻線貼付文と、そこから垂下する刻線貼付文によって作られた方形区画の上部に鋸歯状の山形沈線が施されている。

第４類（第18図－14～16／第20図－７・10・12・14・16～18・25～27／第21図－１～７・10・13・17・20～22）

平行沈線文が施され、山形沈線文や波状沈線文、（交互）弧状沈線文、連弧状沈線文の加えら

れる一群で組合わせによって細分される。

4a 類（第21図－１～７・10・13・20・21）

平行沈線と波状沈線文、または弧状沈線文との組合わせによって施文されるもの。

第21図－３は、体部下半に平行沈線が「X」状に垂下している。

4b 類（第18図－14～16／第20図－７・10・12・14・16～18・25～27／第21図－17・22）

平行沈線文と、鋸歯状の山形沈線文によって施文されるもの。

第18図－19・22・23は口縁部で、２本１組単位の鋸歯状の山形沈線が施され、その上部は無文帯となっている。16も同様に口縁部に大きな山形沈線文が施されている。第20図・第21図は、口縁部に鋸歯状の山形文が施文される一群で、第20図－10・14・18・25の２本１組単位の鋸歯状の山形沈線の上部は無文帯となっている。

4c 類（第12図－12／第14図－13／第18図－５・６）

口縁部を肥厚させているもの。

第12図－12は、折り返しによって肥厚させた無文の口縁部に、コブ状の貼付文がつけられている。第14図－13は、肥厚させたやや外反する口縁部に、短い粘土紐を縦に貼り付けている。頸部には、細い粘土紐とそれに沿った沈線が巡っている。第18図－５は、口縁に沿って円形刺突の入った巾広の隆帯が巡っており、６は隆帯を貼りつけて肥厚させた口縁の下部に刻目が入れられている。

第VII群土器（第７図／第８図／第19図／第22図／第23図）

中期の大木７式以降のものを中心とする一群で、文様施文上の特色により第１類～第４類に分けられる。

第１類（第７図－14／第18図－21／第19図－４・22）

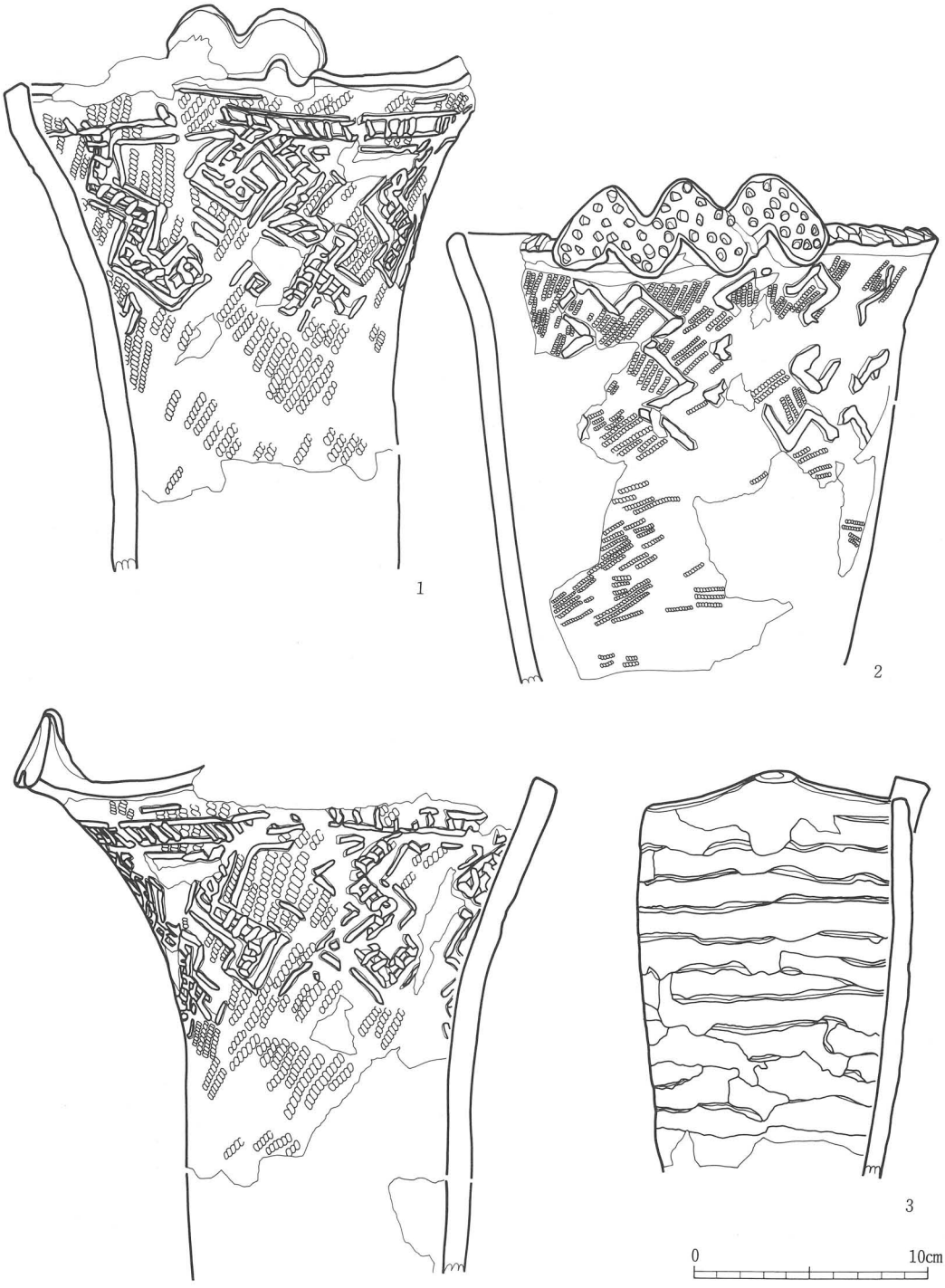
大木７式に比定されるもの。第18図－21は頸部資料と思われ、三角形彫去の下に沈線文がつけられている。第19図－４は、刻線貼付文と平行沈線の間に鋸歯状山形沈線文がつけられ、体部には弧状沈線が施されている。

第２類（第９図－４・10・11／第22図－３～10）

大木８式新～９式新段階に比定されるもの。第９図－10・11のように、沈・隆線区画によって施文されるものや、第22図－３～８のように、渦巻隆（稜）沈線文によって施文されるものがある。第22図－９・10は、沈線区画で磨消縄文となるものである。

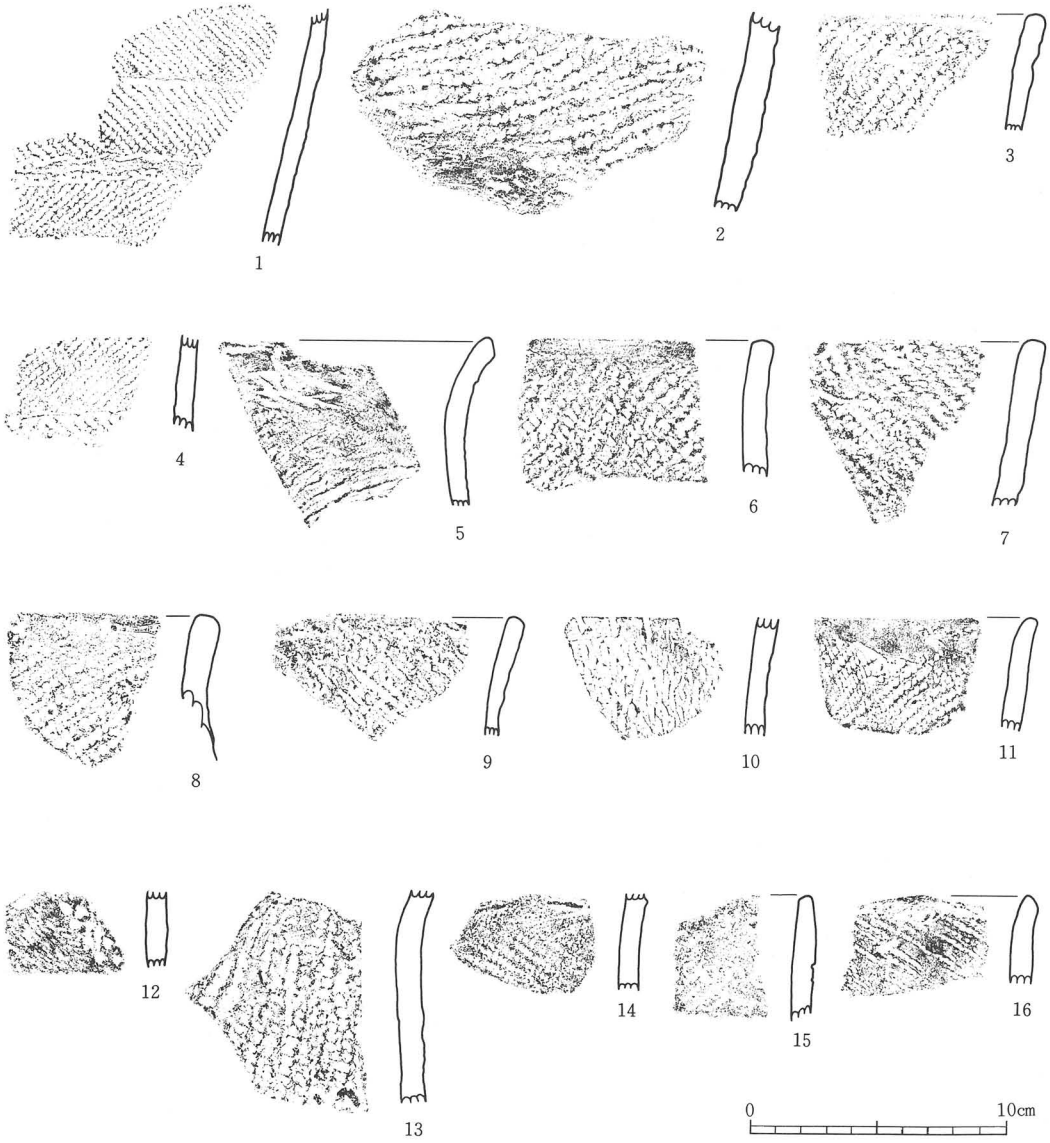
第３類（第22図－11・12）

晩期に比定されるもの。12は、浅鉢の口縁部で、山形波状文と平行沈線間に縄文が充塡されている。11は、縄文の充塡された磨消縄文となっている。



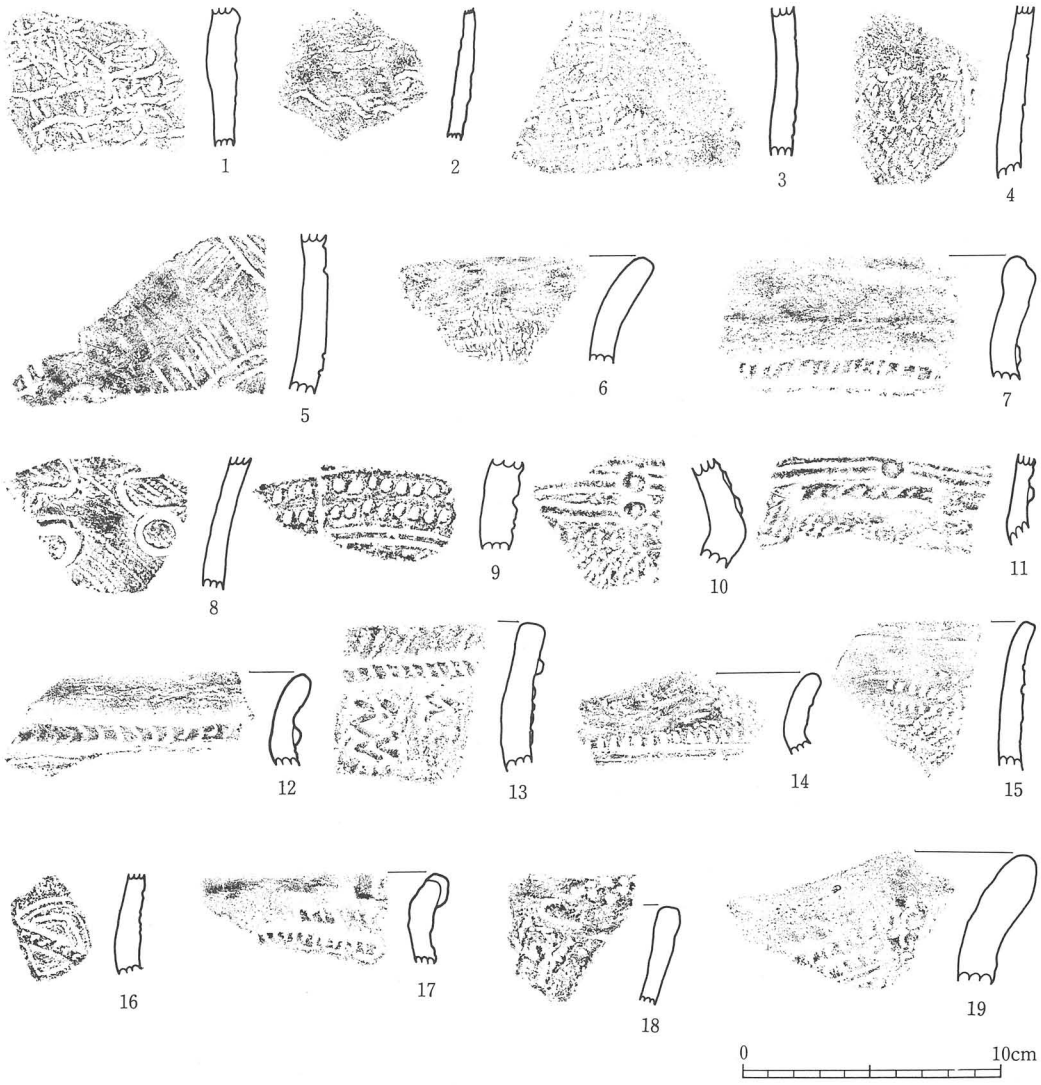
番号	地区・層位	部　位	分　類	文　様・地　文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部　位	分　類	文　様・地　文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅴ－ヨ区		Ⅳ－1c類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐梯子状文	1	写真6	3	Ⅴ－ヨ区		Ⅳ－1f類	輪積み痕跡　（内面）ミガキ、黒色処理	3	写真8
2	Ⅴ－ヨ区		Ⅳ－1c類	鋸歯状装飾帯（刺突文入）・細い粘土紐貼付文	2	写真7							

第5図　出土遺物・石器（1）



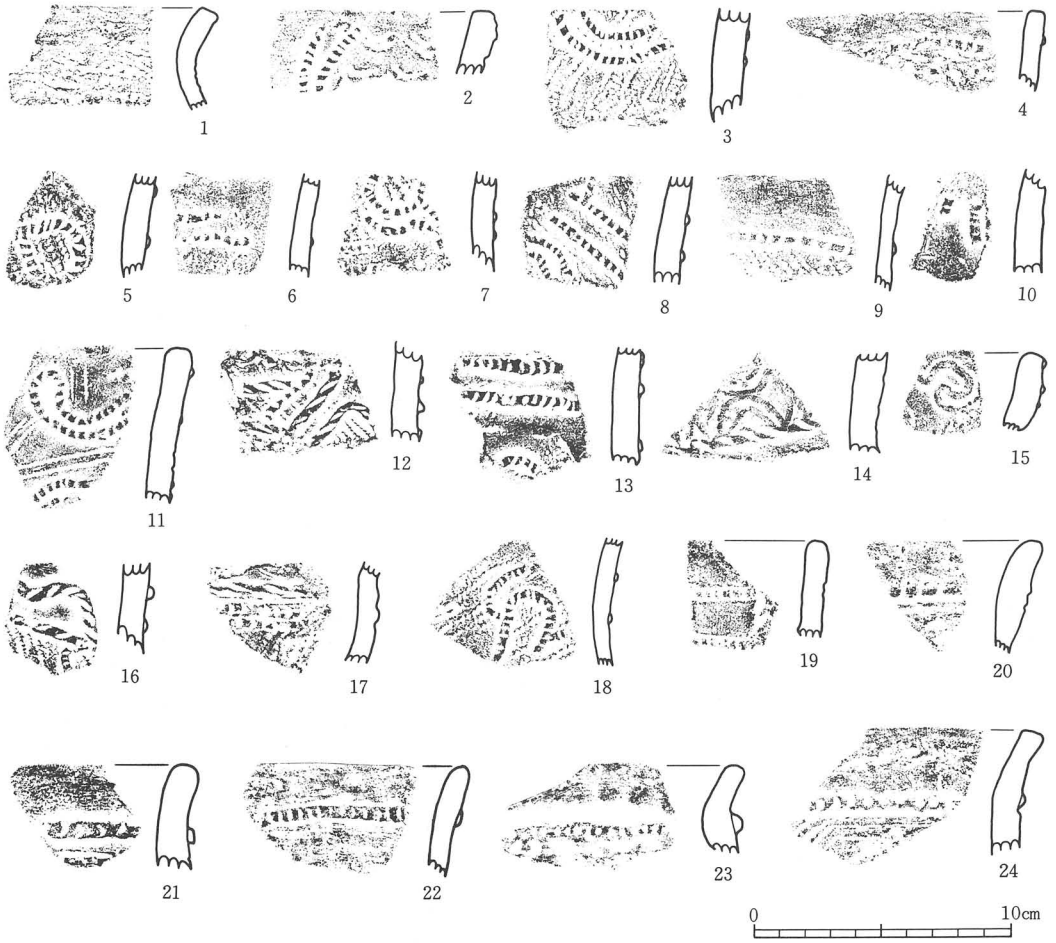
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	VI－北区	体部	Ⅰ－1類	羽状縄文・綾格文	98	11－1	9	V－西区	口縁部	Ⅰ－3類	付加条縄文	96	11－9
2	IV－ル区	体部	Ⅰ－1類	縄文	125	11－2	10	V－西区	体部	II群	縄文・縦位短沈線・沈線文	10	11－10
3	V区	口縁部	Ⅰ－1類	縄文	266	11－3	11	III－D区	口縁部	II群	縄文	189	11－11
4	VI－北区・表採	体部	Ⅰ－1類	羽状縄文（2本の原体）	98	11－4	12	IV－F区	体部	Ⅰ－4類	連続刺突文・撚糸文？	132	11－12
5	V－中央区	口縁部	Ⅰ－1類	縄文	65	11－5	13	V－中央区	体部	III－1a類	縄文・細い粘土紐貼付文	272	11－13
6	V－中央区	口縁部	IV群	縄文	58	11－6	14	V－中央区	体部	III－1a類	細い粘土紐貼付文・縄文	80	11－14
7	V－西区	口縁部	IV群	縄文	75	11－7	15	V－西区	口縁部?	II－1類	横位連続円文・縄文	10	11－15
8	V－中央区	口縁部	IV群	縄文	84	11－8	16	IV－F区	口縁部	Ⅰ－1類	撚糸文・小波状口縁	132	11－16

第6図　出土遺物・土器 (2)



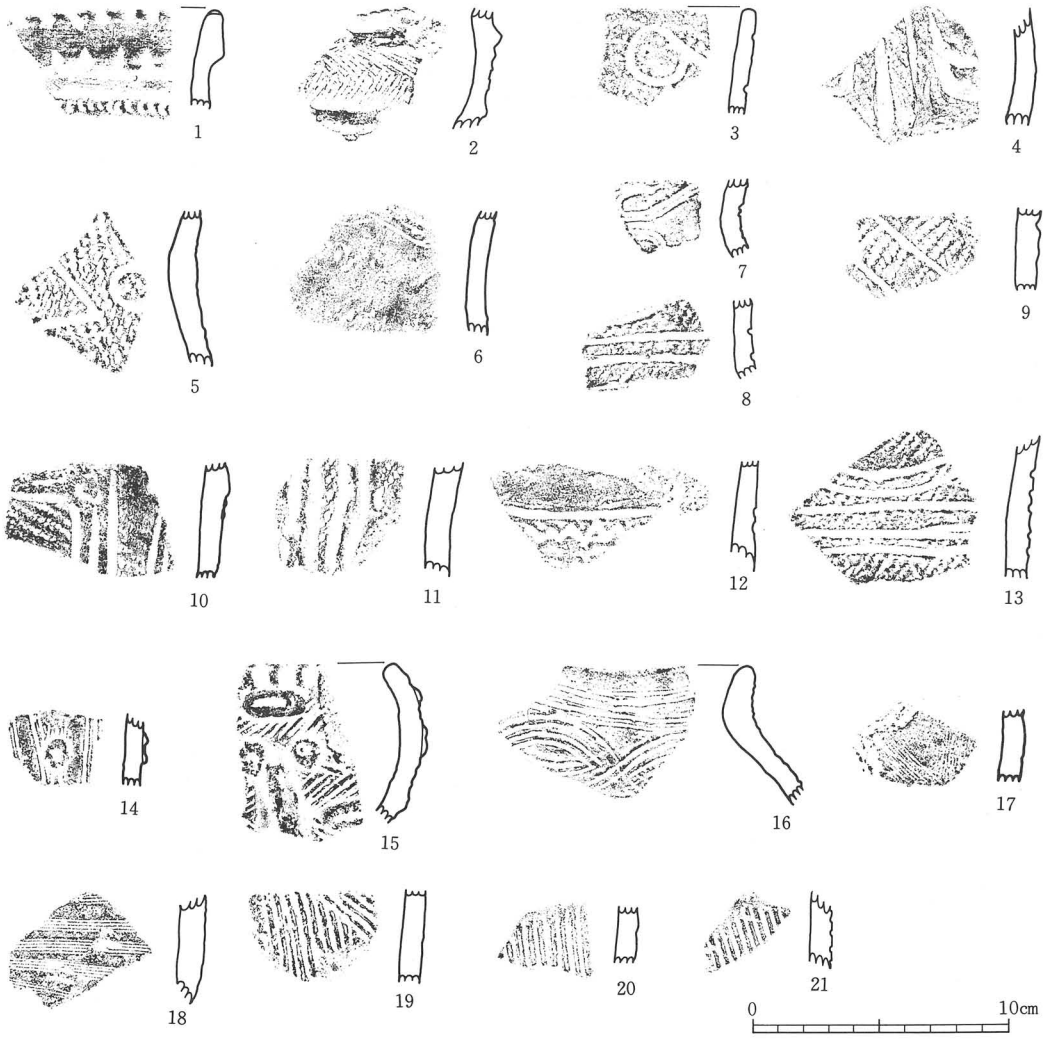
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－B区	体部	Ⅰ－4類	S字状連鎖沈線	23	11－17	11	Ⅴ－西区	体部	Ⅵ－2類	ボタン状貼付文・斜位刻目入隆線文	96	12－1
2	Ⅰ区	体部	Ⅰ－1類	縄文、綾絡文	21	11－18	12	Ⅲ－ヘ区	口縁部	Ⅱ－2類	沈線文・C字状刺突入隆線文	201	12－2
3	Ⅲ－中央区	体部	Ⅰ－4類	付加条縄文？　綾絡文	261	11－19	13	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ群	刻目入隆線文・鋸歯状連続山形文(鋸位)	170	12－3
4	Ⅲ－チ区	体部	Ⅰ－1類	縄文　綾絡文	158	11－20	14	Ⅲ－ニ区	口縁部	Ⅶ－1類	沈線文・連続刺突文・山形突起？	237	12－4
5	Ⅴ－中央区	体部	Ⅰ－4類	沈線文	13	11－21	15	Ⅲ－C区	口縁部	Ⅰ－4類	半竹による押しびき刺突文・縄文	24	12－5
6	Ⅲ－D区	口縁部		縄文	34	11－22	16	Ⅴ－中央区	体部	Ⅵ－1類	沈線文・C字状刺突入隆線文	84	12－6
7	Ⅴ－ヨ区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目入隆線文	245	11－23	17		口縁部	Ⅵ群	刻目入隆線文	128	12－7
8	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－1類	沈線による幾何学文・縄文	73	11－24	18	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅱ群	縄文・口唇部に刺突	80	12－8
9	Ⅴ－西区	体部		横位連続刺突文・平行沈線文	67	11－25	19	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅵ－1類	沈線文・半竹瓜形連続刺突文 肥厚させた山形突起	117	12－9
10	Ⅴ－西区	体部	Ⅵ－2類	ボタン状貼付	10	11－26							

第7図　出土遺物・土器 (3)



番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅴ－カ区	口縁部	Ⅰ－2類	不整撚糸文	160	12-10	13	Ⅲ－ト区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	229	12-22
2	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文・竹管文	75	12-11	14	Ⅲ－ト区	体部	Ⅲ群	刻目付粘土紐貼付文・細粘土紐貼付文	199	12-23
3	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	72	12-12	15	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅲ群	刻目付粘土紐貼付文	144	12-24
4	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	39	12-13	16	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	96	12-25
5	Ⅴ－E区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	102	12-14	17	Ⅴ－ワ区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	113	12-26
6	Ⅲ－チ区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	167	12-15	18	Ⅲ－リ区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	186	12-27
7	Ⅵ－北区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	96	12-16	19	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅱ－1類	平行沈線間瓜形文(C字状文)	25	12-28
8	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	74-a	12-17	20	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅱ－1類	平行沈線間瓜形文(C字状文)	170	12-29
9	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	74-b	12-18	21	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	145	12-30
10	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	66	12-19	22	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	143	12-31
11	Ⅴ－西区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文・平行沈線	93	12-20	23	Ⅲ－ホ区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	213	12-32
12	Ⅴ－中央区	体部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	254	12-21	24	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅱ－2類	刻目付粘土紐貼付文	89	12-33

第8図　出土遺物・土器 (4)

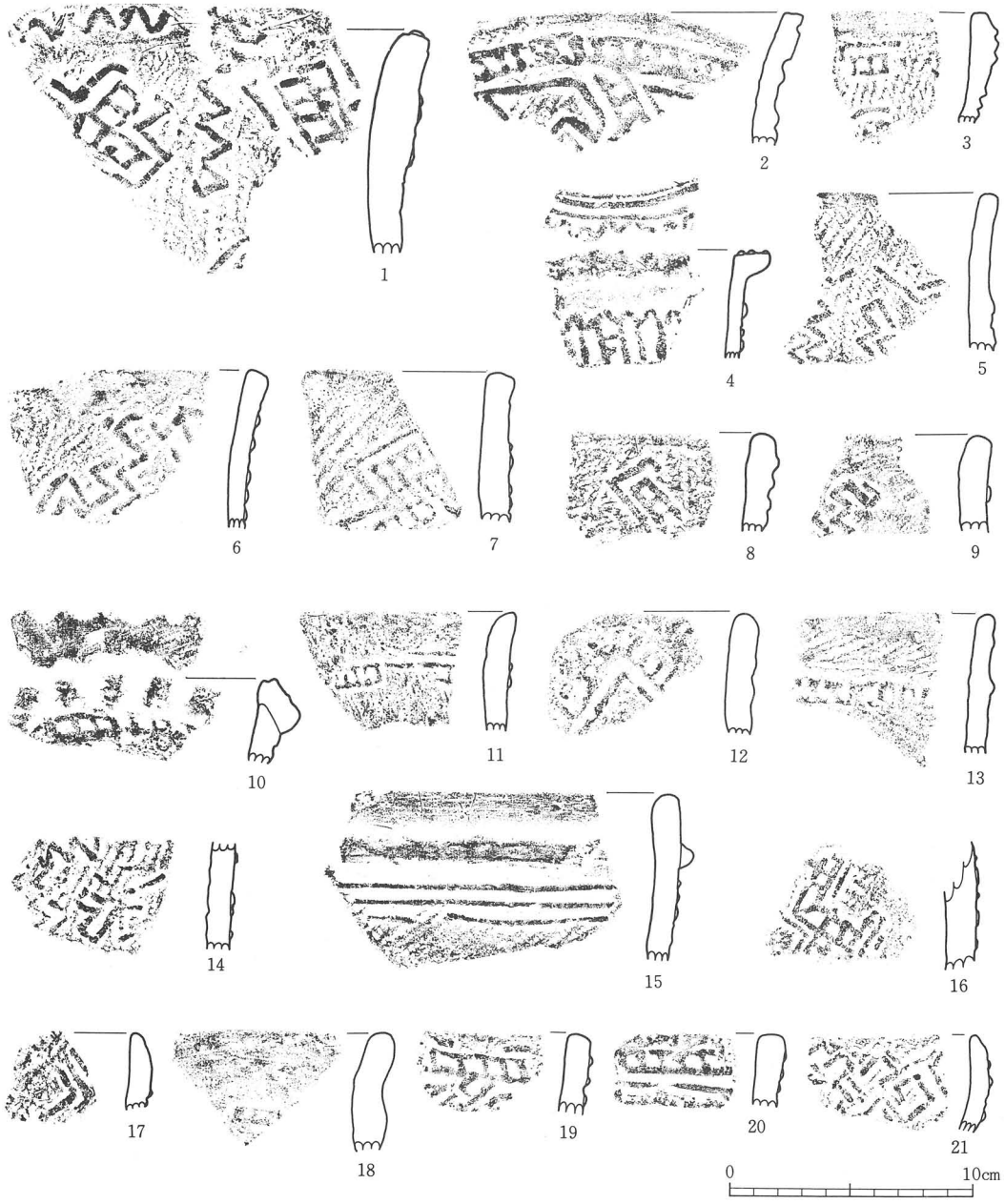


番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅳ－ル区	口縁部	Ⅳ－2Ac類	鋸歯状装飾帯・半竹瓜形連続刺突文	133	13-1	12	Ⅲ－C区	体部	Ⅳ－3Ab類	沈線文・山形沈線文	29	13-12
2	Ⅰ区・表採	体部	Ⅴ群	隆線区画・条線文		13-2	13	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－3Aa類	沈線文・縄文	93	13-13
3	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅱ－1類	沈線による幾何学文・縄文	144	13-3	14	Ⅲ区	体部	Ⅴ群	円形浮文・条線文	159	13-14
4	表採	体部	Ⅶ－2類	沈隆線区画・縄文		13-4	15	Ⅲ－ヌ区	体部	Ⅴ群	棒状貼付文・円形浮文・条線文	29	13-15
5	Ⅲ－北区	体部	Ⅱ－1類	沈線による幾何学文・縄文	4	13-5	16	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－3Aa類	平行沈線文・交互弧状文(レンズ状)	73	13-21
6	Ⅲ－中央区	体部	Ⅱ－1類	沈線文・縄文	253	13-6	17	Ⅱ－ロ区	体部		櫛歯状沈線文	208	13-16
7	Ⅲ区	体部	Ⅱ－1類	竹管による平行沈線文	176	13-7	18	Ⅲ－ト区	体部		櫛歯状沈線文	219	13-17
8	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－3Aa類	沈線文・縄文	93	13-8	19	Ⅲ－D区	体部	Ⅴ群	条線文	30	13-18
9	Ⅳ－ル区	体部	Ⅱ群	沈線文・縄文	126-a	13-9	20	Ⅲ－D区	体部	Ⅴ群	条線文	36	13-19
10	表採	体部	Ⅶ－2類	沈隆線区画・縄文		13-10	21	Ⅲ－ホ区	体部	Ⅴ群	条線文	226	13-20
11	Ⅳ－ル区	体部	Ⅶ－2類	隆線文・縄文	126-b	13-11							

第9図　出土遺物・土器 (5)

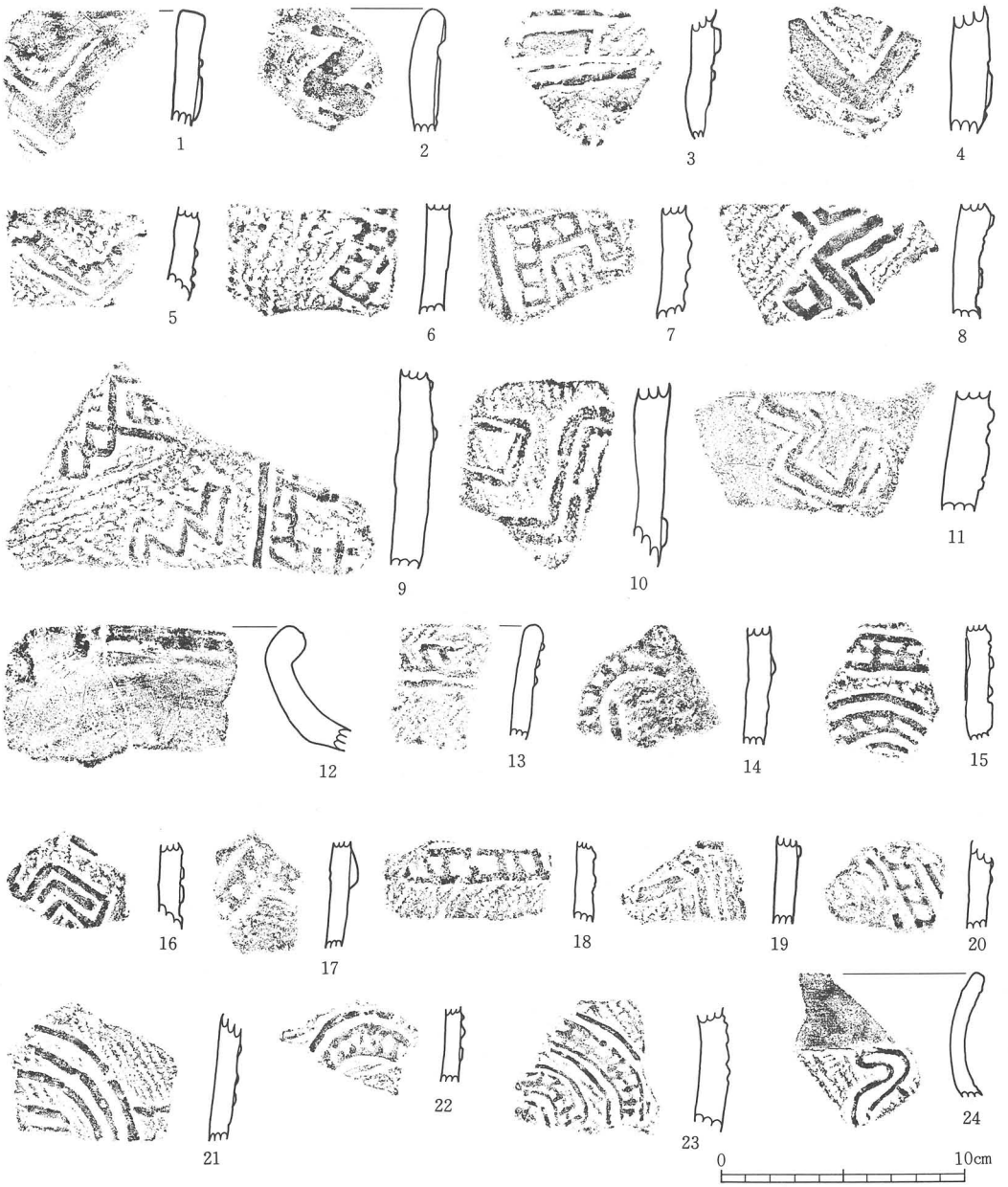
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅱ－1類	沈線文	30	13-22	15	Ⅲ-チ区	体部	Ⅳ－3Ab類	山形沈線文・縄文	176	13-36
2	Ⅲ－リ区	体部	Ⅱ－1類	平行沈線文	145	13-23	16	Ⅴ-中央区	口縁部	Ⅳ－3Ab類	山形沈線文・縄文	82	13-37
3	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ－3Bb類	頂部に刻目の入った山形突起・盲孔	240	13-24	17	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅳ－3Bb類	縄文	34	13-38
4	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅳ－1a類	細い粘土紐貼付文	117	13-25	18	Ⅴ-中央区	体部	Ⅳ－3 Ab類	山形沈線文・縄文	12	13-39
5	Ⅲ区	口縁部	Ⅳ－3Aa類	沈線文・縄文	189	13-26	19	Ⅲ－C区	体部	Ⅳ－3Ab類	山形沈線文(半竹沈線)・半竹刺突(押しびき)	32	13-40
6	表採	口縁部	Ⅲ群	縄文		13-27	20	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－3Ab類	山形沈線文	74	14-1
7	Ⅳ－F区	口縁部	Ⅲ－2類	「∽」状貼付文・細い粘土紐貼付文	38	13-28	21	Ⅴ区	体部	Ⅳ－3 Ab類	山形沈線文	266	14-2
8	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅲ－2類	突起部に「∽」状貼付文	74	13-29	22	Ⅲ-チ区	体部		雨だれ状刺突文・縄文	158	14-3
9	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	山形突起・盲孔・隆帯貼付	176	13-30	23	Ⅲ-中央区	体部	Ⅲ－1a類	巾の広い粘土紐貼付文(刺突入)	5	14-4
10	Ⅴ-中央区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文・縄文	85	13-31	24	Ⅴ－ヨ区	体部		平行沈線文	60	14-5
11	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅳ－3Bc類	波状沈線文・口唇部に双こぶ状の貼付文	143-a	13-32	25	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅵ－1類	竹管刺突入粘土紐貼付文・山形突起	219	14-6
12	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅳ群	口唇部刻目	143-b	13-33	26	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ群	沈線文・縄文	43	14-7
13	Ⅴ-中央区	口縁部	Ⅳ－3Bb類	頂部の割れた山形突起・棒状貼付・縄文	12	13-34	27	Ⅴ－E区	体部	Ⅳ－3Aa類	山形沈線文	11	14-8
14	Ⅲ－チ区	口縁部		巾広の工具による沈線文・縄文	231	13-35							

第10図　出土遺物・土器 (6)



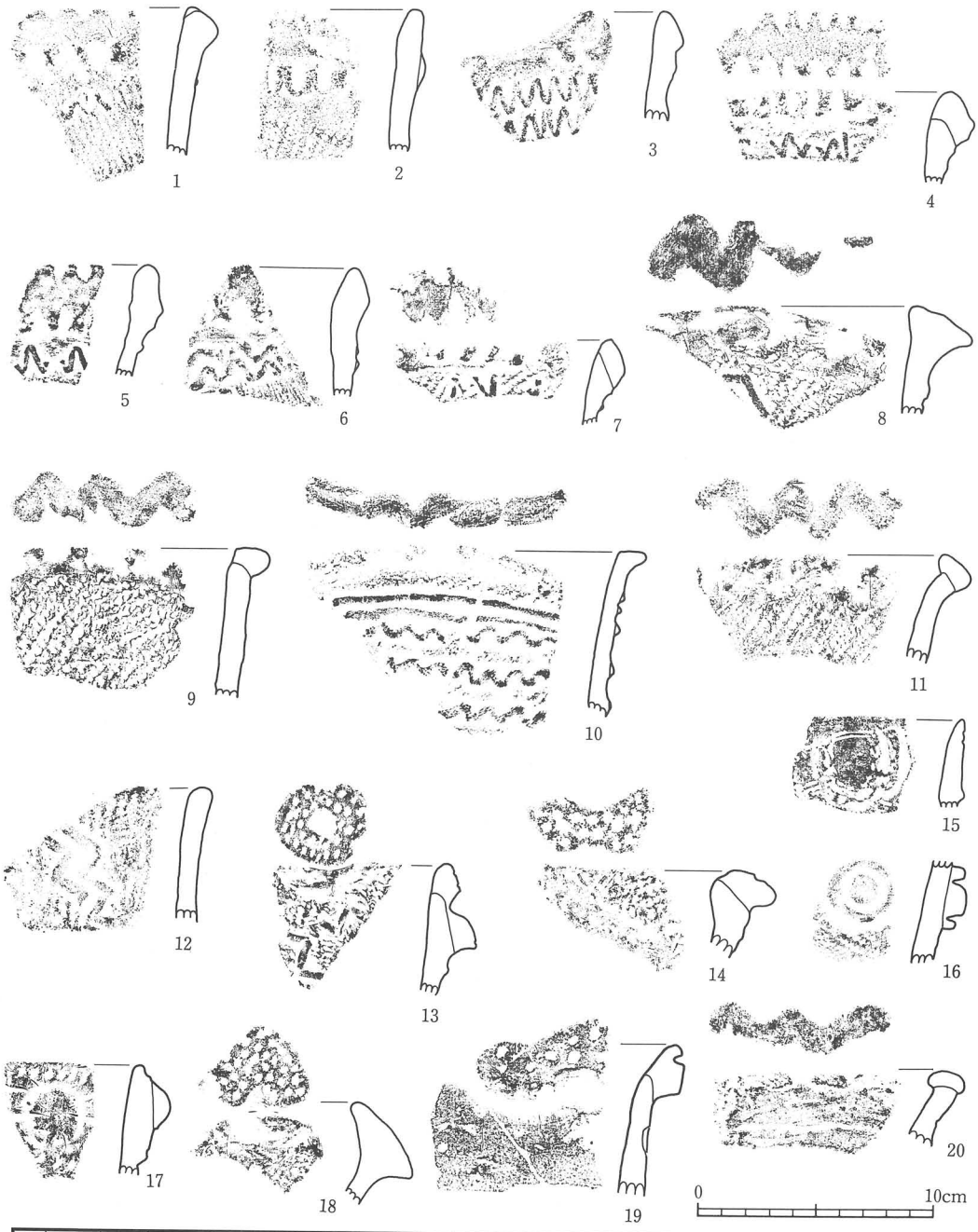
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅲ－２類	細い粘土紐小波状文・格子状文	191	14-9	12	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	229	14-20
2	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	59-a	14-10	13	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	234	14-21
3	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	254	14-11	14	表採	体部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文(折りたたみ式の山形文)		14-22
4	表採	口縁部	Ⅲ－２類	口唇部に細い粘土紐小波状文・格子状文		14-12	15	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅳ－1a類	横位隆帯貼付・細い粘土紐貼付文	191	14-23
5	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文(折りたたみ式の山形)	63	14-13	16	Ⅲ－C区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	29	14-24
6	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文	157	14-14	17	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	71	14-25
7	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	49	14-15	18	Ⅳ－ル区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	125	14-26
8	Ⅴ－ワ区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	131	14-16	19	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	75	14-27
9	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文	167	14-17	20	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	76	14-28
10	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐格子状文	128	14-18	21	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐山形文(折りたたみ式の山形文)	82	14-29
11	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	66	14-19							

第11図　出土遺物・土器 (7)



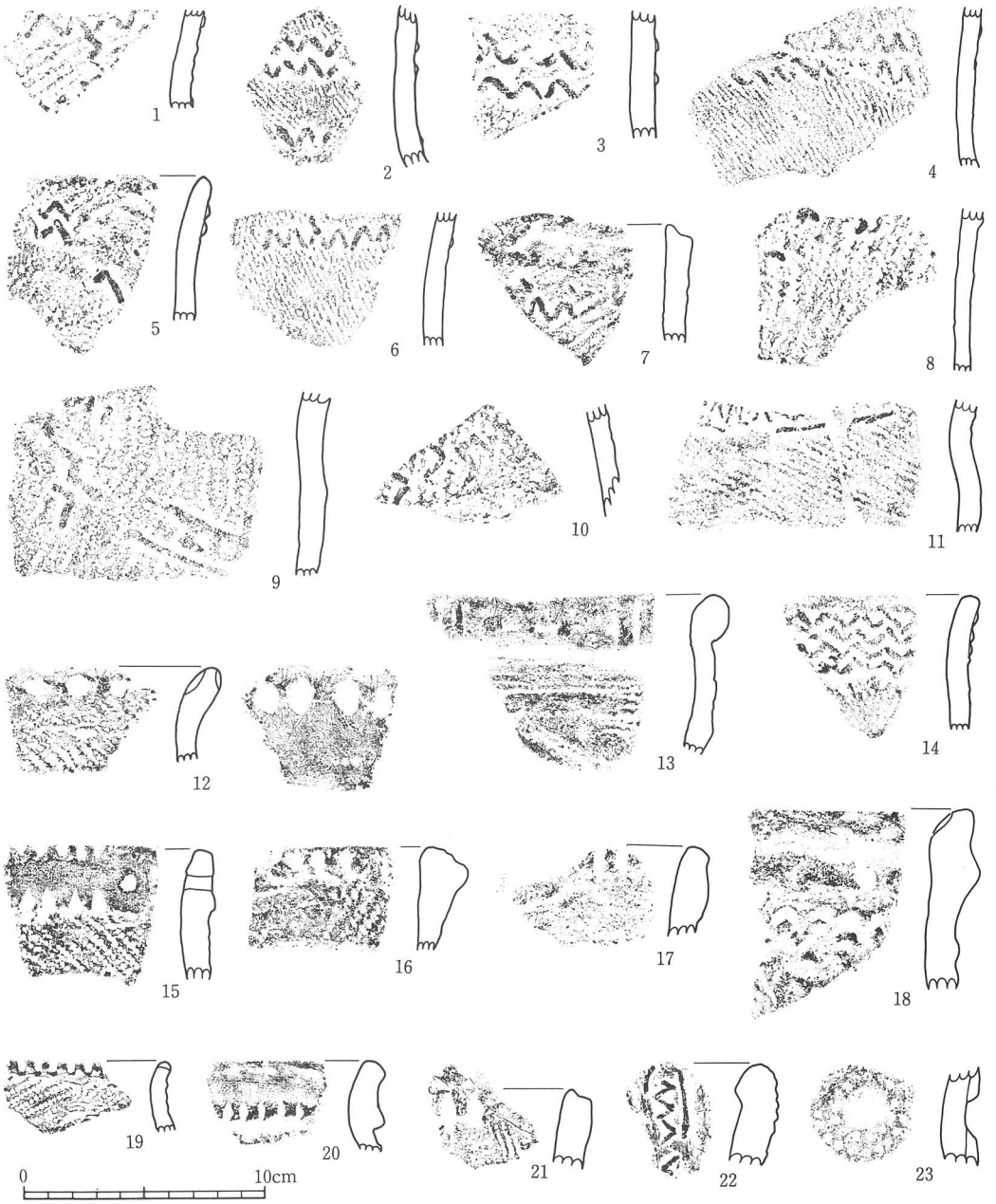
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	表採	口縁部	Ⅲ－1a類	巾広の隆帯・細い粘土紐貼付	18	15－1	13	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐格子状文	167	15-13
2	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅲ－1a類	巾広の隆帯・細い粘土紐貼付	128	15-2	14	Ⅴ－ワ区	体部	Ⅲ－1c類	細い粘土紐格子状文	165	15-14
3	Ⅲ－ヌ区	体部	Ⅲ－1a類	巾広の隆帯・細い粘土紐貼付	168	15-3	15	Ⅴ－中央区	体部	Ⅲ－1c類	細い粘土紐格子状文	64	15-15
4	表採	体部	Ⅲ－1a類	巾広の隆帯・細い粘土紐貼付		15-4	16	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐幾何学文	71	15-16
5	Ⅲ－D区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	34	15-5	17	Ⅳ－ル区	体部	Ⅳ群	刺突入隆帯(山形状)	125	15-17
6	Ⅴ－中央区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	76	15-6	18	Ⅴ－E区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	51	15-18
7	Ⅴ－E区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	161	15-8	19	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ群	粘土紐貼付文	73	15-19
8	Ⅴ－中央区	体部	Ⅳ－1b類	粘土紐幾何学文	85	15-7	20	Ⅲ－リ区	体部	Ⅲ－1b類	細い粘土紐梯子状文	143	15-20
9	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐連続山形文・梯子状文	68	15-9	21	表採	体部	Ⅲ－1c類	細い粘土紐貼付文		15-21
10	Ⅴ－西区	体部	Ⅲ－1b類	粘土紐幾何学文	67	15-10	22	表採	体部	Ⅲ－1c類	細い粘土紐格子状文		15-22
11	Ⅴ－中央区	体部	Ⅲ－1a類	粘土紐幾何学文	63	15-11	23	Ⅴ－中央区	体部	Ⅲ－1c類	細い粘土紐格子状文	59	15-23
12	Ⅲ－C区	体部	Ⅵ－4c類	折返し口縁・コブ状貼付文	232	15-12	24	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1b類	細い粘土紐貼付文	76	15-24

第12図　出土遺物・土器 (8)



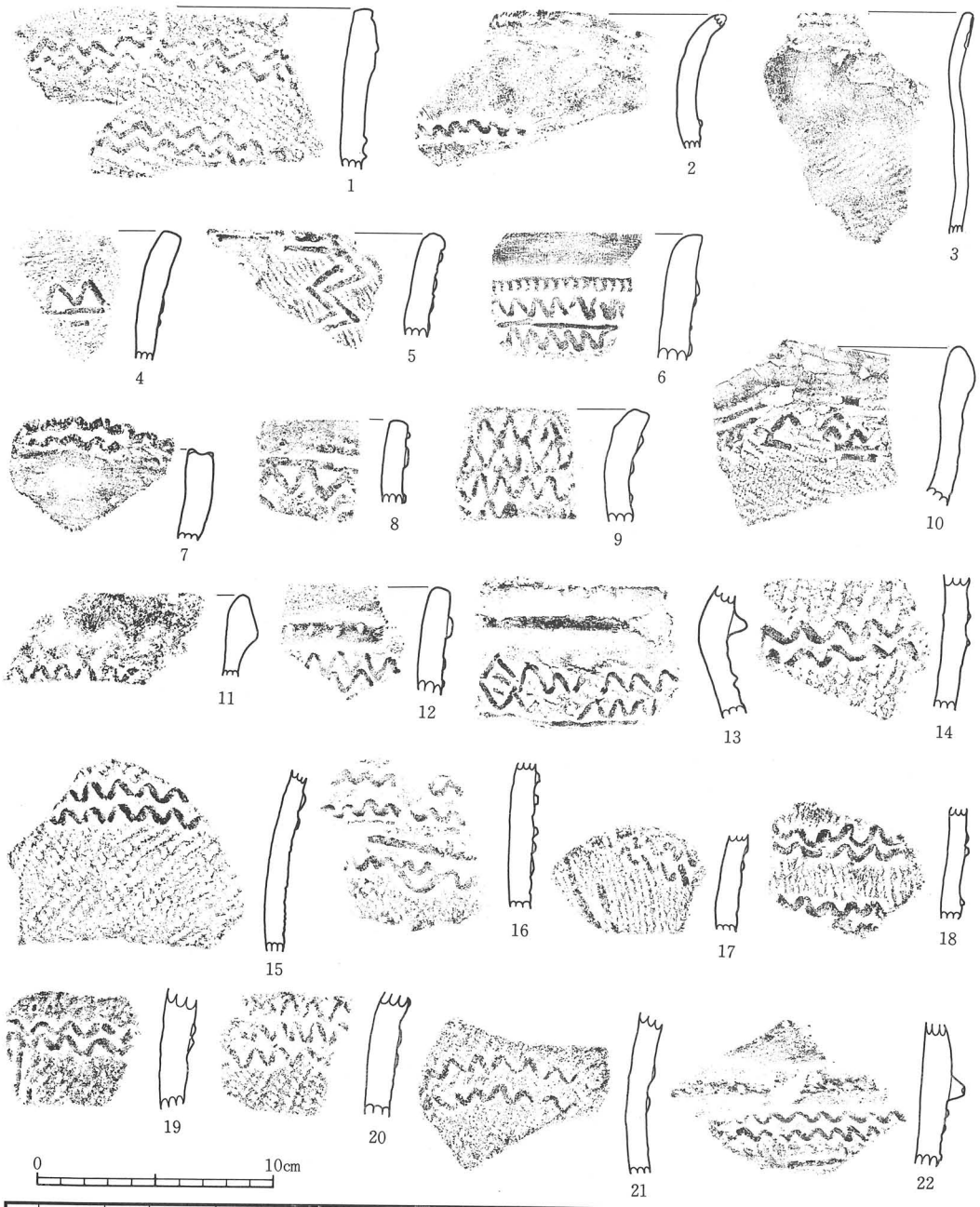
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V−中央区	口縁部	IV−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	85	15-25	11	表採	口縁部	IV−2A類	鋸歯状装飾帯・縄文		16-2
2	V−西区	口縁部	IV−2C類	鋸歯状装飾帯(下部消失)・隆線上に太い短沈線	70	15-26	12	III−チ区	口縁部	IV−1b類	粘土紐鋸歯状山形文・縄文	173	16-3
3	V−西区	口縁部	IV−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	71	15-27	13	V−西区	口縁部	IV−1e類	刺突入擬状貼付文・細い粘土紐鋸歯状山形文	74	16-4
4	III−B区	口縁部	IV−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	23	15-28	14	IV−F区	口縁部	IV−1c類	刺突入鋸歯状装飾帯	38	16-5
5	III−チ区	口縁部	IV−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	240	15-29	15	V−西区	口縁部	VI−2類	円形貼付文・2個1対の連続刺突	70	16-6
6	IV区	口縁部	VI−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐小波状文	126	15-30	16	III−D区	体部	VI−2類	ボタン状貼付文(円形刺突付)・縄文	34	16-7
7	III−D区	口縁部	IV−1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	35	15-31	17	III−D区	口縁部	VI−1類	ボタン状貼付・半竹瓜形連続刺突文	158	16-8
8	V−中央区	口縁部	IV−1c類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐貼付文・縄文	63	15-32	18	V−西区	口縁部	IV−1c類	刺突入鋸歯状装飾帯・縄文	66	16-9
9	V区	口縁部	IV−2A類	鋸歯状装飾帯・縄文	266	15-33	19	表採	口縁部	IV−1c類	刺突入鋸歯状装飾帯	18	16-10
10	V−中央区	口縁部	III−2類	口唇部波状文貼付・細い粘土紐小波状文	84・85	16-1	20	V−西区	口縁部	IV−2A類	鋸歯状装飾帯(口唇部)	66	16-11

第13図　出土遺物・土器 (9)



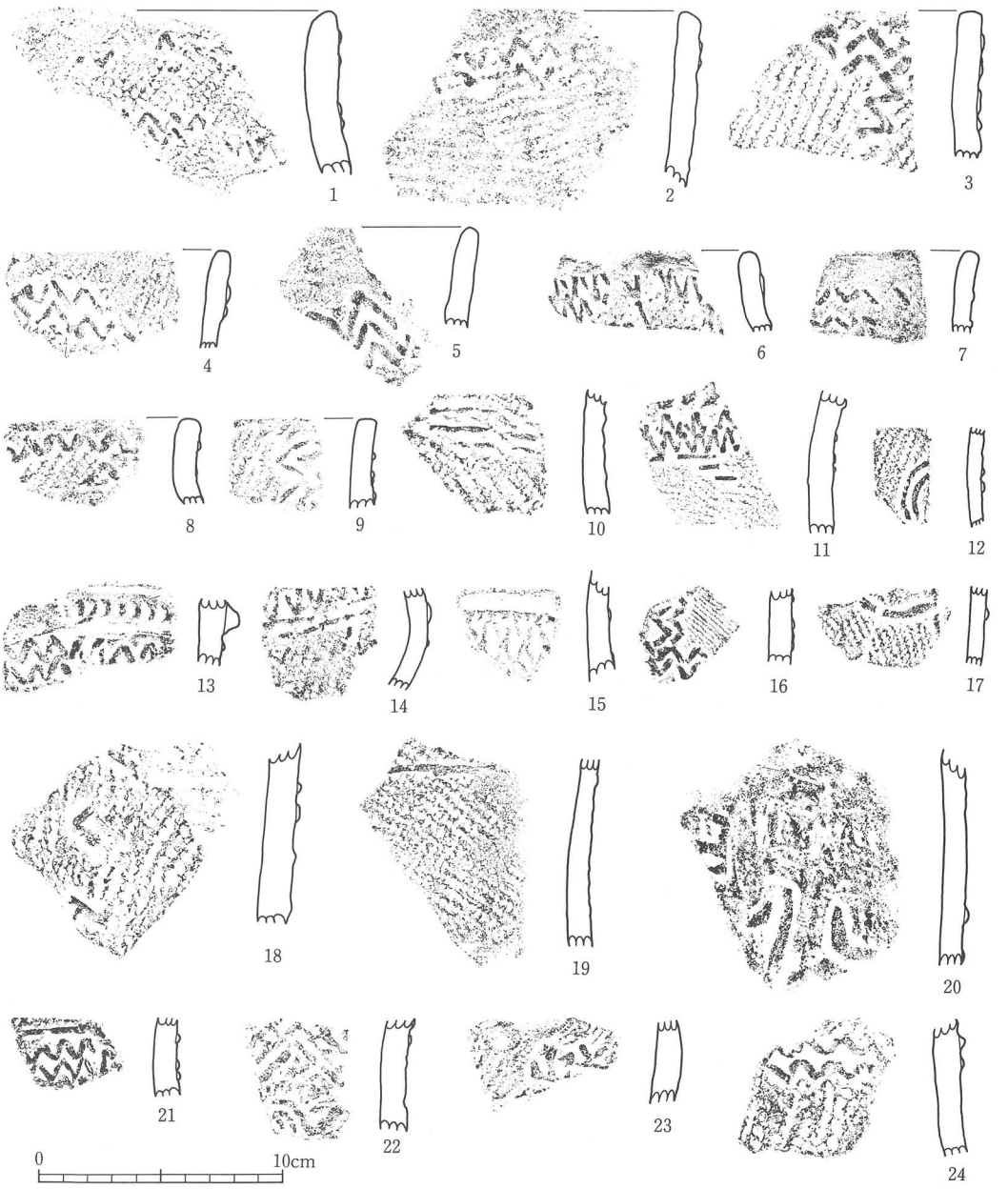
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	表採	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文		16-12	13	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅵ－4c 類	肥厚させた口縁部に短い粘土紐貼付・沈線文	128	16-24
2	表採	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文		16-13	14	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文	12	16-26
3	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐小波状文・縄文	75	16-14	15	Ⅴ－東区	口縁部	Ⅳ－2A 類	鋸歯状装飾帯(全周)・縄文・貫通孔	14	16-27
4	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文	71-a	16-15	16	Ⅳ－F区	口縁部	Ⅳ－1d 類	鋸歯状装飾帯(上部消失)・鋸歯状山形文剝落痕・縄文	50	16-28
5	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文	71-b	16-16	17	Ⅳ－F区	口縁部	Ⅳ－3Bb類	頂部に刻目の入った山形突起	41	16-29
6	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文	73	16-17	18	Ⅳ－F区	口縁部	Ⅳ－3Ab類	隆帯貼付・鋸歯状山形沈線文	38	16-25
7	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐山形文・口縁部装飾帯(欠)	12	16-18	19	Ⅴ－E区	口縁部	Ⅳ－2C 類	口唇部に刻目・縄文	48	16-30
8	Ⅴ－中央区	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐山形文・縄文	77	16-19	20	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－2Ac類	鋸歯状装飾帯(上部消失)・刺突文	10	16-31
9	Ⅴ－中央区	体部	Ⅲ群	細い粘土紐梯子状文・縄文	82	16-20	21	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅳ－1d 類	鋸歯状装飾帯(全周)	117	17-1
10	Ⅲ－D区	体部	Ⅲ群	細い粘土紐小波状文・縄文	39	16-21	22	Ⅴ－E区	口縁部	Ⅳ－1a 類	コブ状突起・細い粘土紐鋸歯状山形文・直線紐	99	17-2
11	Ⅴ－西区	体部	Ⅳ－1a 類	細い粘土紐鋸歯状山形文・縄文	108	16-22	23	Ⅴ－中央区	体部	Ⅳ－1e 類	竹管状刺突入環状装飾体	15	17-3
12	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－2D 類	口縁部に内外面の押圧により鋸歯状装飾化・縄文	76	16-23							

第14図　出土遺物・土器 (10)



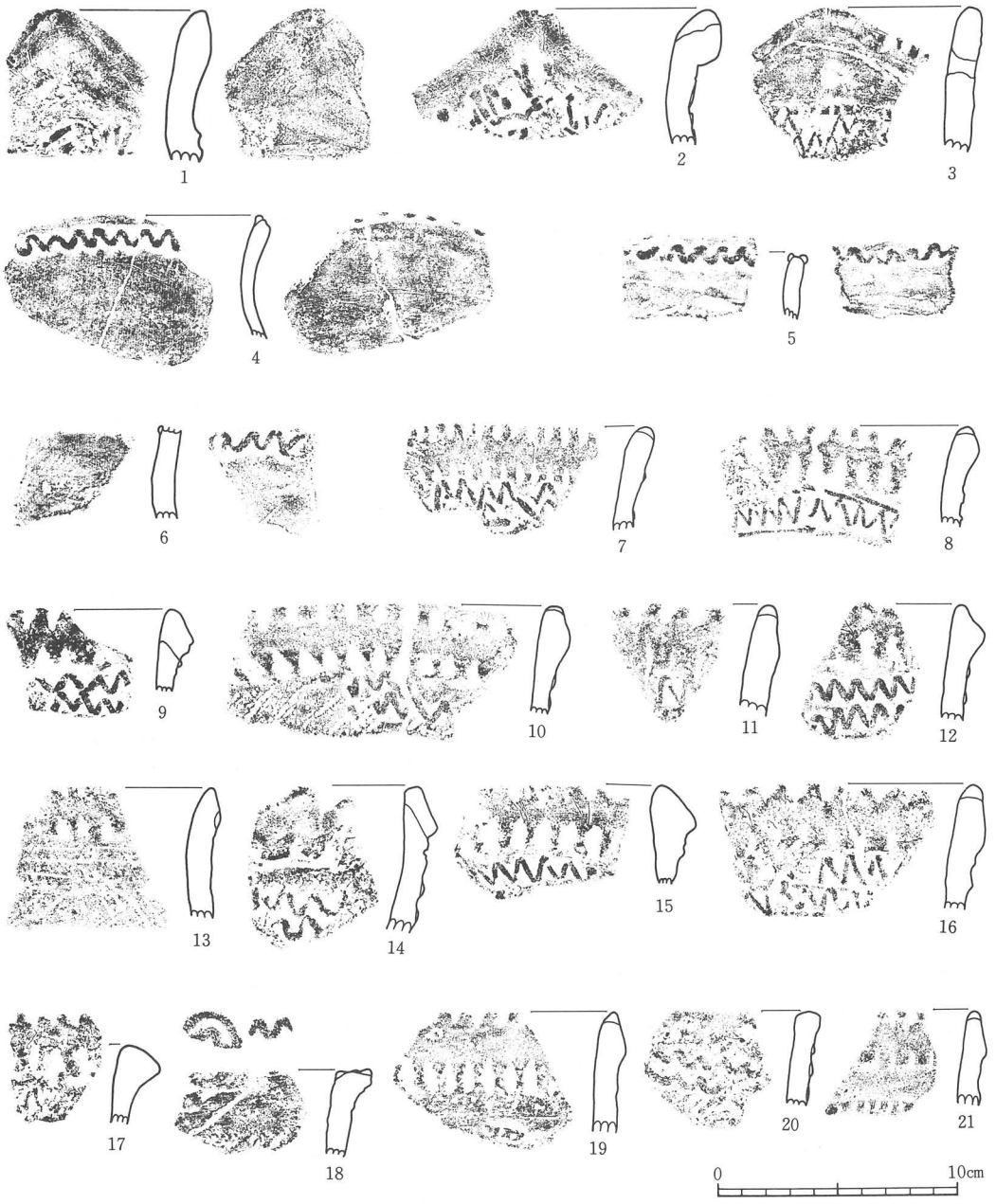
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V－中央区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	59	17-4	12	V－中央区	口縁部	IV－1a類	刺突入隆帯・細い粘土紐の小波状文	63	17-15
2	III－ヌ区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	168	17-5	13	V－西区	口頸部	IV－1a類	隆帯・細い粘土紐の小波状文	75	17-16
3	V－中央区	口縁部		縄文	49	17-6	14	V－中央区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	15	17-17
4	III－ヌ区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	151	17-7	15	III－チ区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	173	17-18
5	III－D区	口縁部	IV群	細い粘土紐鋸歯状山形文	179	17-8	16	III－ヌ区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	159	17-19
6	V－西区	口縁部	IV－1a類	刻目入隆帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	154	17-9	17	V－中央区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	84	17-20
7	III－ヘ区	口縁部	III－2類	口唇部に細い粘土紐の小波状文	201	17-10	18	V－中央区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	12	17-21
8	表採	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文		17-11	19	V－中央区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	84	17-22
9	V－西区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	89	17-12	20	IV－F区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	132	17-23
10	V－E区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	100	17-13	21	III－チ区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	157	17-24
11	III－D区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐の小波状文	31	17-14	22	V－E区	体部	IV－1a類	刺突入隆帯・細い粘土紐の小波状文	106・108	17-25

第15図　出土遺物・土器 (11)



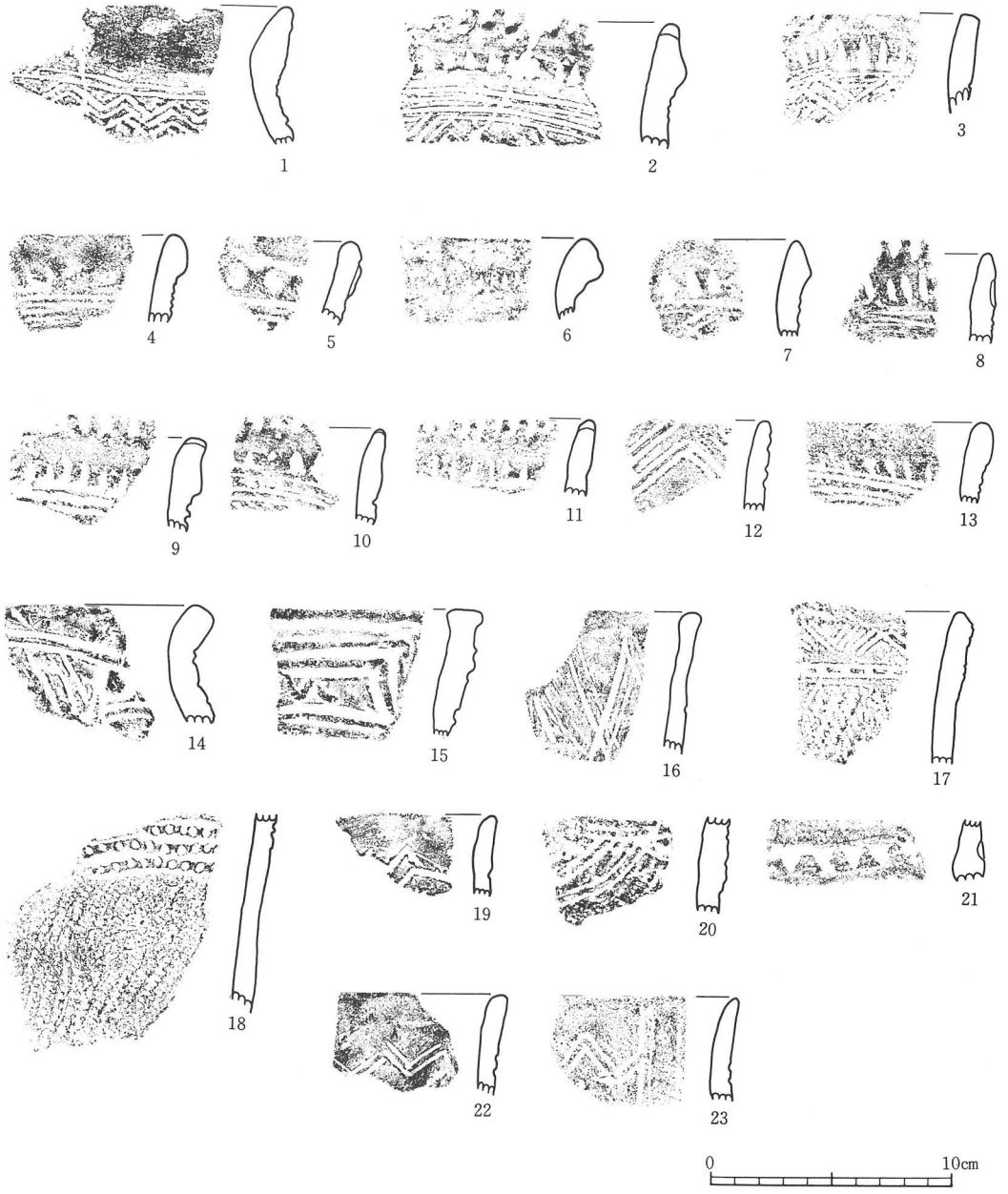
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V－E区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	161	18-1	13	III－ト区	体部	IV群	刻目入隆帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	205	18-12
2	V－中央区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	13	18-2	14	V－E区	体部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	48	18-13
3	V－中央区	口縁部	IV－1b類	細い粘土紐鋸歯状山形文	65	18-3	15	III－D区	体部	IV－1a類	刻目入隆帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	30	18-15
4	V－中央区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	77	18-4	16	V－西区	体部	IV－1b類	細い粘土紐鋸歯状山形文	73	18-16
5	V－中央区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	62	18-5	17	V－E区	体部	III－1a類	細い粘土紐貼付文	98	18-17
6	V－E区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	161-b	18-6	18	V－E区	体部	IV－1b類	細い粘土紐鋸歯状山形文	57	18-18
7	V－西区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	44	18-7	19	III－リ区	体部	IV－1a類	細い粘土紐貼付文	144	18-19
8	V－西区	口縁部	IV－1a類	細い粘土紐小波状文	75	18-8	20	V－西区	体部	III－1b類	細い粘土紐貼付文	44	18-20
9	II－リ区	口縁部	IV－1b類	細い粘土紐鋸歯状山形文	150	18-9	21	V－E区	体部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文	48	18-21
10	II－D区	体部	IV－1a類	細い粘土紐貼付	208	18-14	22	表採	体部	III－1b類	細い粘土紐梯子状文		18-22
11	表採	体部	IV－1a類	細い粘土紐鋸歯状山形文		18-10	23	III－リ区	体部	IV－1a類	細い粘土紐貼付文	137	18-23
12	V－E区	体部	III－1a類	細い粘土紐貼付文	33	18-11	24	III－F区	体部	III－1d類	細い粘土紐の小波状文	38	18-24

第16図　出土遺物・土器 (12)



番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－チ区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	細い粘土紐貼付文・山形突起	218	18-25	12	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	143	19-5
2	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	細い粘土紐貼付文・山形突起	205	18-26	13	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－2B類	鋸歯状装飾帯・平行沈線文	49	19-6
3	Ⅴ－E区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	刻目入隆帯・細い粘土紐鋸歯状山形文・貫通孔・山形突起	48	18-27	14	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	72	19-7
4	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－2類	口唇部細い粘土紐の小波状文	86	18-30	15	Ⅲ－ニ区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	236	19-8
5	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅲ－2類	口唇部細い粘土紐の小波状文	67	18-29	16	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	12	19-10
6	Ⅲ－ヌ区	体部	Ⅲ－2類	細い粘土紐の小波状文	159	18-28	17	Ⅳ－F区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	50	18-11
7	Ⅲ区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	22	18-31	18	Ⅴ－リ区	口縁部	Ⅲ－2類	口唇部細い粘土紐貼付文・小波状文	112	18-12
8	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	80	19-1	19	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－2Ab類	鋸歯状装飾帯・刺突入隆線	44	19-13
9	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	75	19-2	20	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅲ－1d類	細い粘土紐の小波状文	13	19-9
10	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐鋸歯状山形文	89・134	19-3	21	Ⅲ－ハ区	口縁部	Ⅳ－2Ab類	鋸歯状装飾帯・刻目入隆線	225	19-14
11	Ⅳ－ル区	口縁部	Ⅳ－1d類	鋸歯状装飾帯・細い粘土紐の小波状文	125	19-4							

第17図　出土遺物・土器 (13)

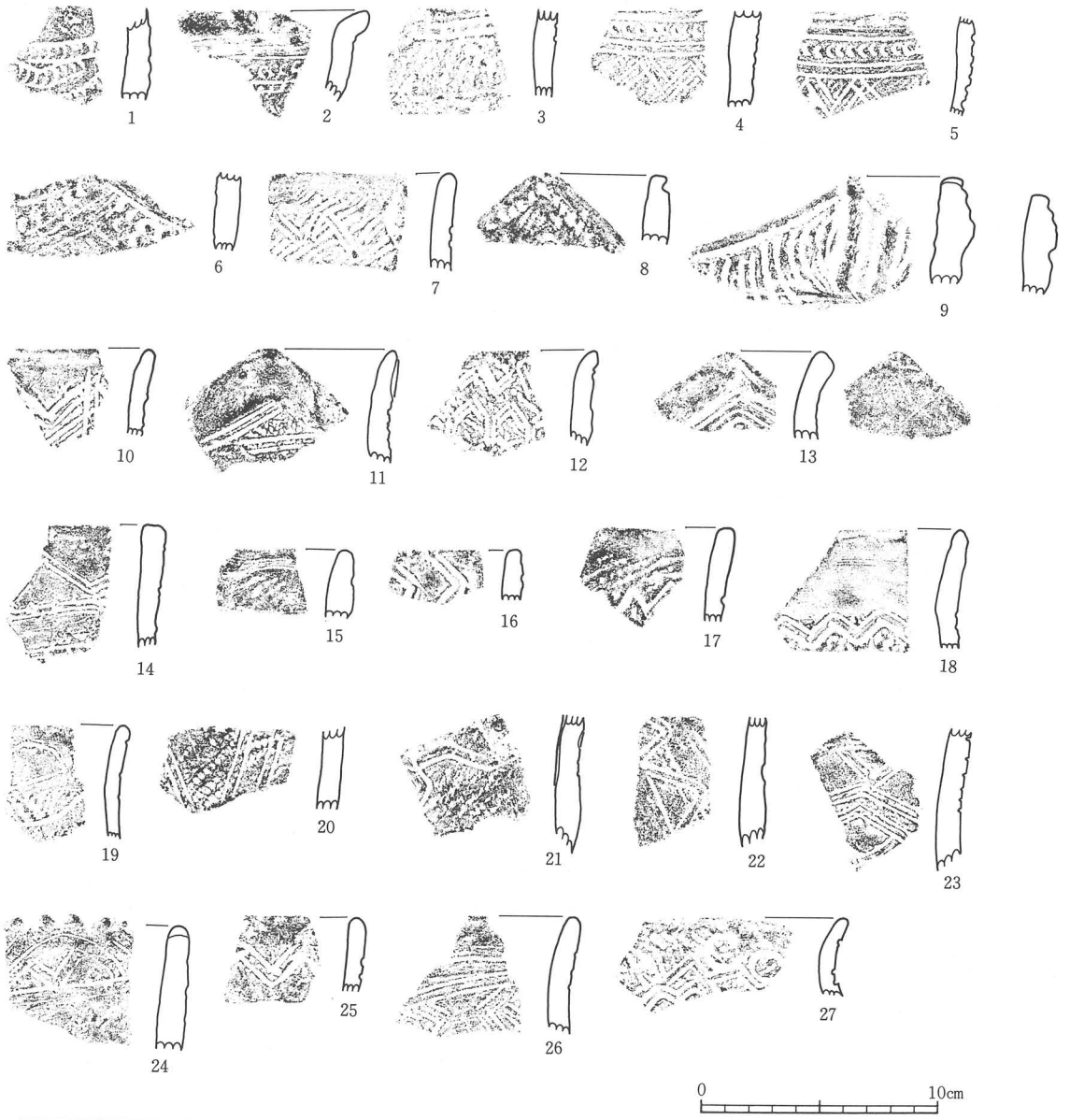


番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V－西区	口縁部	IV－2D類	平行沈線文・山形沈線文	93	19-15	13	V－中央区	口縁部	IV－2B類	肥厚させた口縁下部に刻目・平行沈線文	56	19-27
2	III－ヲ区	口縁部	IV－2Aa	鋸歯状装飾帯・平行沈線文・山形沈線文	120	19-16	14	V－E区	口縁部	IV－4b類	口縁部肥厚・沈線区画	102	19-28
3	III－D区	口縁部	IV－2B類	縦位短沈線・山形沈線文	25	19-17	15	V－E	口縁部	IV－4b類	沈線・隆線による方形区画	100	19-29
4	V－E区	口縁部	IV－2B類	刺突文・平行沈線文	108	19-18	16	V－中央区	口縁部	IV－4b類	沈線文	81	19-30
5	V－中央区	口縁部	VI－4c類	巾広の隆帯に刺突	56	19-19	17	V－D区	口縁部	IV－1類	山形沈線文・半竹押しびきによる瓜形文	111	19-31
6	IV－ル区	口縁部	VI－4c類	肥厚させた口縁下部に刻目	116	19-20	18	V－東区	体部	IV－1類	刺突入隆線	16	19-32
7	III－D区	口縁部	IV－2B類	肥厚させた口縁下部に刻目(鋸歯状装飾帯下部消失)	34	19-21	19	III－B区	口縁部	VI群	山形沈線文	23	19-33
8	III－ニ区	口縁部	IV－2Aa類	鋸歯状装飾帯・沈線文	237	19-22	20	VI区	体部	IV－3Aa類	沈線文	164	19-34
9	V－E区	口縁部	IV－2Aa類	鋸歯状装飾帯・平行沈線文	106	19-23	21	表採	体部	VII－1類	三角形彫去		19-35
10	V－西区	口縁部	IV－2Aa類	鋸歯状装飾帯・沈線文	98	19-24	22	V－西区	口縁部	VI群	山形沈線文	67	19-36
11	IV－ル区	口縁部	IV－2Aa類	鋸歯状装飾帯	125	19-25	23	V－E区	口縁部	VI群	山形沈線文	106	19-37
12	V－西区	口縁部	IV－3Ab類	平行沈線文・山形沈線文	74	19-26							

第18図　出土遺物・土器 (14)

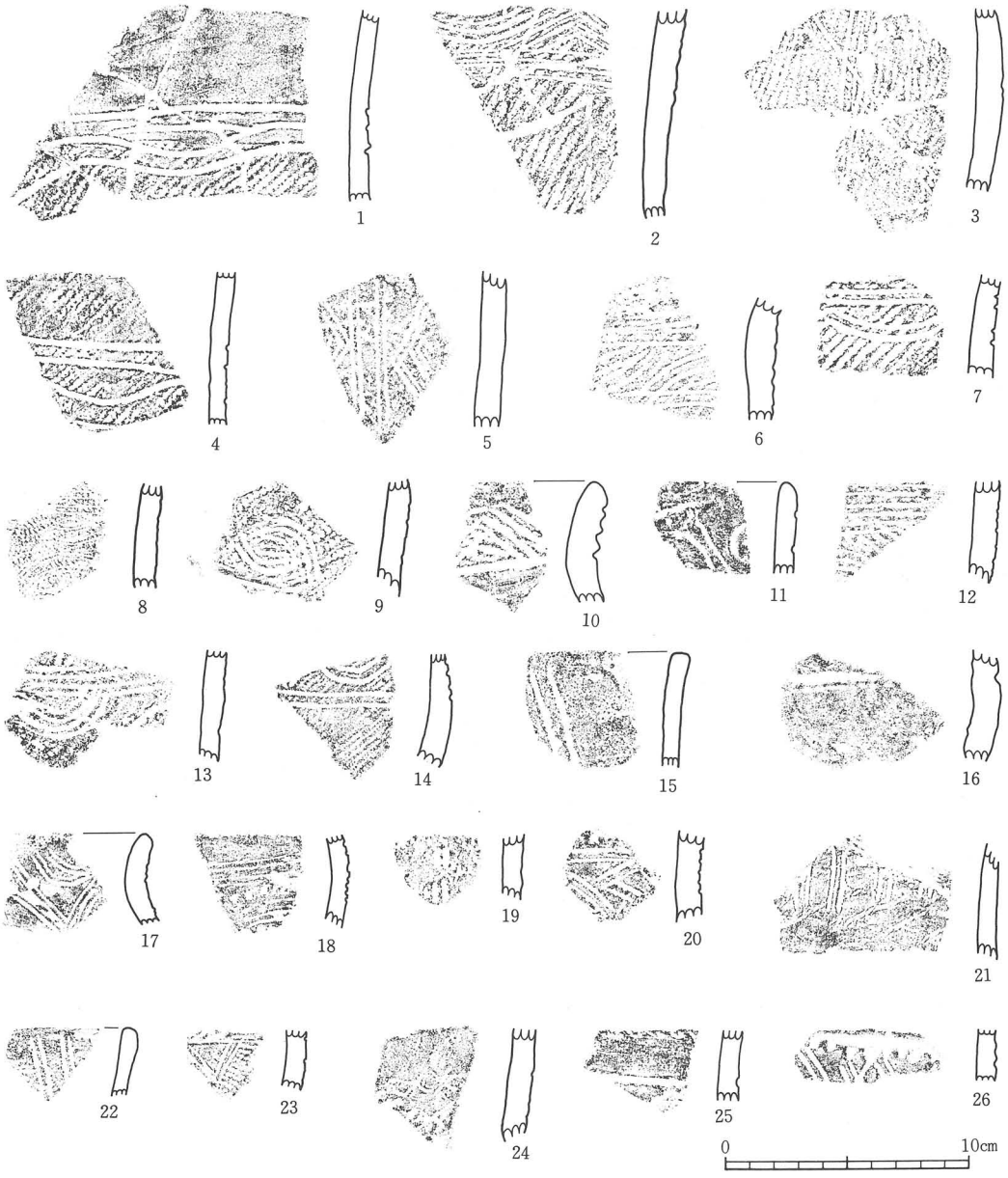
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V－西区	口縁部	IV－2Ac類	鋸歯状装飾帯・平行沈線文・半竹瓜形連続刺突文	9	20-1	14	V－西区	口縁部		沈線文	219	20-14
2	V－西区	体部	VI群	刻線貼付文・縄文RL	74	20-2	15	V区	口縁部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文・平行沈線文・山形沈線文	66	20-15
3	III－ハ区	口縁部	VI－3類	突起頂部に刻目・刺突文・刻線貼付文	216	20-3	16	V－E区	口縁部	VI－3類	刻線貼付文・山形沈線文・半竹瓜形連続刺突文	119	20-16
4	V－ワ区	体部	VII－1類	刻線貼付文・平行沈線文・山形沈線文	113	20-4	17	V－D区	体部	VI－3類	刻線貼付文	40	20-17
5	III－リ区	口縁部	VI群	口唇部梯子状貼付文・刻入貼付文・円形刺突(竹管)	143	20-5	18	V－中央区	口縁部	VI－1類	刺突入隆線	135	20-18
6	III－チ区	体部	VI－3類	刻線貼付文・縄文RL(磨消)	157	20-6	19	V－西区	体部	IV－3Ab類	鋸歯状沈線文	91	20-19
7	表採	体部	VI－3類	刻線貼付文	31	20-7	20	III－ト区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文・平行沈線文・縄文RL	229	20-20
8	II－A区	口縁部	VI－3類	刻線貼付文	187	20-8	21	III－D区	体部	VI群	沈線文・山形沈線文	31	20-21
9	V－西区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文・細い平行刺突文	78	20-9	22	V－D区	口縁部	VII－1類	突起波頂部	111	20-22
10	V－E区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文	43	20-10	23	III－チ区	口縁部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文・ボタン状貼付・突起頂部	113	20-23
11	V－ワ区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文	118	20-11	24	V－ソ区	口縁部	IV－3Ab類	沈線文	170	20-24
12	V－中央区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文・斜位刻目入隆線	84	20-12	25	III－リ区	口縁部	III－2類	口唇部に円形貼付文	144	20-15
13	III－ト区	体部	VI－1類	半竹瓜形連続刺突文	219	20-13							

第19図　出土遺物・土器 (15)



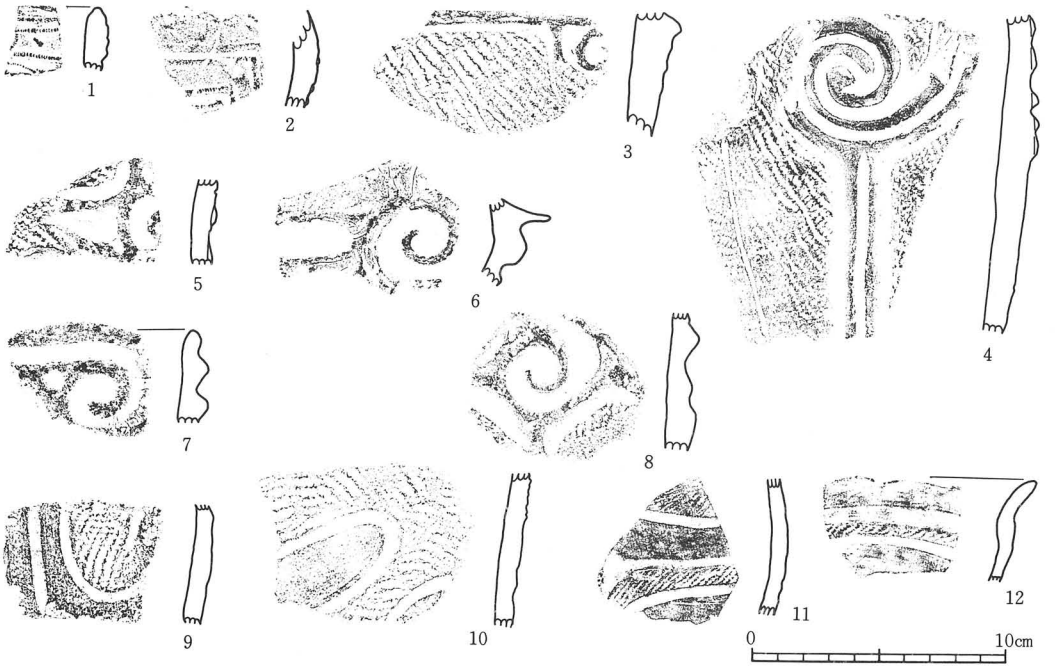
番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－ト区	体部	Ⅴ群	半竹瓜形連続刺突文	184	20-26	15	Ⅳ－F区	口縁部		巾広工具による区画沈線	41	21-1
2	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅵ－1類	2個1対の小突起・平行沈線文・半竹瓜形連続刺突文	44	20-27	16	Ⅵ区	口縁部	Ⅵ－4b類	山形沈線文	16	21-2
3	Ⅲ－リ区	体部	Ⅵ－1類	半竹瓜形連続刺突文	144	20-28	17	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅵ－4b類	山形沈線文	70	21-3
4	Ⅴ－西区	体部	Ⅵ－1類	平行沈線文・山形沈線文・半竹瓜形連続刺突文	75	20-29	18	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅵ－4b類	鋸歯状山形沈線文・口縁部内側折返し口縁	128	21-4
5	Ⅴ－E区	体部	Ⅵ－1類	平行沈線文・山形沈線文・半竹瓜形連続刺突文	171	20-30	19	表採	口縁部		沈線文	123	21-5
6	Ⅴ－E区	体部	Ⅵ－1類	平行沈線文・半竹瓜形連続刺突文	100	20-31	20	Ⅴ－E区	体部		平行沈線文・縄文LR	43	21-6
7	Ⅲ－リ区	口縁部	Ⅵ－4b類	鋸歯状山形沈線文	137	20-32	21	Ⅲ－リ区	体部		平行沈線文	143	21-7
8	Ⅵ区	口縁部	Ⅵ群	突起波頂部・半竹瓜形連続刺突文	16	20-33	22	表採	体部	Ⅵ群	平行沈線文		21-8
9	Ⅴ－ワ区	口縁部	Ⅵ群	突起波頂部・弧状沈線文・隆線貼付文	135	20-34	23	Ⅲ－D区	体部		山形沈線文	30	21-9
10	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅵ－4b類	山形沈線文・平行沈線	127	20-35	24	Ⅲ－ト区	口縁部	Ⅳ－2C類	口唇部刻目(小波状を呈す)・平行沈線文(弧状・山形文)	229	21-10
11	Ⅳ－ヲ区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	突起波頂部・平行沈線文	128	20-36	25	Ⅴ－E区	口縁部	Ⅵ－4b類	鋸歯状山形沈線文	102	21-11
12	Ⅴ－西区	口縁部	Ⅵ－4b類	連続山形沈線文・Y字状沈線文	69	20-37	26	Ⅴ－中央区	口縁部	Ⅵ－4b類	平行沈線文・山形沈線文	63	21-12
13	Ⅲ－北区	口縁部	Ⅳ－3Ba類	突起波頂部・平行沈線文	4	20-38	27	Ⅲ－D区	口縁部	Ⅵ－4b類	竹管円文・鋸歯状山形沈線文	34	21-13
14	表採	口縁部	Ⅵ－4b類	山形沈線文・平行沈線文に半竹による刺突	123	20-39							

第20図　出土遺物・土器 (16)



番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	V－西区	体部	VI－4a類	平行沈線文・波状沈線文・縄文RL	91・93	21-14	14	V－E区	体部	IV－3Aa類	平行沈線・弧状沈線文	171	21-27
2	III－ハ区	体部	VI－4a類	平行沈線文・波状沈線文	216	21-15	15	III－C区	口縁部	II－1類	平行沈線文	29	21-28
3	V－西区	体部	VI－4a類	平行沈線文	108	21-16	16	IV－ル区	体部		半竹による刺突	118	21-29
4	V－西区	体部	VI－4a類	平行沈線文・波状沈線文	91・93	21-17	17	III－ト区	口縁部	VI－4b類	山形沈線文・弧状沈線文	199	21-30
5	V－西区	体部	VI－4a類	平行沈線文・山形沈線文	66	21-18	18	V－E区	体部	VI－1類	平行沈線文・半竹瓜形連続刺突文	106	21-31
6	III－ヲ区	体部	VI－4a類	平行沈線文・弧状沈線文	159	21-19	19	III－ヌ区	体部		短沈線	168	21-32
7	III－D区	体部	VI－4a類	平行沈線文・連弧状沈線文	31	21-20	20	V－E区	体部	VI－4a類	平行沈線文	175	21-33
8	III－D区	体部	IV群	平行沈線文・交互弧状沈線文	39	21-21	21	III－ハ区	体部	VI－4a類	平行沈線文	224	21-34
9	III－チ区	体部	IV－3Aa類	弧状沈線文	157	21-22	22	III－C区	口縁部	VI－4b類	平行沈線文	29	21-35
10	V－西区	口縁部	VI－4a類	山形沈線文	79	21-23	23	III－D区	体部		山形沈線文・刺突文	189	21-36
11	V－E区	口縁部		沈線文	102	21-24	24	III－チ区	体部	I－4類	S字状連鎖沈線	173	21-37
12	III－ヘ区	体部		平行沈線文	206	21-25	25	V－西区	体部		沈線文	70	22-1
13	IV－ヲ区	体部	VI－4a類	平行沈線文・交互弧状沈線文	117	21-26	26	IV－ル区	体部		平行沈線文・刺突文	125	22-2

第21図　出土遺物・土器 (17)



番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分類	文様・地文	登録番号	写真図版番号
1	Ⅲ－A区	口縁部	Ⅵ－1類	結節浮線文	22	22-3	7	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻(稜)沈線文		22-9
2	Ⅴ－E区	体部	Ⅵ－1類	結節浮線文	106	22-4	8	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻(稜)沈線文		22-10
3	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻隆(稜)沈線文		22-5	9	表採	体部	Ⅶ－2類	沈線区画・磨消縄文		22-11
4	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻隆(稜)沈線文		22-7	10	表採	体部	Ⅶ－2類	沈線区画・磨消縄文		22-12
5	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻隆(稜)沈線文		22-6	11	Ⅲ区	体部	Ⅶ－3類	沈線間縄文充填	126	22-13
6	表採	体部	Ⅶ－2類	渦巻隆(稜)沈線文		22-8	12	Ⅲ－ヘ区	口縁部	Ⅶ－3類	山形波状文・平行沈線間縄文充填	194	22-14

第22図　出土遺物・土器 (18)

第４類（第23図－１～11）

底部資料を本類としている。１～11は網代底となるもので、12・13は木葉底のものである。このうち、７・11・13は粘土紐接合面での剝落となっている。

②土製品

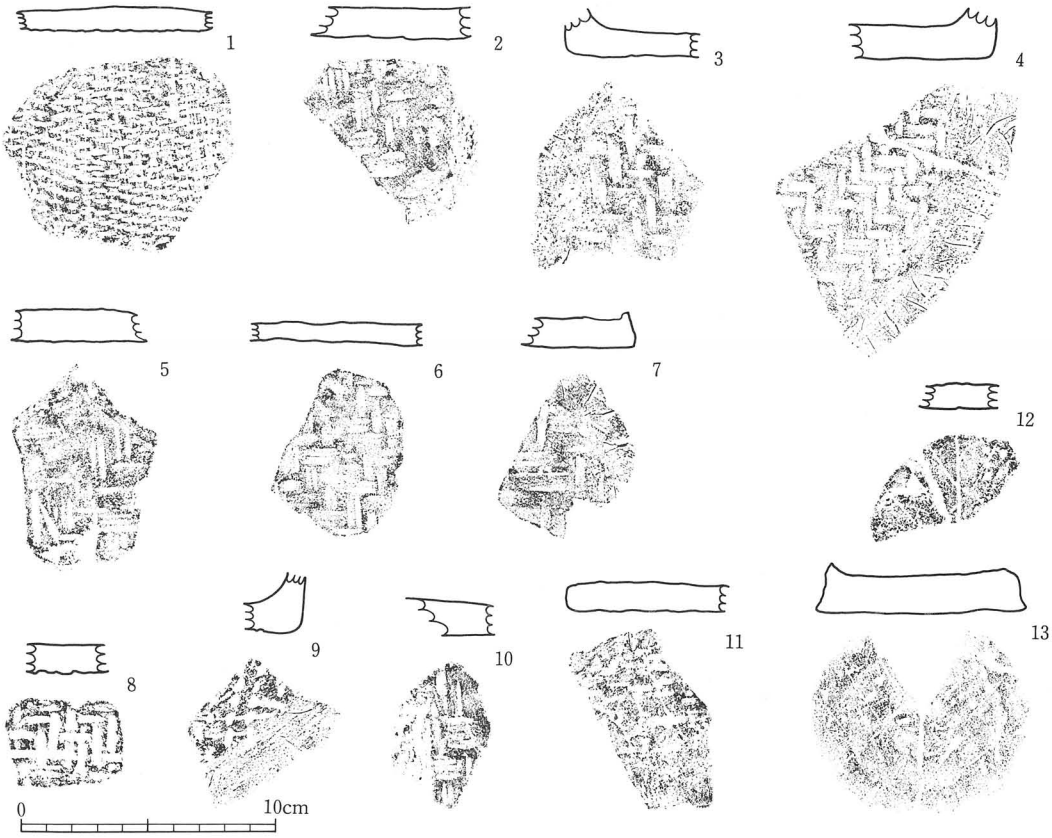
土偶（第25図）

土偶は３点出土している。全て板状の土偶で、完形品はなくいずれも胴部の破片と思われる。１～３はともに表面と背面の両面に施文されており、いずれも沈線によって区画された中に斜め方向からの細かな連続刺突が充填されている。このうち２には、正中線と思われる沈線文の表現が見られる。

全体の形状ははっきりしないが、所属する時期については土器と同様に、大木４～５式期のものと思われる。一般にこの時期の土偶については、形態は扁平で山形または逆台形状になり、顔の表現はされず、腕が左右に短く伸び、胸部の表現は円形の凹みとなるものが多いとされている。施文方法については沈線や刺突が中心となっている。

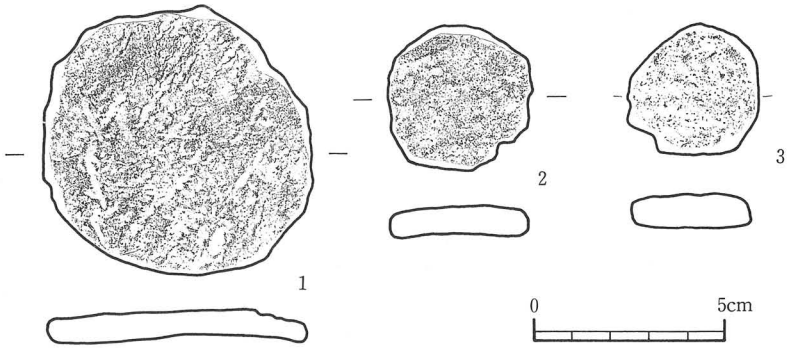
４は、あるいは土偶の脚部とも思われるもので、円柱状を呈し、文様はつけられていない。

長さ24.5㎜、幅25.6㎜、重さ17.8g を計る。

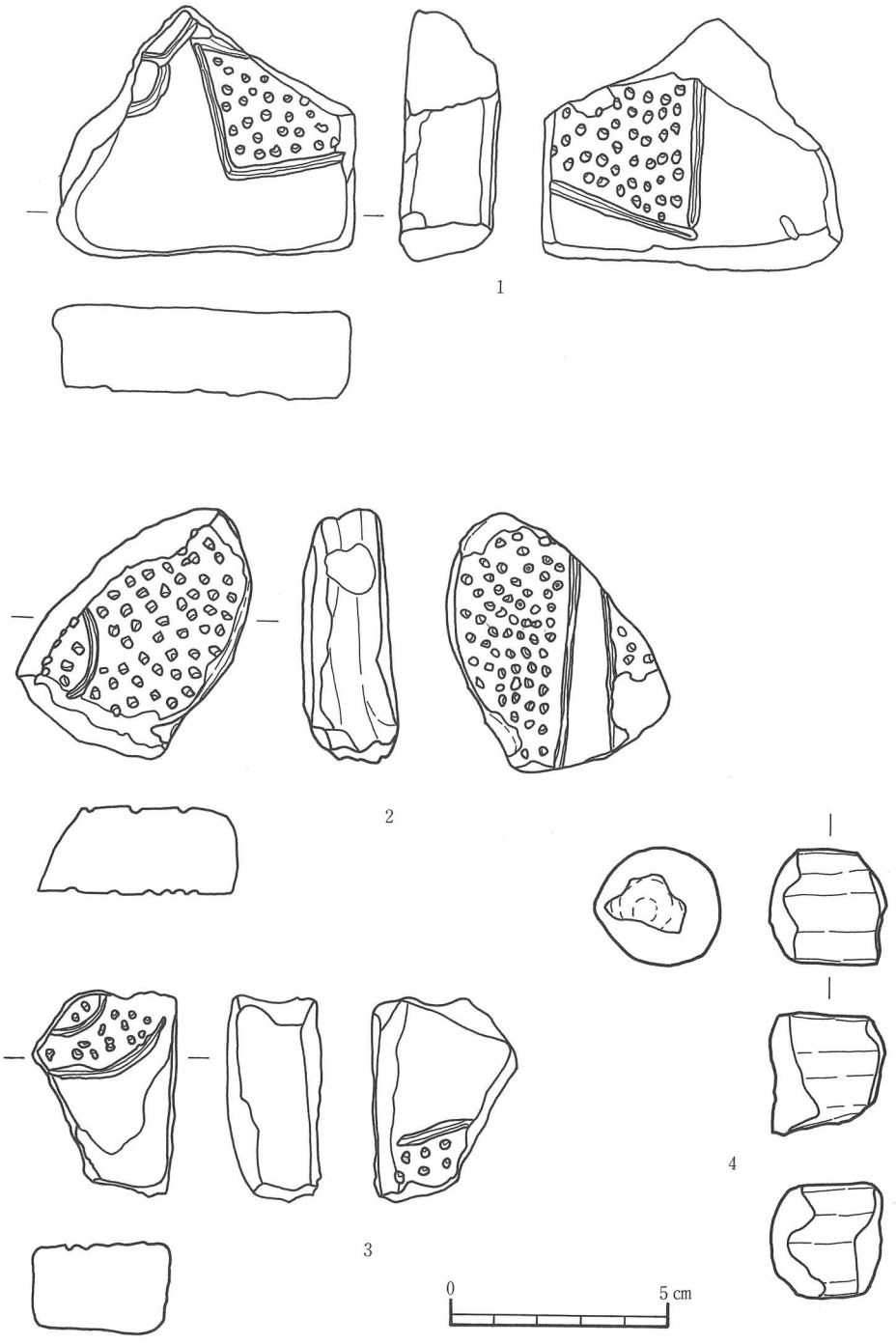


番号	地区・層位	部位	分　類	文 様・地 文	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	部位	分　類	文 様・地 文	登録番号	写真図版番号
1	表採	底部		網代圧痕		22-15	8	Ⅳ－北区	底部		網代圧痕	4	22-22
2	Ⅲ－D区	底部		網代圧痕	203	22-16	9	Ⅲ－ホ区	底部		網代圧痕	226	22-23
3	Ⅴ－中央区	底部		網代圧痕	81	22-17	10	Ⅳ－ヲ区	底部		網代圧痕	117	22-24
4	Ⅲ－ヌ区	底部		網代圧痕	159	22-18	11	Ⅴ－中央区	底部		網代圧痕	49	22-25
5	Ⅴ－西区	底部		網代圧痕	9	22-19	12	Ⅴ－西区	底部		木葉痕	44	22-26
6	Ⅴ－E区	底部		網代圧痕	245	22-20	13	Ⅲ－チ区	底部		木葉痕	179	22-27
7	Ⅲ－D区	底部		網代圧痕	30	22-21							

第23図　出土遺物・土器 ⑲



第24図　円盤状土製品



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　　考	登録番号	写真図版番号	番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備　　考	登録番号	写真図版番号
24-1	Ⅲ区・2層下	73.4	70.0	7.5	48.7	綾絡文	150	10-4	25-1	Ⅴ区西・1b層	67.2	55.2	74.4	沈線文・刺突文	72	10-1
24-2	Ⅲ区・3～4層	37.5	38.5	7.7	13.0	縄文(不明)・快り	229	10-5	25-2	Ⅲ－A区・2層	59.0	38.5	49.6	沈線文・刺突文		10-2
24-3	Ⅴ区中央・1b層	35.0	33.0	9.2	12.6	縄文(RL)	87	10-6	25-3	Ⅴ区西端	46.0	32.8	29.5	沈線文・刺突文	106	10-3
									25-4	Ⅲ－D区・2層	24.5	25.6	17.8			

第25図　土偶・土製品

円盤状土製品（第24図）

円盤状土製品は３点出土している。第24図－１は、上下73.4㎜、左右70.0㎜、最大厚7.5㎜、２は、上下37.5㎜、左右38.5㎜、最大厚7.7㎜、３は、上下35.0㎜、左右33.0㎜、最大厚9.2㎜を計る。いずれも土器片の周囲を打ち欠いて製作されている。重さについては、１は48.7g、２は13.0g、３は12.6gである。

⑵石器・石製品

今回北原街道Ｂ遺跡から出土した石器はほとんどが包含層中からの出土であり、そのうちの半数以上を石鏃がしめている。これらの石器は共伴する土器から、縄文時代前期後半のものと考えられる。石器の器種名について、定型的な石器の器種名については従来つけられている名称によった。不定形な石器については「不定形石器」とし、形態・技術的特徴等からさらに分類している。

出土した石器の総点数は615点で、剥片石器555点・礫石器36点・磨製石斧10点・石製品11点・玦状耳飾３点となっている。剥片石器総数での各石器ごとの点数と比率は、石鏃321点(58%)・尖頭器28点（５%）・石匙26点（５%）・石錐31点（６%）・石篦25点（５%）・スクレイパー10点（２%）・不定形石器114点（21%）となっている。石器の実測にあたっては可能なかぎり努めたが、図化数量は器種別数量・出土状況などを勘案し決定した。石器の器種別数量及び図化数量は第３表のとおりである。

第３表　石器の器種別数量及び図化数量

器種名／遺存状態他	石鏃Aa類 凹基(えぐり鏃)	Ab類 凹基(えぐり鏃)	Ac類 円基	Ad類 平茎	Ae類 有茎	石鏃Af類 器種不明	尖頭器B類	石匙CⅠ類 三側縁構成	C２類 楔型	C３類 二側縁構成	石錐D１類 錐部とつまみ部	D２類 棒状	D３類 不定形	石篦E類	スクレイパーF類
完形品 (%)	38 (37%)	62 (44%)	3 (43%)	16 (52%)	2 (100%)	0	10 (36%)	7 (64%)	4 (80%)	10 (100%)	6 (46%)	5 (45%)	2 (67%)	22 (88%)	8 (80%)
欠損品 (%)	65 (63%)	79 (56%)	4 (57%)	15 (48%)	0	37 (100%)	18 (64%)	4 (36%)	1 (20%)	0	7 (54%)	6 (55%)	1 (33%)	3 (12%)	2 (20%)
合計 (%)	103 (100%)	141 (100%)	7 (100%)	31 (100%)	2 (100%)	37 (100%)	28 (100%)	11 (100%)	5 (100%)	10 (100%)	13 (100%)	11 (100%)	3 (100%)	25 (100%)	10 (100%)
実測数	30	31	2	7	1	0	12	6	2	5	4	6	1	20	9
図化率(%)	29%	22%	28%	23%	50%	0%	43%	55%	40%	50%	30%	55%	33%	80%	90%
器種名／遺存状態他	不定形石器GA類	GB類	GC類	GD類	GE類	石核	石製品	玦状耳飾	磨製石斧	磨石	凹石	敲石	磨凹石		
定形品 (%)	32	16	39	10	17	5	1	1	2 (20%)	16 (67%)	6 (75%)	2	3 (75%)		
欠損品 (%)							10	2	8 (80%)	8 (33%)	2 (25%)		1 (25%)		
合計 (%)	32	16	39	10	17	5	11	3	10 (100%)	24 (100%)	8 (100%)	2	4 (100%)		
実測数	3	7	10	2	6	2	11	3	8	22	8	0	4		
図化率(%)	1%	43%	26%	20%	35%	40%	100%	100%	80%	92%	100%	0%	100%		
	石鏃	石匙	不定形石器												
定形品	121	21	114												
欠損品	200	5													
計	321	26	114		剥片石器	礫石器	磨斧	石製品	玦状耳飾						
実測数	71	13	29		555	36	10	11	3						
図化率	22%	50%	25%												

出土石器の分類

剥片石器

①石鏃　Ａ類（第27図－１～第30図－１～15・18）

石鏃としたものは尖頭部をもち、先端部が薄く扁平な石器で、平面形は基本的に二等辺三角形を呈するものである。総数で321点出土しており、出土した石器のなかで約60％をしめている。完形品が121点・欠損品が200点となっている。これらについて、基部形態から６類に分類している。

Aa類　基部が凹状のもの。いわゆる凹基無茎鏃で、基部中央部の抉りの深いもの。

Ab類　基部が凹状のもの。いわゆる凹基無茎鏃で、基部中央部の抉りの浅いもの。（第27図－１～第30図－５）

Ac類　基部を丸くふくらませるもの。いわゆる円基無茎鏃である。（第30図－14・15）

Ad類　基部が平坦となるもの。いわゆる平基無茎鏃である。（第30図－６・８～13）

Ae類　基部が突出し（凸基）茎部が作り出されたれもの。いわゆる有茎鏃である。（第30図－18）

Af類　欠損により器種が不明なもの。

各類型の点数は、Aa類103点・Ab類141点・Ac類７点・Ad類31点・Ae類２点・Af類37点である。

さらにAa類・Ab類の凹基無茎鏃については、尖頭部・側縁形態等からさらに７類型に細別している。

１類　側縁部が内湾するもの（第27図－１～５、第28図－16～18、第29図－２・９・10・14・16・17、第30図－７）。

２類　側縁部が直線的か、あるいは外湾するもの（第27図－６～10、第28図－10・12・19、第29図－６・７・11～13・18、第30図－１・２）。

３類　基部の抉りがとくに深くはいり、比較的巾の広いもの（第27図－11～15）。

４類　側縁部が尖部から内湾して基部にむかって外湾するもの（第27図－16～18、第28図－１・２・11、第29図－16、第30図－３～５）。

５類　側縁部が直線的か、あるいは外湾し尖部が細く尖るもの（第28図－３～６・９）。

６類　大型で鏃身が幅広のもの（第28図－７・８、第29図－５）。

７類　大型で鏃身が細身のもの（第28図－13～15）。

これらAa類・Ab類とした凹基無茎鏃244点のうち、完形品または形態のわかる128点について類型別にみると、Aa １類９点・Ab １類27点（１類28％）、Aa ２類12点・Ab ２類44点（２類44％）、Aa ３類５点（３類４％）、Aa ４類８点・Ab ４類５点（４類10％）、Aa ５類６点・Ab ５類３点（５類７％）、Aa ６類２点・Ab ６類１点（６類２％）、Aa ７類１点、Ab ７類５点（７類５％）となる。

第28図－６・９は、表裏両面ともに丁寧な二次加工によって尖部がとくに細く作り出されて

いる。第29図－５は、比較的厚手のもので表裏両面ともに基部と側辺に簡単な二次加工が施されている。第30図－４は、表裏両面ともに基部と側辺に簡単な二次加工が施され、尖部は尖らずに突起状になっている。上下を逆にみれば雁股状の鏃にも似ている。第30図－５は、尖部から基部にかけて強く屈曲し、基部の部分が有段となっている。第30図－６・７は比較的大きなもので、６の基部はわずかに凹みを帯びており、形態的には７類に近い。７の尖部は丸みを帯びたものになっている。

②尖頭器　Ｂ類（第30図－16・17・19・20、第31図－１～８）

石鏃に比べて大型で厚みのあるものを尖頭器とした。総数で28点出土しており、出土した石器のなかで５％をしめている。完形品が10点・欠損品が18点となっている。

これらについて、欠損品が多いものの形態や大きさなどから４類に分類している。

１類　柳葉形状で基部につまみがつくもの（第31図－８）。

２類　三角形状を呈するもの（第30図－16・17・19・20）。

３類　柳葉形状で基部につまみがつかないもの（第31図－１・２・３・５～７）。

４類　側縁が屈曲し有段になるもの（第31図－４）。

各類型の点数は、１類３点・２類11点・３類11点・４類２点・不明１点である。

第30図－17は、基部に浅い抉りが入っているもので、石鏃７類に近い形態をもっている。第31図－６～８は、錐として使われた可能性のあるもので、６の尖部にははっきりした磨痕がみられる。７・８は、基部や尖部を欠いているが、第34図－７の石錐２類のようなものとも考えられる。第30図－19・20は共に比較的厚手のもので、20は表裏両面ともに粗い二次加工が施されており、不定形石器GB類に分類すべきものかもしれない。

③石匙Ｃ類（第32図－１～第33図－７）

両側辺から抉りを入れることにより作り出されたつまみ部を有し、刃部と判断できる縁辺をもつ石器を石匙とした。総数で26点出土しており、出土した石器のなかで５％をしめている。完形品が21点・欠損品が５点となっている。刃部の形態などから３類に分類している。

１類　刃部の構成が三側縁構成のもの（第32図－６、第33図－１～３・５・６）。

２類　横に長い刃部がつくもの（第33図－４・７）。

３類　刃部の構成が二側縁構成のもの（第32図－１～５・７）。

これらについて、つまみ部に対する刃部の形状・角度に違いがみられ、刃部の位置でみると縦に長い刃部がつくいわゆる縦型のもの（１・３類）と、横に長い刃部がつくいわゆる横型のもの（２類）に大別される。各類型の点数は、１類11点・２類５点・３類10点である。

第32図－１・２は、両側辺のうちの片方が直線的なのにたいして、もう一側辺がゆるく弧状に張りだし先端が尖るもので、全体の形状は半月状を呈している。第33図－２は、両側辺のう

ちの片方が直線的なのにたいして、もう一側が外側に張り出して角ばっているものである。第33図－４は、両側辺のうちの片方に自然面を残し、もう一側辺は弧状に張り出している。第33図－５・６は、粗い二次加工によって整形されている。

④石錐Ｄ類（第33図－８～第34図－11）

いわゆるドリルで、尖頭部をもち、その回転運動によって穿孔などの作業に使われたと考えられる石器である。総数で28点出土しており、出土した石器のなかで約５％をしめている。完形品が13点・欠損品が15点となっている。これらについて全体の形状が想定される27点について、形態などから３類に分類している。

１類　つまみ部をもちその一端に尖頭部（錐部）が作り出されたもの（第33図－８、第34図－１・２・４）。

２類　両端が尖り全体形が棒状を呈するもの（第34図－６～11）。

３類　つまみ部と錐部の境が明確でないもの。形態的に逆二等辺三角形または不定形を呈する（第34図－５）。

各類型の点数は、１類13点、２類11点・３類３点である。このうち２類とした棒状の形態のものの尖部に、はっきりとした磨痕のあるものが多い。

⑤石篦Ｅ類（第35図－１～第37図－１・４・７）

篦状石器とも呼ばれるほぼ左右対称の長方形状の石器で、両側縁が基部側から刃部にむかって開いたいわゆる撥形を呈するものが多い。最大幅は刃部付近にある。二次加工は全面に施されるものと裏面には周辺にだけ施されるものがある。裏面は平坦なものが多く、横断面はかまぼこ型を呈し厚みのある石器である。総数で25点出土しており、出土した石器のなかで約５％をしめている。完形品が22点・欠損品が３点となっている。これらについて全体の形状などから次の４類に分類できた。

１類　側辺が直線的で、刃部に向かってわずかに開く細長い形のもの（第35図－６、第36図－２・３）。

２類　側辺が外湾しながら開き、楕円形を呈するもの（第35図－２・４・５・７、第36図－４・５・７）。

３類　基部が尖り気味になり、刃部に向かって側辺が直線的もしくは内湾気味に開き撥状を呈するもの（第35図－１・３、第36図－１・６）。

４類　側辺が弧状に張り出しているもの（第37図－１・７）。

第36図－３・５・７は、一部に自然面の残る剝片を素材としている。第37図－４は、基部を欠いているが、表裏ともに粗い大きな二次加工品が施されており、側辺の一部に自然面が残っている。形態的には尖頭器に近い形を呈している。

⑥スクレイパーＦ類（第37図－２・３・５・６、第38図－１～第39図－３）

スクレイパー・エッジを有する石器。総数で10点出土しており、出土した石器のなかで約２％をしめている。これらについて全体の形状などから次の３類に分類され、さらに刃部加工から、ａ類：片刃・ｂ類：両刃の２類に細別された。

１類　長軸に対して平行な刃部が作られるもの。いわゆるサイドスクレイパーである。

ａ類：第38図－３・５　ｂ類：第37図－６、第38図－１・２

２類　長軸に対して直行する刃部が作られるもの。いわゆるエンドスクレイパーである。

ａ類：第39図－２・３

３類　長軸に対して斜行する刃部が作られるもの。

ａ類：第38図－４　ｂ類：第37図－２・３

第38図－１は、側辺の形状が緩やかな弧状を呈しており、表裏全面に丁寧な二次加工が施されている。第39図－１は、欠損品であるが厚手の素材をもちいた大型のもので、表裏全面に比較的粗い大きな二次加工が施されている。

⑦不定形石器Ｇ類（第40図－１～第44図－２）

剝片を素材とした、二次加工や使用痕跡のみられる石器で、定形石器の分類に含まれないものを不定形石器として一括した。総数で114点出土しており、出土した石器の中で21％をしめている。これらについて、二次加工の状況や平面形態などからⅢ群－５類に分類された。

〔Ⅰ　群〕　二次加工が全周におよび素材の形態を大きく変化させ、刃部以外にも一定の形態的なまとまりを指向する石器で、GA類・GB類の２類に分類された。

GA類（第40図－１～３）

片面または両面の全面に二次加工が施されるもので、折断面をもち定形石器の欠損品の可能性もあるもの。

GB類（第40図－４～10）

片面または両面の全面に二次加工が施されるもの。

GA・GB類ともに平面形態によってさらに３類型に細別される。

１類　楕円形を呈するもの（第40図－１・５・８・９）。

２類　三角形を呈するもの（第40図－３・４・７・10）。

３類　台形または方形を呈するもの（第40図－６）。

〔Ⅱ　群〕　素材の形態をあまり変化させずに、部分的な二次加工によって刃部を作り出す石器で、GC類・GD類の２類に分類された。

GC類　（第40図－11・第41図－１～６・第42図－１・第43図－１・第44図－２）

刃部加工のための二次調整が部分的に施されるもの。刃部の形態から２類型に細分される。

1類　素材の先端に加工がなく、長軸の1～2側辺に加工が集中するもの。いわゆる「サイドスクレイパー」である（第41図－2・4・5・第42図－1）。

2類　長軸に対して直行する刃部が形成されるもの（第40図－11・第41図－1・3・6・7・第43図－1・第44図－2）。

GD類（第43図－2・5）

比較的大まかな二次加工によって、不整または粗雑な刃部加工が施されるもの。

第43図－2は折断調整石器の可能性があるもので、剝片の2側辺を折断し台形に加工され残された縁辺に二次加工が施されている。

〔III　群〕　明確な刃部加工は施されず、使用の結果と考えられる微細剝離痕のみとめられる石器。

GE類（第42図－2～4・第43図－3・4・第44図－1）

微細剝離のあるもので二次加工がほとんどみられないもの。

⑧石核（第44図－3・第45図－1）

石核としたものは、剝片剝離作業の行われた残核である。総数で5点出土している。これらについて打面転移の状態によって分類をおこなった。

1類　打面を転移せず、ひとつの打面から連続的に剝片を剝離をしているもの。

2類　打面を約180°の単位で転移し、剝片を剝離しているもの。

3類　打面を約90°の単位で上下・左右に転移し、剝片を剝離しているもの。

4類　石核の縁辺にそって打面を転移し、剝片を剝離しているもの。

礫石器

礫石器の分類は、石器の表面に残された磨面・凹み・敲打痕などの使用痕の観察によって行った。礫石器は総数で36点出土しており、出土した石器の中で6％をしめている。

①磨　石

総数で24点出土しており、そのうち欠損品は8点である。これらについて、形態・大きさ・重量・使用痕跡の観察と計測を行い分類した。

［使用痕跡］使用痕跡としてみられる磨面について観察すると、磨石にみられる磨面の位置から、a類～h類の8類に細分された。

a類 上面にあるもの（使用痕跡1面）。第48図－1・2・4～6　第52図－2

b類 上下両面にあるもの（使用痕跡2面）。第50図－1～5

c類 片面と片側面にあるもの（使用痕跡2面）。第51図－1

d類 片側面にあるもの（使用痕跡1面）。第49図－1・3～6

e類 両側面にあるもの（使用痕跡2面）。第49図－2

f類 片面と両側面にあるもの（使用痕跡３面）。第52図－１

g類 上下両面と片側面にあるもの（使用痕跡３面）。第51図－２・３・５

h類 上下両面と両側面にあるもの（使用痕跡４面）。第51図－４・６

各類型ごとの点数は、a類６点・b類５点・c類１点・d類５点・e類１点・f類１点・g類３点・h類２点となっている。

第49図の磨石は、２が両側面に磨面をもつ以外はいずれも片側面のものであるが、そのなかで４・５は断面形が三角形の礫を素材とし、その稜線部分に磨痕が観察されるもので、いわゆる「特殊磨石」に類似している（八木 1977）。また、３・５の片面に比較的浅い凹みがみとめられるが、これについては敲打痕が部分的に集中した結果としてわずかに凹みを呈しているとも考えられる。

②凹　石

総数で８点出土しており、そのうち欠損品は２点である。これらについて、形態・大きさ・重量・使用痕跡の観察と計測を行った。

［使用痕跡］　使用痕跡としてみられる凹みについて観察すると、使用面にみられる凹みの位置から次のように分類される。

a類　上面に凹みがあるもの（使用痕跡１面）。第52図－４・第53図－１

b類　上下両面に凹みがあるもの（使用痕跡２面）。第53図－２～６

またそれぞれの使用面にみられる凹みの数は、(1)１個のもの、(2)２個のもの、(3)３個のもの、(4)３個以上の凹みが連続するものがある。凹みが連続するものについては、(a)縦方向に溝状に並ぶものと、(b)同心円状に丸く並ぶものがある。

第52図－４・第53図－１は、凹みが上面にあり、３個以上の凹みが同心円状に連続し円形を呈している。第51図－２～６は、上下両面ともに３個以上の凹みが溝状に並んでいる。３・５については、下面の凹みが１個ないし２個で浅い凹みとなっている。

凹みのなかには中心部が明確なＶ字状とならず、比較的浅い凹みのものがみとめられる。これらについては、敲打痕が部分的に集中した結果としてわずかに凹みを呈していると考えられ、敲凹として区別すべきものかもしれないが、通常の凹みとの区別が困難な場合もあり同一のものとして扱っている。

③磨凹石

総数で４点出土しており、そのうち欠損品は１点である。これらについて、形態・大きさ・重量・使用痕跡の観察と計測を行った。

［使用痕跡］　使用痕跡としてみられる凹みと磨面について観察すると、使用痕としての凹みと磨面の位置は次のようになる。

a類　上面に一緒にあるもの（使用痕跡同一面）第48図－3

b類　上下面にわかれるもの（使用痕跡別面）第52図－3・5

石製品

石製品は総数で14点出土している。

①玦状耳飾（第26図－1～3）

3点出土しており、うち1点は完形品である。第26図－1は中央部で折れているが、平面形は長軸46mmのほぼ円形を呈し、中央孔は14mmでやや上辺によっている。断面形は扁平で厚さは7mmを計る。切れ目はそれぞれ両側から入れられている。石材は蛇紋岩の一種を用いており、色調は淡緑色で、平滑に研磨されており美麗である。2は半分欠損しているが、平面形は長軸46mmの円みを帯びた長方形を呈し、中央孔はやや上辺によっている。断面形は扁平で厚さは7mmを計る。切れ目は両側から擦切手法によって入れられた痕跡が残る。上部に直径7mmの補修孔がある。石材は蛇紋岩を用いており、色調は青黒色で一部オリーブ黄色、平滑に研磨されており美麗である。3は全体の1/4程度しか残っていないが、平面形は円形を呈すると思われる。中央孔は大きめでやや上辺によっている。断面形は扁平で厚さは7.5mmを計る。上部に直径8mmの補修孔がある。石材は滑石を用いており、色調はオリーブ黄色で、平滑に研磨されており美麗である。

②その他の石製品（第46図－1～9・第47図－7・8）

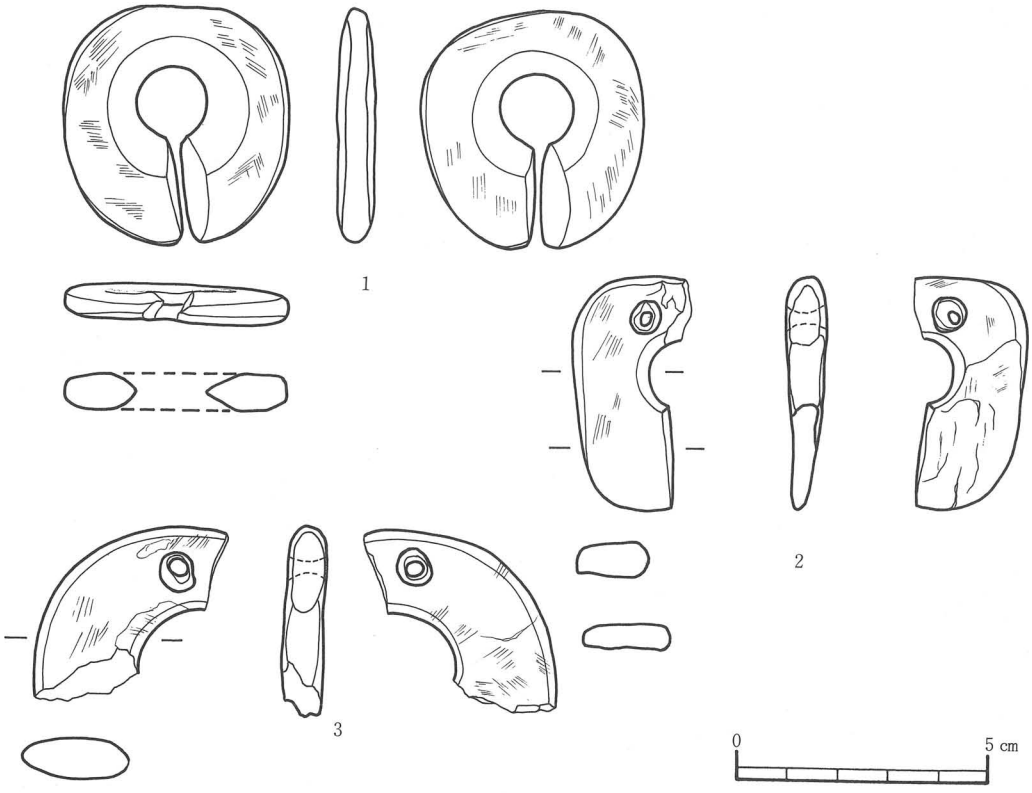
第46図－1は小型磨製石斧のような短冊型の形態を呈するもので、やや狭まった刃部をもっている。第46図－2・3は薄く扁平な断面形を呈し、表面に擦痕が観察されるものである。第46図－5は小型磨製石斧で刃部を欠いている。第46図－4・6～9は磨製石斧の剝落したものとも考えられるもので、平滑な表面に擦痕が観察される。第47図－7は扁平で隅丸方形状に加工されているが、文様がみられないことから岩版状石製品とした。石材は砂岩を用いており、表面は非常にもろくなっており、剝落した縞紋様がみられる。

磨製石斧（第47図－1～6）

総数で10点出土しているがそのうち8点は破損している。破損の位置は、基部付近が1点、刃部付近が5点である。また基部と刃部の2カ所破損しているものが2点あった。破損面は体部主面に対して90°近い角度で破損している。

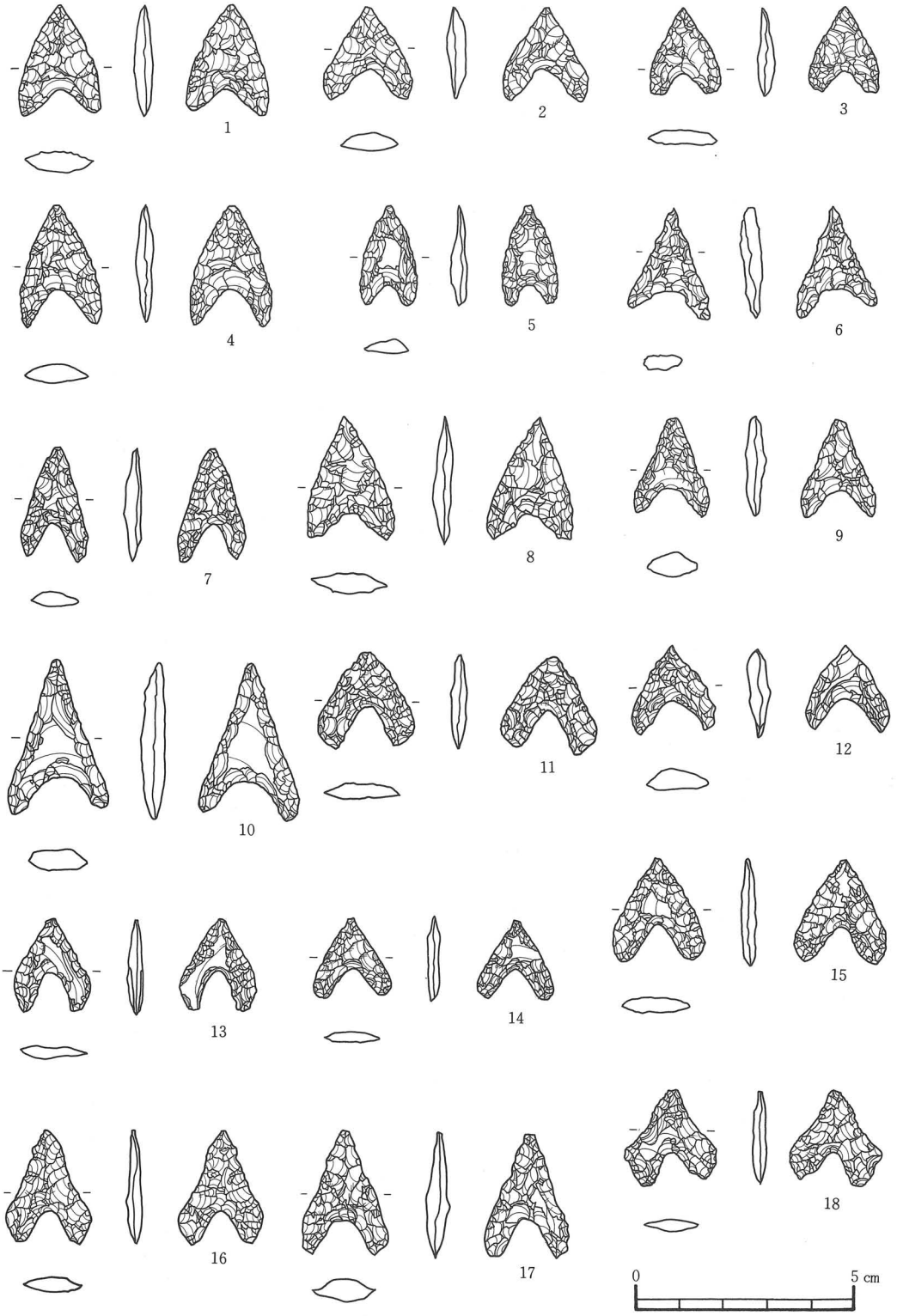
平面形は、胴部上半よりも下半のほうが幅広く最大幅が刃部付近にくるもので、頭部の形態は4以外は丸みをもち、胴部側縁との境が不明瞭になっている。胴部の横断面形は、1～4がふくらみをもつ長方形で隅が角ばるのに対して、5・6は楕円形を呈している。

3は基部を欠いているが丸みをもった刃縁をもち、刃部には刃こぼれと思われるような細かな剝離がみられる。3・4については表面が丁寧に研磨されて加工されている。

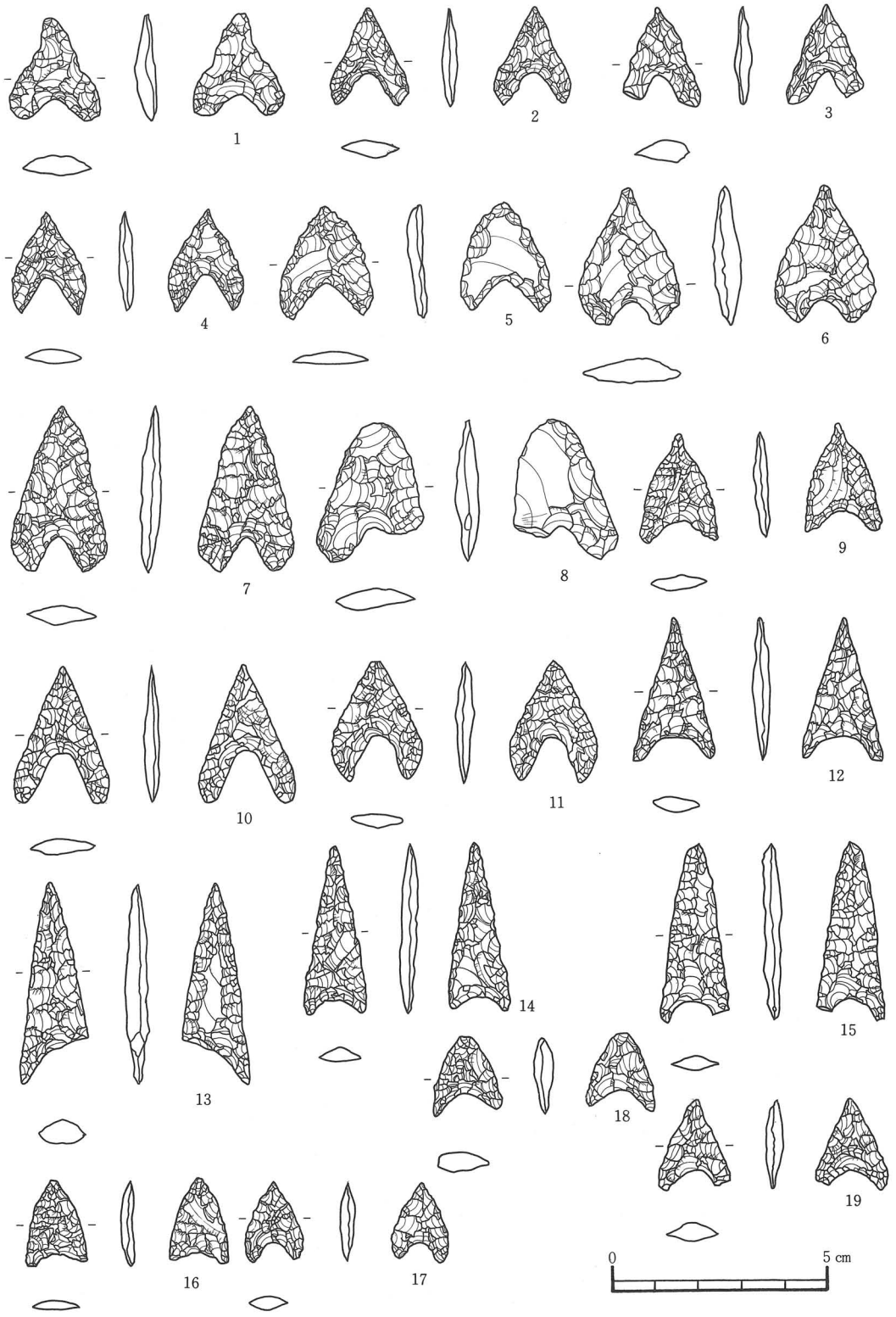


図版番号	地　区	層　位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	色　調	写真図版番号
26－1	Ⅲ－ヌ区 Ⅲ－チ区	2層	46	44	7.0	21.6	蛇紋岩	淡緑色	写真9
26－2	Ⅴ－ヨ区	2層	46		7.0	10.8	蛇紋岩	青黒色	写真9
26－3	Ⅳ－ヲ区	2層	43		7.5	12.8	滑石	オリーブ黄色	写真9

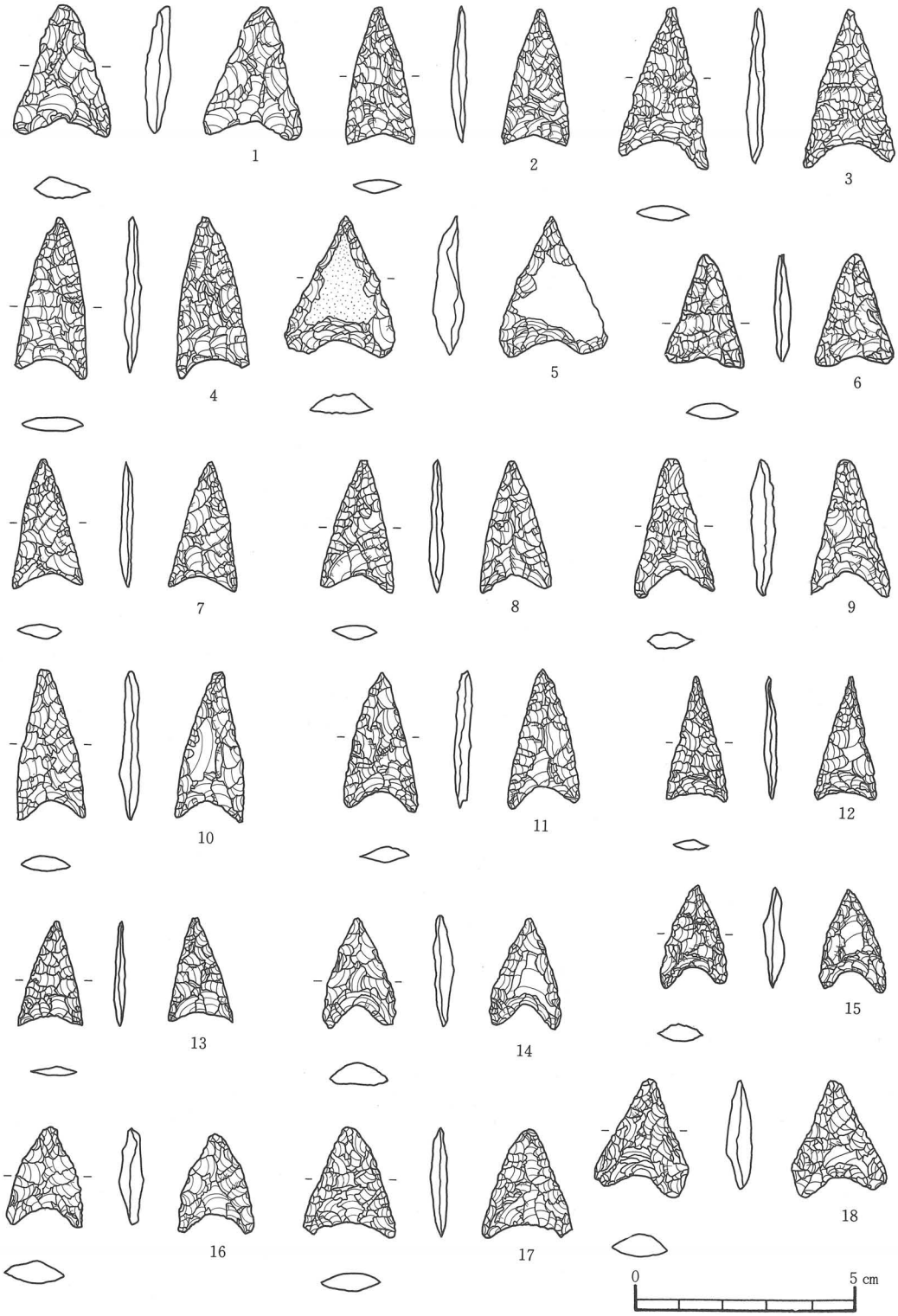
第26図　出土遺物・玦状耳飾



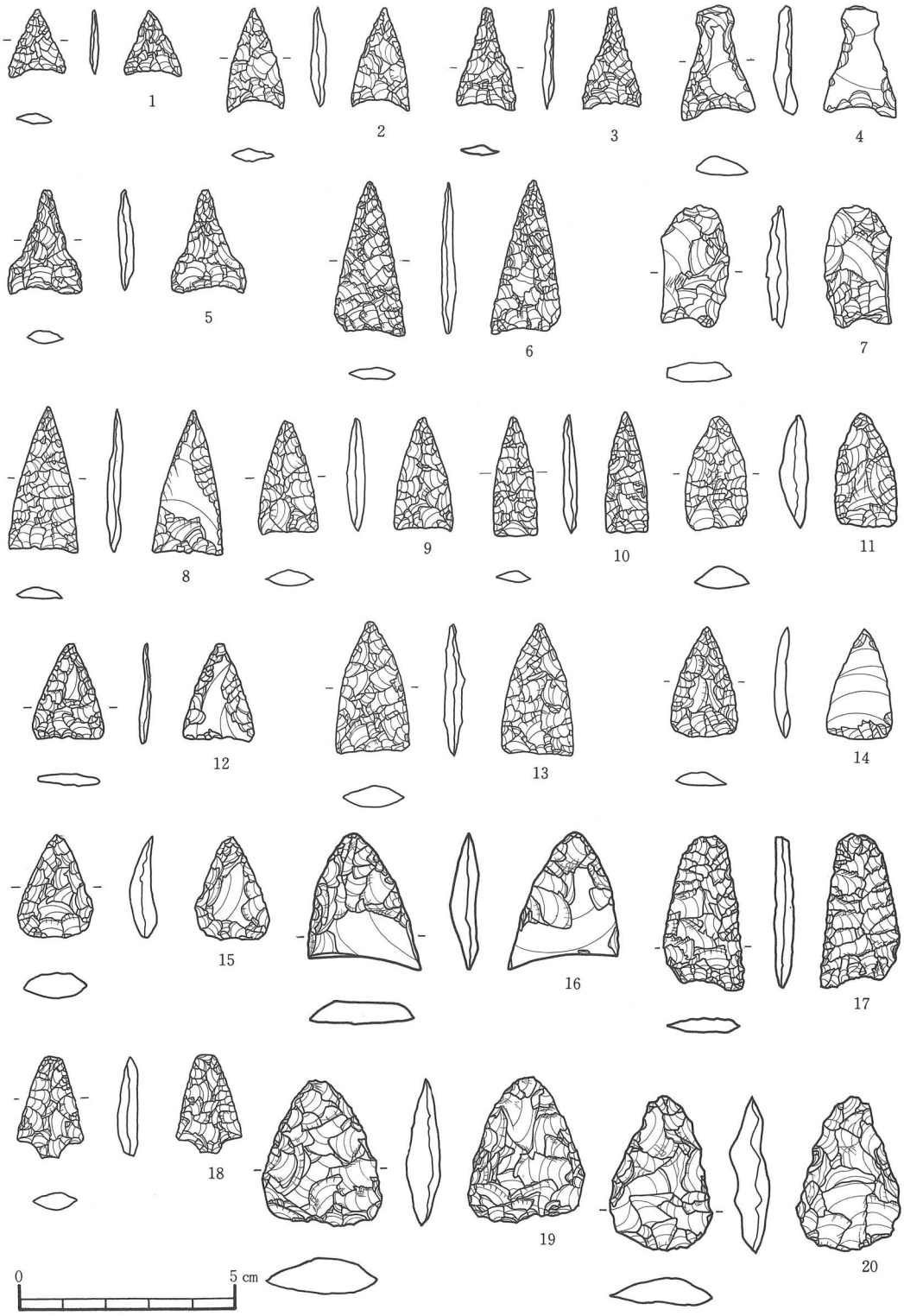
第27図　出土遺物・石器（1）



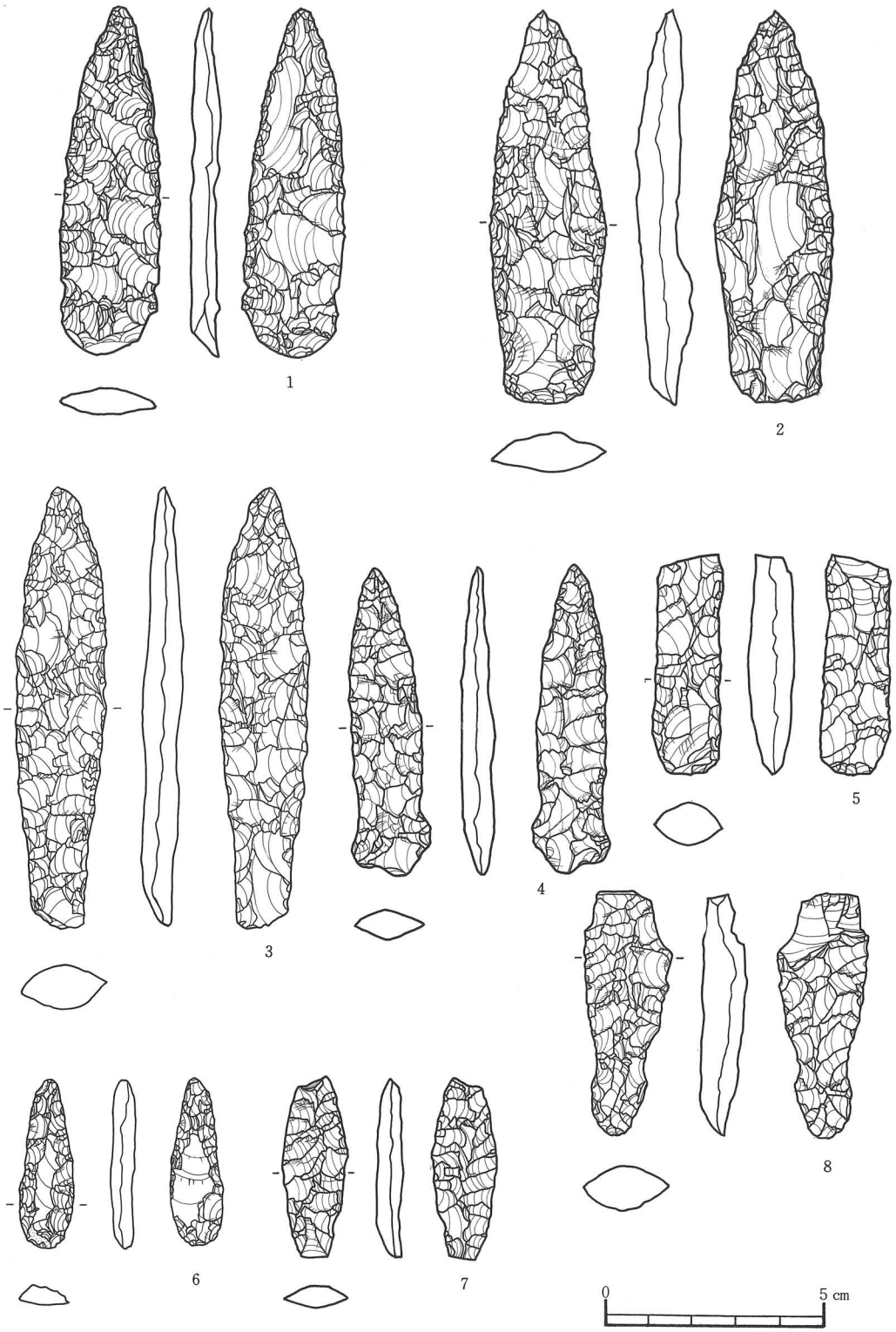
第28図　出土遺物・石器 (2)



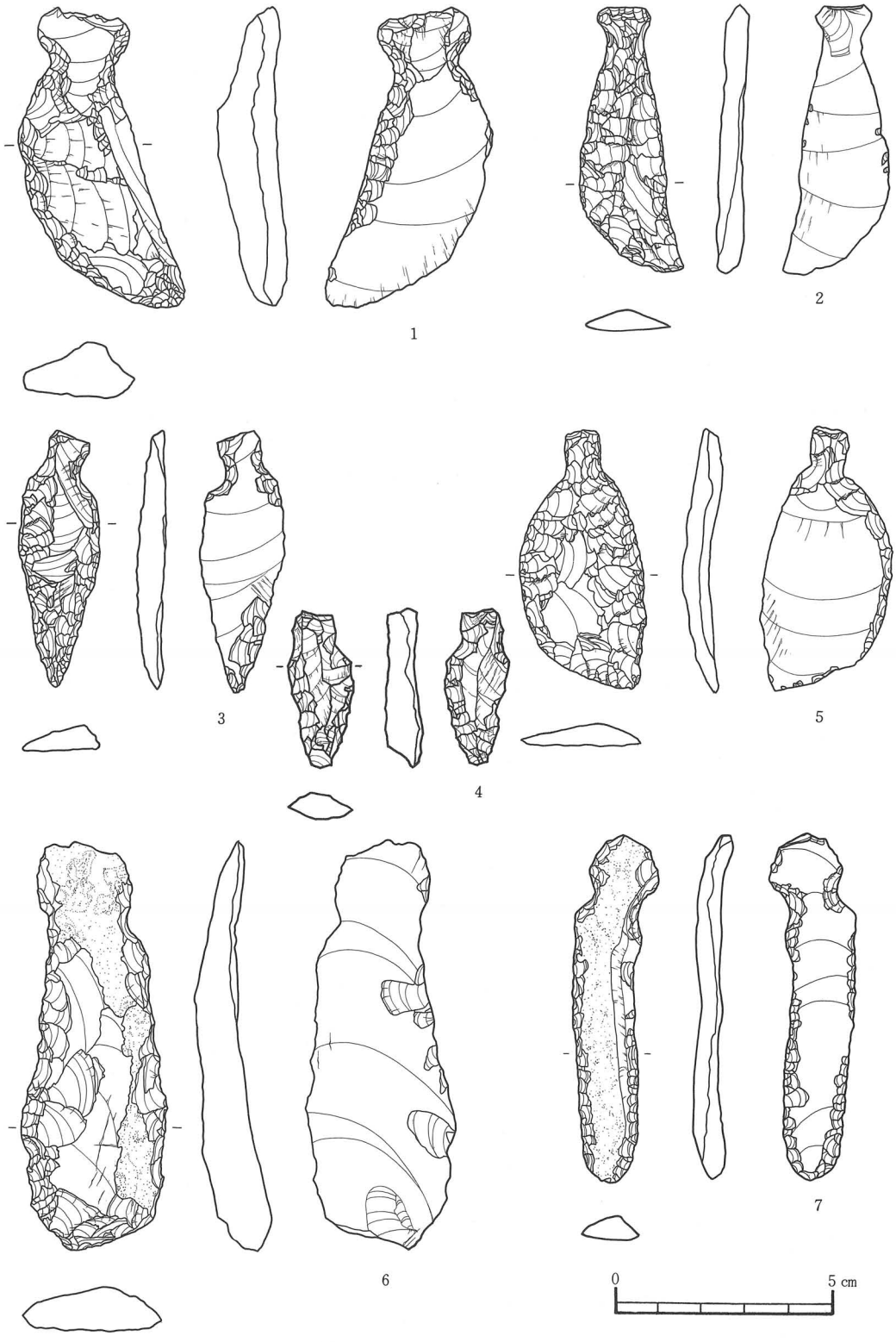
第29図　出土遺物・石器 (3)



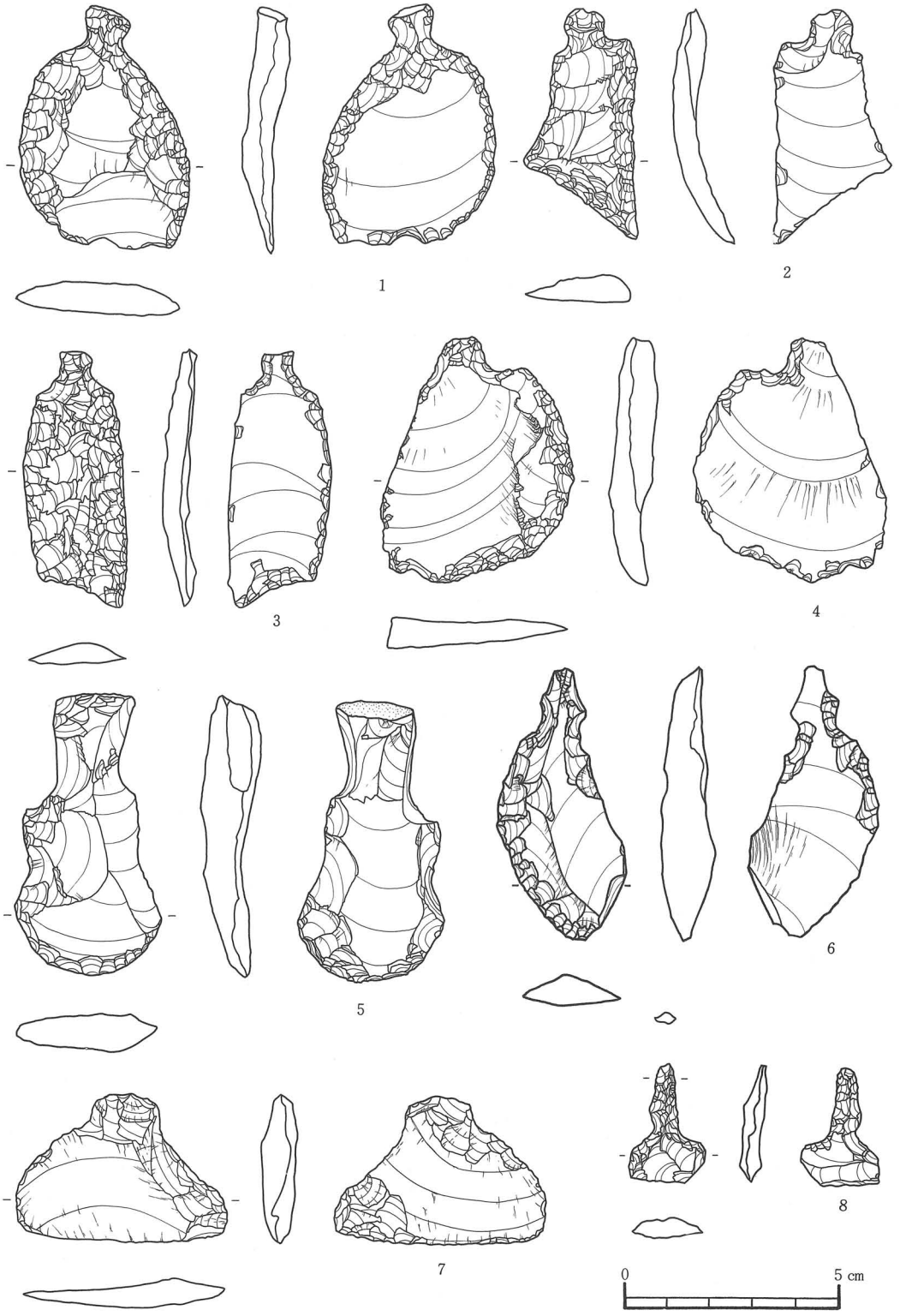
第30図　出土遺物・石器 (4)



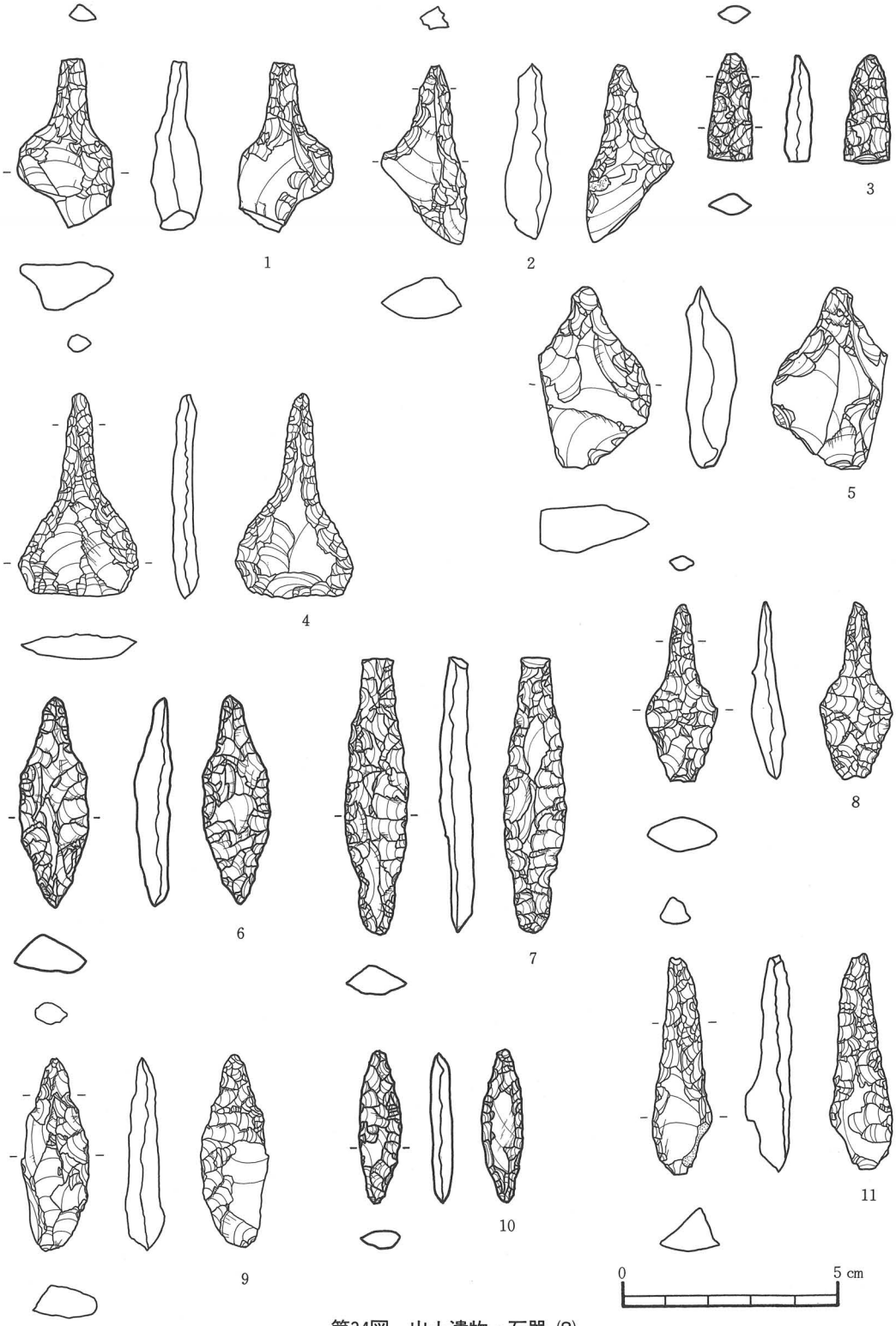
第31図　出土遺物・石器 (5)



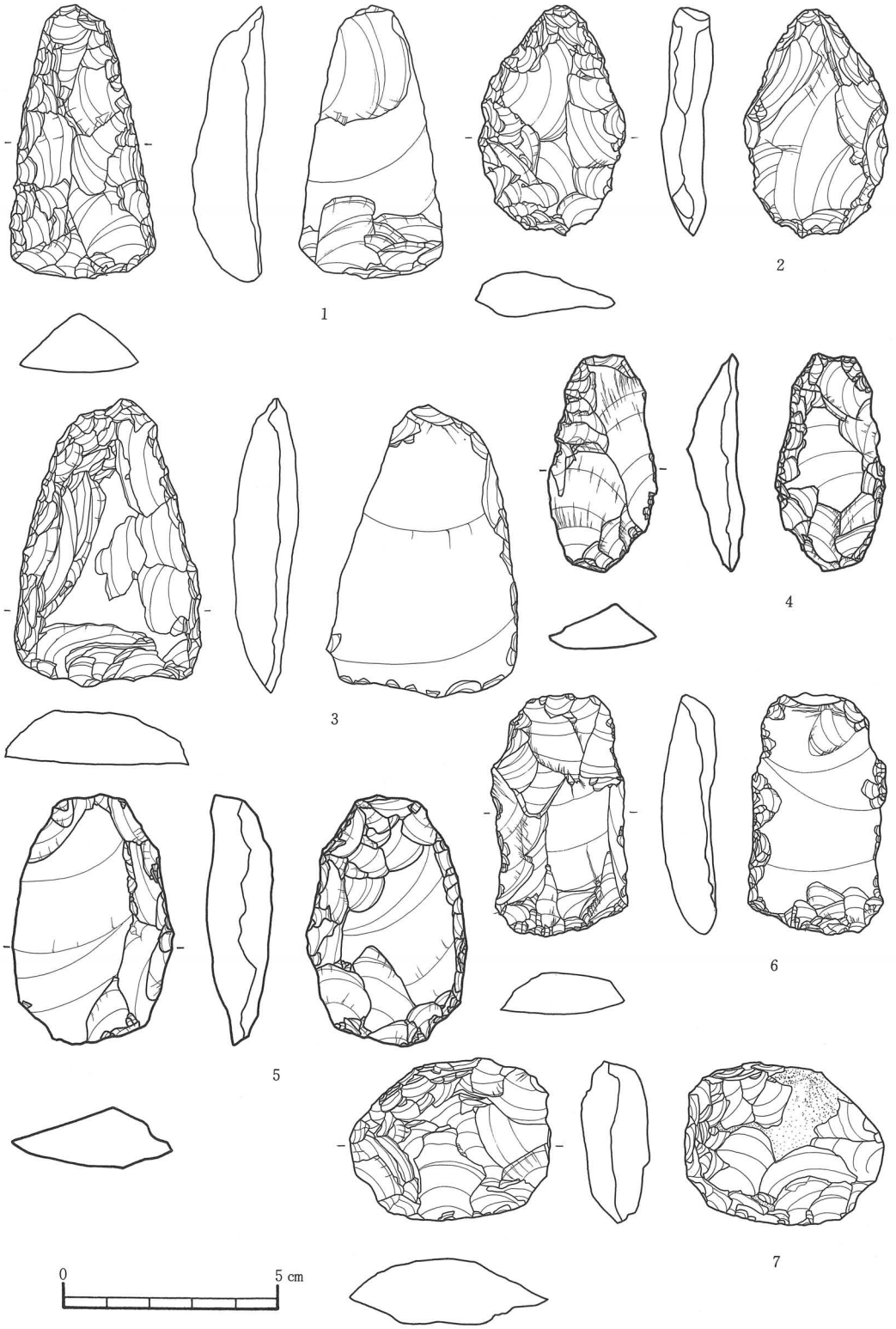
第32図　出土遺物・石器 (6)



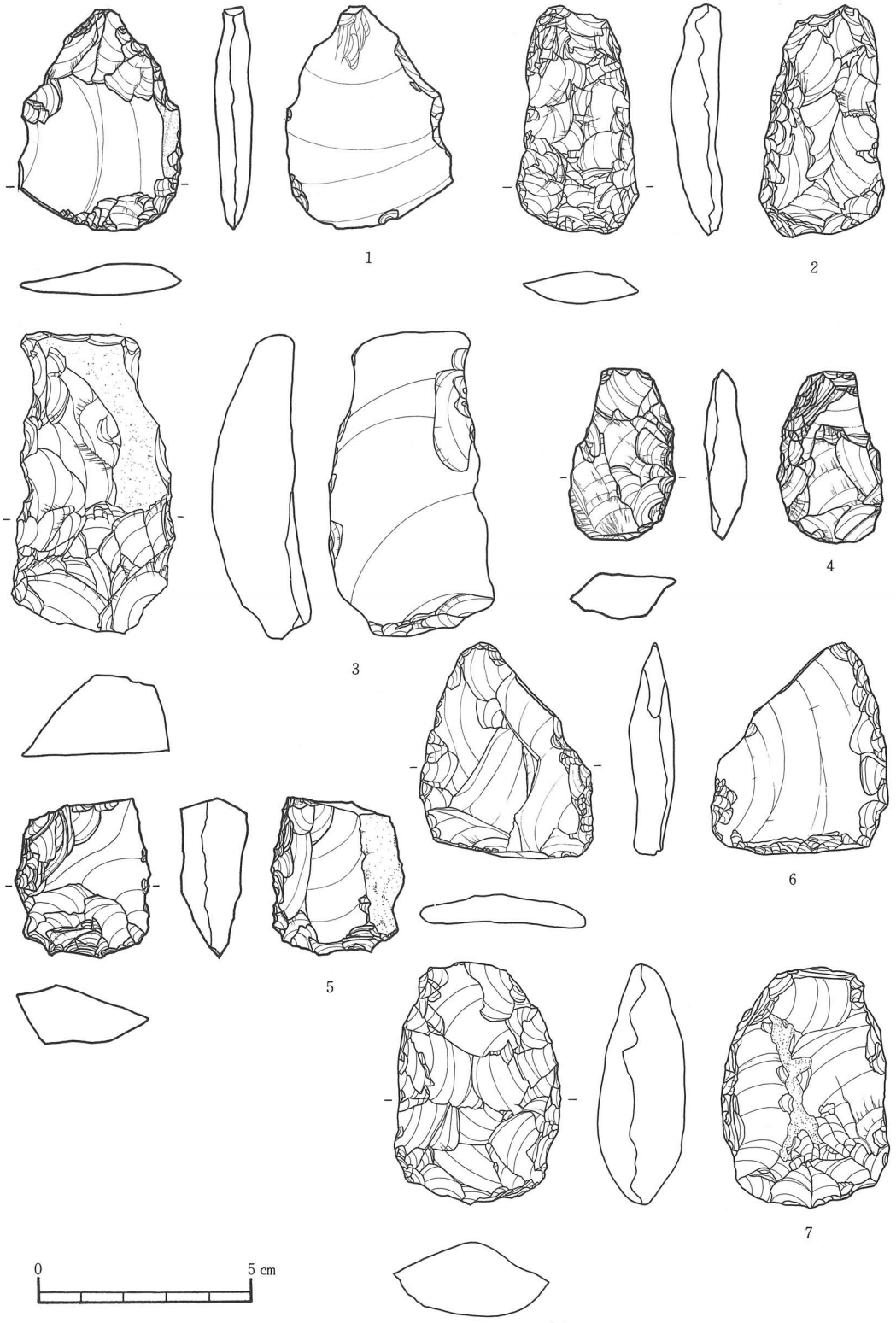
第33図　出土遺物・石器 (7)



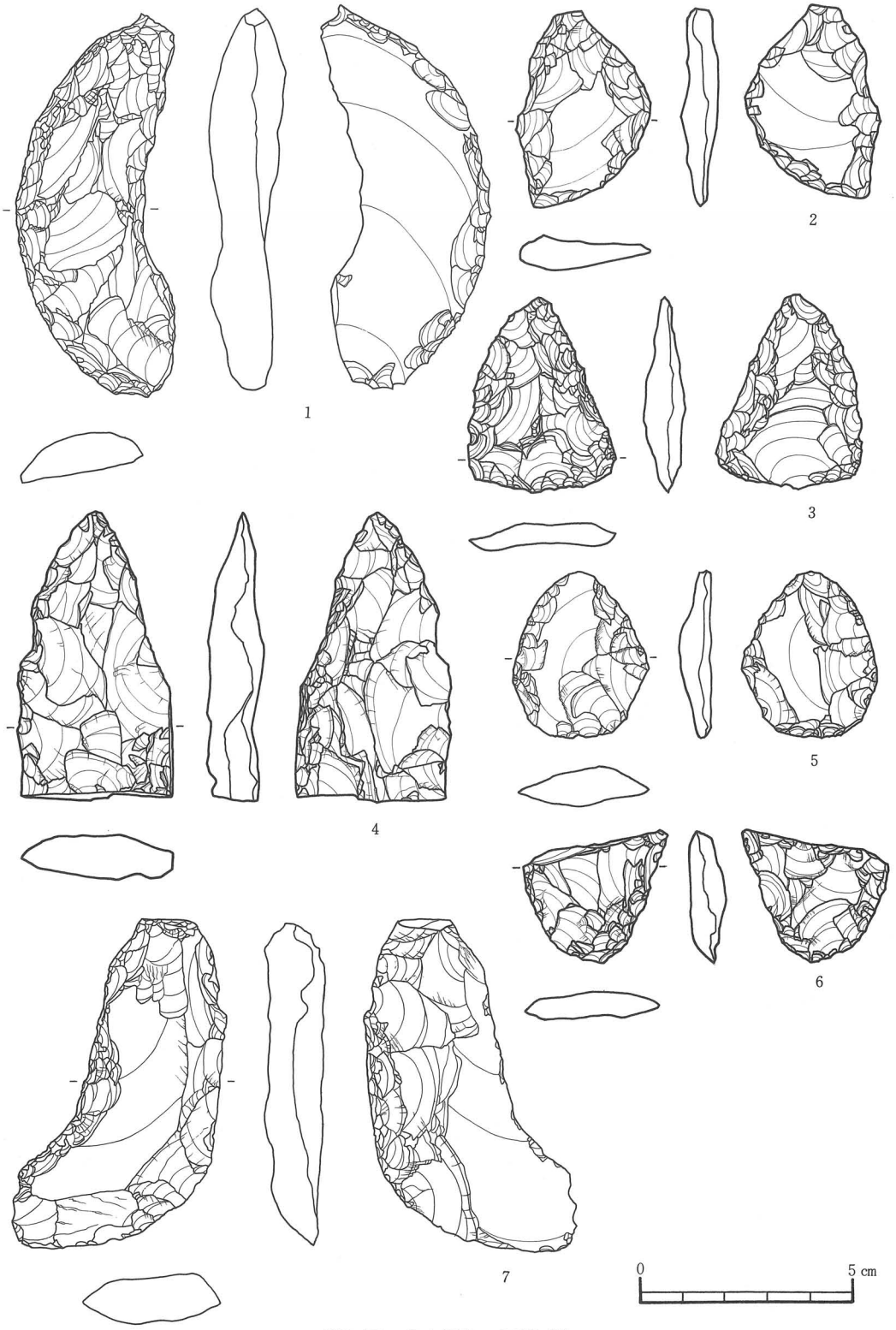
第34図　出土遺物・石器 (8)



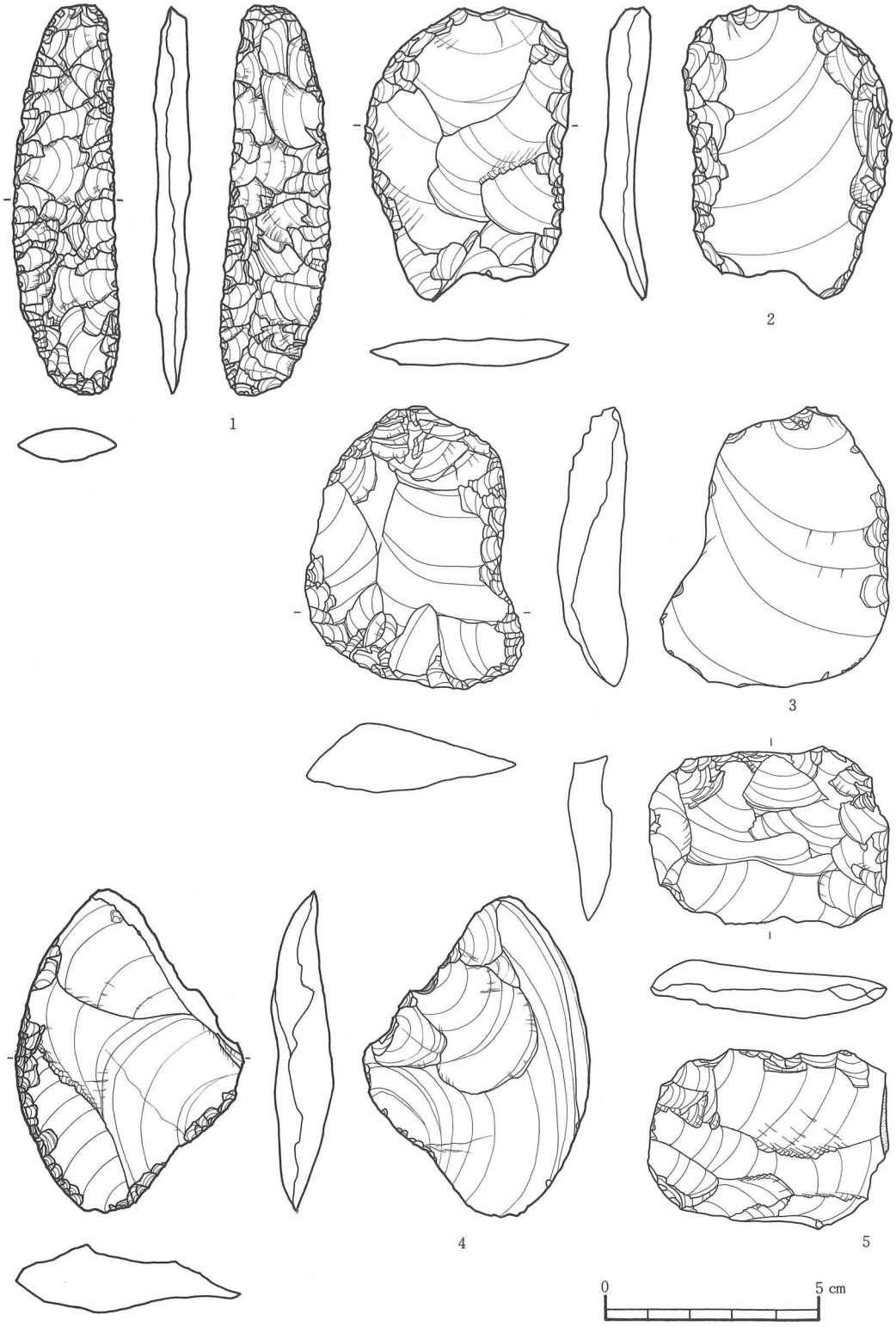
第35図　出土遺物・石器 (9)



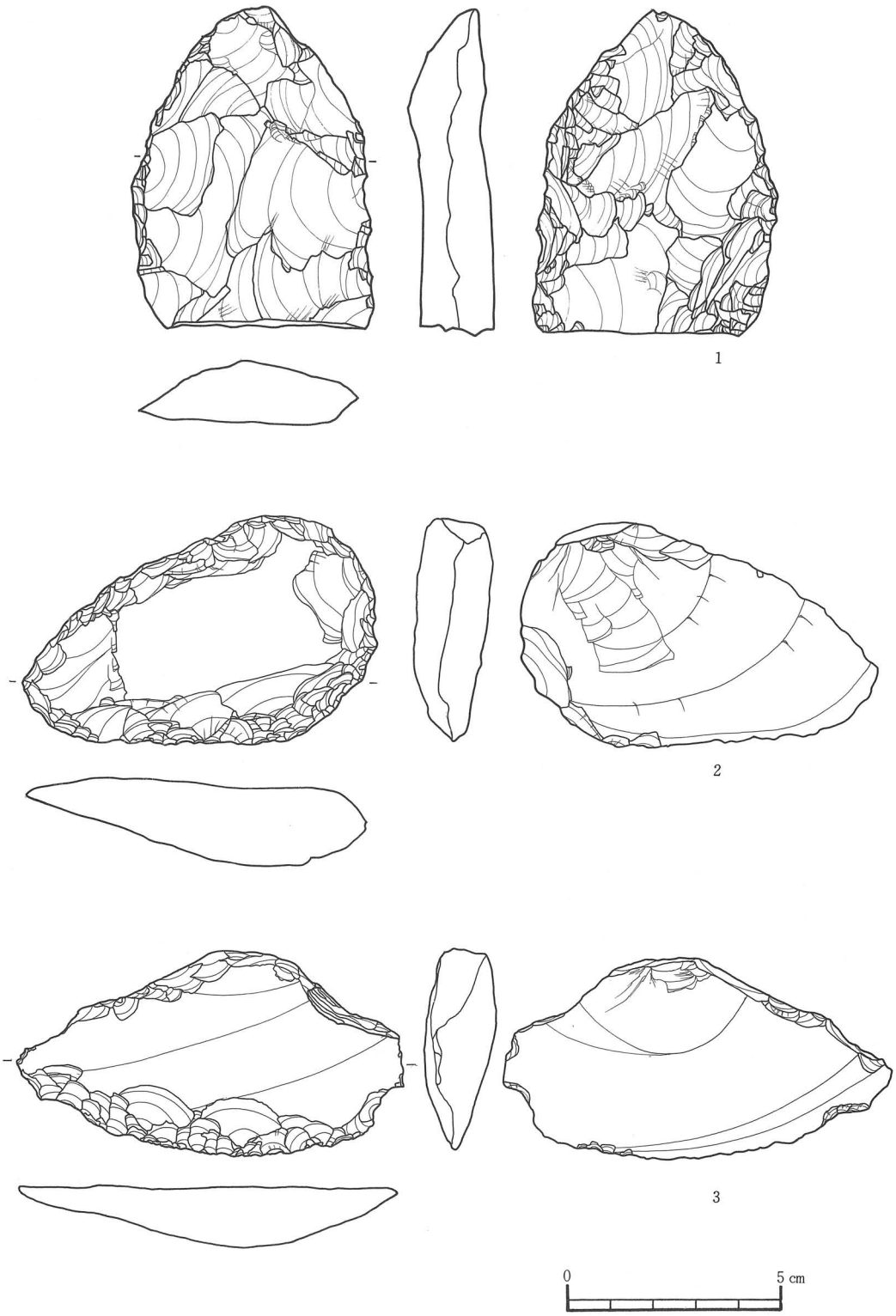
第36図　出土遺物・石器 ⑽



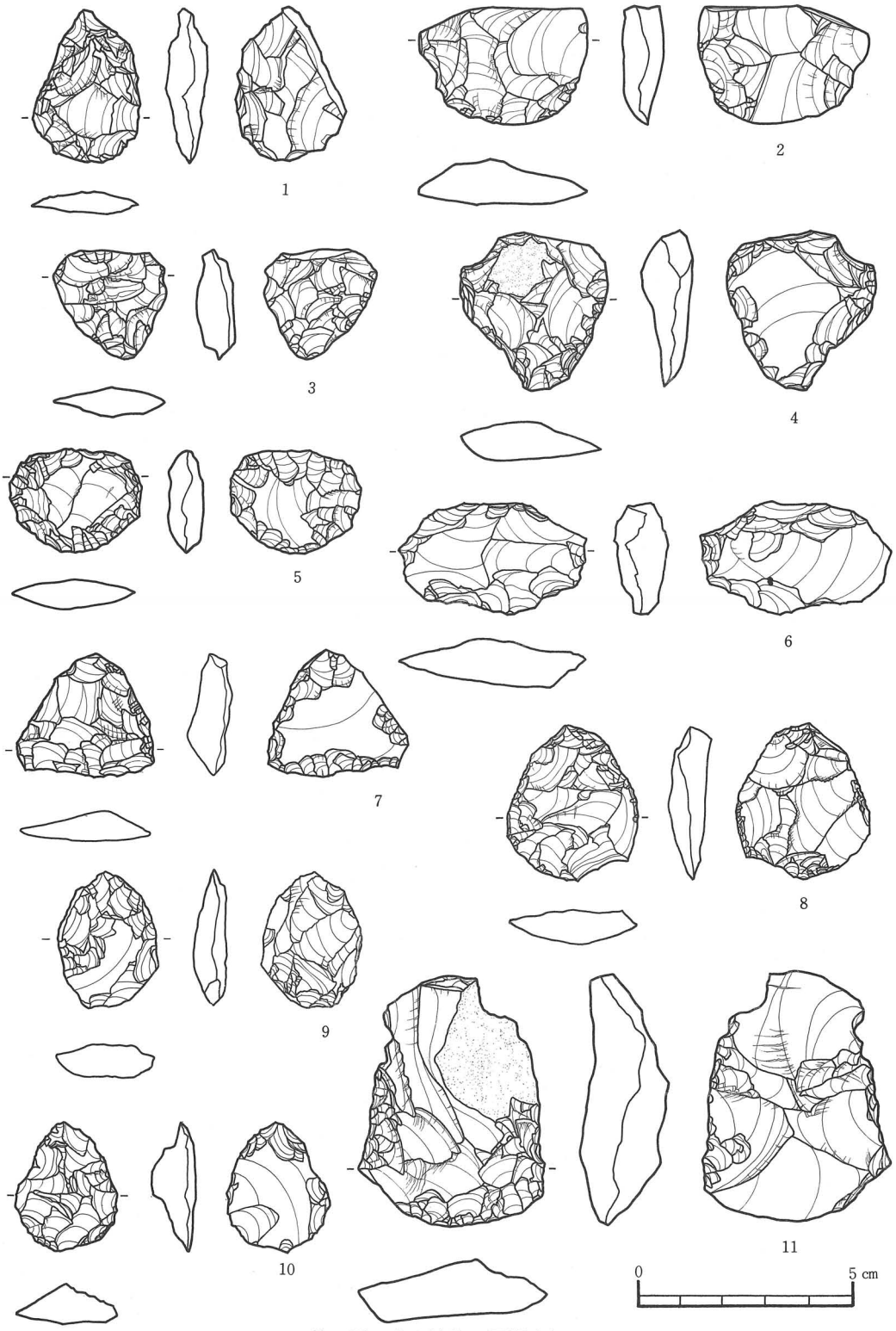
第37図　出土遺物・石器 (11)



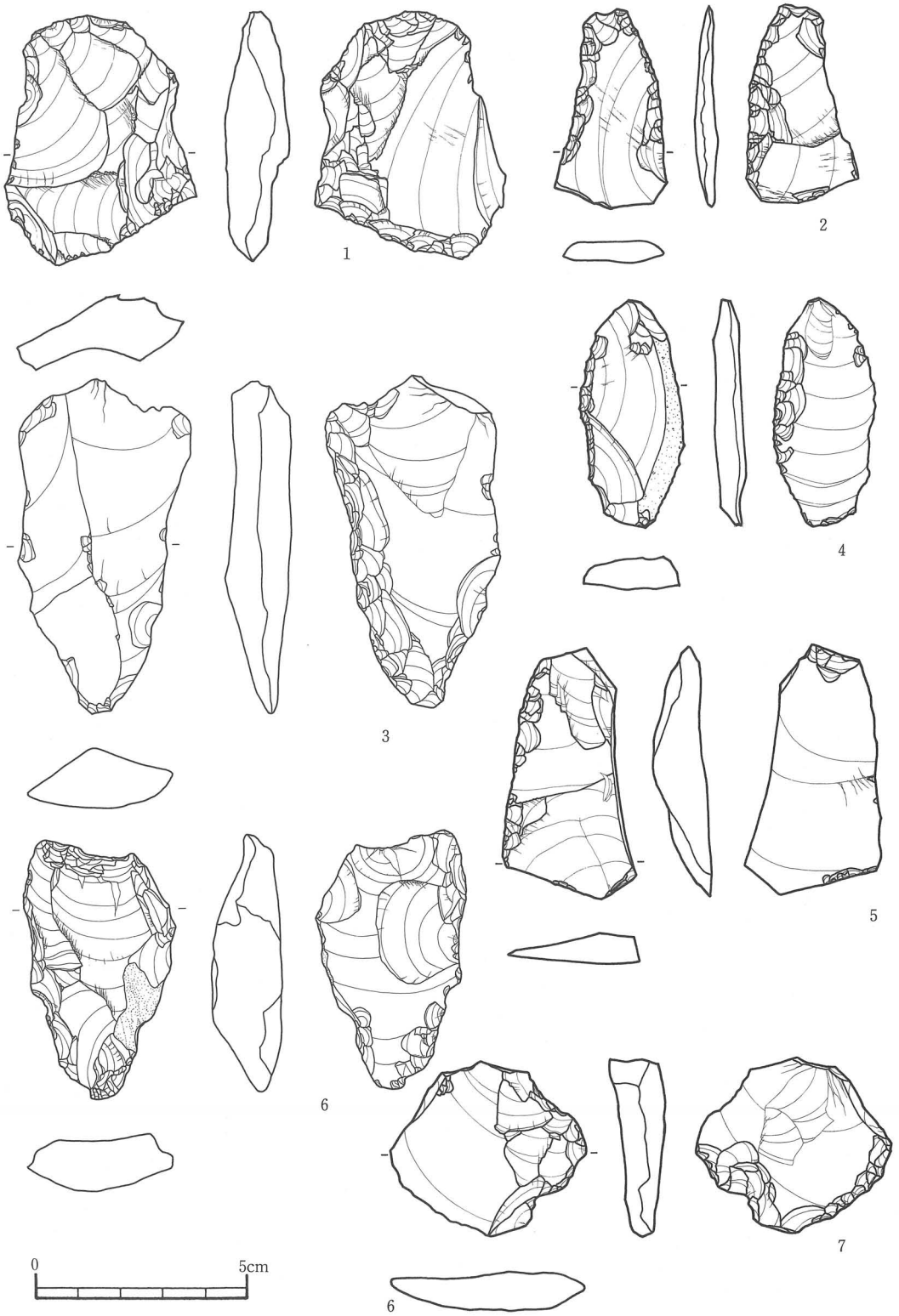
第38図　出土遺物・石器 ⑿



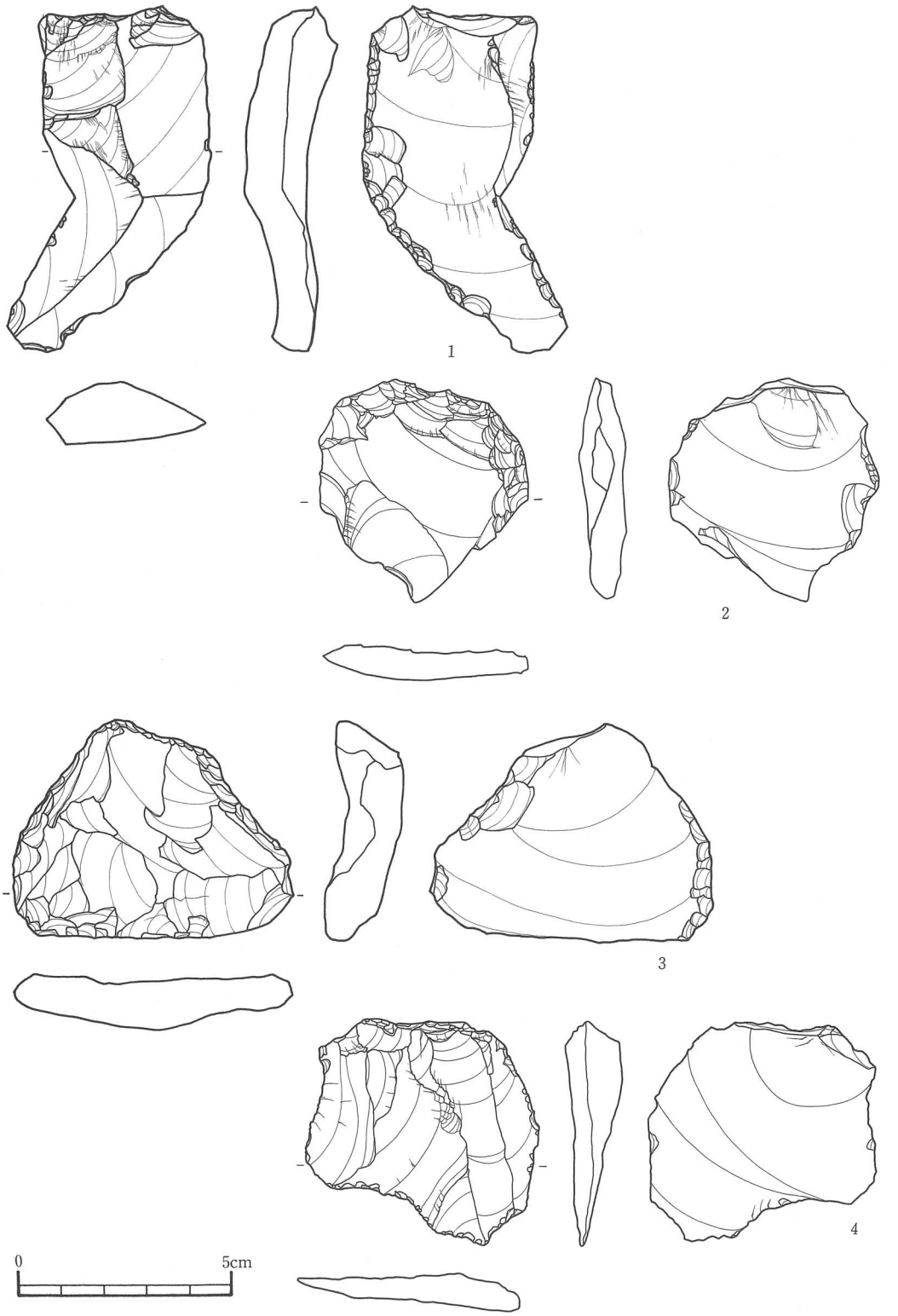
第39図　出土遺物・石器 (13)



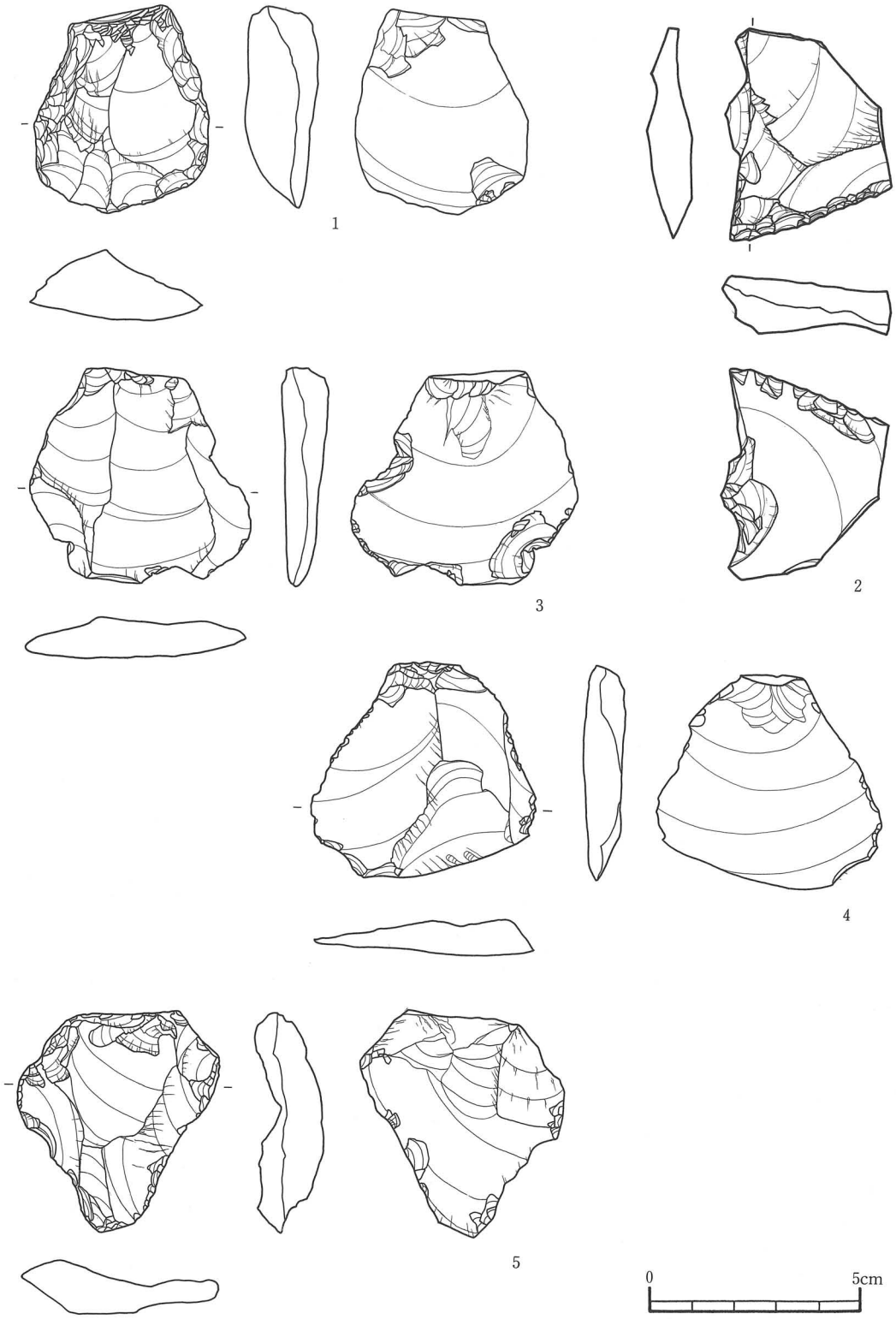
第40図　出土遺物・石器 ⑭



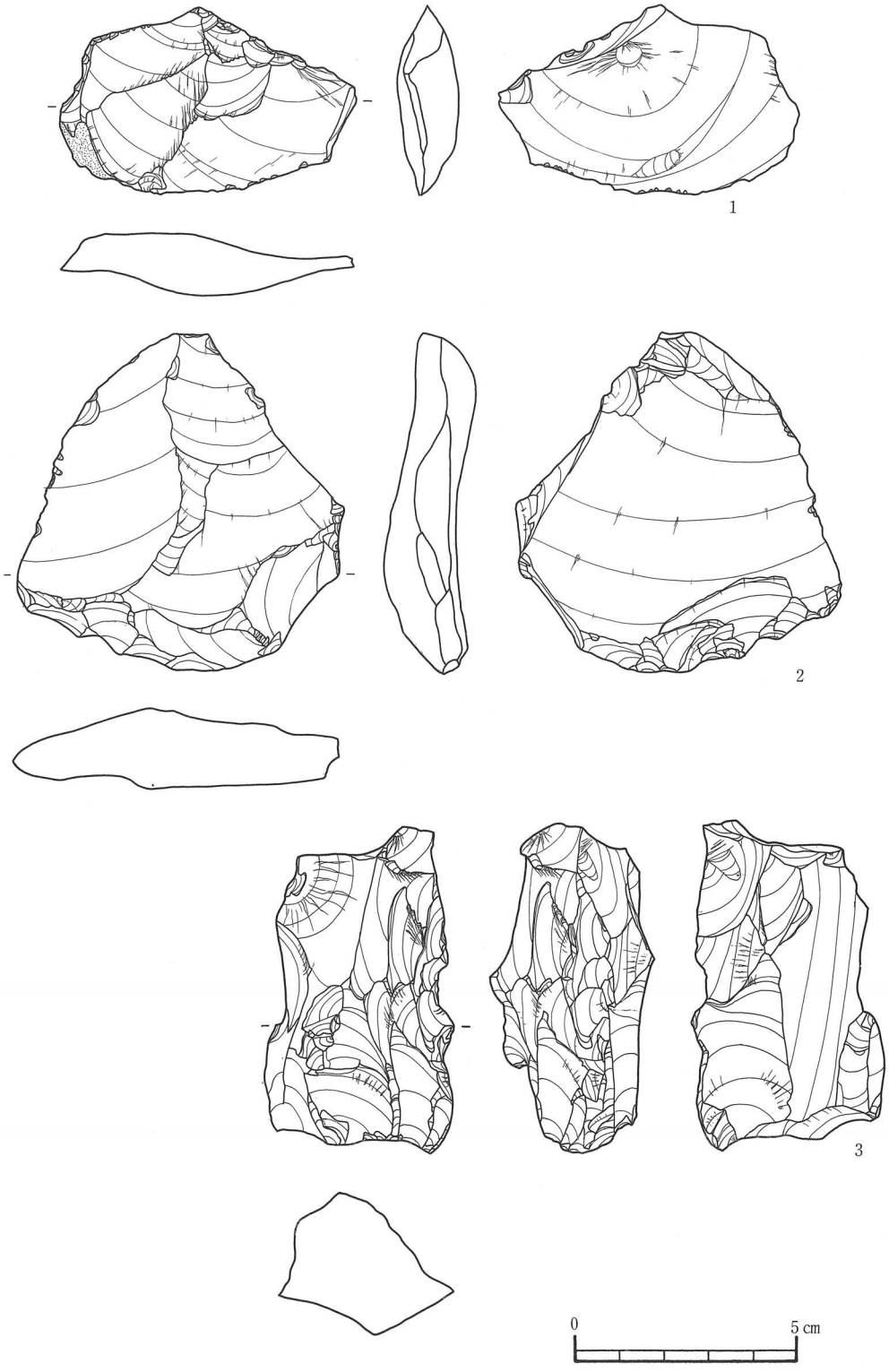
第41図　出土遺物・石器 (15)



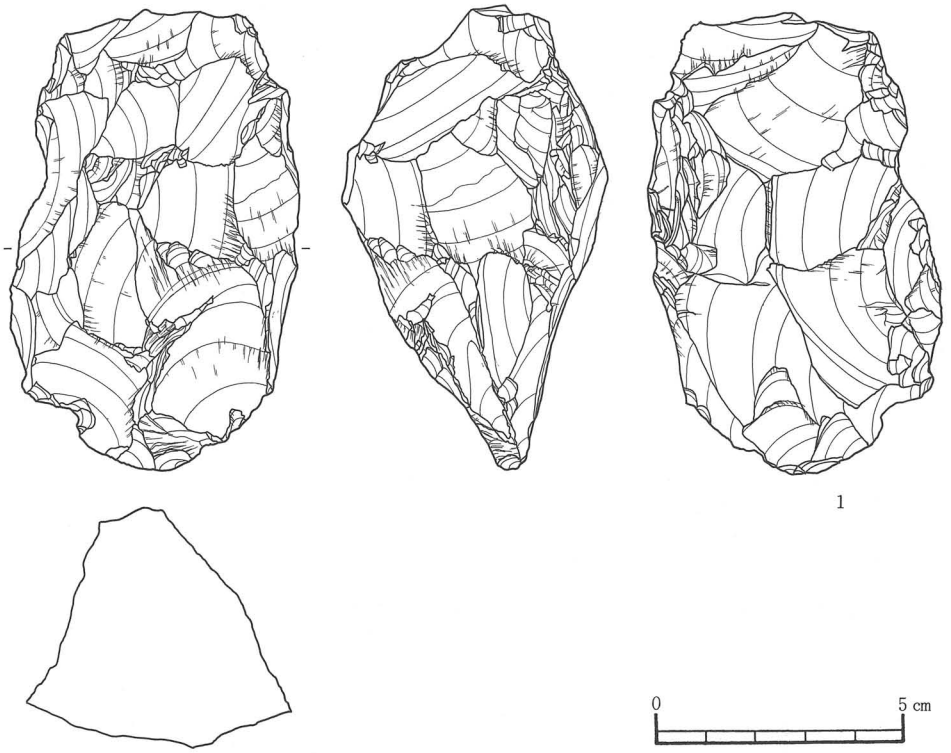
第42図　出土遺物・石器 ⑯



第43図　出土遺物・石器 (17)

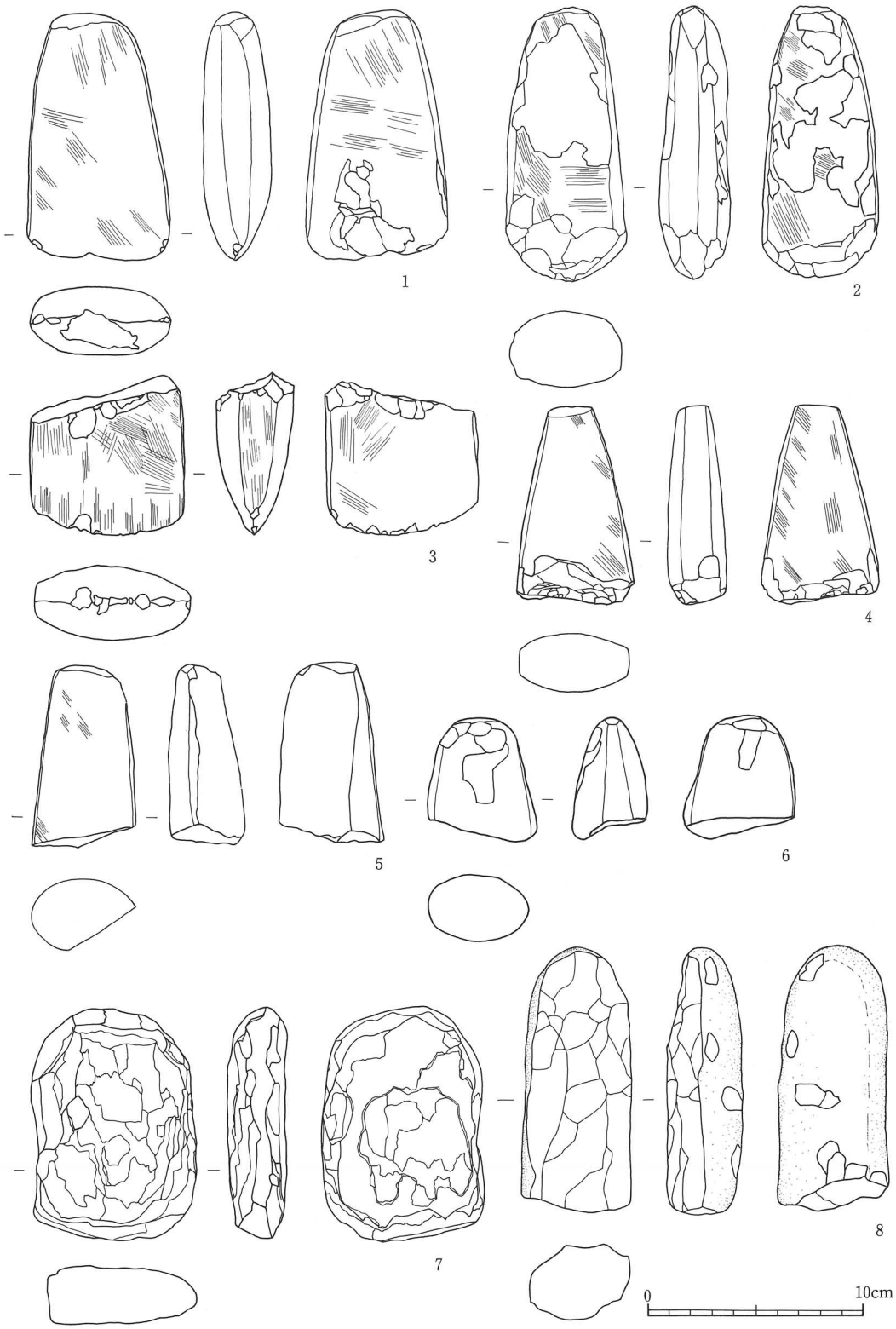


第44図　出土遺物・石器 (18)

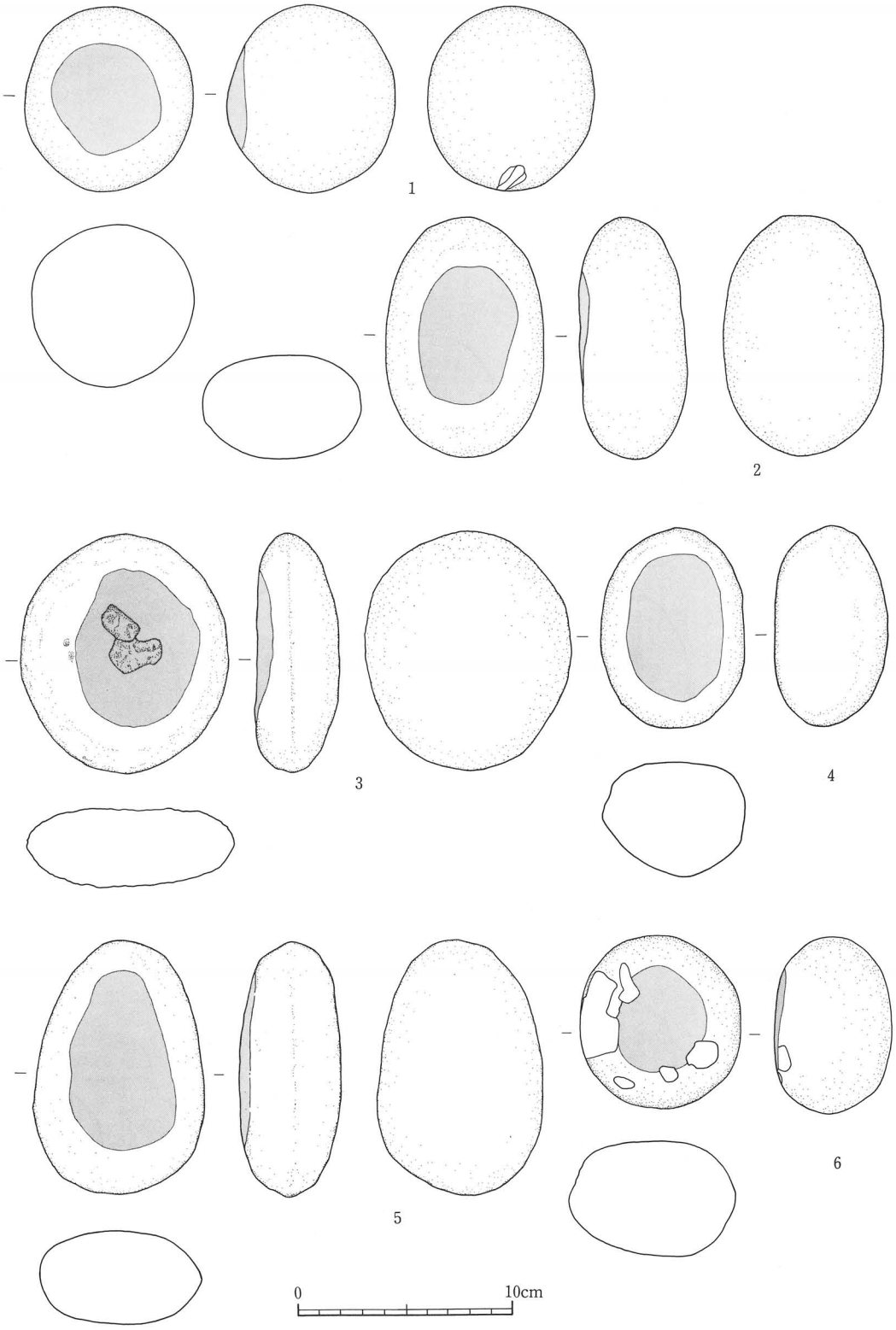


第45図　出土遺物・石器 (19)

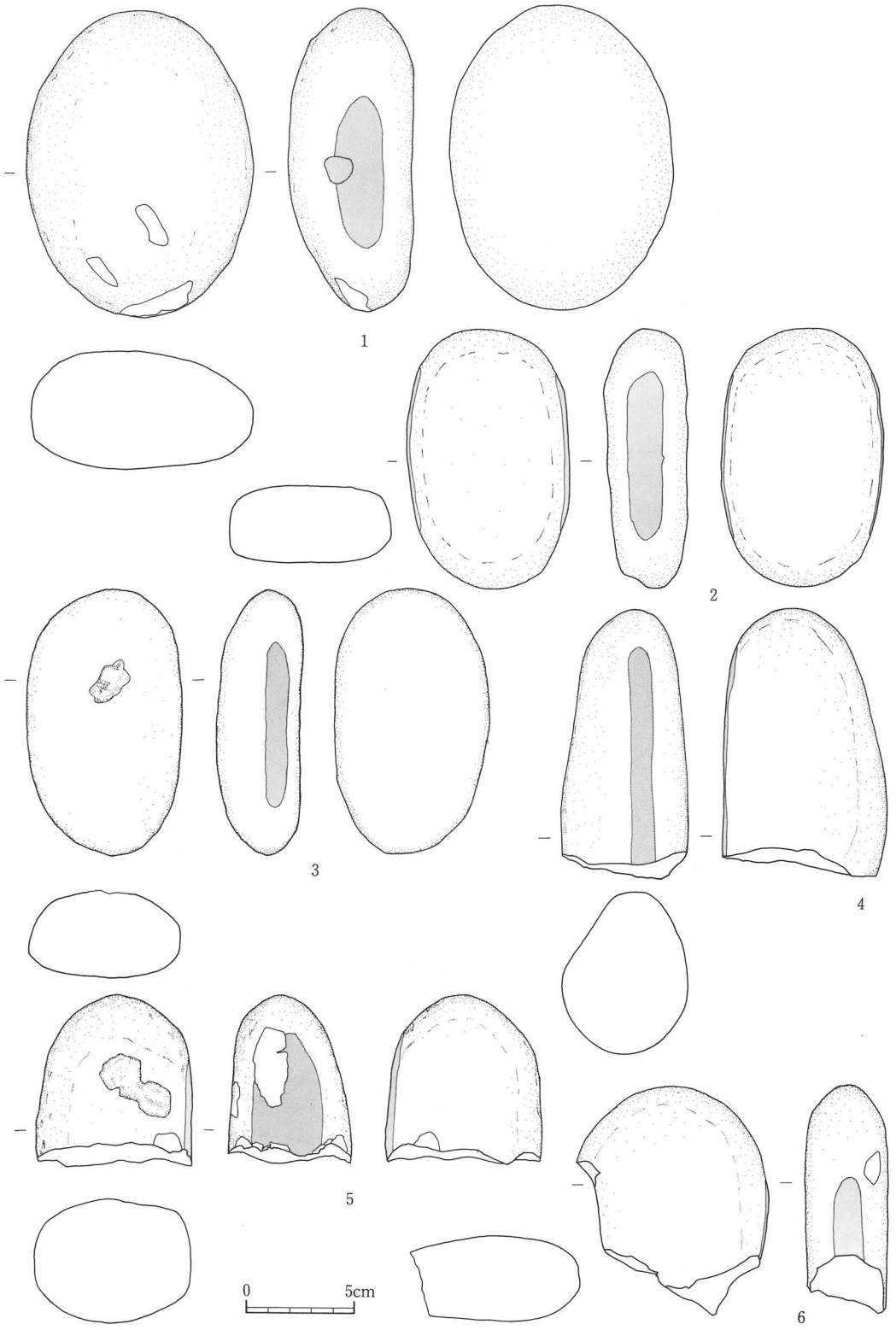
第46図　出土遺物・石器(20)



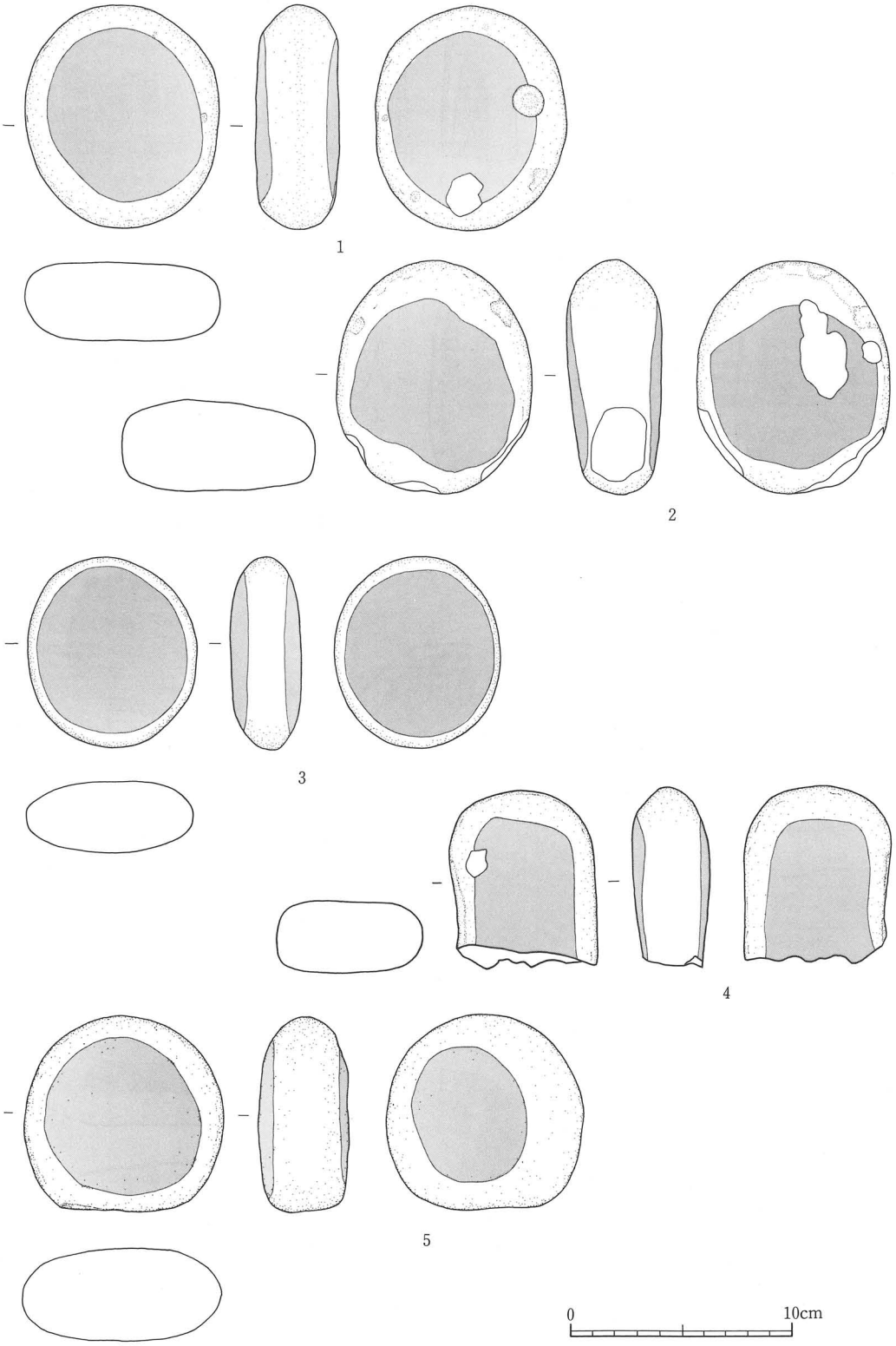
第47図　出土遺物・石器 (21)



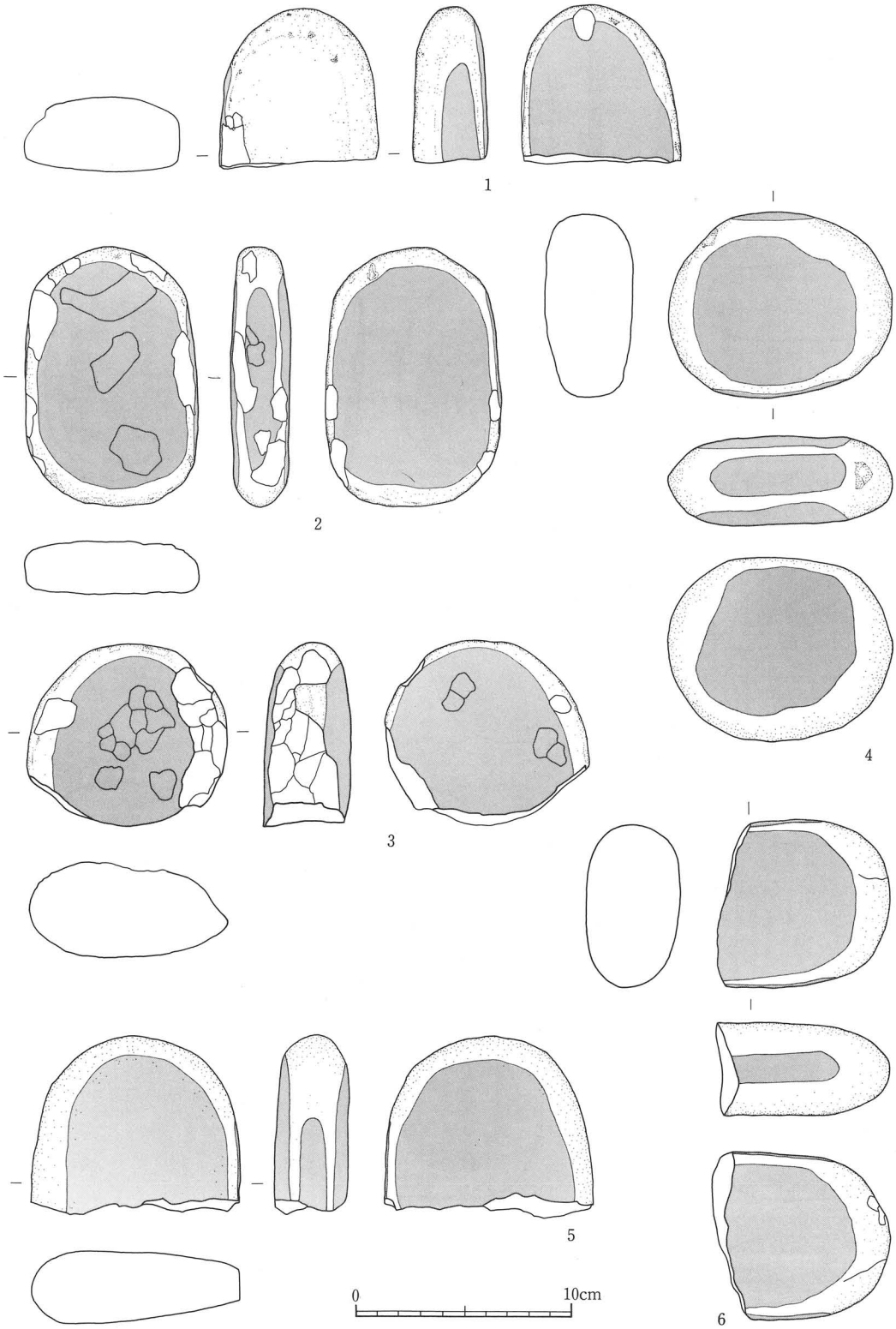
第48図　出土遺物・石器 (22)



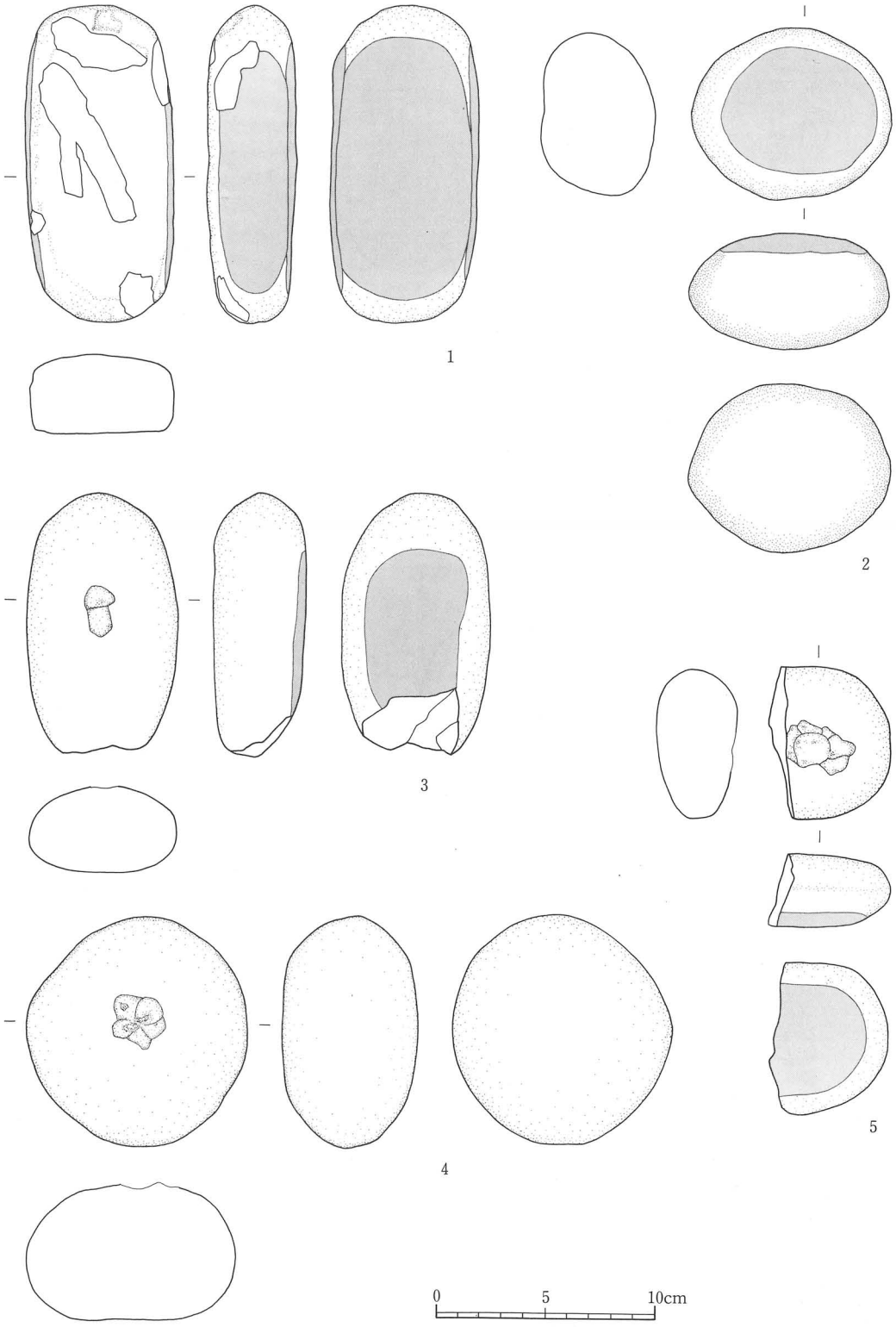
第49図　出土遺物・石器 (23)



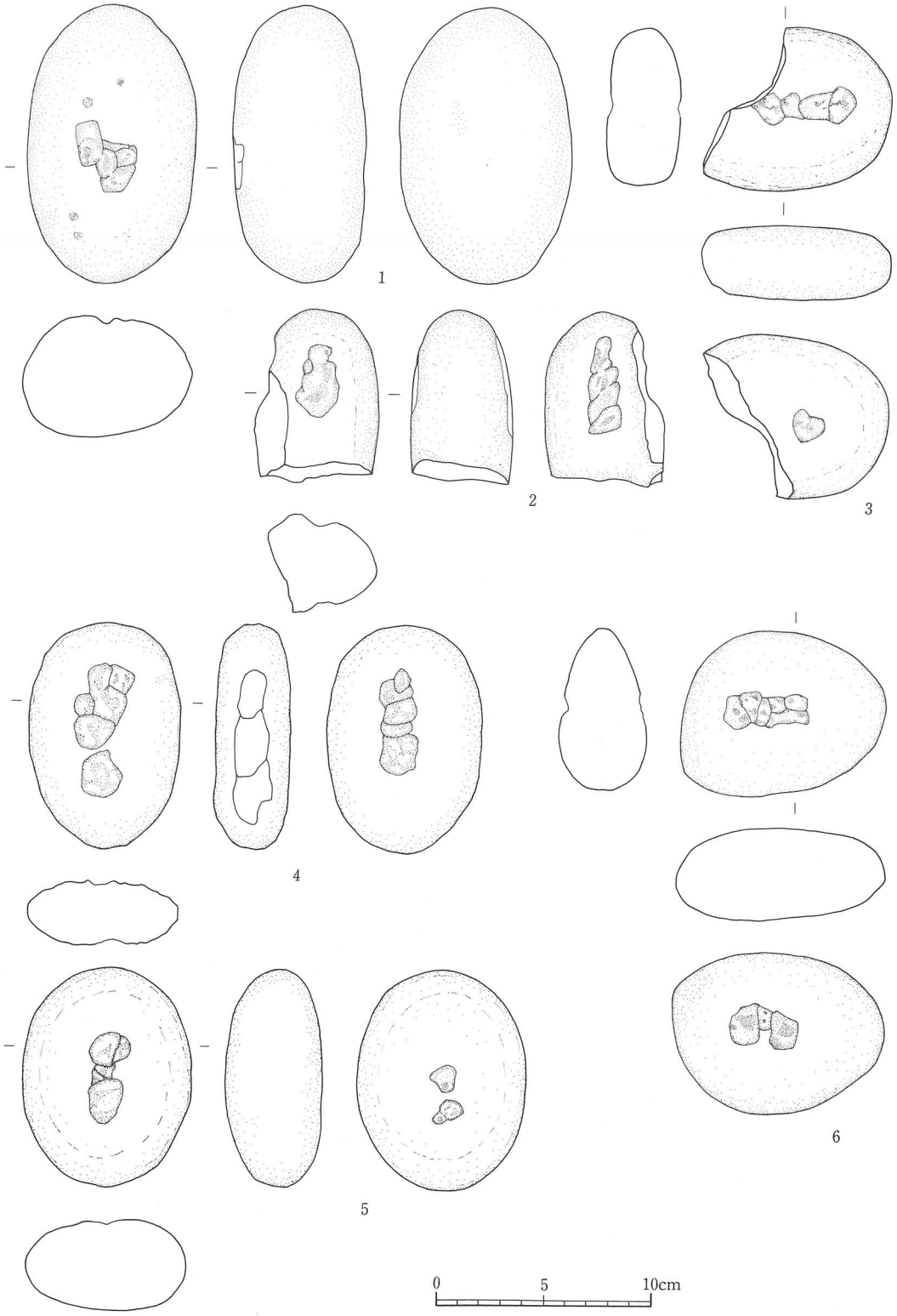
第50図　出土遺物・石器 (24)



第51図　出土遺物・石器 (25)



第52図　出土遺物・石器 (26)



第53図　出土遺物・石器 (27)

第４表　剝片石器観察表(1)

図版番号	地　区	層　位	器種・登録番号	分　類	長(mm)	幅(mm)	長/巾指数	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真・図版番号	備　考
27－1	Ⅴ－Ｅ区東	２層下	石鏃・Aa－１	Ａ１類	26.0	19.0	1.37	4.0	1.5	珪質頁岩	写真23	
27－2	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Aa－12	Ａ１類	21.5	20.0	1.08	4.5	1.3	珪質頁岩	〃	
27－3	Ⅳ－ヲ区	２層	石鏃・Aa－34	Ａ１類	20.0	16.2	1.23	3.5	0.9	珪質頁岩	〃	
27－4	Ⅲ－ト区	3～4層	石鏃・Aa－44	Ａ１類	27.8	18.5	1.50	4.0	1.6	珪質頁岩	〃	
27－5	Ⅲ－ニ区	２層	石鏃・Aa－45	Ａ１類	23.0	12.6	1.83	3.7	0.8	珪質頁岩	〃	
27－6	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Aa－14	Ａ２類	24.8	18.7	1.33	4.0	1.2	珪質頁岩	〃	
27－7	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－18	Ａ２類	26.0	16.0	1.63	3.5	1.0	珪質頁岩	〃	
27－8	Ⅴ－ワ区	２層下	石鏃・Aa－21	Ａ２類	29.0	19.8	1.46	3.8	1.6	珪質頁岩	〃	
27－9	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－39	Ａ２類	23.0	17.3	1.33	4.7	1.1	珪質頁岩	〃	
27－10	Ⅲ－ロ区	２層	石鏃・Aa－46	Ａ２類	35.5	23.4	1.52	5.3	2.9	珪質頁岩	〃	
27－11	Ⅴ－ワ区	２層下	石鏃・Aa－２	Ａ３類	21.8	22.3	0.98	4.2	1.3	珪質頁岩	〃	
27－12	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－４	Ａ３類	19.3	19.0	1.02	4.5	1.1	珪質頁岩	〃	
27－13	Ⅴ－ワ区	２層下	石鏃・Aa－11	Ａ３類	21.7	17.8	1.22	2.0	0.8	珪質頁岩	〃	
27－14	Ⅲ－ホ区	２層	石鏃・Aa－24	Ａ３類	18.0	17.7	1.02	2.5	1.6	珪質頁岩	〃	
27－15	Ⅲ－ハ区	２層	石鏃・Aa－38	Ａ３類	24.0	21.1	1.14	3.0	1.2	珪質頁岩	〃	
27－16	Ⅲ－ホ区	２層	石鏃・Aa－６	Ａ４類	26.0	19.5	1.33	3.1	1.0	珪質頁岩	〃	
27－17	Ⅳ－ヌ区	２層下	石鏃・Aa－16	Ａ４類	28.6	20.0	1.43	5.0	1.6	珪質頁岩	〃	
27－18	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石鏃・Aa－28	Ａ４類	21.4	21.1	1.01	2.9	1.9	珪質頁岩	〃	
28－1	Ⅴ－Ｅ区		石鏃・Aa－36	Ａ４類	24.6	21.5	1.14	4.5	1.5	珪質頁岩	〃	
28－2	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－40	Ａ４類	22.6	18.0	1.26	3.5	0.9	珪質頁岩	〃	
28－3	Ⅴ－ワ区	２層下	石鏃・Aa－10	Ａ５類	23.0	18.0	1.28	3.8	0.9	珪質頁岩	〃	
28－4	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Aa－22	Ａ５類	23.8	17.0	1.40	3.0	0.8	珪質頁岩	〃	
28－5	Ⅳ区	２層下	石鏃・Aa－30	Ａ５類	26.0	21.2	1.23	3.5	1.6	珪質頁岩	〃	
28－6	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－37	Ａ５類	32.0	23.0	1.39	5.7	3.5	珪質頁岩	〃	
28－7	Ⅲ－リ区	２層	石鏃・Aa－15	Ａ６類	39.0	22.0	1.77	5.0	3.0	珪質頁岩	〃	
28－8	Ⅲ－ホ区	２層	石鏃・Aa－48	Ａ６類	32.2	(22.8)		4.8	3.1	珪質頁岩	〃	右基部欠損
28－9	Ⅲ－ヘ区	２層	石鏃・Aa－29	Ａ５類	25.0	17.8	1.40	3.0	1.0	珪質頁岩	〃	
28－10	Ⅲ－Ｂ区	２層	石鏃・Aa－８	Ａ７類	32.0	22.5	1.42	3.0	1.3	珪質頁岩	〃	
28－11	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Aa－32	Ａ７類	28.0	21.0	1.33	4.0	1.5	珪質頁岩	〃	
28－12	Ⅴ－Ｅ区東	２層下	石鏃・Ab－60	Ａ２類	33.0	18.8	1.76	3.7	1.3	珪質頁岩	〃	
28－13	Ⅲ－ホ区	２層	石鏃・Aa－54	Ａ７類	46.7	15.0	3.11	5.0	2.7		〃	右基部欠損
28－14	Ⅲ－ヘ区	２層	石鏃・Ab－４	Ａ７類	39.0	14.0	2.79	3.5	1.6	珪質頁岩	〃	
28－15	Ⅳ－ヲ区	２層	石鏃・Ab－113	Ａ７類	41.0	15.2	2.70	3.9	2.1	珪質頁岩	〃	右基部端・尖部欠損
28－16	Ⅲ－ト区	3～4層	石鏃・Ab－66	Ａ１類	20.0	14.0	1.43	2.5	0.7	珪質頁岩	〃	
28－17	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Ab－28	Ａ１類	18.0	13.0	1.38	3.5	0.7	珪質頁岩	〃	
28－18	Ⅲ－リ区	２層	石鏃・Ab－46	Ａ１類	18.0	16.0	1.13	4.0	0.9	珪質頁岩	〃	
28－19	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Ab－40	Ａ２類	21.0	16.5	1.27	4.5	1.0	珪質頁岩	写真23	右基部端欠損
29－1	Ⅴ－西区	1b層	石鏃・Ab－19	Ａ２類	30.0	22.0	1.36	5.4	2.2	凝灰岩	写真24	
29－2	Ⅲ－ヘ区	２層	石鏃・Ab－84	Ａ１類	31.0	15.0	2.07	3.3	1.2	珪質頁岩	〃	
29－3	Ⅲ区		石鏃・Ab－82	Ａ２類	36.0	20.5	1.76	4.0	2.1	珪質頁岩	〃	
29－4	Ⅴ－Ｅ区西		石鏃・Ab－11	Ａ１類	36.0	16.0	2.25	3.6	1.8	珪質頁岩	〃	
29－5	Ⅳ－ル区	２層下	石鏃・Ab－62	Ａ６類	32.0	25.0	1.28	7.5	4.2		〃	
29－6	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Ab－78	Ａ２類	25.0	18.0	1.39	4.1	1.3	珪質頁岩	〃	
29－7	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石鏃・Ab－79	Ａ２類	29.0	15.6	1.86	3.0	1.1	珪質頁岩	〃	
29－8	Ⅳ－ヲ区	２層下	石鏃・Ab－35	Ａ２類	31.0	16.0	1.94	3.0	1.2	珪質頁岩	〃	
29－9	Ⅳ－ヌ区	２層	石鏃・Ab－74	Ａ２類	31.0	18.0	1.72	4.7	1.9	珪質頁岩	〃	
29－10	Ⅳ－ル区	２層下	石鏃・Ab－71	Ａ１類	34.0	15.6	2.18	4.3	1.7	珪質頁岩	〃	尖部欠損
29－11		表採	石鏃・Ab－76	Ａ２類	31.0	16.0	1.94	3.5	1.5	珪質頁岩	〃	1987年調査出土
29－12	Ⅲ－チ区	２層	石鏃・Ab－１	Ａ２類	28.0	13.8	2.03	2.8	0.8	珪質頁岩	〃	
29－13	Ⅲ－ハ区	２層	石鏃・Ab－21	Ａ２類	24.0	15.0	1.60	2.4	0.6	珪質頁岩	〃	
29－14		表採	石鏃・Ab－72	Ａ１類	25.0	16.0	1.56	4.0	1.4		〃	1987年調査出土
29－15	Ⅴ－ワ区	２層下	石鏃・Ab－30	Ａ１類	23.0	15.0	1.53	4.3	1.1	珪質頁岩	〃	
29－16	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Ab－８	Ａ４類	22.0	17.5	1.26	5.0	1.5	珪質頁岩	〃	
29－17	Ⅳ区	表土	石鏃・Ab－６	Ａ１類	25.0	20.0	1.25	4.0	1.5	珪質頁岩	〃	
29－18	Ⅳ－ヲ区	２層	石鏃・Ab－９	Ａ２類	25.0	21.0	1.19	5.8	2.3	珪質頁岩	〃	
30－1	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Ab－68	Ａ２類	15.0	13.0	1.15	2.4	0.3	珪質頁岩	〃	
30－2	Ⅳ－ル区	２層下	石鏃・Ab－38	Ａ２類	23.0	13.5	1.70	3.0	0.6	珪質頁岩	〃	
30－3	Ⅲ－ヘ区	２層	石鏃・Ab－13	Ａ４類	22.5	13.2	1.70	2.5	0.8	珪質頁岩	〃	
30－4	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Ab－37	Ａ４類	25.0	16.0	1.56	3.5	1.3	チャート	〃	
30－5	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石鏃・Ab－15	Ａ４類	23.0	17.0	1.35	3.8	1.0	珪質頁岩	〃	
30－6	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Ad－11	Ａ１類	35.0	(15.0)		2.9	1.3	珪質頁岩	〃	左基部端欠損
30－7	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Ab－122		28.0	(15.0)		4.5	2.1	珪質頁岩	〃	左側辺欠損
30－8	Ⅴ－Ｅ区西		石鏃・Ad－３		33.0	16.0	2.06	2.6	1.2	珪質頁岩	〃	
30－9	Ⅴ区		石鏃・Ad－７		26.0	13.0	2.00	4.0	1.1		〃	
30－10	Ⅲ－ヘ区		石鏃・Ad－６		27.0	10.0	2.70	3.0	0.9	珪質頁岩	〃	
30－11	Ⅳ－ル区	２層	石鏃・Ad－１		26.0	14.0	1.86	5.4	2.1	珪質頁岩	〃	
30－12	Ⅲ－Ｄ区	２層下	石鏃・Ad－８		22.0	17.0	1.29	2.0	0.8	珪質頁岩	写真24	

第５表　剝片石器観察表(2)

図版番号	地　区	層　位	器種・登録番号	分　類	長(mm)	幅(mm)	長/巾指数	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真・図版番号	備　考
30－13	Ⅴ－Ｅ区西		石鏃・Ad－５		30.0	16.0	1.88	4.5	1.8	珪質頁岩	写真24	
30－14	Ⅴ－西区	1b 層	石鏃・Ac－１		25.0	15.0	1.67	2.5	0.9	珪質頁岩	〃	
30－15	Ⅴ－Ｅ区西		石鏃・Ac－２		23.5	17.3	1.36	5.0	2.0	珪質頁岩	〃	
30－16	Ⅲ－ホ区	２層	尖頭器・Ｂ－20	Ｂ２類	(31.0)	23.7		6.0	4.0	珪質頁岩	〃	基部欠損
30－17	Ⅲ－チ区	２層	尖頭器・Ｂ－５	Ｂ２類	(35.0)	(17.0)		3.7	2.6	珪質頁岩	写真24	左基部端・尖部欠損
30－18	Ⅴ－Ｅ区西	２層	石鏃・Ae－１		(23.0)	15.0		5.0	1.3	石英	写真25	尖部・基部欠損
30－19	Ⅲ－ニ区	２層	尖頭器・Ｂ－９	Ｂ２類	33.0	26.0	1.27	6.8	6.0	珪質頁岩	〃	
30－20	Ⅴ－Ｅ区	２層下	尖頭器・Ｂ－12	Ｂ２類	35.5	23.0	1.54	7.4	5.2	珪質頁岩	〃	
31－１	Ⅲ－Ｃ区		尖頭器・Ｂ－４	Ｂ３類	79.0	22.0	3.59	5.7	12.2	珪質頁岩	〃	
31－２	Ⅳ－Ｆ区		尖頭器・Ｂ－３	Ｂ３類	89.0	26.0	3.42	10.7	24.0	珪質頁岩	〃	
31－３	Ⅲ－チ区	２層	尖頭器・Ｂ－７	Ｂ３類	100.0	19.8	5.05	10.0	20.1	珪質頁岩	〃	
31－４	Ⅳ－ル区		尖頭器・Ｂ－10	Ｂ４類	70.0	17.8	3.93	6.5	8.5	珪質頁岩	〃	
31－５	Ⅲ－チ区	２層	尖頭器・Ｂ－18	Ｂ３類	(50.0)	15.0		9.8	9.1	珪質頁岩	〃	尖部欠損
31－６	Ⅳ－ヌ区	２層	尖頭器・Ｂ－８	Ｂ３類	38.0	12.0	3.17	5.0	2.7	珪質頁岩	〃	ドリルの可能性
31－７	Ⅲ－リ区	２層	尖頭器・Ｂ－２	Ｂ１類	(40.5)	14.5		5.5	3.5	珪質頁岩	〃	ドリルの可能性、尖部欠損
31－８		表採	尖頭器・Ｂ－30	Ｂ１類	(55.0)	19.8		9.0	9.8	珪質頁岩	〃	尖部欠損
32－１	Ⅲ－チ区	２層	石匙・Ｃ－２	Ｃ３類	69.0	26.5		13.5	24.9	珪質頁岩	〃	二側縁構成
32－２	Ⅴ区		石匙・Ｃ－５	Ｃ３類	62.0	20.0		5.0	7.0	珪質頁岩	〃	二側縁構成
32－３	Ⅳ－ヌ区	２層	石匙・Ｃ－６	Ｃ３類	59.0	18.5		6.5	6.5	珪質頁岩	〃	二側縁構成
32－４	Ⅱ－イ区	２層	石匙・Ｃ－９	Ｃ３類	36.0	14.0		8.0	4.1	珪質頁岩	〃	二側縁構成
32－５	Ⅳ－Ｆ区	２層	石匙・Ｃ－１	Ｃ３類	59.0	28.0		6.5	10.4	珪質頁岩	写真25	二側縁構成
32－６	Ⅴ-Ｅ区西		石匙・Ｃ－19	Ｃ１類	94.5	33.0		9.8	33.3	珪質頁岩	写真26	三側縁構成
32－７	Ⅲ－チ区	２層	石匙・Ｃ－17	Ｃ１類	79.5	15.0		6.0	8.6	珪質頁岩	〃	三側縁構成
33－１	Ⅲ－チ区	２層	石匙・Ｃ－11	Ｃ１類	56.0	38.0		8.5	17.6	珪質頁岩	〃	三側縁構成
33－２	Ⅲ－Ｄ区	２層	石匙・Ｃ－８	Ｃ１類	54.0	25.5		5.0	6.6	珪質頁岩	〃	三側縁構成
33－３	Ⅴ区	1b層下	石匙・Ｃ－20	Ｃ１類	59.0	22.0		5.0	8.8	珪質頁岩	〃	三側縁構成
33－４	Ⅳ－ヲ区	２層	石匙・Ｃ－12	Ｃ２類	57.0	40.0		8.5	19.4	珪質頁岩	〃	横型
33－５	Ⅲ区西壁	表土	石匙・Ｃ－21	Ｃ₁類	65.0	33.0		12.3	22.2		〃	三側縁構成
33－６		表採	石匙・Ｃ－24		(63.0)	25.0		10.0	13.3	珪質頁岩	〃	欠損
33－７	Ⅴ区	1b 層	石匙・Ｃ－10	Ｃ２類	34.5	48.5		7.0	10.2		〃	横型
33－８	Ⅴ－Ｅ・ワ区		石錘・Ｄ－８	Ｄ１類	27.8	18.0		5.0	1.7	珪質頁岩	写真26	
34－１	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石錘・Ｄ－９	Ｄ１類	(39.0)	(21.5)		10.0	6.4	珪質頁岩	写真27	尖部欠損
34－２	Ⅲ－チ区	２層	石錘・Ｄ－12	Ｄ１類	(41.0)	(19.0)		9.5	5.7	珪質頁岩	〃	基部欠損
34－３	Ⅳ－ヲ区	２層下	石錘・Ｄ－14	不明	(24.0)	9.5		5.5	1.6	珪質頁岩	〃	基部欠損
34－４	Ⅲ－チ区	２層	石錘・Ｄ－７	Ｄ１類	47.0	27.0		6.0	6.3	珪質頁岩	〃	
34－５		表採	石錘・Ｄ－４	Ｄ１類	(42.0)	24.0		10.5	10.8	珪質頁岩	〃	尖部欠損
34－６	Ⅴ－Ｅ区東	２層	石錘・Ｄ－30	Ｄ２類	48.0	15.6		7.0	4.8	珪質頁岩	〃	
34－７	Ⅴ－Ｅ区東	２層	石錘・Ｄ－29	Ｄ２類	(63.0)	14.0		6.5	6.2	珪質頁岩	〃	尖部欠損
34－８	Ⅳ－ヲ区	２層下	石錘・Ｄ－５	Ｄ２類	40.8	16.3		6.5	3.5	珪質頁岩	〃	
34－９	Ⅴ－Ｅ・ワ区		石錘・Ｄ－19	Ｄ２類	44.5	15.0		7.5	4.9	珪質頁岩	〃	
34－10	Ⅳ－Ｆ区	２層	石錘・Ｄ－28	Ｄ２類	34.5	9.0		4.5	1.7	珪質頁岩	〃	
34－11	Ⅴ－Ｅ西区	２層	石錘・D-21	Ｄ２類	50.0	13.4		9.0	4.7	珪質頁岩	〃	
35－１	Ⅲ－チ区	２層	石篦・Ｅ－22		63.0	32.7		15.0	30.3		〃	
35－２	Ⅲ－ト区	3～4層	石篦・Ｅ－１		53.0	32.0		9.0	16.7	珪質頁岩	〃	
35－３	Ⅳ－Ｆ区	２層	石篦・Ｅ－６		67.0	42.5		12.0	32.9		〃	
35－４	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石篦・Ｅ－16		49.0	24.0		12.0	11.5	珪質頁岩	〃	
35－５	Ⅴ－Ｅ区西		石篦・Ｅ－20		57.0	36.0		15.0	32.3	珪質頁岩	〃	
35－６	Ⅲ－チ区	２層	石篦・Ｅ－３		55.0	30.0		10.0	22.9	珪質頁岩	写真27	
35－７	Ⅲ－Ａ区	２層	石篦・Ｅ－11		37.0	46.0		15.0	23.9	珪質頁岩	写真28	
36－１	Ⅴ－ワ区	２層	石篦・Ｅ－18		51.0	36.0		8.0	16.6	珪質頁岩	〃	
36－２	Ⅴ－中央西	２層	石篦・Ｅ－７		54.0	28.0		11.8	12.1	珪質頁岩	〃	
36－３	Ⅴ－中央東		石篦・Ｅ－14		70.0	35.5		19.0	56.0	珪質頁岩	〃	
36－４	Ⅴ－西区	２層上	石篦・Ｅ－13		39.0	23.0		9.8	9.5	珪質頁岩	〃	
36－５	Ⅳ－ヲ区	２層	石篦・Ｅ－23		35.0	29.0		15.0	18.7	珪質頁岩	〃	
36－６	Ⅴ－中央西	２層	石篦・Ｅ－10		49.0	39.0		10.2	18.2	珪質頁岩	〃	
36－７	Ⅴ－Ｅ区	２層下	石篦・Ｅ－４		56.0	37.0		18.7	44.0	珪質頁岩	〃	
37－１	Ⅲ－チ区	２層	石篦・Ｅ－５		88.0	28.5		14.0	44.8	珪質頁岩	〃	
37－２	Ⅲ－Ａ区	２層	スクレイパー・Ｆ－４		44.0	30.0		7.0	8.9		〃	
37－３	Ⅴ区		スクレイパー・Ｆ－３		44.0	32.0		9.0	10.4	珪質頁岩	写真28	
37－４	Ⅲ－リ区	２層	石篦？Ｅ－15		(65.0)	35.0		11.0	27.4		写真29	
37－５	Ⅲ－Ｄ区	２層下	スクレイパー・Ｆ－１		38.0	31.0		7.0	7.6	珪質頁岩	〃	
37－６	Ⅴ－Ｅ区西	２層	スクレイパー・Ｆ－９		(30.0)	29.5		7.0	6.3	珪質頁岩	〃	
37－７	Ⅴ－南区		石篦・Ｅ－19		75.0	33.0		12.5	44.1	珪質頁岩	〃	
38－１	Ⅳ－ワ区	２層下	スクレイパー・Ｆ－５		89.0	22.0		7.0	18.4	珪質頁岩	〃	
38－２	Ⅲ区		スクレイパー・Ｆ－７		67.0	45.0		9.3	27.9	珪質頁岩	〃	
38－３	Ⅴ－西区	２層上	スクレイパー・Ｅ－２		64.0	45.0		15.0	48.7	珪質頁岩	写真29	

第６表　剝片石器観察表(3)

図版番号	地　区	層　位	器種・登録番号	分　類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真・図版番号	備　考
38－4	Ⅳ－ル区	2層下	スクレイパー・F－8		73.0	50.0	13.0	41.6	珪質頁岩	写真29	
38－5	Ⅲ－チ区	2層	スクレイパー・E－17		54.0	38.0	10.0	27.1	珪質頁岩	写真29	
39－1	Ⅲ－ト区	2層	スクレイパー・F－10		73.0	54.8	17.0	76.3	珪質頁岩	写真30	
39－2	Ⅲ－D区	2層下	スクレイパー・E－21		49.0	82.0	16.0	67.1	凝灰岩	〃	
39－3	Ⅲ－A区	2層	スクレイパー・F－6		89.0	46.8	14.0	53.7		〃	
40－1	Ⅲ－ト区	2層	不定型石器・GA－8		35.0	24.0	7.0	6.5	珪質頁岩	〃	
40－2	Ⅴ－E区西		不定型石器・GA－10		27.0	38.0	9.0	11.2	珪質頁岩	〃	
40－3	Ⅳ－ル区	2層	不定型石器・GA－15		24.0	24.0	8.0	4.3		〃	
40－4	Ⅲ－チ区	3～4層	不定型石器・GB－16		36.0	33.0	10.0	10.7	珪質頁岩	〃	
40－5	Ⅲ－チ区	3～4層	不定型石器・GB－14		23.0	29.0	8.0	6.8	石英	〃	
40－6	Ⅳ－ヲ区	2層	不定型石器・GB－12		25.0	41.0	10.0	9.9	凝灰岩	〃	
40－7	Ⅳ－ル区	2層下	不定型石器・GB－7		28.0	30.0	7.0	5.9	珪質頁岩	〃	
40－8	Ⅲ－リ区	2層	不定型石器・GB－4		29.0	23.0	8.0	6.8	珪質頁岩	〃	
40－9	Ⅳ－ヲ区	2層下	不定型石器・GB－5		31.0	25.0	7.0	5.5	珪質頁岩	〃	
40－10	Ⅲ－チ区	2層	不定型石器・GB－11		29.0	23.0	9.0	4.6	珪質頁岩	写真30	
40－11	Ⅲ－ト区	3層下	不定型石器・GC－17		58.0	42.0	18.0	41.0	珪質頁岩	写真31	
41－1	Ⅴ－E区東	2層	不定型石器・GC－25		57.0	42.0	16.0	30.1	珪質頁岩	〃	
41－2	Ⅳ－ヲ区	2層	不定型石器・GC－27		45.0	21.0	5.0	5.6	珪質頁岩	〃	
41－3	Ⅲ－チ区	2層	不定型石器・E－8		77.0	34.0	14.0	41.1	珪質頁岩	〃	
41－4	Ⅲ－D区	2層下	不定型石器・F－2		53.0	22.0	6.0	9.0	珪質頁岩	〃	
41－5	Ⅴ－E区	2層下	不定型石器・GC－12		58.0	28.0	7.0	16.2	珪質頁岩	〃	
41－6	Ⅴ－E区東	2層	不定型石器・GB－6		60.0	36.0	16.0	30.7	珪質頁岩	〃	
41－7		表採	不定型石器・GC－18		39.0	44.0	9.0	17.7		写真31	1987年調査出土
42－1	Ⅴ－カ区	2～3層上	不定型石器・GC－37		78.0	37.0	13.0	42.5	珪質頁岩	写真32	
42－2		表採	不定型石器・GB－15		48.0	48.0	9.0	23.4		〃	1987年調査出土
42－3	Ⅲ－D区	2層	不定型石器・GC－20		51.0	62.0	13.0	43.1		〃	
42－4	Ⅴ－ワ区	2層	不定型石器・GC－10		49.0	55.0	6.0	21.7		〃	
43－1	Ⅳ区		不定型石器・GB－1		47.0	40.0	19.0	31.5		〃	
43－2	Ⅲ－ヘ区	4層	不定型石器・GC－19		37.0	48.0	11.0	20.6		〃	
43－3	Ⅲ－ヲ区	2層	不定型石器・GC－35		49.0	50.0	7.0	21.7		〃	
43－4	Ⅲ－ト区	3層下	不定型石器・GE－12		48.0	51.0	7.0	20.3	珪質頁岩	〃	
43－5	Ⅴ－E区東	2層上	不定型石器・GE－7		50.0	38.0	10.0	21.7	珪質頁岩	写真32	
44－1	Ⅴ－ワ区	2層	不定型石器・GE－10		64.0	40.0	12.0	28.1	珪質頁岩	写真33	
44－2	Ⅳ－F区	2層	不定型石器・GD－3		75.0	71.0	16.0	73.3		〃	
44－3	Ⅳ－ヲ区	2層	石核－2		72.0	42.0	33.0	85.9	珪質頁岩	〃	
45－1		表採	石核－1		90.0	53.0	45.0	219.6	珪質頁岩	写真33	

第７表　石製品・磨製石斧観察表

図版番号	地　区	層　位	器種・登録番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	写真・図版番号	備　考
46－1	Ⅴ区－南壁	表土	石製品	97	30	9	46.1		写真38	
46－2	Ⅲ－D区	2層	石製品	52	25	89	16.9		〃	欠損品
46－3	Ⅲ区	2層	石製品	32	39	8	17.5		〃	欠損品
46－4	Ⅴ－E区	2層下	石斧	19	31	7	6.9		〃	欠損品
46－5	Ⅴ－E区	2層下	石斧	19	11	9	4.4		〃	欠損品
46－6	Ⅳ－F区	2層	石斧	34	38	5	10.2		〃	欠損品
46－7	Ⅴ－E区西側	2層	石斧	30	18	2	1.8		〃	欠損品
46－8	Ⅳ－ヌ区	2層	石斧	32	30	5	7.4		〃	欠損品
46－9	Ⅳ－ヌ区	2層	石斧	32	31	3	4.0		写真38	欠損品
47－1		表採	磨製石斧	112	65	30	380		写真34	1987年調査出土
47－2	Ⅴ区	1ｂ層	磨製石斧	127	53	32	330		〃	刃部欠損
47－3	Ⅲ－リ区	2層下	磨製石斧	70	70	31	260		〃	基部欠損
47－4	Ⅲ－D区	2層下	磨製石斧	89	53	27	200		〃	刃部欠損
47－5	Ⅴ－E区	2層下	磨製石斧	84	46	33	180		〃	刃部欠損
47－6	Ⅲ－ホ区	2層	磨製石斧	55	48	33	120		〃	刃部欠損
47－7	Ⅴ－リ区	2層	石製品	106	73	24	350		〃	
47－8	Ⅳ－F区	2層	石製品	122	48	34	290		写真34	欠損品

第８表　礫石器観察表

図版番号	地　区	層　位	器種・登録番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真・図版番号
48－１	Ⅳ－Ｆ区	２層下	磨石ａ類・Ａ－１	84	76	76	740		磨－１面	写真34
48－２	Ⅲ－ト区	３・４層	磨石ａ類・Ａ－４	112	74	41	640		磨－１面	写真34
48－３	Ⅲ－ホ区	２層	磨凹石ａ類・Ａ－５	110	94	37	550		磨・凹－片面・同一面	写真35
48－４	Ⅳ－Ｆ区	２層	磨石ａ類・Ａ－３	90	68	56	550		磨－１面	〃
48－５	Ⅴ－ヨ区	１ｂ層	磨石ａ類・Ａ－６	117	78	46	690		磨－１面	〃
48－６	Ⅳ－Ｆ区	２層	磨石ａ類・Ａ－23	81	75	54	470		磨－１面	〃
49－１	Ⅲ－ト区	３・４層	磨石ｃ類・Ａ－22	141	103	53	1260		磨－１側面	〃
49－２	Ⅲ－ハ区	２層	磨石ｅ類・Ａ－16	120	74	35	520		磨－２側面	〃
49－３	表採		磨石ｄ類・Ａ－12	123	72	40	550		磨－１側面	〃
49－４	Ⅲ区		磨石ｄ類・Ａ－24	124	58	76	750		磨－１側面	写真35
49－５	Ⅴ区	１ｂ層	磨石ｄ類・Ａ－13	75	71	57	430		磨－１側面	写真36
49－６	Ⅱ－イ区	２層	磨石ｄ類・Ａ－17	107	78	37	500		磨－１側面	〃
50－１	Ⅲ－ト区	３・４層	磨石ｂ類・Ａ－14	101	87	35	490		磨－両面	〃
50－２	Ⅳ－チ区	２層	磨石ｂ類・Ａ－20	103	87	40	610		磨－両面	〃
50－３	Ⅴ－ワ区	２層下	磨石ｂ類・Ａ－19	87	76	30	340		磨－両面	〃
50－４	Ⅲ－Ｄ区	２層下	磨石ｂ類・Ａ－21	79	64	34	320		磨－両面	〃
50－５	Ⅳ－ヲ区	２層下	磨石ｂ類・Ａ－18	89	76	41	540		磨－両面	〃
51－１	Ⅴ区	１ｂ層下	磨石ｃ類・Ａ－７	71	72	34	270		磨－片面・１側面	〃
51－２	Ⅲ－リ区	２層	磨石ｇ類・Ａ－８	119	79	26	420		磨－両面・１側面	〃
51－３	表採		磨石ｇ類・Ａ－11	123	72	40	550		磨－両面・１側面	写真36
51－４	Ⅲ－チ区	２層	磨石ｂ類・Ａ－９	100	86	40	580		磨－両面・２側面	写真37
51－５	Ⅲ－Ｄ区	２層	磨石ｇ類・Ａ－15	80	95	28	340		磨－両面・１側面	〃
51－６	Ⅴ－ヨ区	２層	磨石ｂ類・Ａ－10	76	75	41	450		磨－両面・２側面	〃
52－１	表採		磨石ｆ類	146	67	39	700		磨－片面・２側面	〃
52－２	Ⅲ－チ区	２層	磨石ａ類・Ｄ－１	91	78	52	560		磨－１面	〃
52－３	Ⅳ区北壁	表土	磨凹石ｂ類・Ｂ－３	117	69	42	570		凹－片面・磨－１面	〃
52－４	Ⅲ－リ区	２層	凹石ａ類・Ｂ－１	106	101	59	840		凹－片面	〃
52－５	Ⅲ－チ区	２層	磨凹石ｂ類・Ｄ－３	50	68	32	160		凹－片面・磨－１面	〃
53－１	Ⅴ－ワ区	２層下	凹石ａ類・Ｂ－２	127	78	58	930		凹－片面	〃
53－２	表採		凹石ｂ類	81	53	46	220		凹－両面	写真37
53－３	Ⅲ－チ区	２層	凹石ｂ類・Ｂ－６	79	74	34	280		凹－両面	写真38
53－４	Ⅴ区	２層	凹石ｂ類・Ｄ－２	135	70	30	253		凹－両面	〃
53－５	Ⅴ－ヨ区	１ｂ層	凹石ｂ類・Ｂ－７	101	78	42	470		凹－両面	〃
53－６	Ⅲ－チ区	２層	凹石ｂ類・Ｂ－４	96	77	44	440		凹－両面	写真38

V　出土遺物についての考察と分析

1．縄文土器

今回の調査によって出土した土器は、縄文時代前期後半のものを中心としており、それぞれの文様の特徴などから第Ⅰ群～第Ⅶ群に大別され、さらにそれぞれのなかで文様施文上の特徴などから細別を行っている。

しかし出土した土器は、層位的に分離することなく混在しており、しかもその大部分が小破片ということで、全体の器形が明らかなものはほとんどない状況である。ここではその中で、出土点数も多く資料的にまとまりのみられる第Ⅲ群・第Ⅳ群土器を中心として、これまでの研究成果に基づいて編年的位置付けを述べることにする。

第Ⅲ群・第Ⅳ群土器の類似資料は、仙台市内ではこれまでほとんど出土していないが、県内では大木囲貝塚（七ケ浜町）、長者原遺跡（南方町）、糠塚貝塚（迫町）などで出土しており、第Ⅲ群土器については大木４式に、第Ⅳ群土器については大木５式に比定されるものとして捉えることができる。

興野義一は、「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅵ」（1967～1970）のなかで、大木１式～６式までの前期土器群を論じている。そのなかで大木４式と５式を分けるものとして、大木４式にみられる細い粘土紐による小波状文・格子状文・梯子状文が、大木５式では、粘土紐をちぎって折り重ねたような鋸歯状の連続山形文に変わり、口縁部に分厚い鋸歯状装飾帯がつくことをあげている。その後長者原遺跡出土資料から「大木5b 式の提唱」（1970）を発表し、大木5a 式と5b 式を細分する要素として以下のような特徴をあげている。

(1)鋸歯状装飾帯の口周への拡張と窓の出現につづく装飾帯の喪失。

(2)萎縮する貼付文。山形貼付文の退化と直線紐の付加と刻線紐の発生。

(3)ボタン状貼付の発生。

(4)貼付文から沈線文への置換。刻線紐の残存と交互波状沈線文、細い山形沈線文。

(5)文様帯の簡略化と帯外拡散。

そこでこれまでの調査例から今回の出土遺物についてみると、第Ⅲ群土器の1a 類とした土器のうち、第12図－１～４のように巾広の粘土紐による文様がつくものは、大木４式の特徴のひとつとされている。おなじく２類とした土器群のうち、第11図－１・４、第17図－４～６・18のように、口縁端部または口唇部に小波状を呈する細い粘土紐貼付文がつく土器群は、大木囲貝塚昭和52年度環境整備調査（八巻 1979）のＣＳ77地区ａ区・ｂ区8d 上層の報告で「細い粘土紐による山道文（高橋詠而 1977）」としているものと同じもので、やはり大木４式としている。

第Ⅳ群土器についてみると、１類とした土器群は、折り重ねられた鋸歯状連続山形文と格子

状文・梯子状文の組合せによって幾何学文状となり、口縁部には大きな鋸歯状装飾帯がつく典型的な大木５式といえる土器群であり、これは大木5a 式と考えられる。そのなかでｅ類とした刺突入りの環状貼付文は、大木5a 式に特徴のある環状突起と思われ、波状口縁端部に口端から飛び出すようにつくことが多い。ｆ類とした輪積みの痕跡を残した円筒形の無文土器は、糠塚貝塚に同様の土器があり同じく大木5a 式とされている（興野「糠塚貝塚について」）。

２類とした土器群は、山形沈線文・沈線区画直線文と円文・弧状文などの曲線文が組みあわされて施文され、鋸歯状装飾帯は退化小型化して全周につく土器群で、大木5a 式～5b 式の中間の様相を示すものと考えられる。鋸歯状装飾帯の鋸歯はその上部または下部を喪失して次第に名目的なものになり、口唇部に刻目がつけられただけのものや、上下の鋸歯を完全に喪失して口縁部を肥厚させただけのものになっていく。このうち第14図－12は、口縁端部の側面を内外面から指頭または太い棒状の工具によって押圧し前後波状口縁としたもので、花弁状口縁ともよばれるがこれも鋸歯状装飾帯からの転化のひとつと考えられる。また第13図９・11にみられる口唇部に太い粘土紐によって波状を呈する山形文がつけられているものは、鋸歯状装飾帯が退化したものと考えられるが、第Ⅲ群２類とした大木４式のなかで、口縁端部または口唇部に小波状を呈する細い粘土紐貼付文がつく土器と同じ表現方法のものとも考えられる。

３類とした土器群は、口縁部につけられていた鋸歯状装飾帯の喪失後の土器群で、大木5b 式と考えられる。２類とした鋸歯状装飾帯の退化小型化はこの段階ではまったくみられなくなり、口縁部の肥厚も行われなくなっている。鋸歯状装飾帯が全周に広がるなかで生じた窓が装飾帯の喪失後も残存し、3B 類とした口縁部に山形突起かコブ状の突起をもつ土器群となっていくが、山形突起のなかに開けられた窓はやがて退化して盲孔となって痕跡化していく。

第Ⅵ群土器のうち１類とした土器群は、大木5b 式～６式の中間様相をしめすものと考えられる。このなかで第10図－25、第18図－18、第19図－18にみられる竹管状工具の連続刺突による列点入りの隆線は、大木5b 式にみられた刻線紐の転じたものと考えられる。

２．石器・石製品

出土した石器の総点数は615点で、このうち剝片石器555点・礫石器36点・磨製石斧10点・石製品11点・玦状耳飾３点となっている。

石器自体で所属する時期を推定するためには、形態がよほど特徴的なものなどに限られてくる。とくに今回の調査では遺構が検出されず、遺物はほとんど包含層からの出土であった。その包含層も全体を完全に発掘したわけではないが、所属する時期については、共伴する土器によって縄文時代前期後葉と考えられる。当該期の宮城県内での調査例は少なく、仙台市内においてもまとまった資料としては初めてのものといえることから、当該期における石器のあり方について考えるうえでの良好な資料とおもわれる。

なお、用いられた石材についてはそのほとんどが珪質頁岩で、他に流紋岩、チャート、珪化凝灰岩、石英安山岩などがある。

(1)剥片石器の分析

剥片石器の総数は555点であり、器種組成の比率は、石鏃321点（58%）・尖頭器28点（5%）、石匙26点（5%）・石錐31点（6%）・石篦25点（5%）・スクレイパー10点（2%）・不定形石器114点（21%）となっている。

数量的には石鏃の出土量が全体の6割をしめ、ついで不定形石器が2割となっている。今回は他の遺跡との比較検討は行っていないが、一般的にいわれる縄文時代前期後葉から中期にかけての石器の器種組成の特徴として、素材をあまりかえずに二次加工を施す不定形石器の増加と、定形石器の減少があげられている。今回の器種組成が当該期の様相を反映しているのかは明確ではないが、少なくても器種組成にしめる石鏃の割合が非常に高いことと、それ以外の定形石器や礫石器の数が少ないとみることはできる。

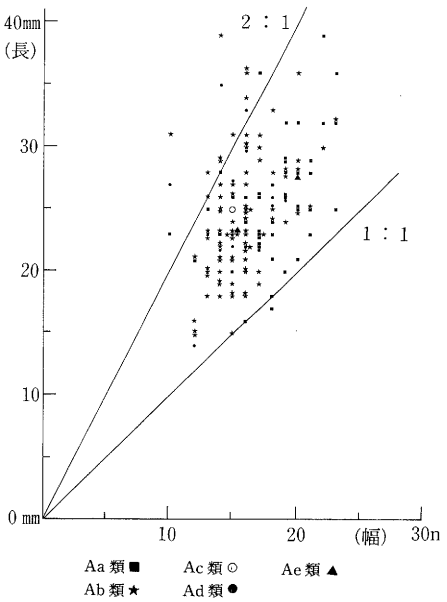
①石　鏃

［類型組成］第54図・第55図参照

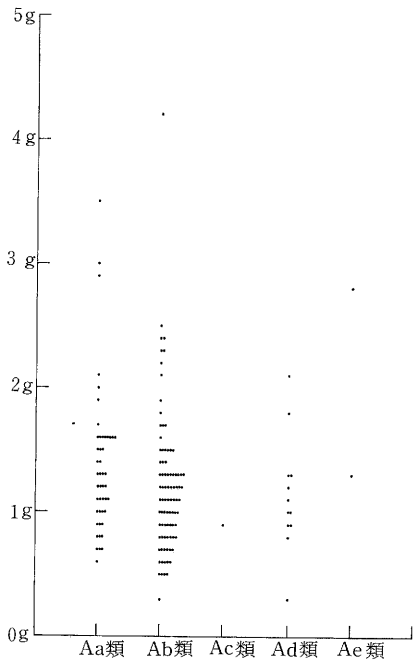
総数321点のうち、Aa類・Ab類の凹基無茎鏃があわせて244点（76%）をしめている。石材としては、ほとんどが珪質頁岩を使用している。

［長さと幅］長さ20～30㎜、幅13～20㎜を中心に分布する。最小のもので長さ14㎜、最大は長さ39㎜を計る。長さと幅の比率(以下長幅比という。)は、1：1～2：1の範囲にほぼ含まれる。

［重さ］0.7～1.6gを中心に分布している。最軽量のものは0.3gであるが、もっとも重いものは4.2gと非常に重い。

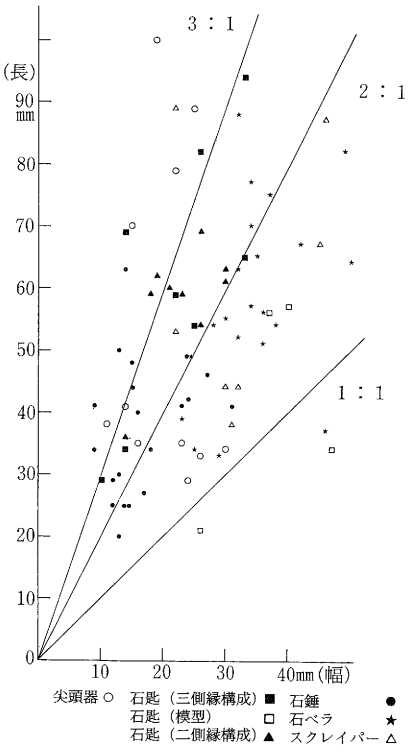


第54図　石鏃長幅分布図



第55図　石鏃重量分布図

［破損状況］石鏃の破損品は200点で総数の60%にあたる。このうちの189点について破損状況



第56図　剝片石器長幅分布図

を、尖端部側が欠損したもの(Ⅰ)、基部側が欠損したもの(Ⅱ)、側縁が欠損したもの(Ⅲ)、尖端部・基部が欠損したもの(Ⅳ)、基部・側縁部が欠損したもの(Ⅴ)とに分けてみた場合、(Ⅰ)は63点（33%)、(Ⅱ)は74点（39%)、(Ⅲ)は14点（7%)、(Ⅳ)は27点（14%)、(Ⅴ)は11点（6%）となる。

類型ごとの欠損率でみると、Aa類63%・Ab類56%・Ac類57%・Ad類48%・Ae類0%と高い破損率を示している。

②尖頭器

［類型組成］第56図・第57図参照

総数28点のうち、石材としては、ほとんどが珪質頁岩を使用している。

［長さと幅］完形品10点を対象とした。長さ30～40㎜、幅10～30㎜の範囲に納まるグループと、長さ70～100㎜、幅15～25㎜の範囲に納まるグループに大別される。最小のもので長さ29㎜、最大は長さ100㎜を計る。長幅比は、前者が1：1～3：1の範囲にほぼ含まれるのに対して、後者は3：1以上と縦長形を示している。

［重さ］ほとんどが10g以下に分布している。最軽量のものは2.6gであるが、もっとも重いものは24.8gである。

［破損状況］尖頭器の破損品は18点で総数の64%にあたる。このうち16点について破損状況を、尖端部側が欠損したもの(Ⅰ)、基部側が欠損したもの(Ⅱ)、側縁が欠損したもの(Ⅲ)、尖端部・基部が欠損したもの(Ⅳ)、尖端部・側縁部が欠損したもの(Ⅴ)とに分けてみた場合、(Ⅰ)は9点（56%)、(Ⅱ)は3点（18%)、(Ⅲ)は2点（13%)、(Ⅳ)は1点（6%)、(Ⅴ)は1点（6%）となる。

③石　匙

［類型組成］第56図・第57図参照

総数26点のうち、石材としては、ほとんどが珪質頁岩を使用している。

［長さと幅］完形品21点を対象とした。最小のもので長さ21㎜、最大は長さ94㎜を計る。長幅比は、1・3類が2：1～3：1の範囲にほぼ含まれるのにたいして、2類は1：1以下の横長形を示している。

［重さ］ほとんどが20g以下に分布している。最軽量のものは1.7gであるが、最も重いものは

33.3g である。

［破損状況］石匙の破損品は５点で総数の19％にあたる。

④石　錐

［類型組成］第56図・第57図参照

総数31点のうち、石材としては、ほとんどが珪質頁岩を使用している。

［長さと幅］完形品21点を対象とした。最小のもので長さ20㎜、最大は長さ63㎜を計る。長幅比は１：１～３：１の範囲にほぼ含まれる。

［重さ］ほとんどが10g 以下に分布している。最軽量のものは2.0g であるが、もっとも重いもので11.6g である。

［破損状況］石錐の破損品は15点で総数の48％にあたる。これらについて破損状況をみると、尖端部（錐部）側が欠損したもの（Ⅰ）、つまみ部（基部）側が欠損したもの（Ⅱ）、尖端部（錐部）・つまみ部（基部）が欠損したもの（Ⅲ）とに分けてみた場合、（Ⅰ）は６点（40％）、（Ⅱ）は７点（47％）、（Ⅲ）は２点（13％）となる。

⑤石　篦

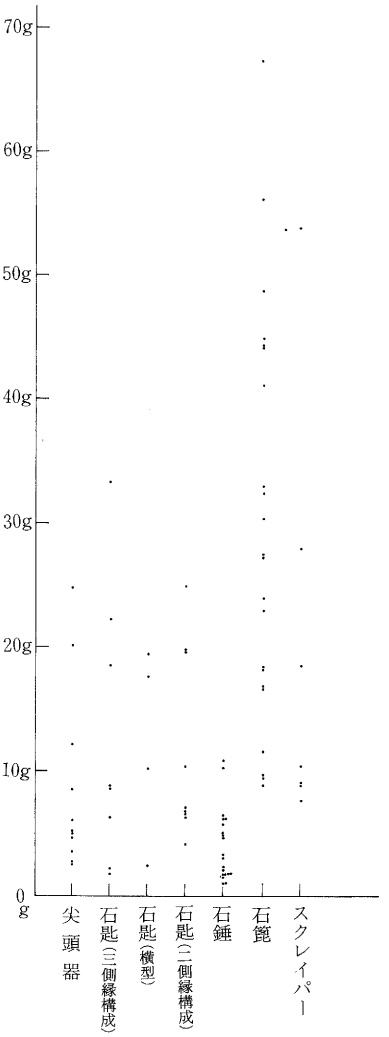
［類型組成］第56図・第57図参照

総数25点のうち、石材としては、珪質頁岩や流紋岩・珪化凝灰岩を使用している。

［長さと幅］完形品22点を対象とした。最小のもので長さ33㎜、最大は長さ88㎜を計る。長幅比は、１：１～３：１の範囲にほぼ含まれる。

［重さ］最軽量のものは8.8g であるが、もっとも重いものは67.2g である。

［破損状況］石篦の破損品は３点で総数の12％にあたる。



第57図　剥片石器重量分布図

⑥スクレイパー

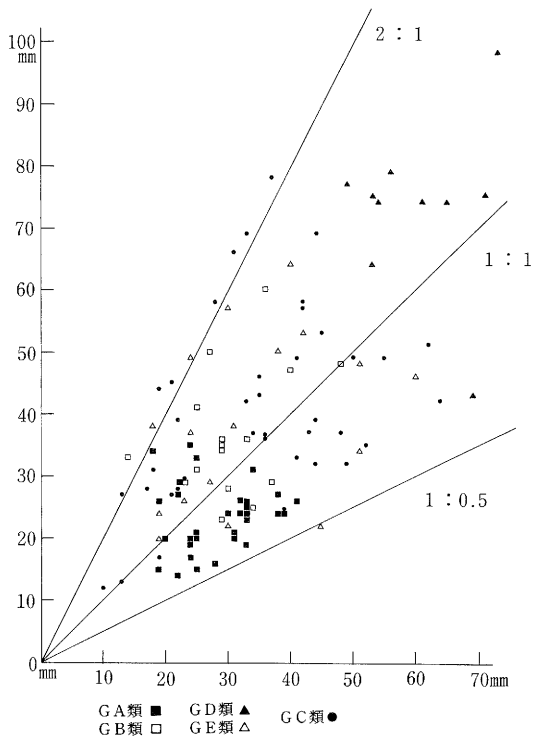
［類型組成］第56図・第57図参照

総数10点のうち、石材としては、珪質頁岩や流紋岩・珪化凝灰岩を使用している。

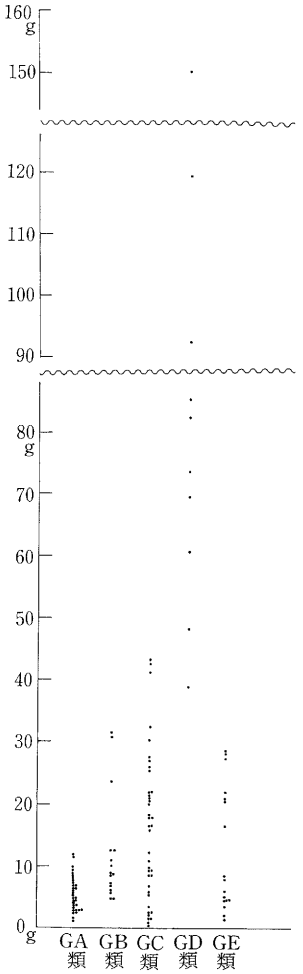
［長さと幅］完形品８点を対象とした。最小のもので長さ38㎜、最大は長さ89㎜を計る。長幅比は、１：１～３：１の範囲にほぼ含まれる。

［重さ］最軽量のものは7.6g であるが、もっとも重いものは53.7g である。

［破損状況］石篦の破損品は２点で総数の20％にあたる。



第58図　不定形石器長幅分布図



第59図　不定形石器重量分布図

⑦不定形石器

総数で114点出土しており、出土した石器の中で21%をしめている。321点出土している石鏃とあわせれば今回出土した石器の80%をしめることになる。

前期後葉から中期後葉の石器群の特徴として、不定形石器の増加、なかでも素材の形態をあまり変化させずに部分的な二次加工によって刃部を作り出す石器の増加と、定形石器の減少がいわれている。

石材についてみても、定形石器の石材がほとんど珪質頁岩であるのにたいして、不定形石器には流紋岩や珪化凝灰岩といった珪質頁岩以外の石が比較的多く使用されている。

不定形石器について類型的にみると、二次加工が全周におよび素材の形態を大きく変化させ、刃部以外にも一定の形態的なまとまりを指向するものが48点、素材の形態をあまり変化させずに、部分的な二次加工によって刃部を作り出すものが49点とほぼ同数出土している。

全体の形態をあまり変化させないものは、製作に要する時間も短く、また使用される時間も短かったと考えられる。当時希少な石材である珪質頁岩が、何度も再生され複数の用途に用いられたと思われるのに対して、その場の目的に応じて作られるものには、容易に入手できる石

材を用いたと考えられる。

［類型組成］第58図・第59図参照

各類型の点数は、GA類32点（28%）・GB類16点（14%）・GC類39点（34%）・GD類10点（９%）・GE類17点（15%）となっている。

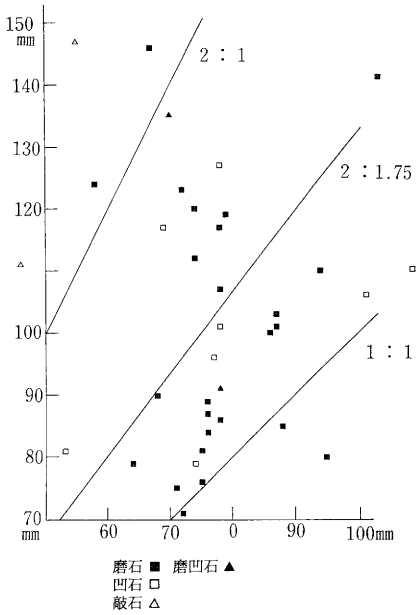
［長さと幅］GA類については、長さ・幅ともに20～40㎜の範囲内におさまるものがほとんどで、長幅比は、１：0.5～１：１の範囲に含まれる。GB類については、最小で23×29㎜で、最大で60×36㎜を計る。長幅比は、１：１～２：１の範囲内にほぼ含まれる。GC類については、最小で12×10㎜、最大で78×37㎜を計る。長幅比については特に傾向はみられず、１：0.5～２：１の広い範囲内に含まれる。GD類については、最小で43×69㎜、最大で97×73㎜を計る。長幅比は、１：１～２：１の範囲内にほぼ含まれる。GE類については、最小で20×21㎜、最大で64×40㎜を計る。長幅比については特に傾向はみられず、１：0.5～２：１の広い範囲内に含まれる。

［重さ］GA類については、全ての石器が10g以下となっている。GB類については、10g前後と20～30gの範囲内の２グループに別れるようである。GC類については40g以下におさまるが、10g以下と20g前後に集中する傾向がみられる。GD類については40g以上となり、もっとも重いものは150gを計る。GE類については30g以下におさまるが、10g以下と20～30g前後に集中する傾向がみられる。

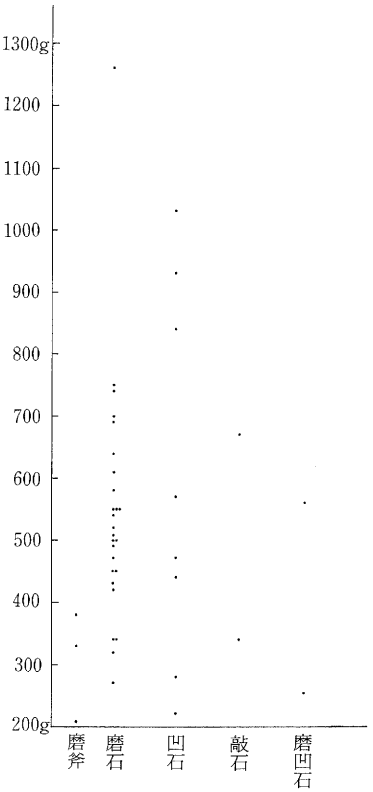
⑵礫石器の分析　第60図・第61図参照

礫石器の総数は36点であり、器種組成の比率は、磨石23点（64%）、凹石８点（22%）、磨凹石４点（11%）、敲石２点（５%）となっている。礫石器は出土した石器のなかで６%をしめるだけで極端に少なくなっている。

磨面・凹み・敲打痕などの使用痕でみると、磨石のように単独で構成されるのがほとんどで、複数の使用痕がみられるものは少ない。石材についてはほとんどが石英安山岩をもちいてい



第60図　礫石器長幅分布図



第61図　礫石器重量分布図

る。

大きさについて長幅分布図でみると、長さについては70㎜～90㎜と100㎜～120㎜に集中がみられ、幅については70㎜～90㎜に集中しており、長幅比１：１～２：１の範囲におさまっている。重さについて重量分布図でみると、400～600g に集中している。形態的には、ほとんどのものが円形から長楕円形を呈しており、明確な加工痕はなく自然礫をそのまま使用している。

①磨　石

総数で24点出土しており、そのうち欠損品は８点である。これらについて、形態・大きさ・重量の観察と計測を行った。

［形態］平面形・断面形ともに楕円形を基本としている。

［大きさ］長軸と短軸の長さの関係についてみると、最大のものは最大長軸で146㎜、最大短軸で103㎜を計り、最小のものは最大長軸で71㎜、最大短軸で64㎜を計る。

長・短比についてみると、長軸・短軸ともに90㎜以下の小型のものと、長軸で100～120㎜、短軸で70～90㎜の範囲に入る大型のものに別れるようである。

［重量］重量分布からみると、最大1260g、最小270g で、400～600g の範囲に入るものが多い。

第47図－４は断面形が三角形の礫を素材とし、その稜線部分に磨痕が観察されるもので、いわゆる「特殊磨石」に類似している（八木 1977）。特殊磨石は中部地方においては押型文土器と非常に強く共伴すること、関東地方では撚糸文・沈線文土器に伴い、北海道では縄文時代早期に存在することが八木によって指摘されている。東北においても前期から中期にかけて岩手県を中心として出土している。用途に関しては、獣皮なめし工具節（中村 1965）。落葉広葉樹林帯に産する植物資源の処理用具節（八木 1977）などがある。

②凹　石

総数で８点出土しており、そのうち欠損品は２点である。これらについて、形態・大きさ・重量の観察と計測を行った。

［形態］平面形・断面形ともに楕円形を基本としているが、厚さをみると磨石よりも比較的薄い石を用いている。

［大きさ］長軸と短軸の長さの関係についてみると、最大のものは最大長軸で127㎜、最大短軸で114㎜を計り、最小のものは最大長軸で79㎜、最大短軸で53㎜を計る。

長・短比についてみると、磨石にみられるような大きさの集中などはなかった。

［重量］重量分布からみると、最大1030g、最小220g で、大きさと同様に重さについても集中等はみられないが、他の礫石器類に比べて重いものが多い傾向がみられる。

③磨凹石

総数で４点出土しており、そのうち欠損品は１点である。これらについて、形態・大きさ・

重量の観察と計画を行った。

［形態］平面形・断面形ともに楕円形を基本としている。

［大きさ］長軸と短軸の長さの関係についてみると、最大のものは最大長軸で135㎜、最大短軸で70㎜を計り、最小のものは最大長軸で91㎜、最大短軸で78㎜を計る。長・短比についてみてみると、凹石と同様磨石にみられるような大きさの集中などはなかった。

［重量］重量分布からみると、最大560g、最小256g で、大きさと同様に重さについても集中等はみられなかった。

④敲　石

総数で２点出土しており、すべて完形品である。これらについて、形態・大きさ・重量の観察と計測を行った。

［形態］平面形・断面形ともに楕円形を基本としている。

［大きさ］長軸と短軸の長さの関係についてみると、長軸147㎜×短軸55㎜と、長軸111㎜×短軸46㎜を計る。長・短比についてみてみると、いずれも２：１以上と縦長の形態を示す。

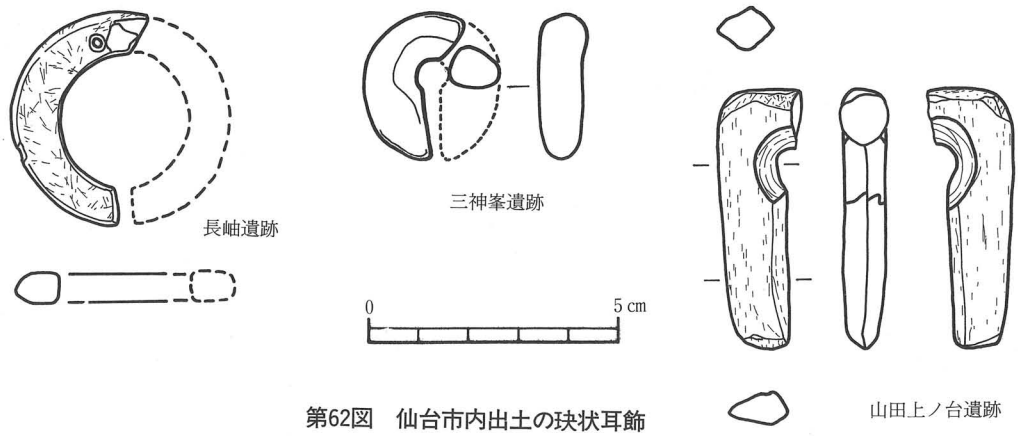
［重量］重量分布からみると、670g と340g で、磨石などと同様に重いものはなかった。

⑶石製品の分析

① 玦状耳飾

仙台市内では三神峯遺跡・長岫遺跡・山田上ノ台遺跡についで４例目の出土となったが、県内では他に大木囲貝塚・小梁川遺跡などおよそ７遺跡から出土している　所属する時期について、第62図の三神峯遺跡から出土したものは、大木１式の土器に共伴したもので、長岫遺跡のものについても縄文時代前期のものと報告されている。また山田上ノ台遺跡のものは、縄文時代中期初頭のものと報告されている。今回出土した３点については大木４・５式の土器に共伴していることから前期後葉のものと考える。

現在の玦状耳飾研究は、加工のための工程の分析を主としており、加工時における切･切削･



第62図　仙台市内出土の玦状耳飾

切除・研磨の手法のあり方は形態決定に関わるものとされている。第63図は樋口清之による型式分類で、形態の変化によってA～F類までの6型式に分類している。藤田富士夫はこの分類を使って、次のように現在の研究成果での形態変遷による編年を行っている（藤田 1992）。

C（円形）早期～前期後半――B（楕円形）前期後半――A（矩形）前期末～中期初頭――D（正方形）中期～後期
└――E（三角形）――――F（石包丁形）

市内出土のものについてこれにあてはめると、長岫遺跡・三神峯遺跡出土のものはC型に、北原街道B遺跡出土のものはB型に、山田上ノ台遺跡出土のものはA型に近い形態をもっており、この形態変遷に近い内容をもっている。

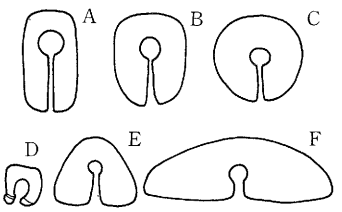
また、藤田の提唱している所属時期を推定するための形式率は、「玦状耳飾の形態の特徴（形式率）は、孔側（切れ目方向と直角に結ぶ側辺部）の長さと切れ目の長さの比率による。」という仮説を基にしている。その形式率は、次のようにして求める。

形式率＝切れ目の長さ÷孔側の側辺の幅

藤田によれば、形式率0.5では早期末葉や前期初頭の玦状耳飾の出現期にあたり、形式率3以上は前期末葉や中期初頭に属し玦状耳飾の衰退期にあたるという。

この形式率から仙台市内出土のものをみてみると、北原街道B遺跡の形式率は、第26図－1で1.31、2で1.4となる。そして長岫遺跡のものは0.77、三神峯遺跡のものは1.2、山田上ノ台遺跡のものは2.25となる。こうしてみると形式率からも樋口分類による形態変遷と同様の内容を示しているといえる。

玦状耳飾の変遷については断面の特徴も時期区分の目安となっており、前期初頭のものは肉厚で断面形が円形に近く、直径も3cm前後の小型のものが多いが、前期後半になると肉薄なものになり、中期以降のものは平面形が円形ではなく下半部が長くなってくるといわれている。北原街道B遺跡のものは形態的にみてもその前期後葉の形態をもっているといえる。



第63図　玦状耳飾型式分類
（樋口清之による）

Ⅵ　ま　と　め

1．北原街道Ｂ遺跡は、仙台市青葉区上愛子字北原道上に所在する。遺跡は広瀬川の形成した河岸段丘上に位置している。

2．今回の調査は宅地造成事業の実施に伴って、1992年５月11日～７月28日まで実施した。調査面積は、約2,100㎡である。

3．調査の結果、竪穴住居や土坑といった遺構は確認されなかったが、遺物包含層を検出した。また遺物は、縄文時代前期後半から中期中葉・晩期のものが出土しているが、縄文時代前期後半のものを主体としている。

4．縄文時代の遺物としては、土器・土偶・土製品・石器・石製品などがある。

(1)土器は、大木４式～５ｂ式期を中心としている。

(2)石製品として、仙台市内では４例目となる玦状耳飾３点が出土している。

(3)石器は、総出土点数615点のうち、約半数の321点を石鏃がしめているのに対して、磨石・凹石といった礫石器の出土が少ない傾向が認められた。

引用・参考文献

1967～70　興野義一　「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅵ」考古学ジャーナル

1970　興野義一　「大木５ｂ式土器の提唱」古代文化

伊東信雄　「長根貝塚」

興野義一　「糖塚貝塚」

加藤　孝　「宮城県登米郡新田村糖塚貝塚について」

1981　興野義一　「糖塚貝塚について」　一迫町史

1981　丹羽　茂　「大木式土器」　縄文文化の研究　４縄文土器　雄山閣

1983　藤田富士夫　「玦状耳飾り」　縄文文化の研究　７道具と技術　雄山閣

1984　興野義一　「大木式土器について」　宮城の研究Ⅰ考古学編　清文堂出版

1984　小笠原好彦　「縄文時代前期・中期の土偶」宮城の研究Ⅰ考古学編　清文堂出版

1992　藤田富士夫　「玉とヒスイ―環日本海の交流を巡って―」　同朋舎出版

1992　吉岡・工藤　「仙台市野川遺跡の調査」考古学ジャーナル 349

1994　「東北・北海道の土偶Ⅰ」　土偶シンポジウム２秋田大会

1973　志間・宮城町教委　「宮城町想海塚発掘報告」宮城町文化財調査報告書第１集

1980　岩淵・佐藤　「三神峯遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第25集

1981　宮城町教育委員会　「御殿館跡」宮城町文化財調査報告書第３集

1982　狩野・真山　「農学寮跡遺跡」宮城県文化財調査報告書第86集

1982　佐藤・斉野　「北前遺跡」仙台市文化財調査報告書第36集

1983　宮城町教育委員会　「蒲沢山遺跡」宮城町文化財調査報告書第４集

1984　斉藤　「一本杉遺跡」宮城県文化財調査報告書第104集
1984　会津高田町教育委員会　「胄宮西遺跡」会津高田町文化財調査報告書第５集
1985　熊谷　「長岫遺跡」泉市文化財調査報告書第４集
1986　宮城町教育委員会　「宮城町の文化財」宮城町文化財調査報告書第５集
1986　阿部・今野　「宮城町観音堂遺跡」宮城県文化財調査報告書第118集
1986　村田・小川　「今熊野遺跡Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第114集
1986　新庄屋・相原他　「小梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第117集
1987　斉藤・藤沼　「宮城町西館跡」宮城県文化財調査報告書第123集
1987　八巻　「大木囲貝塚」七ケ浜町文化財調査報告書第４集
1987　庄子　「六田遺跡」利府町文化財調査報告書第４集
1987　主浜　「山田上ノ台遺跡」仙台市文化財調査報告書第100集
1988　工藤　「谷津Ａ・Ｂ遺跡／芦見遺跡」仙台市文化財調査報告書第120集
1988　渋谷・黒坂　「吹浦遺跡第３・４次調査」山形県文化財調査報告書第120集

写　真　図　版

写真 1
遺跡遠景・空撮
（西方上空から）

写真 2
遺跡遠景・空撮
（北方上空から）

写真 3
調査区全景・空撮

写真 4
調査前状況
（東方から）

写真 5
調査区遠景・III区
（北方から）

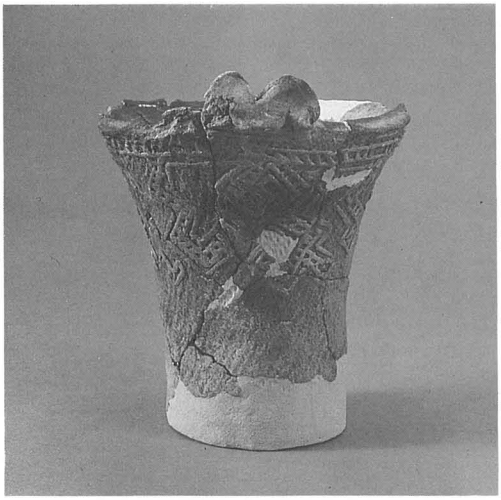


写真６　復元土器　第５図

写真７　復元土器　第５図

写真８　復元土器　第５図

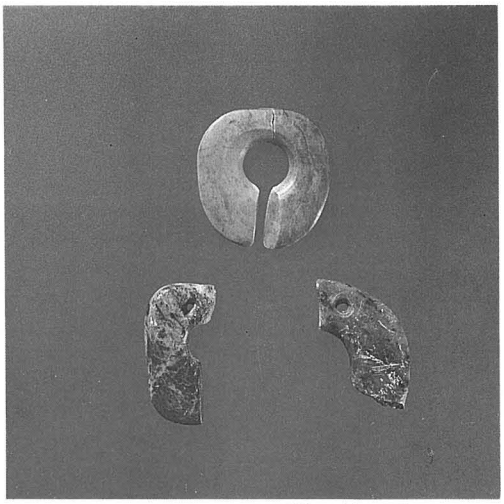


写真９　玦状耳飾　第26図

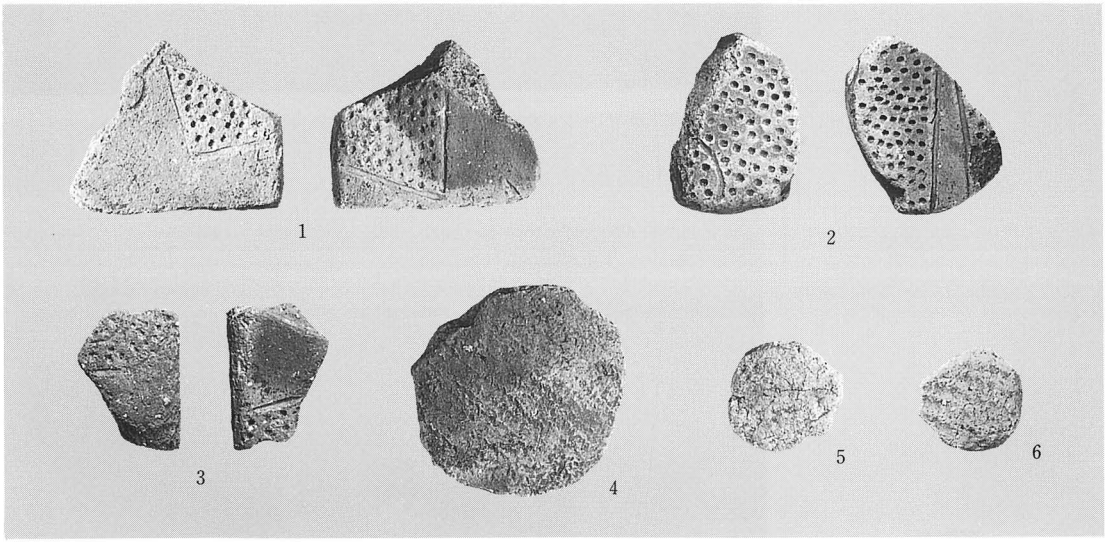
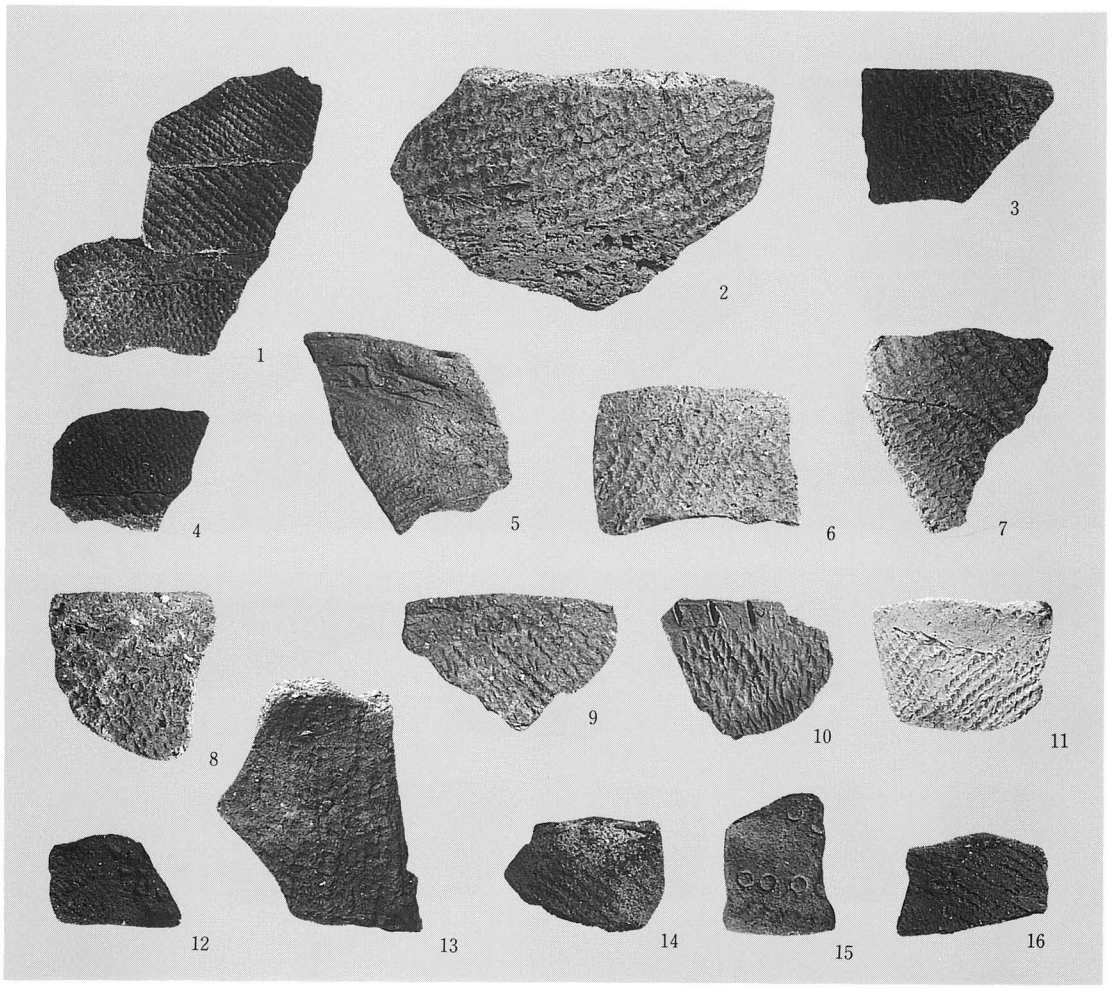
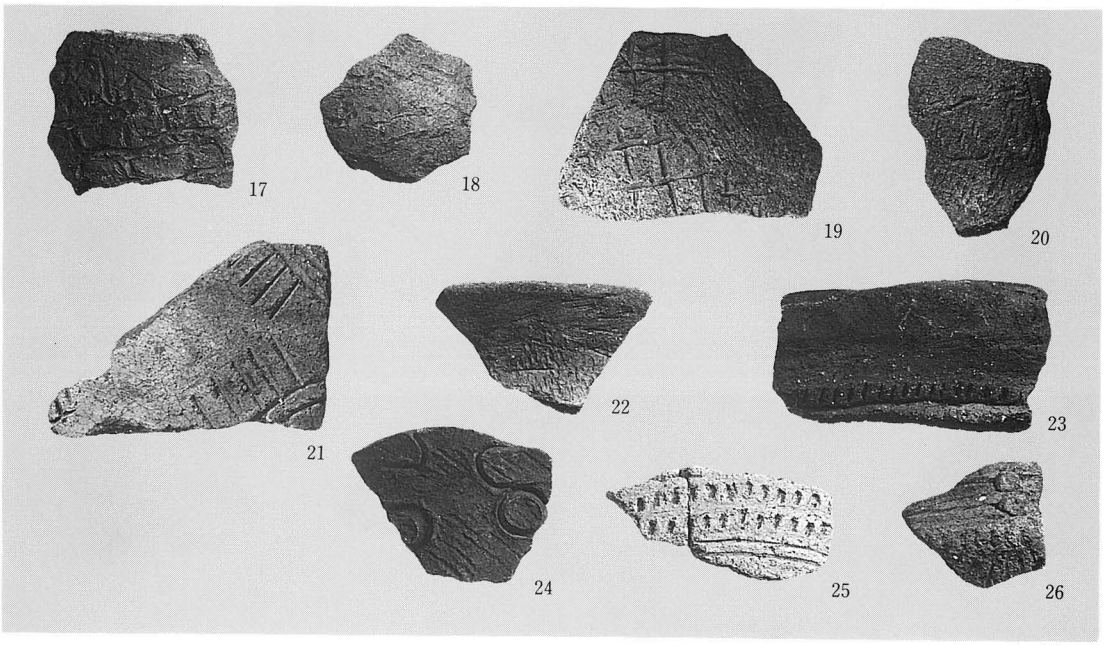


写真10　土偶・円盤状土製品　第24・第25図

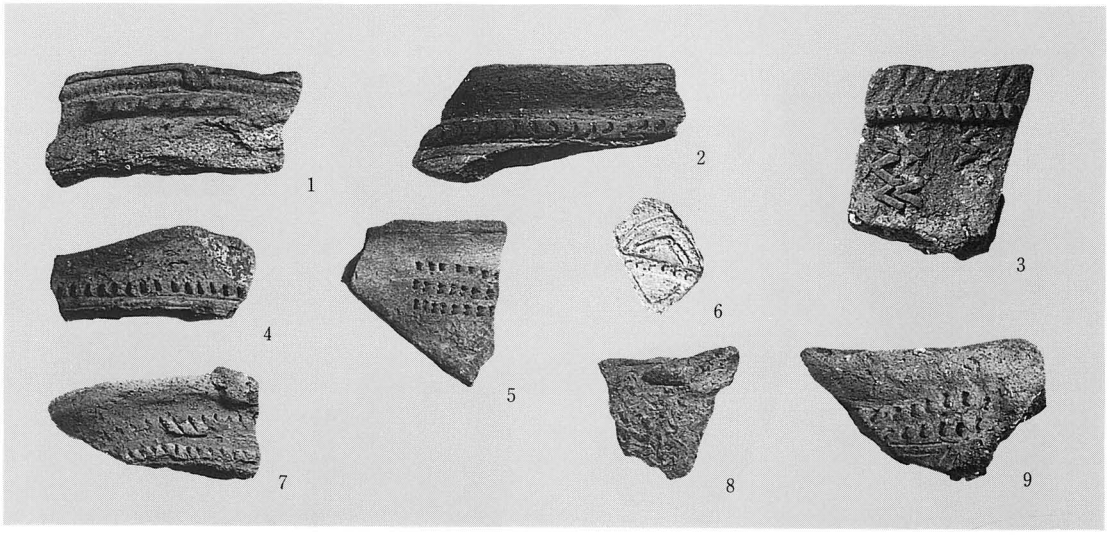


第6図

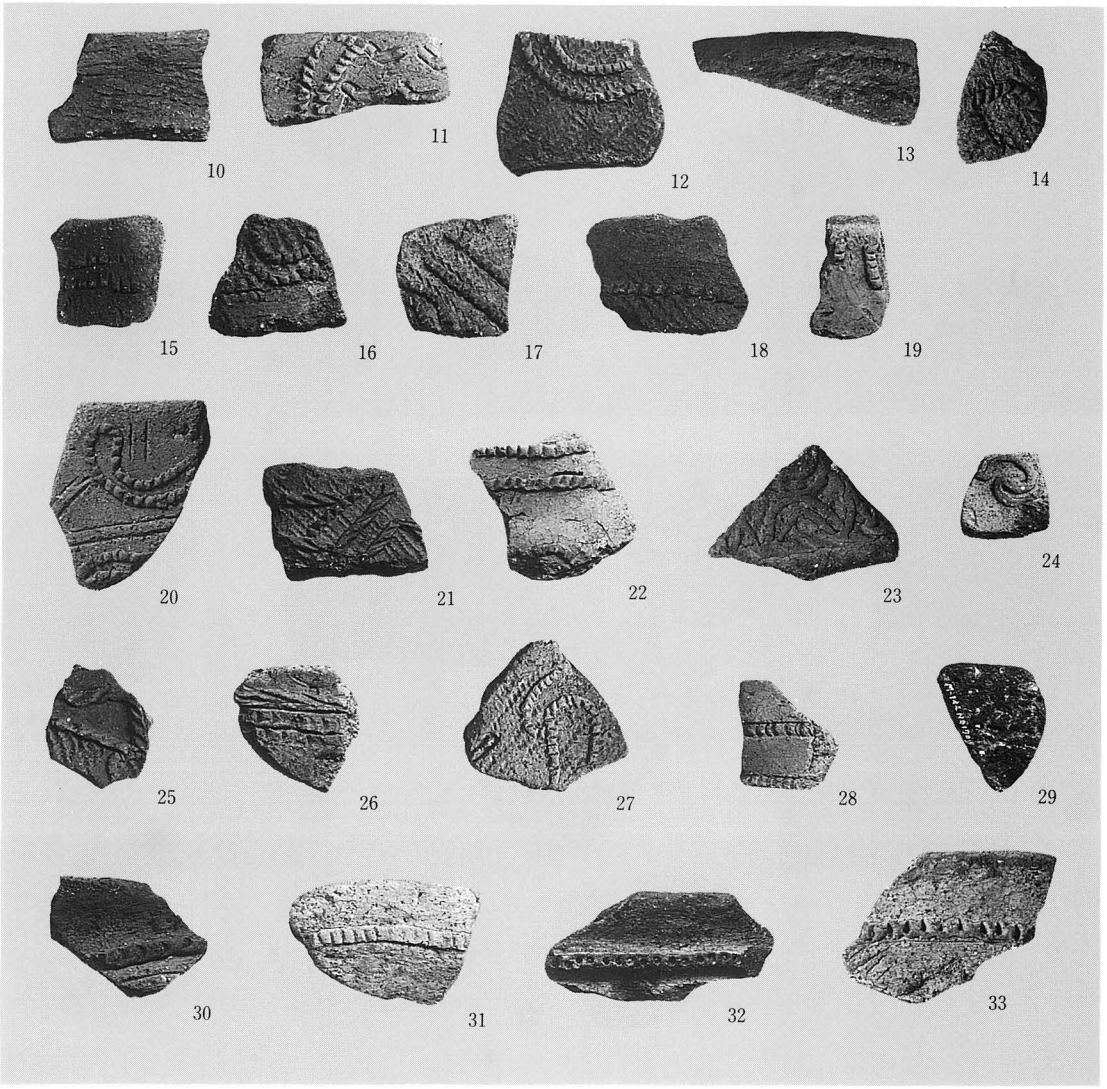


第7図

写真11　出土遺物・土器 (1)　第6図・第7図

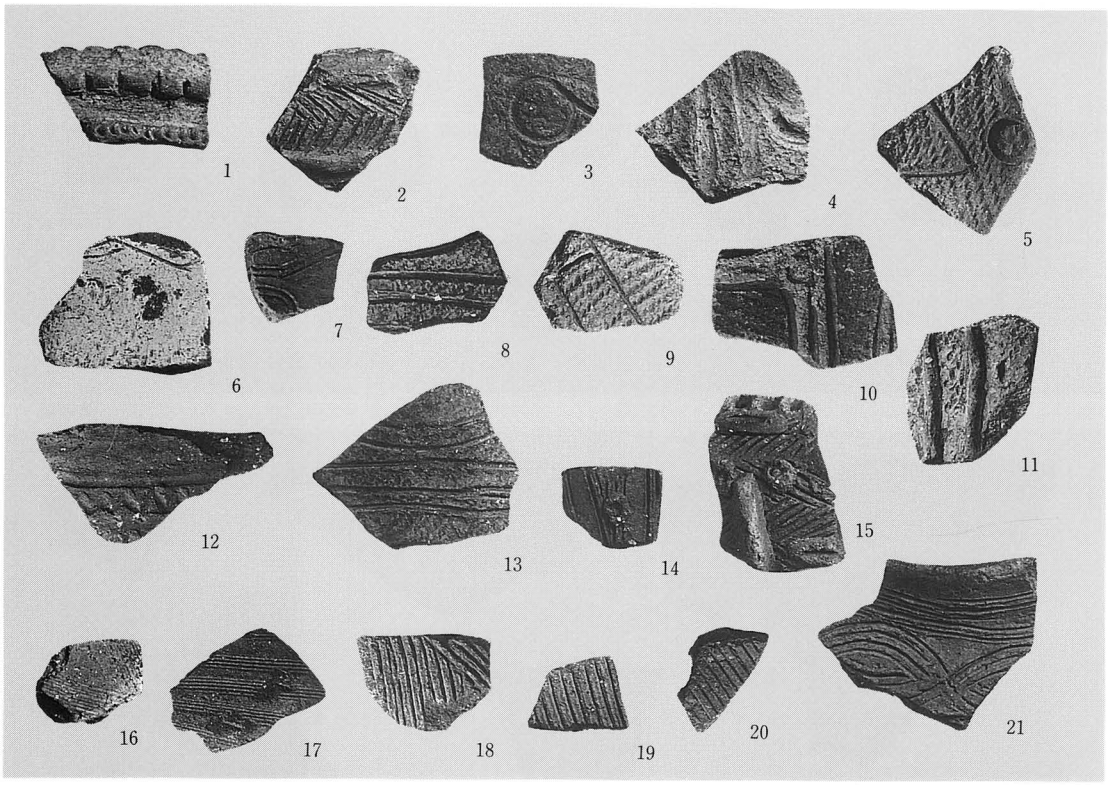


第7図

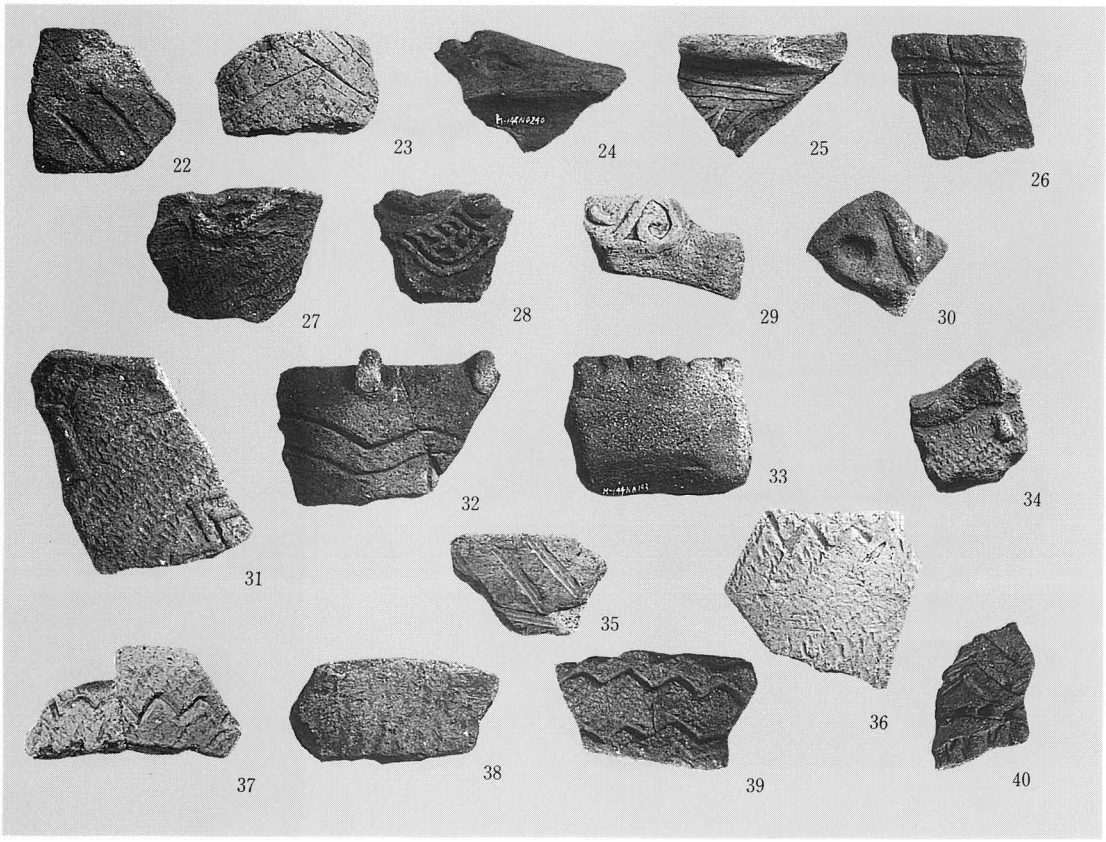


第8図

写真12　出土遺物・土器 (2)　第7図・第8図

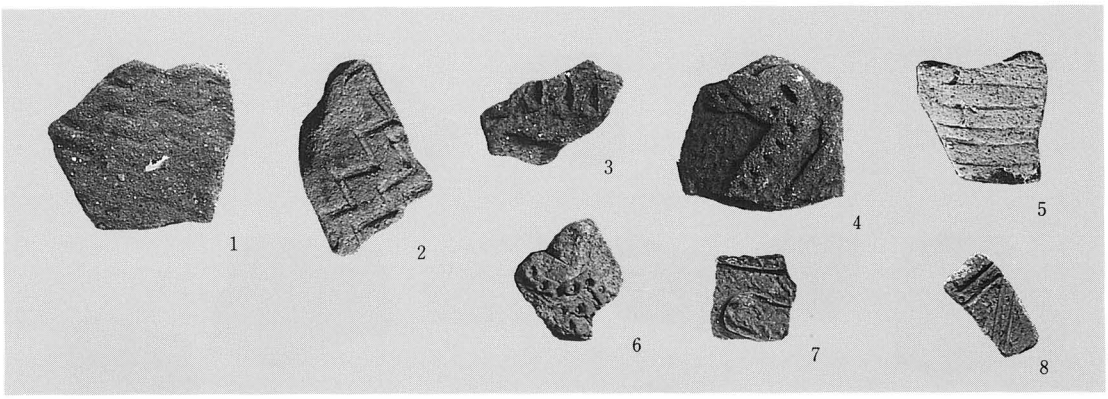


第9図

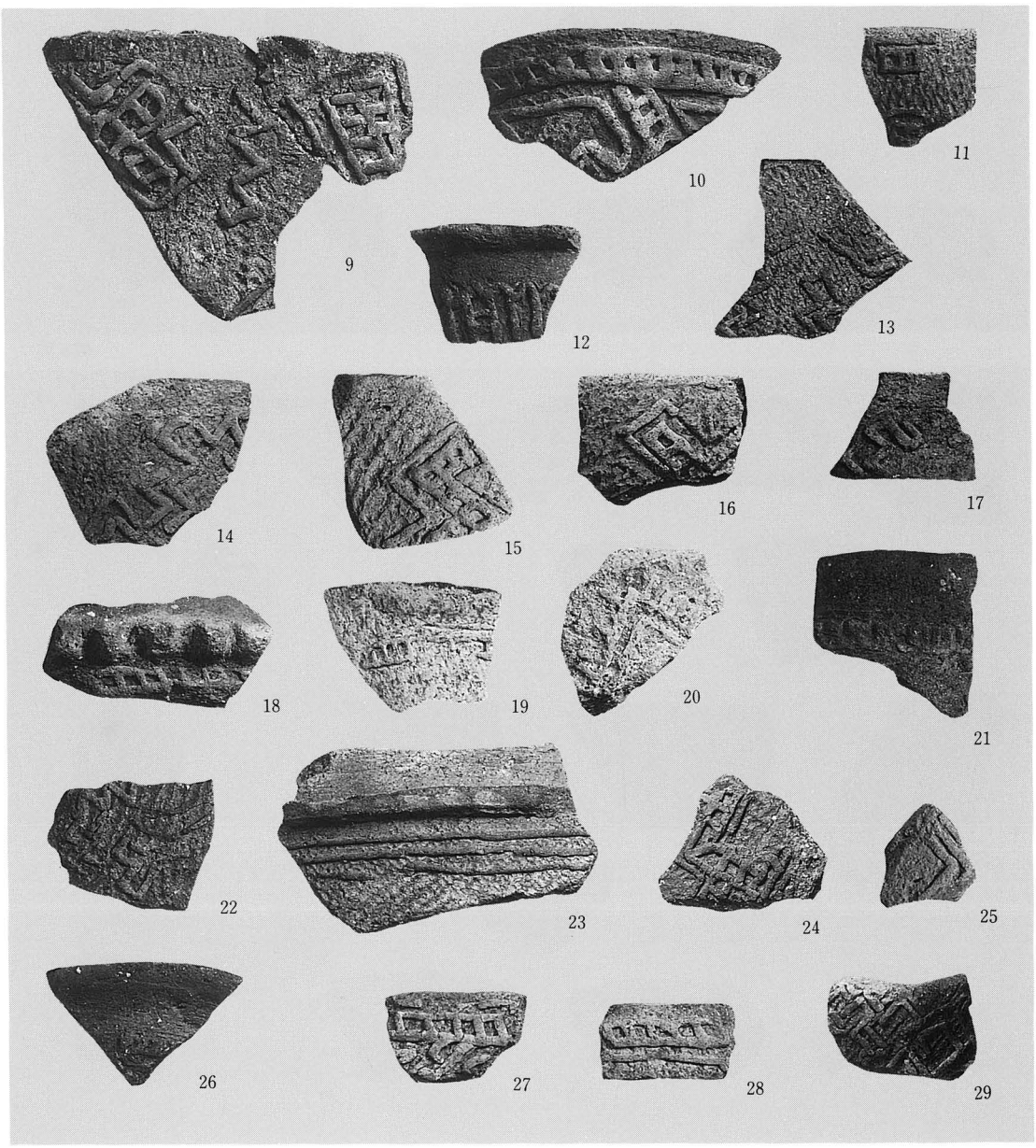


第10図

写真13　出土遺物・土器 (3)　第9図・第10図

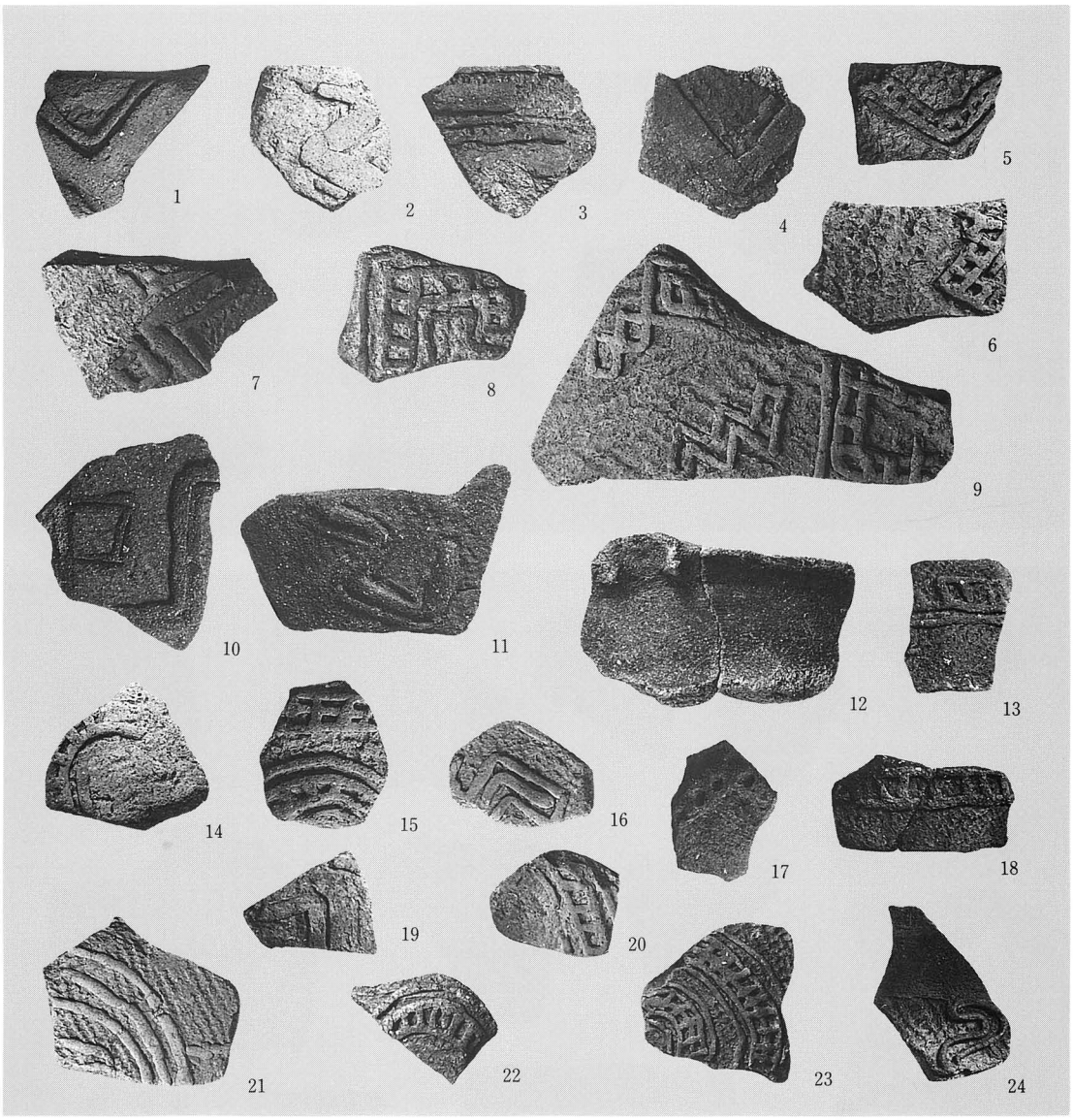


第10図

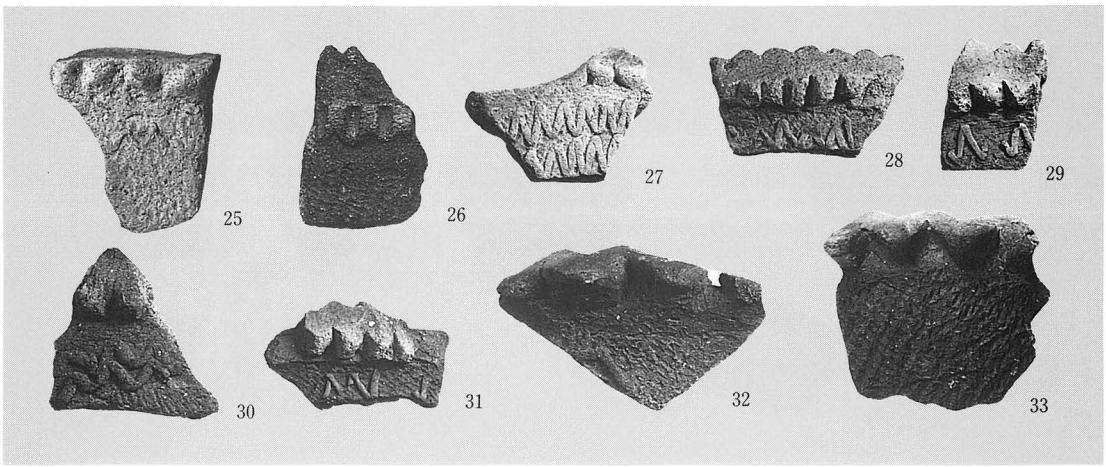


第11図

写真14　出土遺物・土器 (4)　第10図・第11図

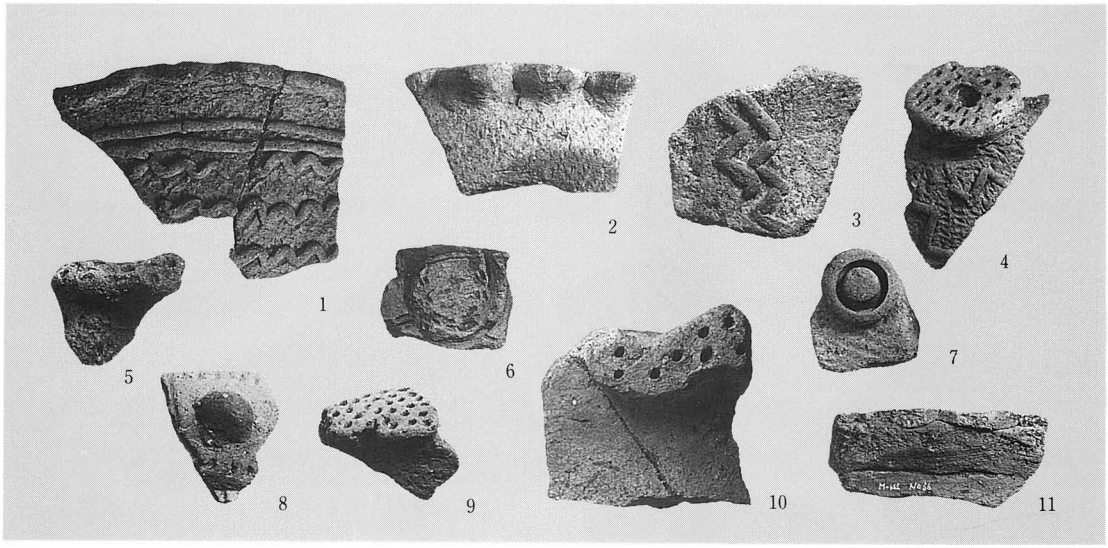


第12図

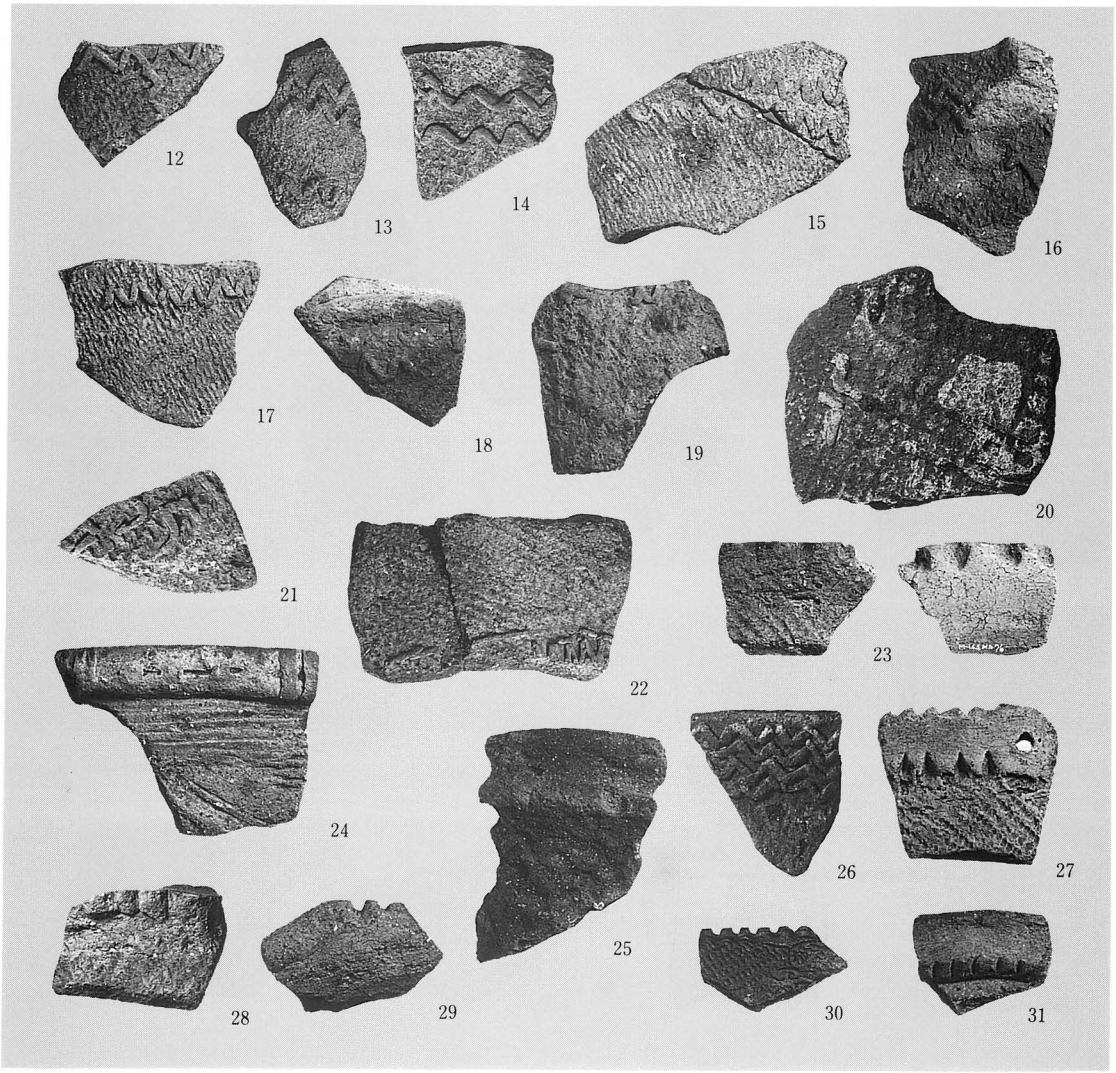


第13図

写真15　出土遺物・土器 (5)　第12図・第13図

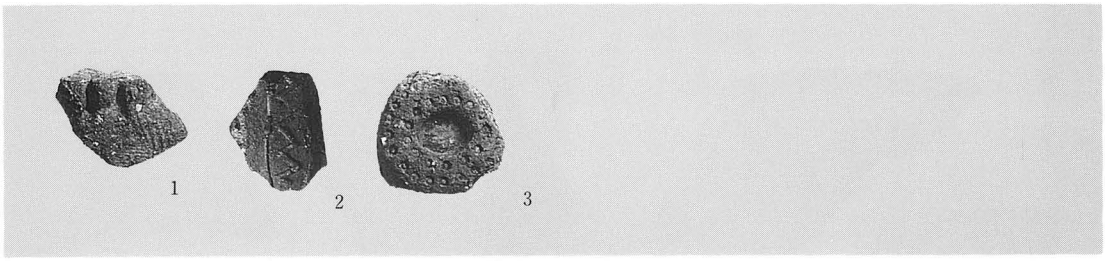


第13図

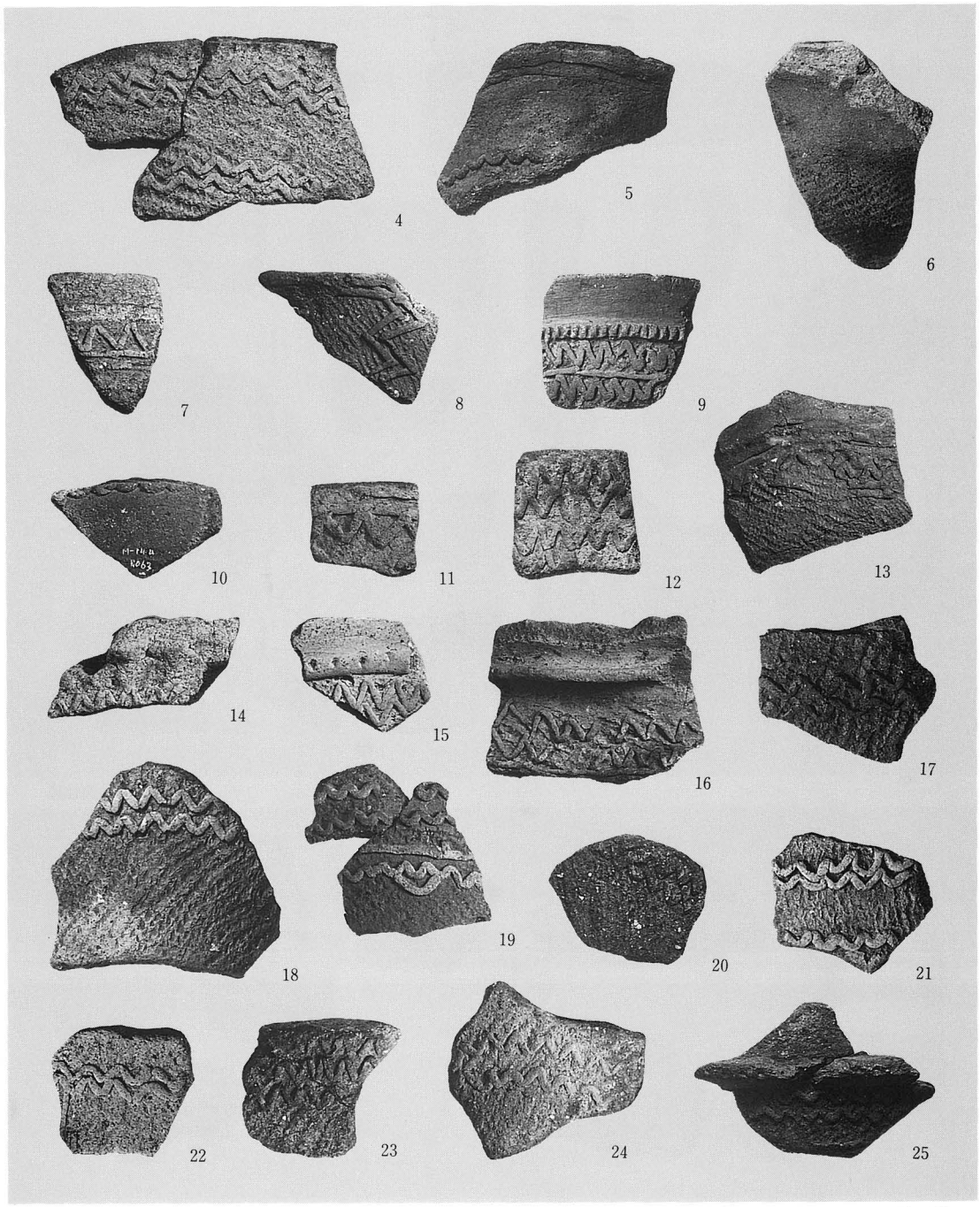


第14図

写真16　出土遺物・土器 (6)　第13図・第14図

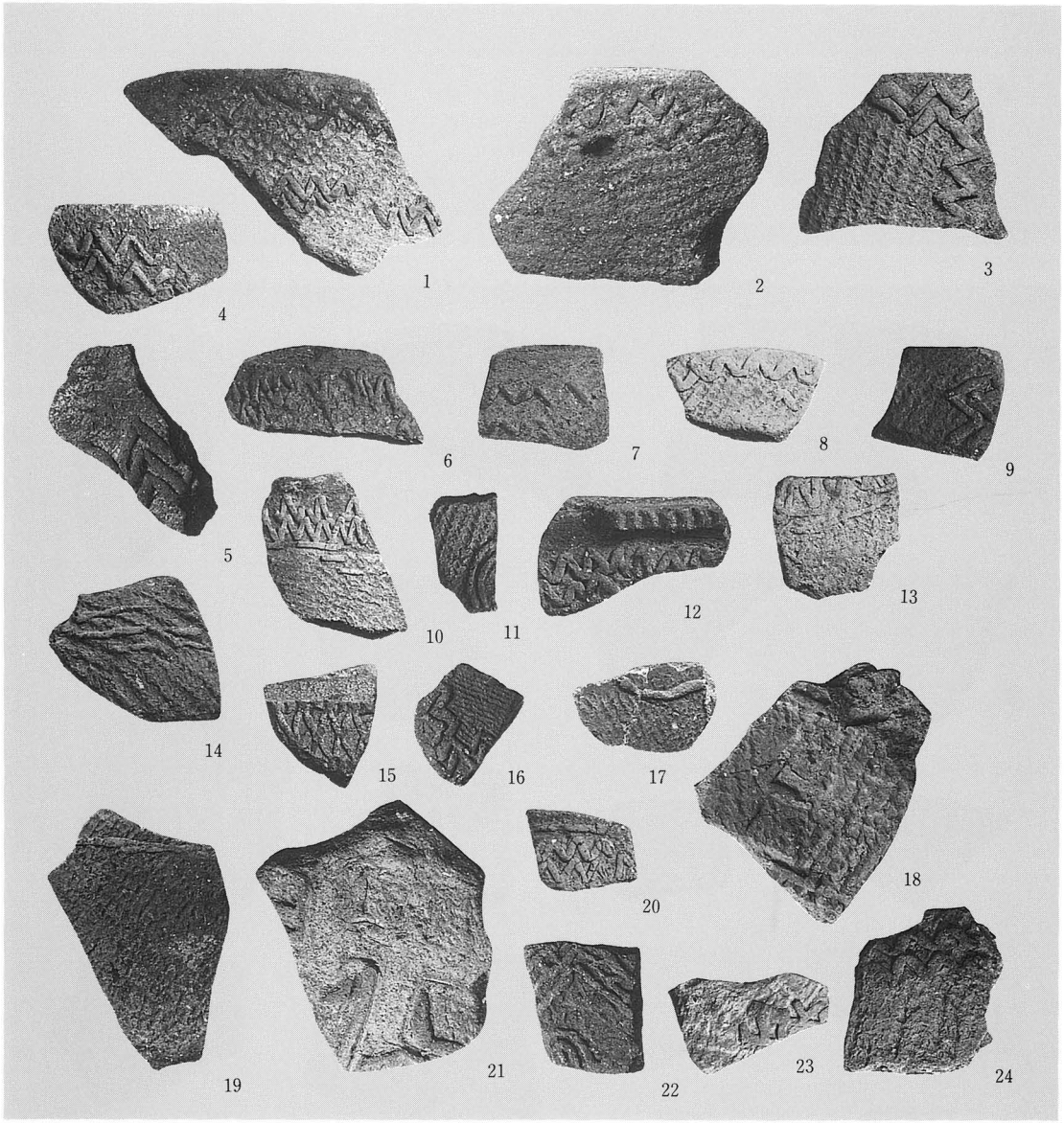


第14図

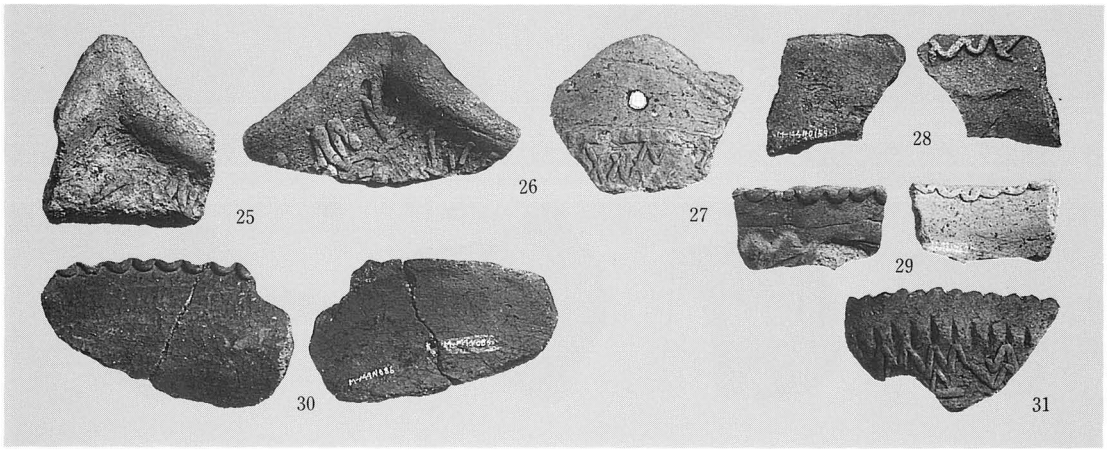


第15図

写真17　出土遺物・土器 (7)　第14図・第15図

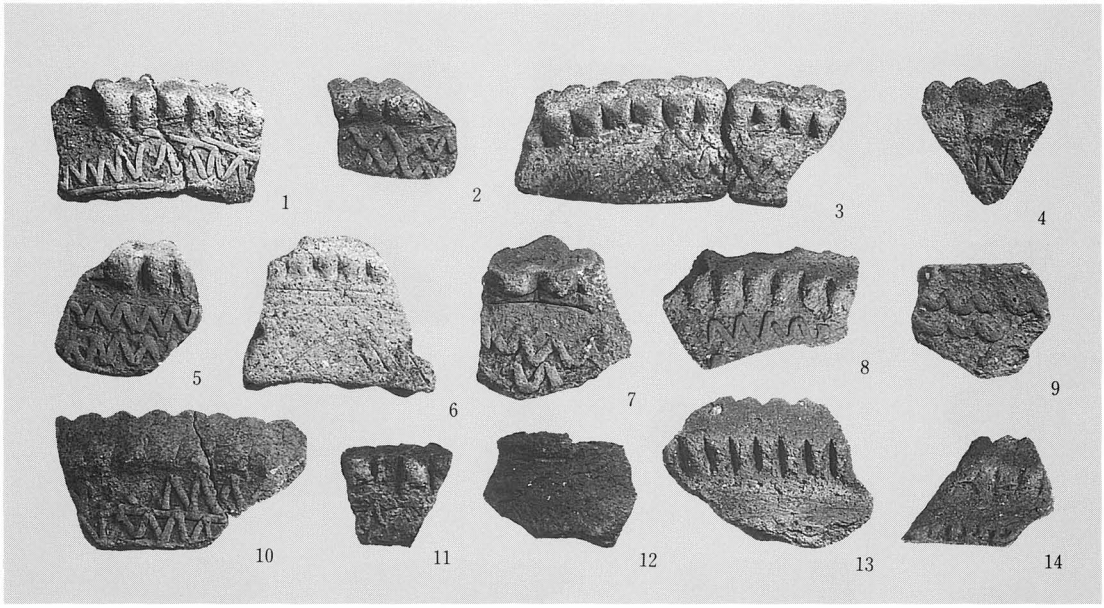


第16図

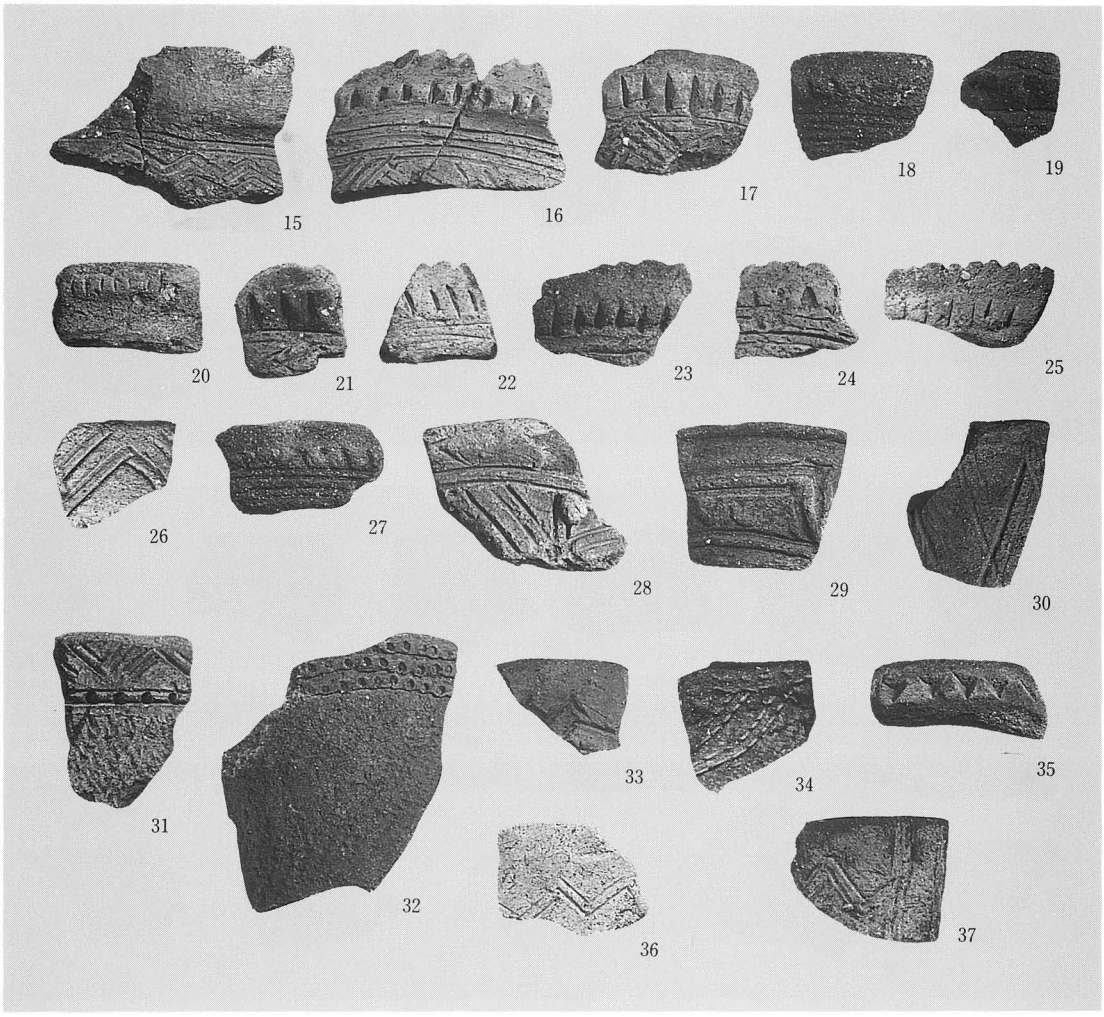


第17図

写真18　出土遺物・土器 (8)　第16図・第17図

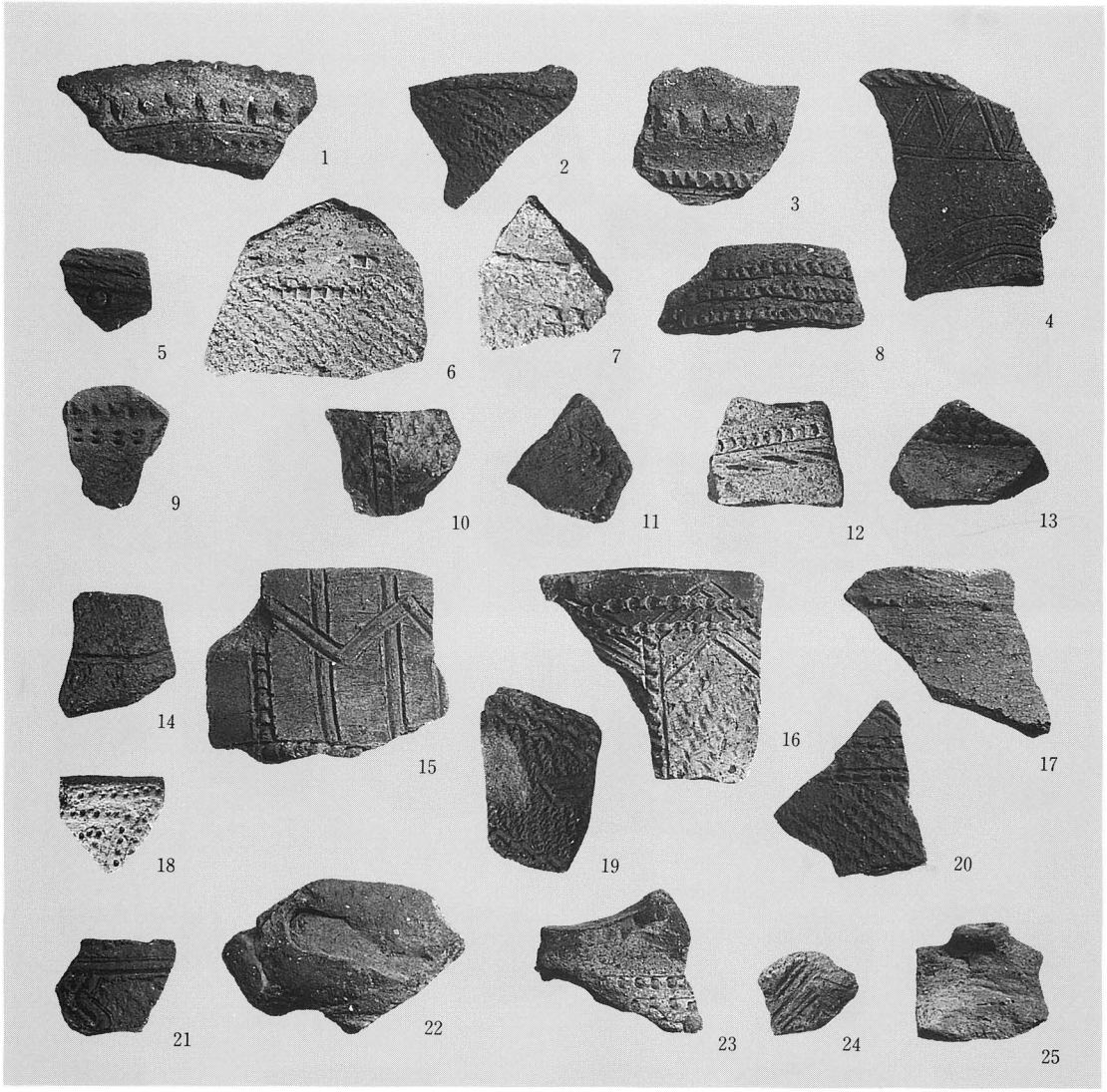


第17図

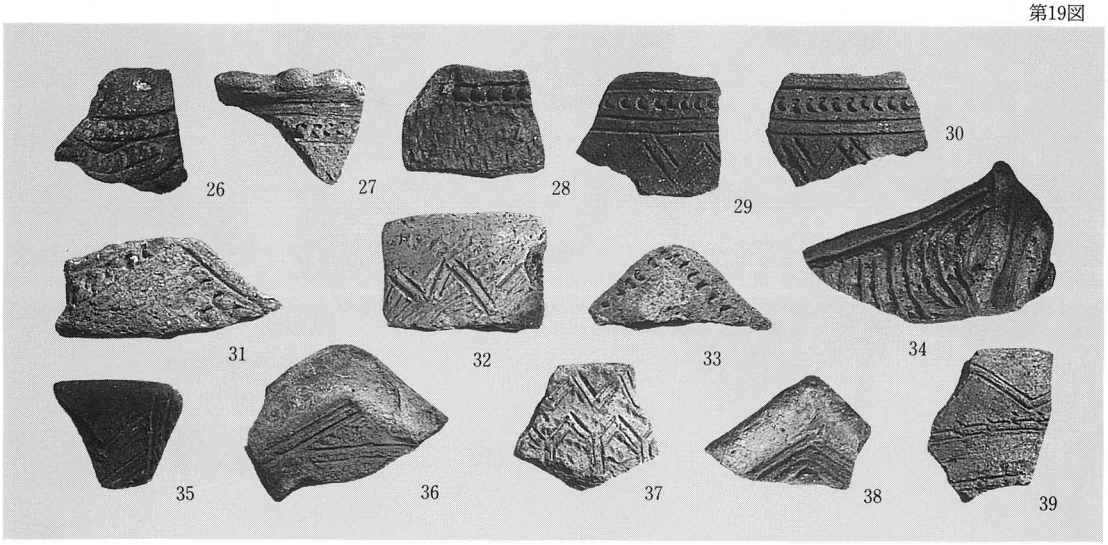


第18図

写真19　出土遺物・土器 (9)　第17図・第18図

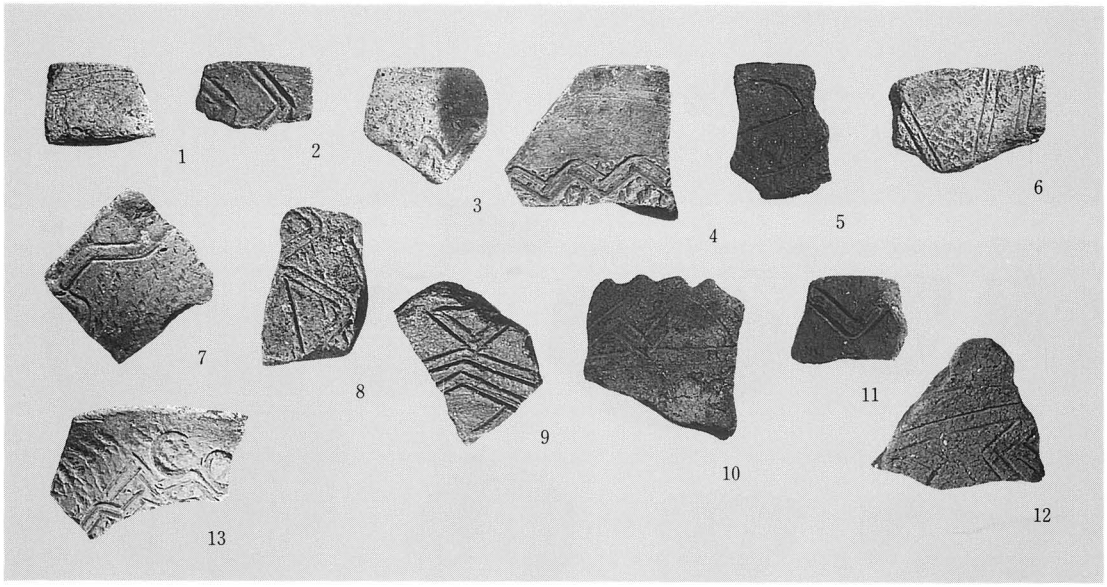


第19図

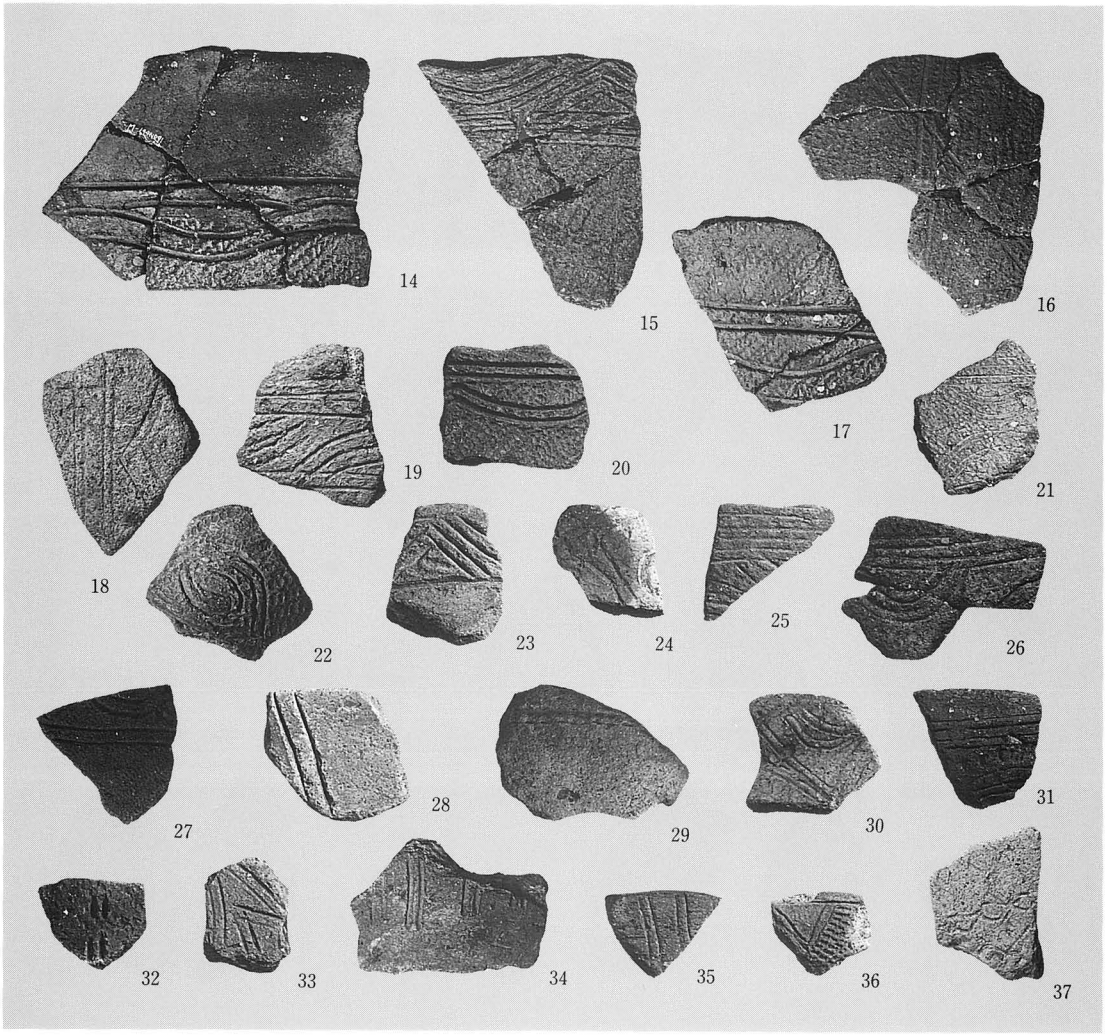


第20図

写真20　出土遺物・土器 ⑽　第19図・第20図

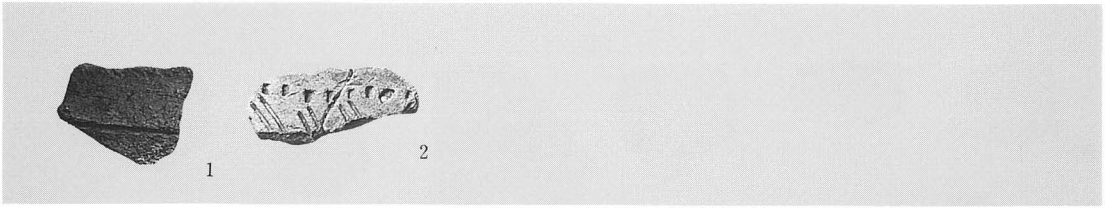


第20図

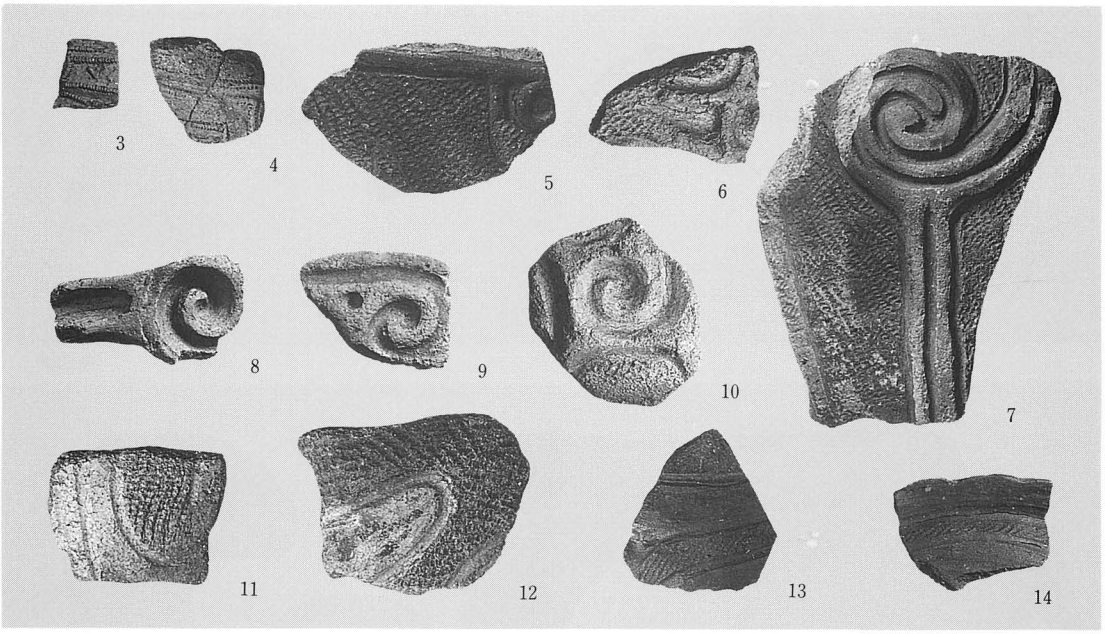


第21図

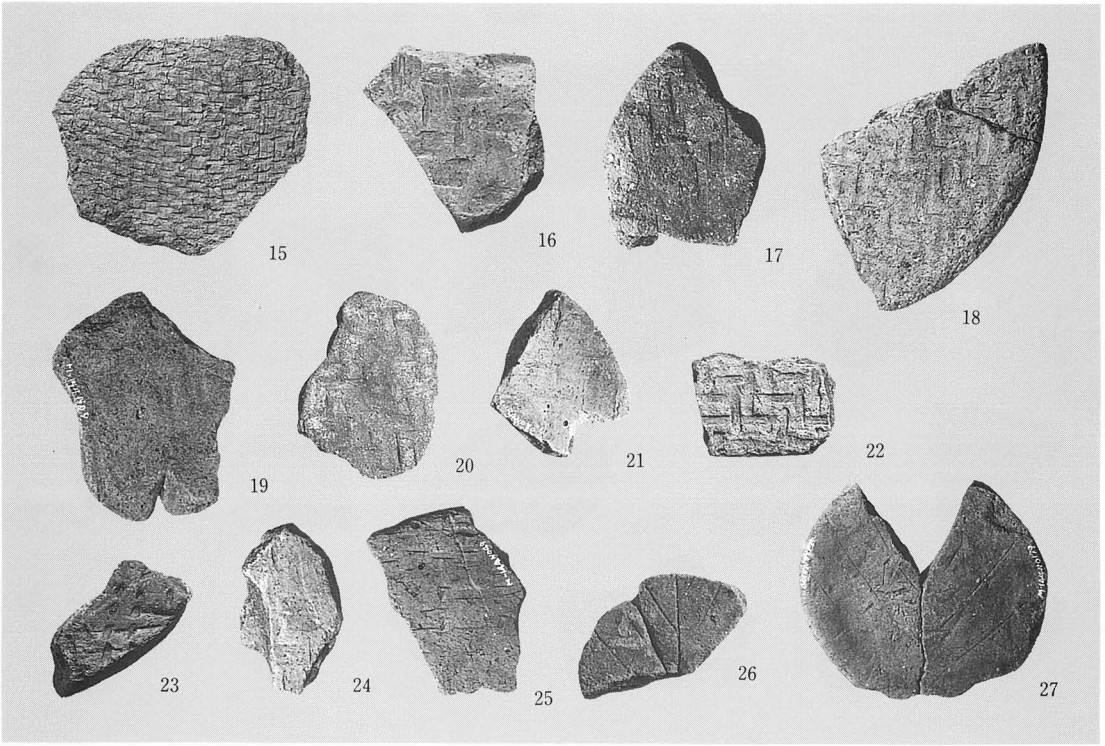
写真21　出土遺物・土器 ⑾　第20図・第21図



第21図



第22図



第23図

写真22　出土遺物・土器 (12)　第21図・第22図・第23図

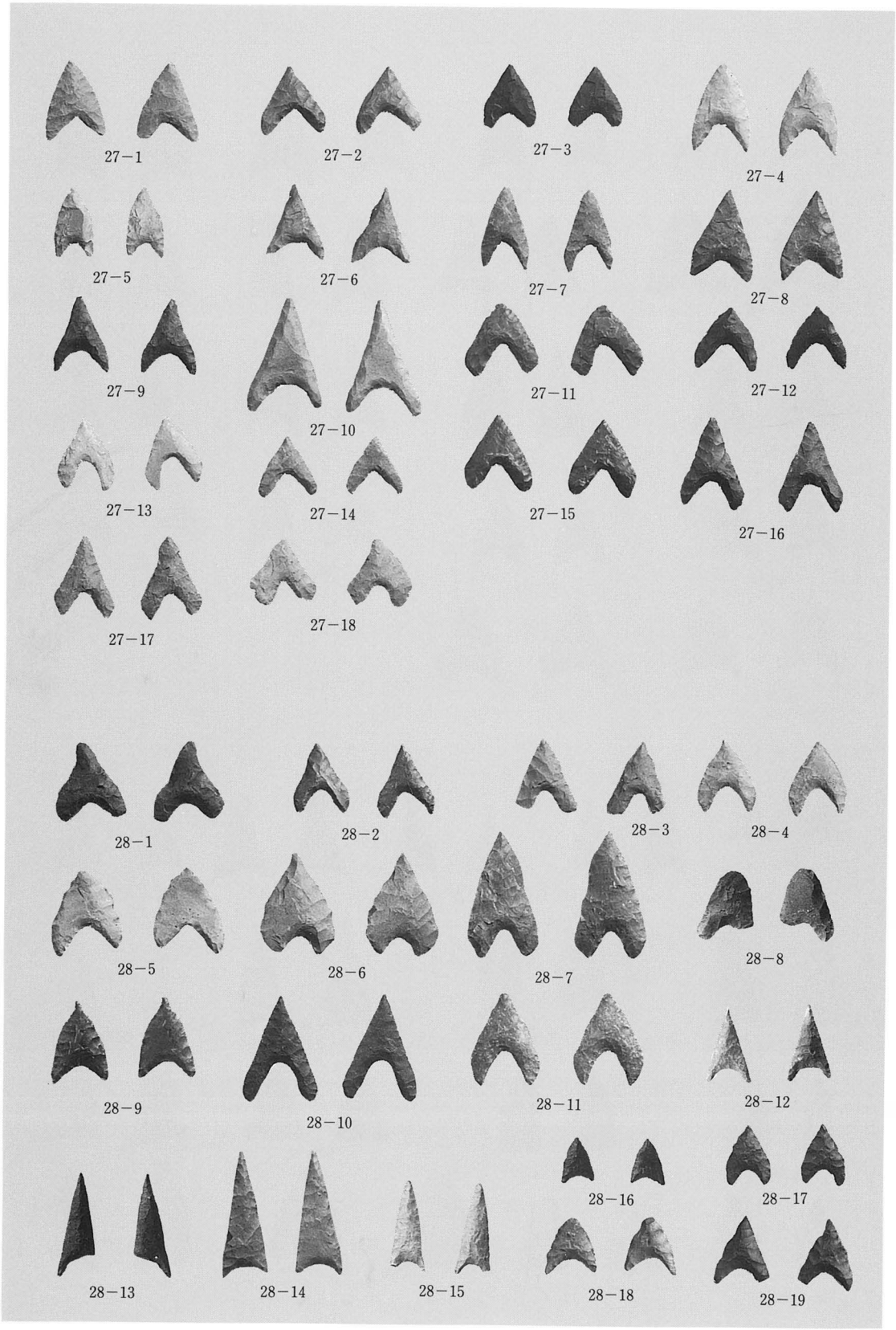


写真23　出土遺物・石器（1）　第27図・第28図

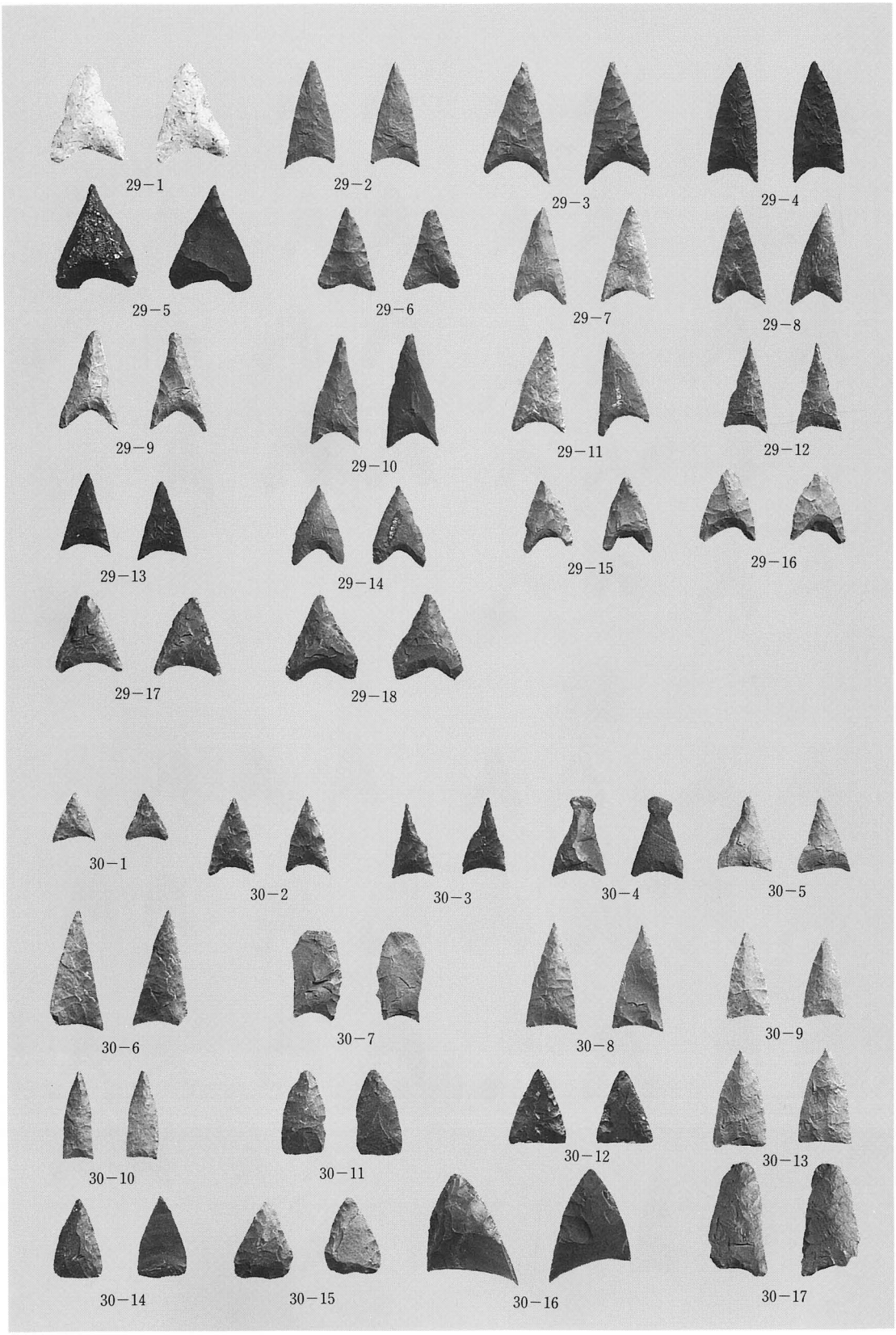


写真24　出土遺物・石器 (2)　第29図・第30図

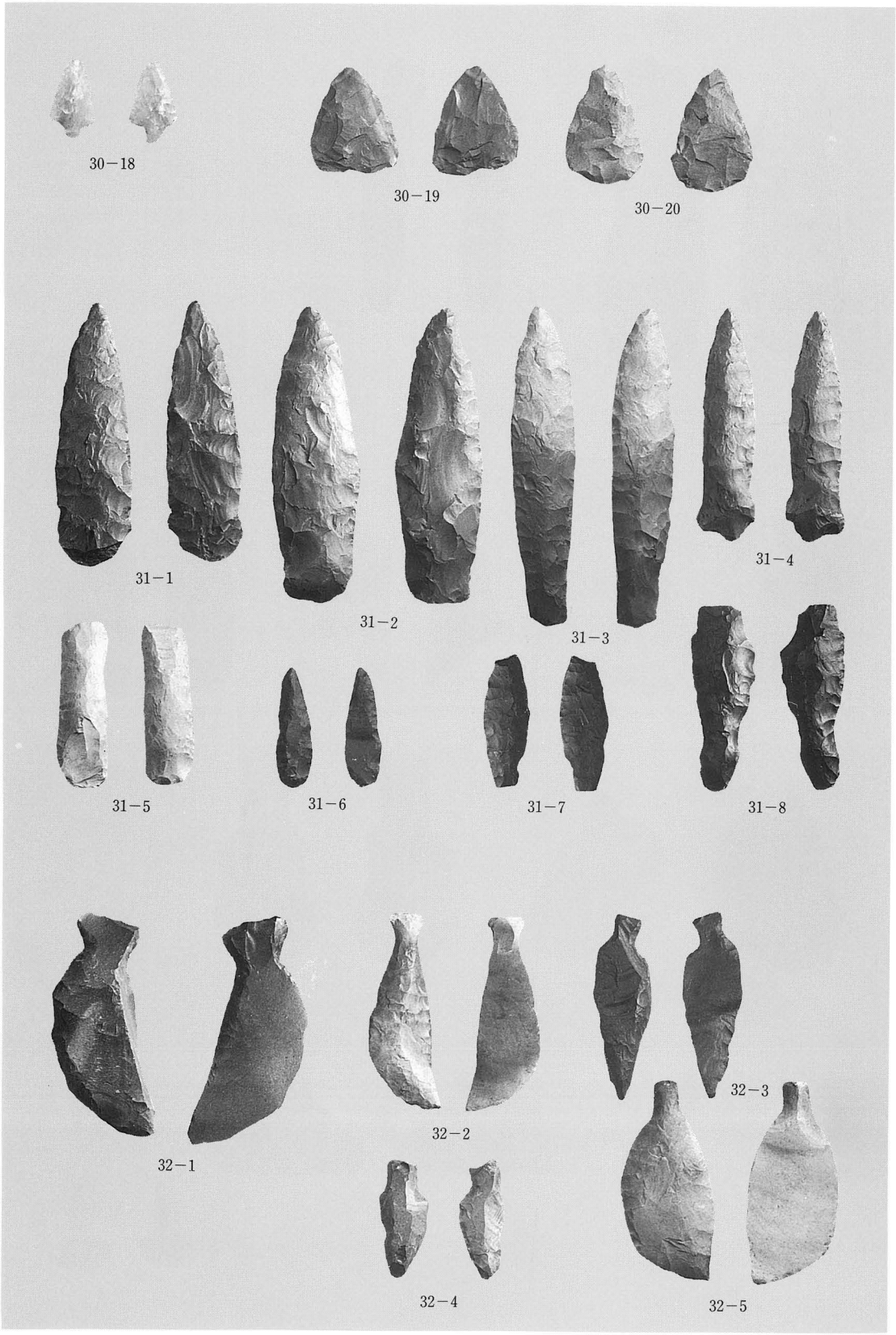


写真25　出土遺物・石器 (3)　第30図・第31図・第32図

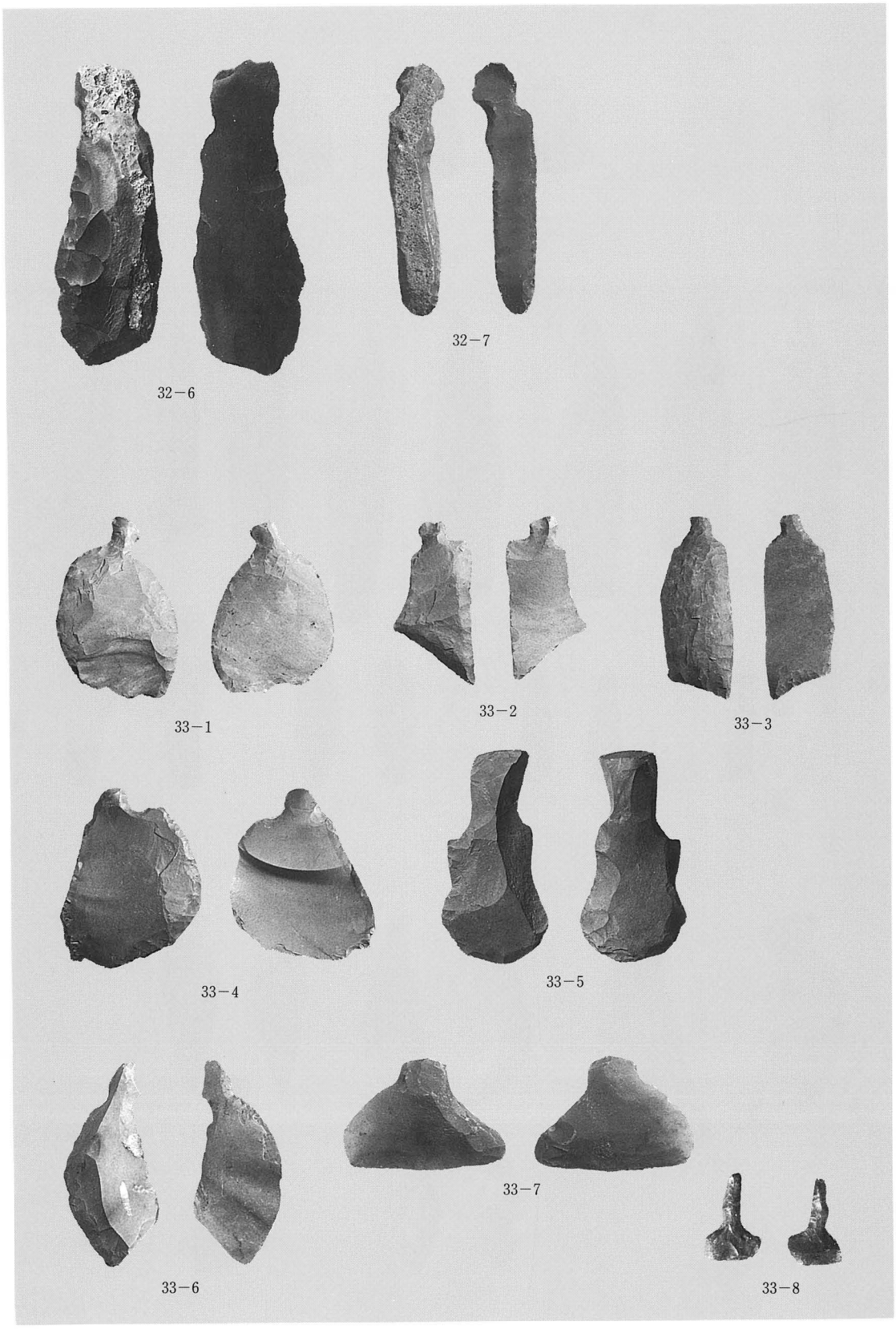


写真26　出土遺物・石器 (4)　第32図・第33図

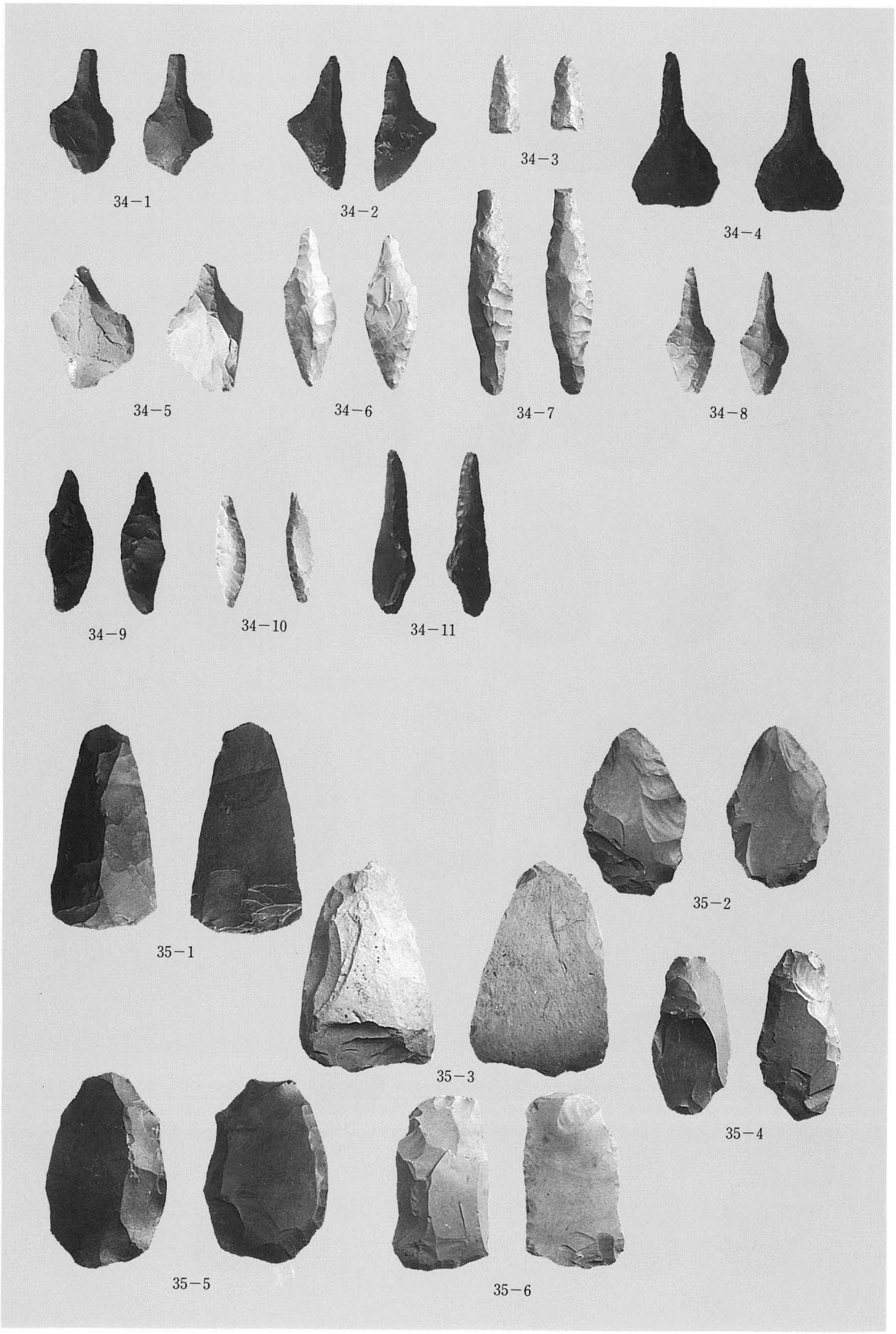


写真27　出土遺物・石器 (5)　第34図・第35図

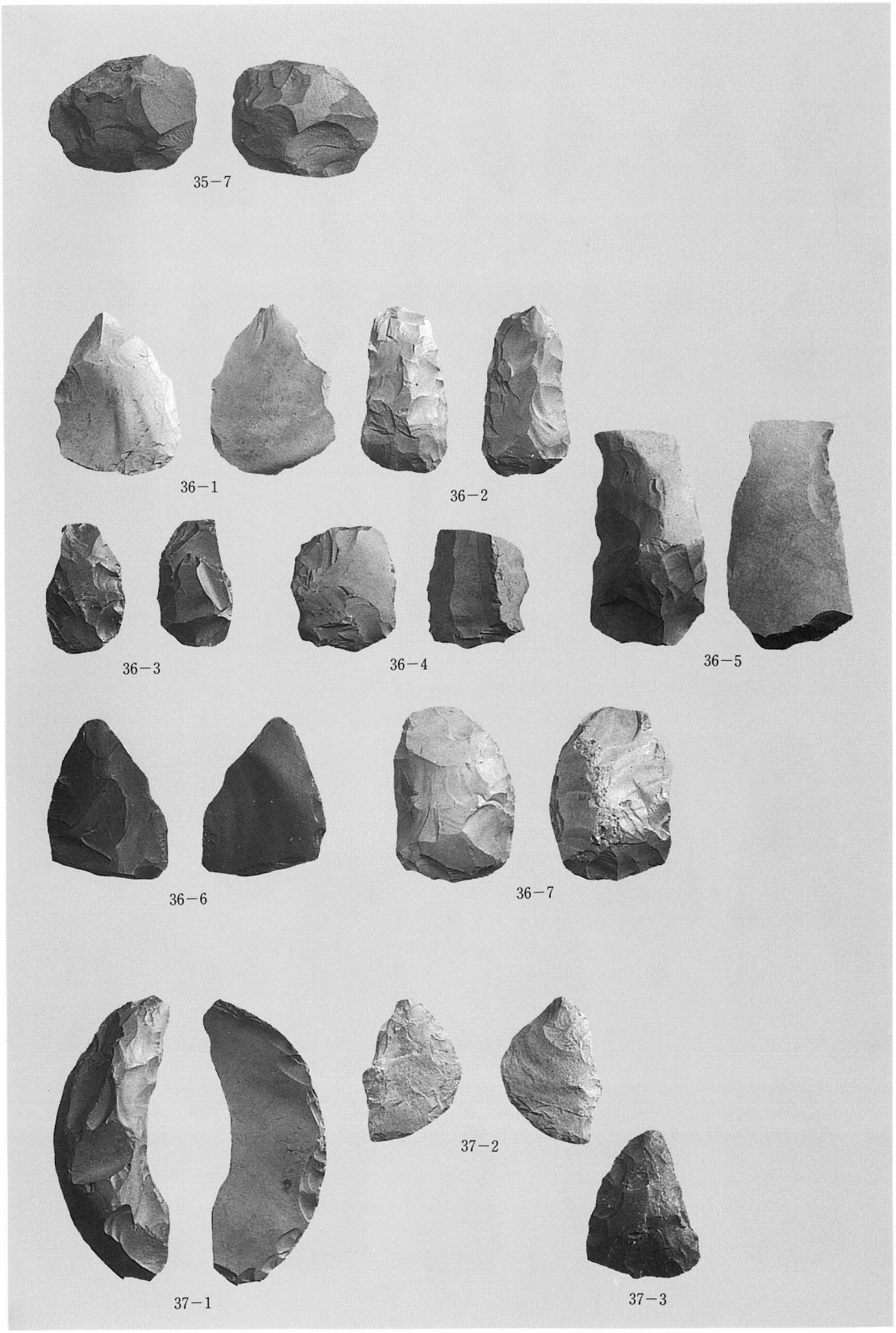


写真28　出土遺物・石器 (6)　第35図・第36図・第37図

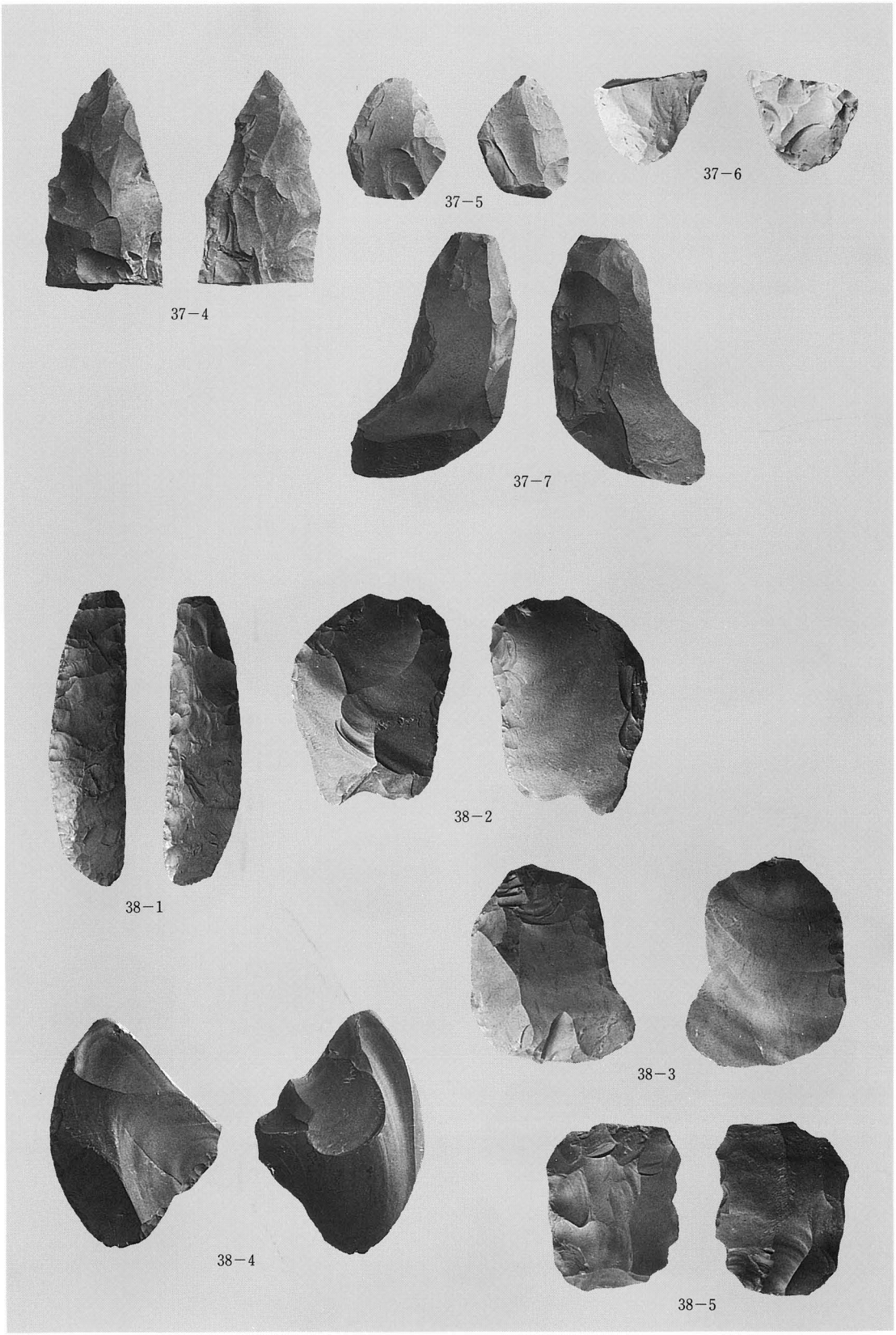


写真29　出土遺物・石器 (7)　第37図・第38図

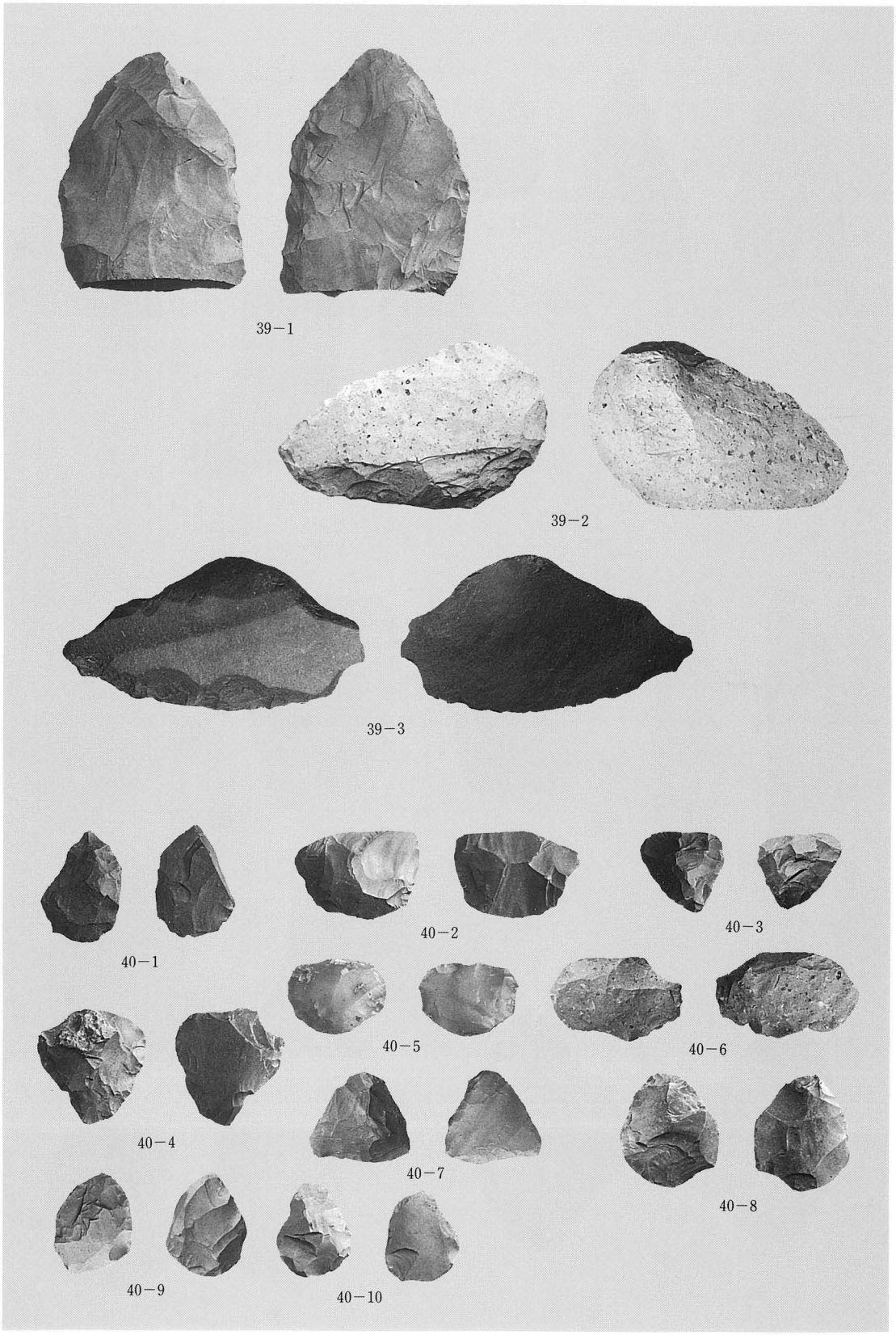


写真30　出土遺物・石器 (8)　第39図・第40図

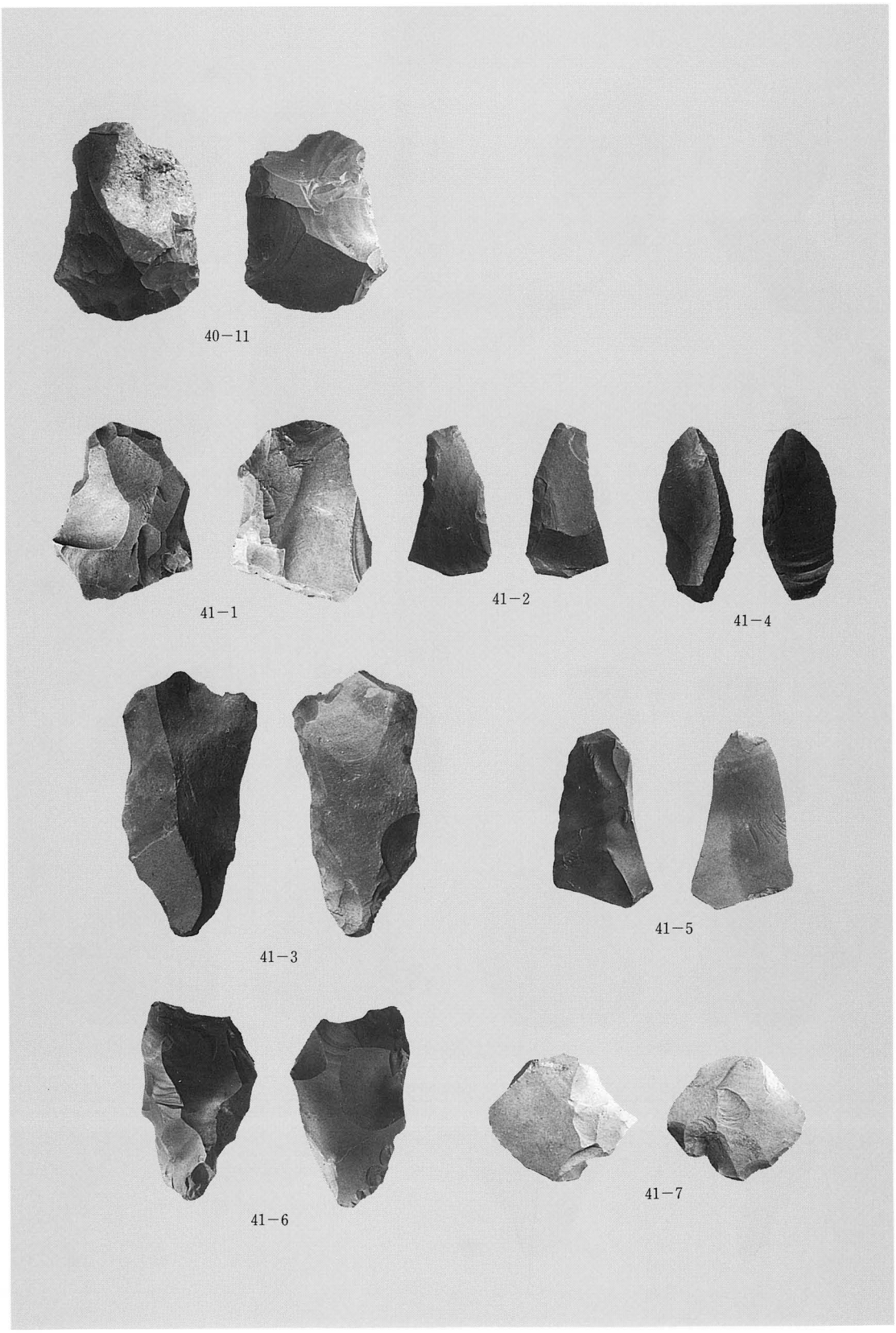


写真31　出土遺物・石器 (9)　第40図・第41図

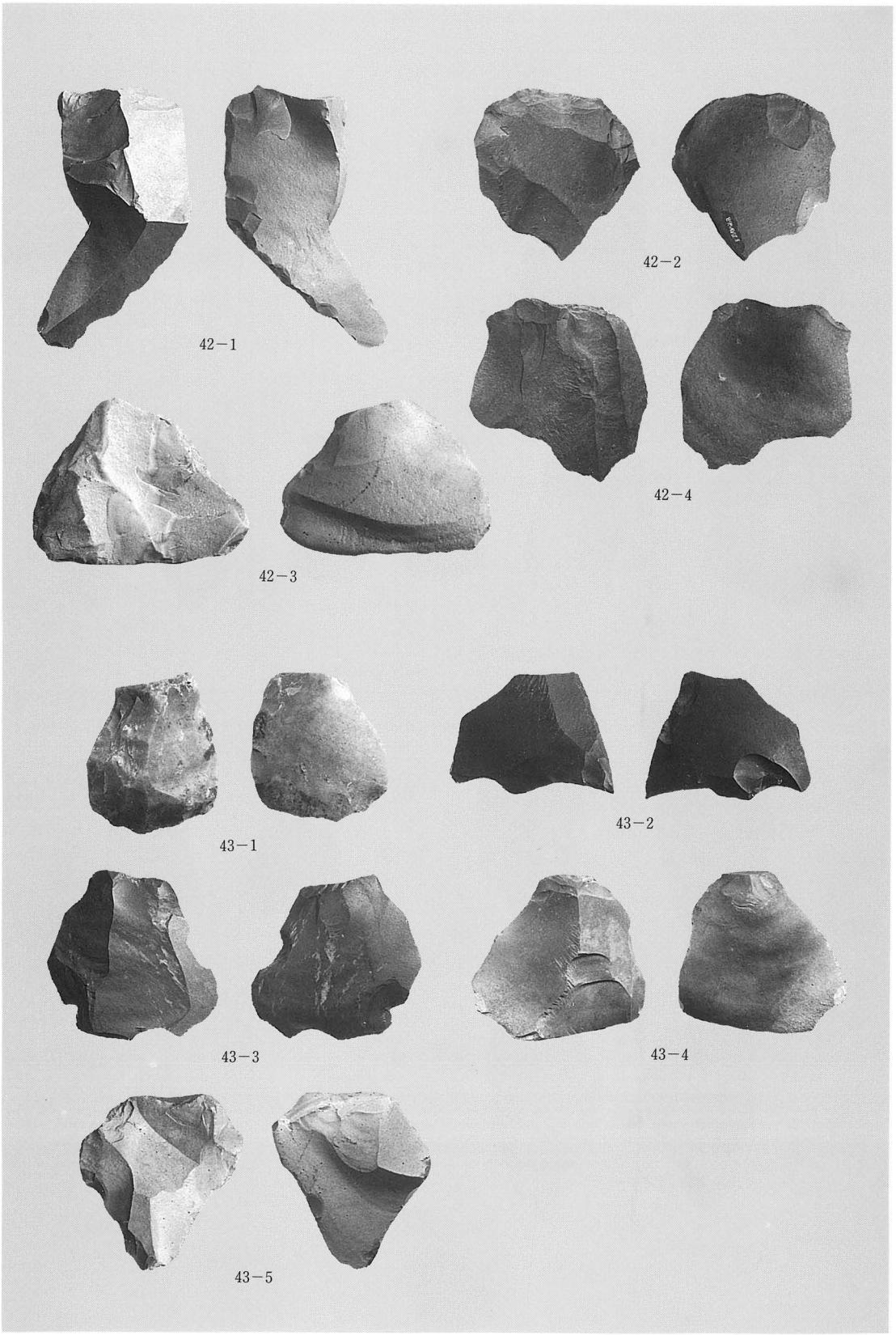
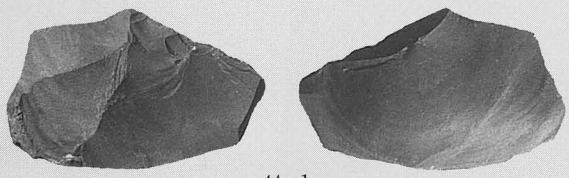
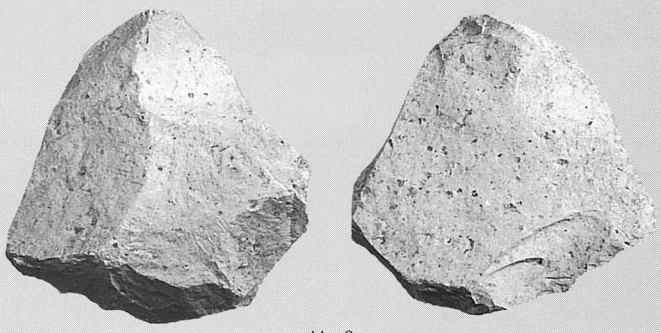


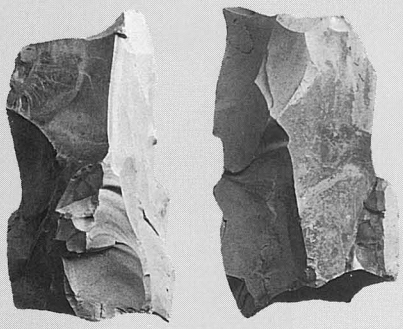
写真32　出土遺物・石器 ⑽　第42図・第43図



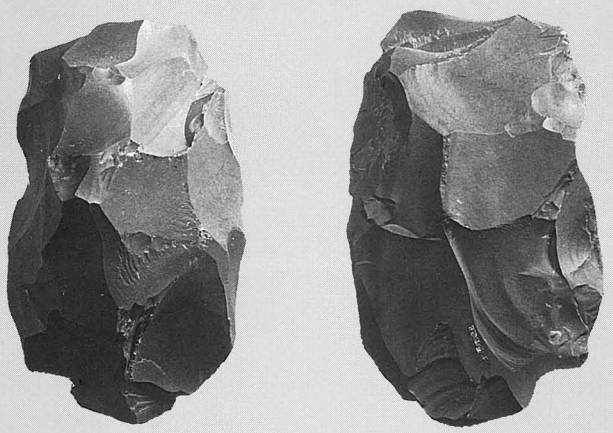
44－1



44－2



44－3



45－1

写真33　出土遺物・石器 (11)　第44図・第45図

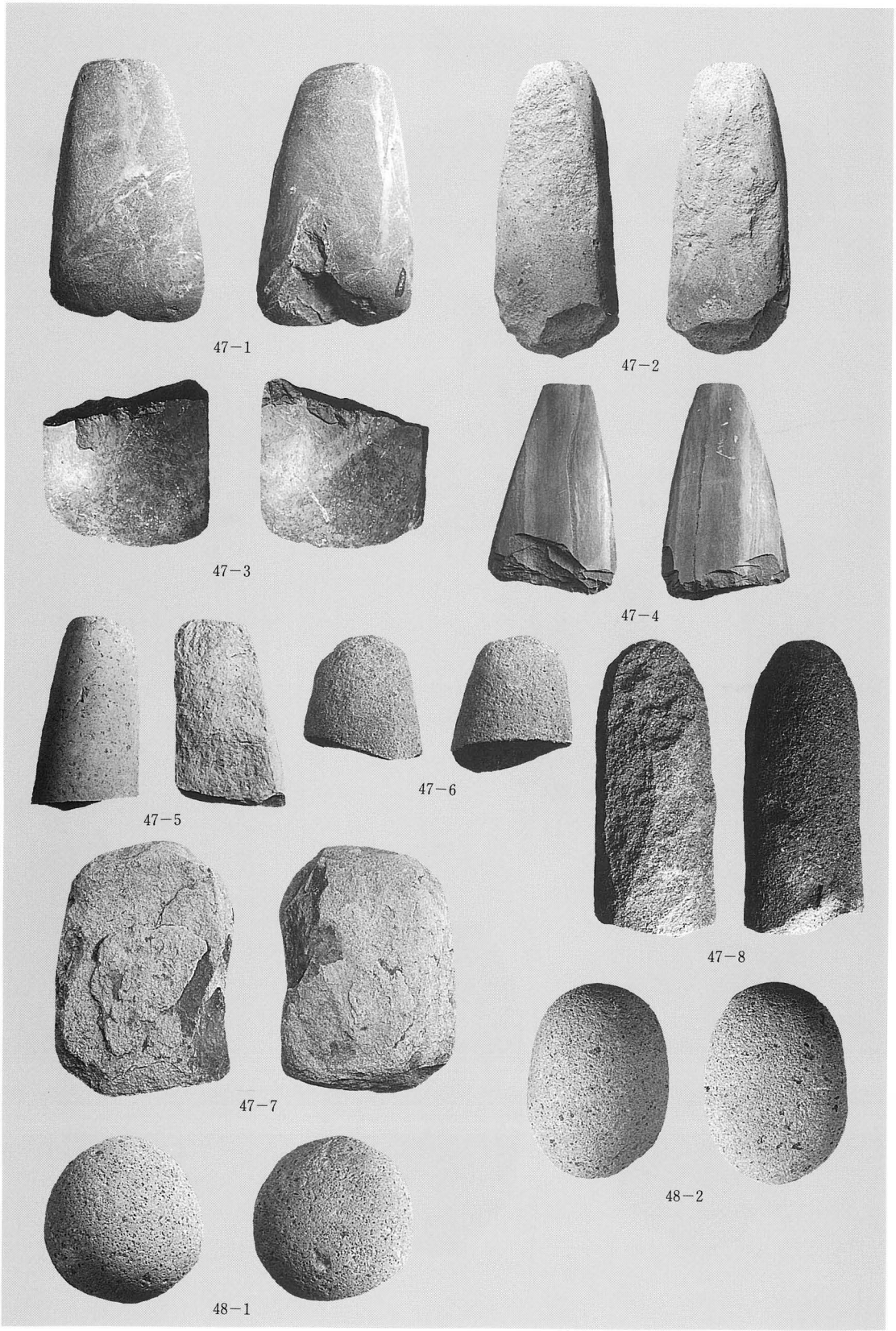
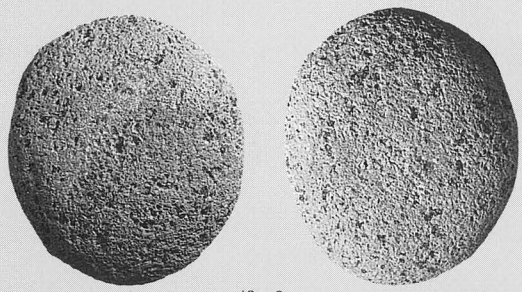
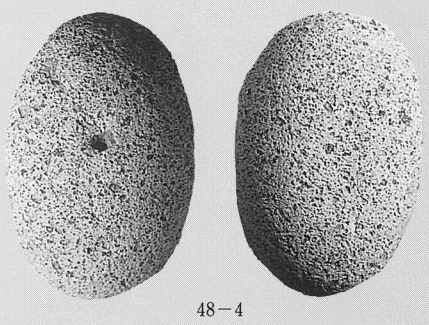


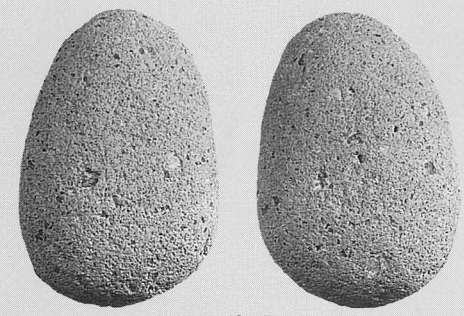
写真34　出土遺物・石器 ⑿　第47図・第48図



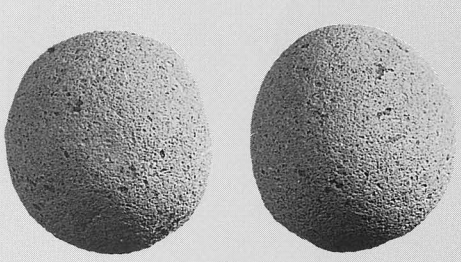
48－3



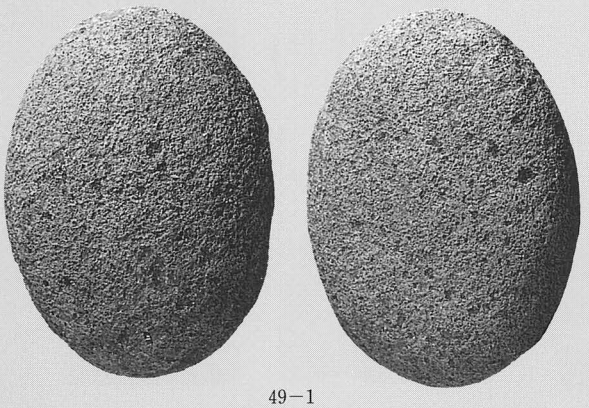
48－4



48－5



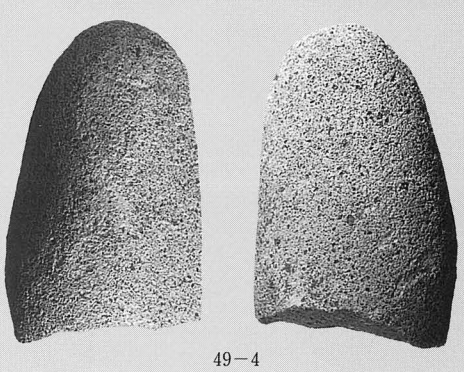
48－6



49－1

49－2

49－3



49－4

写真35　出土遺物・石器 ⒀　第48図・第49図

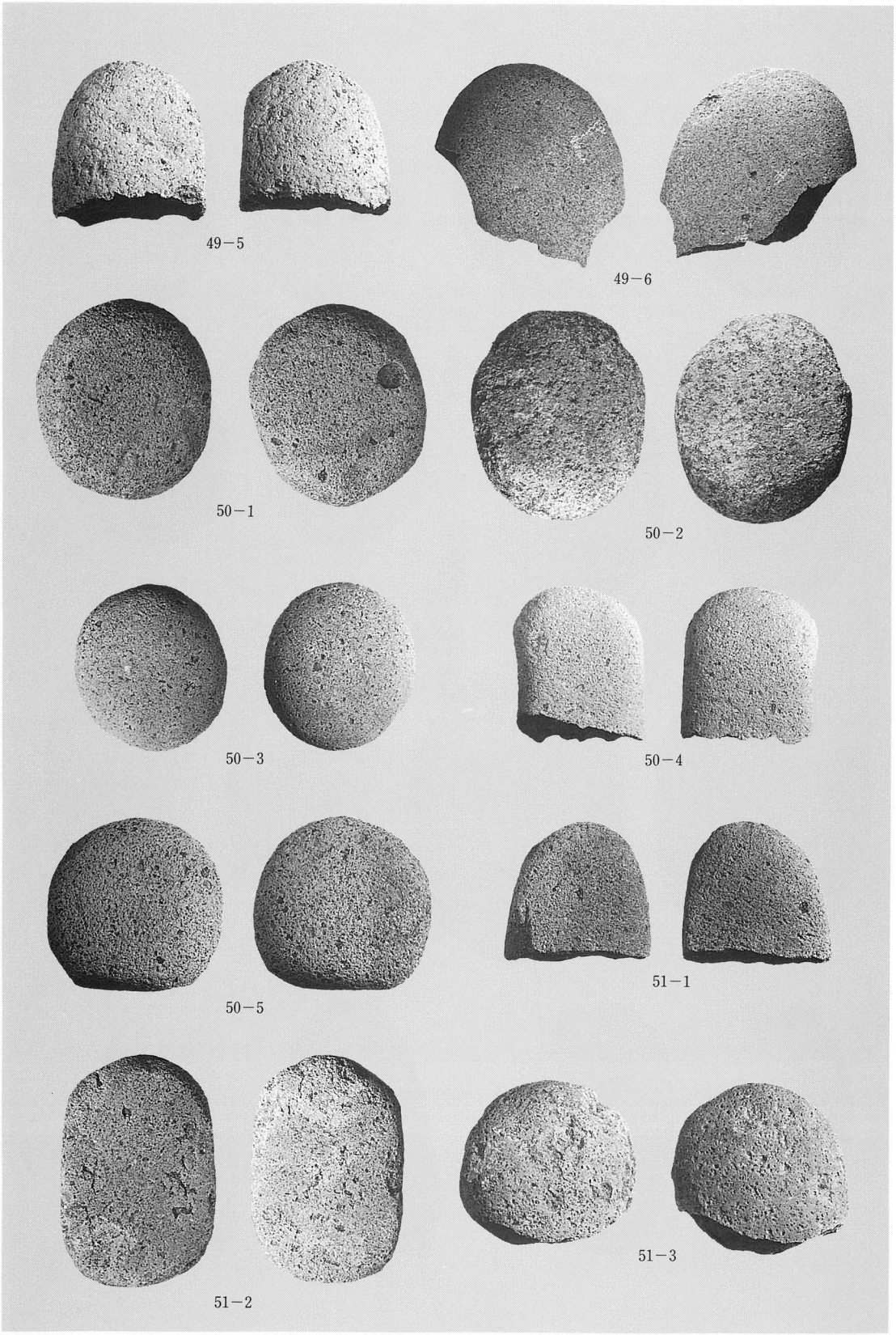


写真36 出土遺物・石器 ⒁ 第49図・第50図・第51図

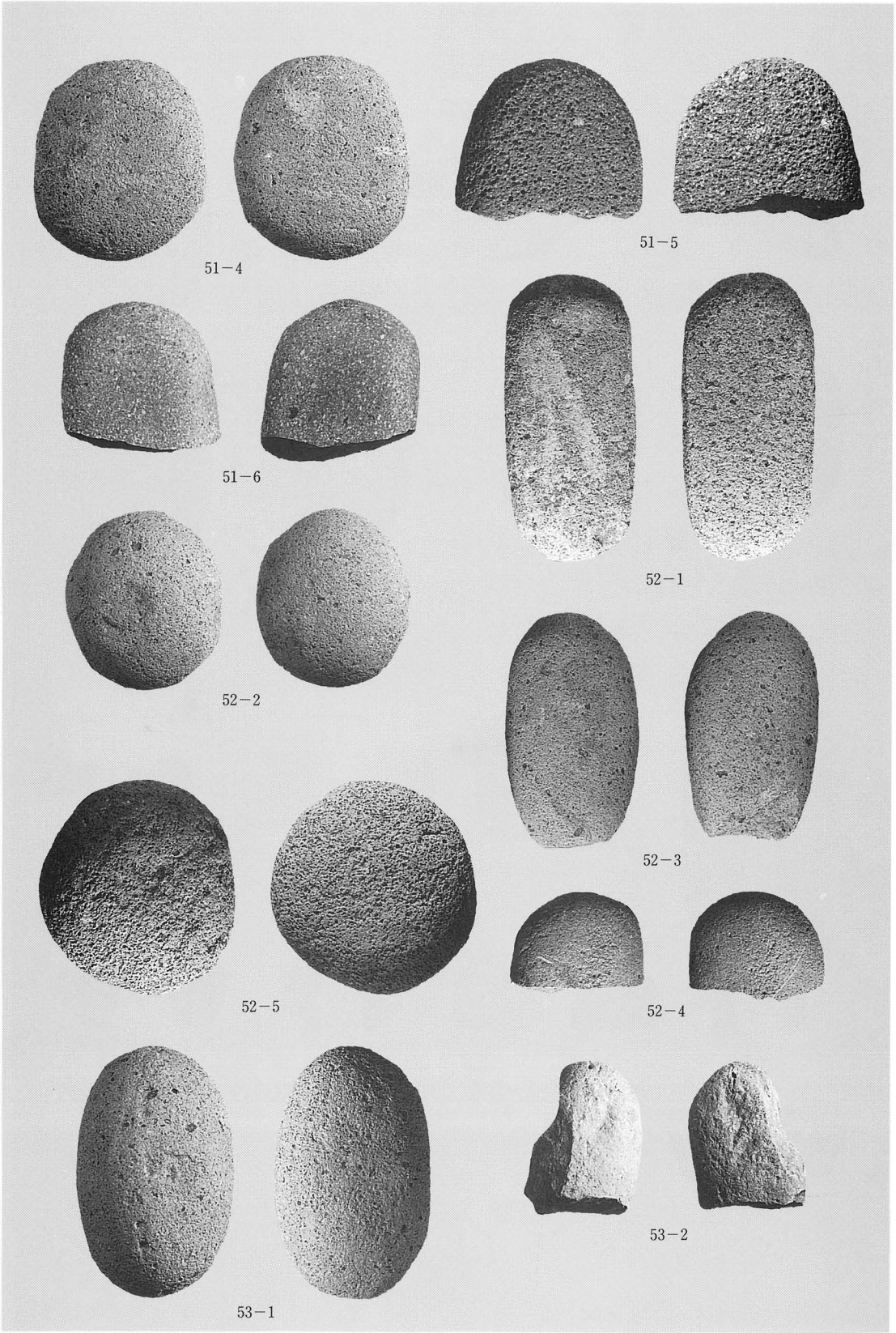


写真37 出土遺物・石器 ⒂ 第51図・第52図・第53図

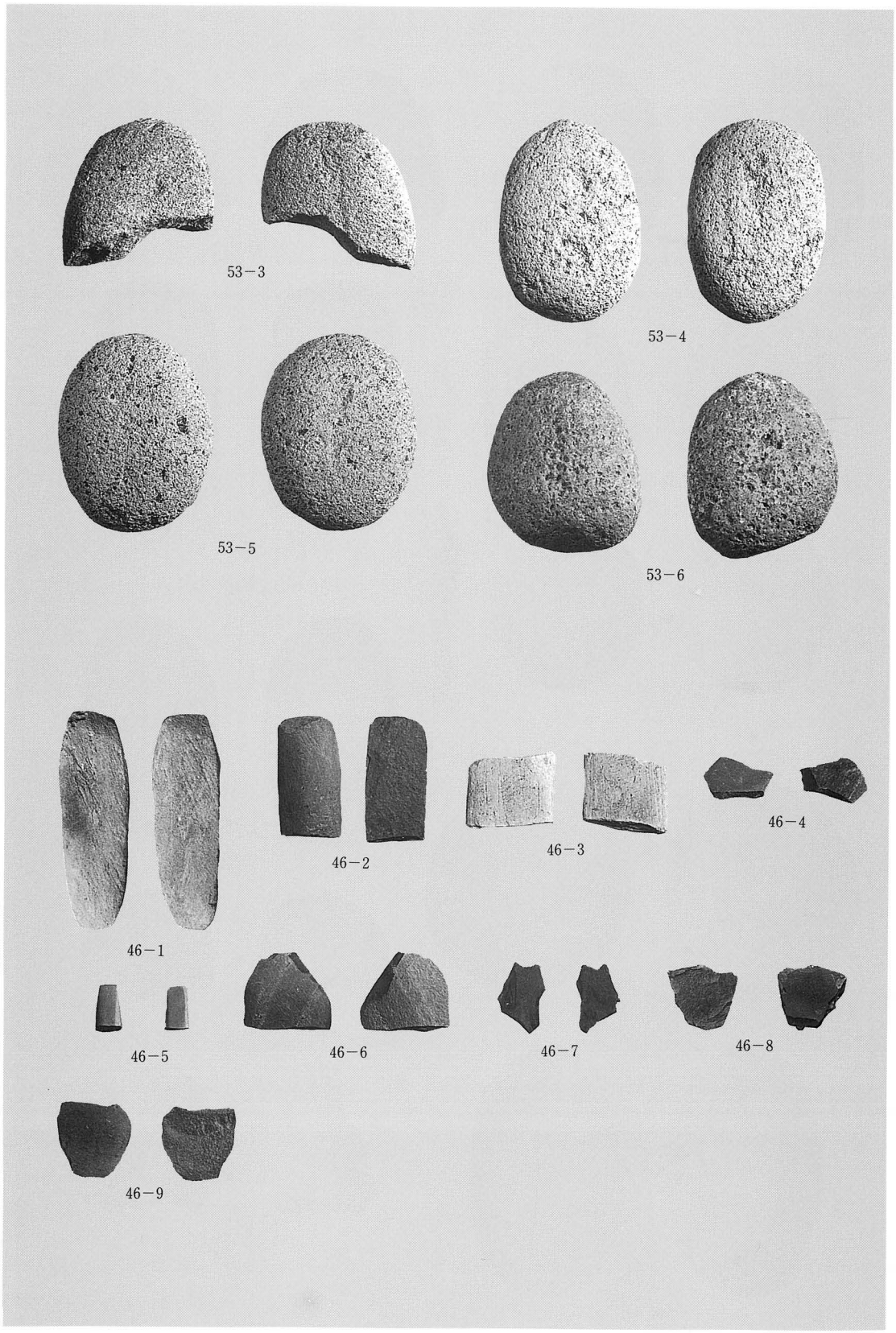


写真38 出土遺物・石器 ⑯ 第53図・第46図

文化財課職員録

課長　白鳥良一

管理係		調査第一係		調査第二係	
係長	菅原澄雄	係長	田中則和	係長	結城慎一
主任	村上道子	主任	木村浩二	主任	篠原信彦
主事	福井健司	教諭	佐藤好一	教諭	太田昭夫
主事	庄司　厚	主任	吉岡恭平	主任	佐藤　洋
主事	齋藤栄治	主事	金森安孝	主事	佐藤甲二
主事	佐藤寿江	教諭	小川淳一	主事	渡部弘美
		主事	工藤哲司	主事	工藤信一郎
		主事	主浜光朗	主事	荒井　格
		主事	齋野裕彦	主事	中富　洋
		主事	長島栄一	主事	平間亮輔
		教諭	稲葉俊一	教諭	五十嵐康洋
		教諭	菅原裕樹	教諭	神成浩志
		主事	渡部　紀	教諭	赤澤靖章
		教諭	川名秀一	教諭	竹田幸司
		教諭	熊谷裕行	主事	佐藤　淳

仙台市文化財調査報告書第181集

北原街道B遺跡

――発掘調査報告書――

1994年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
電話 (263)1166